
遊戯王～真紅眼に選ばれし少年～

新

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

遊戯王〜真紅眼に選ばれし少年〜

【Nコード】

N4101S

【作者名】

新

【あらすじ】

少年は事故で別世界の同姓同名の少年に憑依した。

その世界は現実世界と遊戯王の世界がごっちゃになった世界だった。そんな世界で少年がデュエルアカデミアで過ごす3年間の物語。

2年目で終了しています。

11月7日から続編を始めます。

作品名は遊戯王〜真紅眼に選ばれし少年〜Last Destiny
ySです。

プロローグ

思えば不幸な人生だったな……

少年はトラックに跳ねられそうになった子供を助けたが、自分はトラックに跳ねられることに気づいて思った。

そういえば家族はみんな交通事故で死んだんだっけな……

呪われてるのか？

それなら遂に俺が来たって訳か……

自分の体がふわっと宙に浮いた。

そして頭から地面に落ちた途端に意識が途絶えた。

あれから1週間ほどたった。

俺は奇跡的に生きていた……訳ではなく、別世界の俺の体に憑依した。

そう言える理由は2つある。

1つは家族が全員生きていること、2つ目は見た目が少しが変わっていたからだ。

一応黒髪緑眼なのだが、この世界の自分の昔の写真を見ると真紅の瞳をしていた。

俺は記憶喪失ということになっている。

ちなみに俺が今住んでいる所は童実野町だそうだ……

童実野町？遊戯王の世界？なんて思っていると、青眼が沢山売ってあったり、ライディングデュエルをしてる人がいたり、制限リスト

が元いた世界と一緒にだったり、遊戯王のアニメが普通に放送してあったりと混乱してきた。

この世界自分は事故で1週間ほど寝たきりだったようだ。
その間に俺がこの体に憑依したっぽい。

自己紹介がまだだった。

俺の名前は紅シン

15歳。

使用デッキはレッドアイズデッキだ。
よろしく。

ブローグ（後書き）

ルミミスなどがあつたら、教えていただけると助かります。
目標は週一更新です。

入学試験

俺は試験に向けて勉強をしている。

なんせ元の世界では初心者だったからだ。

なんでこの世界の俺は中等部から入らなかったんだ？

しかもデュエルをしているとみんなに最近シンはよくデュエルするようになったな、昔は避けていたのと言われる。

何をしてたんだこの世界の俺は？

あっという間に試験当日になった。

筆記試験はまあまあだった。

実技試験当日

俺って受験番号32番なんだよな。良いのか悪いのか……

「受験番号32番第3試験場に来なさい」

俺は第3試験場に行った。

「受験番号32番紅シンです。よろしくお願いします」

「では、早速始めようか」

「デュエル！」

「先行は君に譲るよ」

という訳で先行

この手札ワンキル？！

「俺のターンドロー！」

デッキからカードを引いた。

「黒竜の雛を攻撃表示で召喚」

ATK800

「黒竜の雛の効果発動。表側表示で存在するこのカードを墓地に送ることで、手札から真紅眼の黒竜を攻撃表示で特殊召喚！」

ATK2400

観衆から驚きの声があがる。

たかが2400のモンスターを召喚しただけでなんで驚いてるんだ？
まあいいか。

「手札から魔法カード黒炎弾を発動。フィールド上に表側表示で真紅眼の黒竜が存在するとき真紅眼の黒竜の攻撃力分のダメージを相手に与える」

LP4000 1600

ライフ4000で良かった。

「2枚目の黒炎弾を発動します」

LP1600

「おめでとう。結果は後日報告する」

負けたのに普通に言っただな。

自分のデッキじゃなくて試験用デッキだからか？

観衆がうるさいが無視しよう。

疲れた帰ろう。

それにしてもこの程度で驚くとかレベル低いな！。

その後結果は合格だった。

あの島じゃ無いんだよな。

デュエルアカデミア童実野校とか……

入学試験（後書き）

ライフ4000だとすぐ終わる気がする。

ミスなどが有ったなら教えてください。

新入生デュエル

入学式前日

明日は入学式！

デッキ調整しよう！

余りカードは此処か……

なんか知らないカードが数枚あるぞ。面白そうだデッキに入れちゃえ。

あとは警告とか入れて終わり。奈落は入れなくても良いかな？

入学式当日

家からアカデミアまでそんなに遠く無いな……

入学式が終わった。

俺のクラスはオシリスレッドだった。

クラスはオシリスレッドとライイエローとオベリスクブルーの3つかよ……

なんで制服で気づかなかったんだ俺は？

アニメと一緒にオベリスクブルーが一番上でライイエローがその下、

オシリスレッドが一番下か。っていつかなんでオシリスレッドなんだ？

入学試験のとき受験生少なかったような……まさか！

まあいいか。

楽しい3年間を過ごそう。

翌日

今日は新入生デュエルの日だ。

学校がランダムに選んだ相手とデュエルするんだっけ？

俺の相手は誰だ？

取りあえず教室に行こう。

なんか誰も喋らねー。

オシリスレッドは20人か……

なんか女子もいるなアニメでは女子は全員オベリスクブルーだったっけ？

男の人が教室に入ってきた。

「私が担任の……」

その後長い長い話しがあって、全員でデュエル場に行った。
俺？寝てたよ。

ライイエローとオベリスクブルーは30人ずつ居るようだ。

俺の順番はデュエル場3の最初だ。自分の場所に行くと、相手は既に来ていた。

「俺は朝風竜騎っていうんだ。よろしく」

「俺は紅シン。じゃあ始めようか」

「ああ」

「デュエル！」

相手ターンからだ。

「俺のターン、ドロー！」

「俺は愚かな埋葬を発動し、ドラグニティ・フアランクスを墓地に送る」

ドラグニティデッキか……

「俺はドラグニティ・ドウクスを召喚！」

ATK1500

ドウクスの効果でフィールド上のドラグニティの数×200だから

ATK1500 1700

「ドウクスの効果により墓地のドラグニティ・フアランクスを装備する」

ATK1700 1900

「フアランクスの効果発動。装備されているこのカードをフィールド上に特殊召喚する」

ATK500

「レベル4のドラグニティ・ドウクスにレベル2のドラグニティ・

ファランクスをチューニング。魔を払う竜騎士よ旋風を巻き起こせ！シンクロ召喚！現れるドラグニティナイト・ガジャルグ！」

ATK2400

背中に鳥人が乗っている紅い鎧を着た竜が現れる。

「ガジャルグの効果発動。１ターンに一度デッキからレベル4以下のドラゴン族または鳥獣族モンスターを手札に加え、その後手札からドラゴン族または鳥獣族モンスターを墓地に送る。俺はドラグニティ・ドウクスを手札に加え、手札のドラグニティ・アキュリスを墓地に送る」

「カードを１枚伏せてターンエンド」

朝風竜騎

手札3

フィールド ドラグニティナイト・ガジャルグ
伏せカード1

「俺のターンドロー！」

「俺は黒竜の雛を召喚」

「黒竜の雛の効果発動。このカードを墓地に送ることで手札から真紅眼の黒竜を特殊召喚する。」

ATK2400

真紅の瞳を持つ黒い竜が現れた。

（手札に死者蘇生がある。よし！）

「レッドアイズの攻撃！ダークメガフレア！」

真紅眼の黒竜が口から黒き炎を吐こうとしている。

「トランプ発動！風霊術・「雅」！」
しまった！

「自分フィールド上の風属性モンスターを1体リリースする事で相手フィールド上のカード1枚を選択する。そのカードをデッキの1番下に戻す」

真紅眼の黒竜がデッキの1番下に戻された。

「カードを1枚伏せてターンエンド」
これは拙い。

「俺のターン、ドロ」
「俺はドラグニティ・ドウクスを召喚して、墓地のファランクスを装備。」

ATK1700 1900

「ファランクスの効果で装備されているこのカードを特殊召喚する」

ATK500

「レベル4のドウクスにレベル2のファランクスをチューニング！
風を切り裂く竜騎士よ、雷鳴とともに現れよ！シンクロ召喚！轟け！
ドラグニティナイト・ヴァジュランダ！」

ATK1900

かなり拙い。

「ヴァジュランダシンクロ召喚したとき墓地のレベル3以下のドラ

グニティと名のついたドラゴン族モンスターを装備する。俺はドラグニティ・アキュリスを装備させる」

「ヴァジュランダの効果発動！１ターンに１度このカードに装備されているカードを墓地に送ることでエンドフェイズまで攻撃力を倍にする！」

ATK3800

「墓地に送られたアキュリスの効果発動！フィールド上に存在するカード１枚を破壊する。俺はその伏せカードを破壊する」

ミラフォが……

「ヴァジュランダでダイレクトアタック！」

LP4000 200

ライフがあと200しかない。

「ターンエンド」

朝風竜騎

手札3

フィールド

ヴァジュランダ

伏せ0

このままじゃ拙いから、どうにかしよう。

「俺のターン！」

新人生デュエル（後書き）

ゼアルが始まると知った時もう見ないかと思ってたけど、見てみると結構面白かったです。

エクシーズ召喚は前から楽しみでした。

なのでシンクロの時のようにすぐにエクストラデッキに入れました。それにしてもギョッ！は笑えました。

昔、ギョッ！って言ってた友達がいたのを思い出しました。

やっぱり遊戯王ってネタデッキとか作ってデュエルするのが一番楽しいですね。

E・HEROデッキやドラグニティデッキやスクラップデッキが強かったです。

感想などを貰えたら嬉しいです。

誤字やルールミスなどが有りましたら教えていただけると助かります。

真紅眼の少年

「ドロー！」

シンはデュエルディスクから力強くカードを引き抜く。

「俺は未来融合フューチャーフュージョンを発動！俺はエクストラデッキからF・G・D選択してデッキからドラゴン族モンスターを5体墓地に送る」

「俺は仮面竜を召喚する」

ATK1400

「仮面竜をゲームから除外してレッドアイズダークネスメタルドラゴンを特殊召喚する！」

ATK2800

「レッドアイズダークネスメタルドラゴンの効果発動！1ターンに1度自分の手札または墓地のレッドアイズダークネスメタルドラゴン以外のドラゴン族モンスター1体を特殊召喚する！俺は墓地から真紅眼の黒竜を特殊召喚する。蘇れレッドアイズ！」

ATK2400

「さらに真紅眼の黒竜がフィールド上に召喚または特殊召喚されたとき手札からレッドアイズ・シンクロンを特殊召喚する！」

ATK200

「レベル7の真紅眼の黒竜にレベル1のレッドアイズ・シンクロンをチューニング！邪眼を持つ魔竜よ今ここに蘇り、白き炎ですべてを焼き尽くせ！シンクロ召喚！降臨せよ！真紅眼の伝説竜！」

ATK2500

真紅の瞳を持ち白い炎を身に纏った竜が姿を現した。

な、なん……だ？
目が……痛い。

その時、シンの瞳は真紅の色をしていたが竜騎や他の観衆は、見たことの無いレッドアイズに驚いていた……

シンは目を塞いで膝をついた。

シンは何も無い真っ白な場所に立っていた。

「此処は……」

「お前が新しい魂か……」

シンが声のした方を見ると、真紅の瞳をした少年がいた。

「

お、お前は……」

「精霊の瞳……」

「おいっ！新しい魂ってどういう事だ？それに精霊の瞳？」

「その内分かる、もう時間だ……」
そう言うと少年は突然消えた。

「おい大丈夫か？」

シンの異変に気づいた竜騎に声を掛けられた。

「あ、えっ？うん」

「ならいいけど、なんか様子がおかしかったぞ」

「気にするな」

気を取り直してデュエル再開だ。

「えっと真紅眼の伝説竜の効果発動。1ターンに1度自分の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体をゲームから除外することで、相手フィールド上に存在するモンスター1体を墓地に送る」

「なっ!？」

「俺は墓地のドラゴン族モンスターを除外し、ドラグニティナイト・ヴァジュランダを墓地に送る」

ヴァジュランダが白い炎に呑み込まれた。

「レッドアイズダークネスメタルドラゴンでダイレクトアタック！
ダークネス・メタル・フレア！」

LP 4000 1200

竜騎のライフを一気に削った。

「真紅眼の伝説竜でダイレクトアタック！シャイニング・デス・フレア！」

LP12000

「楽しいデュエルだったぜ」

「ああ。次は負けないからな」
そう言つて竜騎と握手した。

「なあ」

「なんだ？」

「そこにドラグニティ・ブランディストックが見えるのは気のせい
か？」とシンが言つと竜騎は驚いて答えた。

「お前カードの精霊が見えるのか？！」

「多分。でも今ので確信した」

「じゃあお前のカードの精霊も見える筈なんだけど」

「見えないのか？」

「どこにも見えない。お前何者なんだ？」

「記憶喪失の少年だけど……」

竜騎はそうかと言つて次使う人がいるので、デュエル場
をあとにした。

その後他の人のデュエルを見ていた。

それにしても何だったんだろうかさっきのあれは……

すると一人の女の子が話し掛けてきた。

「凄いね！オシリスレッドなのに竜騎を倒すなんて」

「あいつそんなに強いのか？」

「うん、強いよ。入学試験でトップの成績で入学したから。あつ私は朝風空、竜騎の双子の妹なんだ」

「俺は紅シンよろしく……なんかマシユマロンが見えるのは気のせいかな？」

と言うと、空は驚いて君にも見えるの？と言ってきた。

今日はデュエルするだけだったから、すぐ学校は終わった。

明日から本格的に授業が始まる。
居眠りせずにいられるかな俺？

真紅眼の少年（後書き）

とりあえずオリカ紹介

レッドアイズ・シンクロン

闇属性

レベル1

ATk200

DEF500

戦士族・チューナー

自分のフィールド上に真紅眼の黒竜が召喚または特殊召喚されたときに手札から特殊召喚する事ができる。

真紅眼の伝説竜
レッドアイズ・レジェンド・ドラゴン

光属性

レベル8

ATk2500

DEF2100

ドラゴン族・シンクロ

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上。

1ターンに1度墓地のドラゴン族モンスター1体をゲームから除外する事で相手フィールド上に存在するカード1枚を墓地に送る事ができる。

白い炎を身に纏った真紅眼の黒竜だと思っていただけといいです。真紅眼の伝説竜の名前はボツ案だったので、いい名前が思いつ

かなかったんで、そのまま使いました。

チューナーの縛りが無しで、攻撃力2500です。
強すぎますか？それともちょうどいいですか？弱いですか？

朝風竜騎は主人公のボツ案です。

最初はシンの名前は朝風真で、ドラグニティ使いで途中からレッド
アイズ使いになる予定だったのですが、1人に2つのデッキを使わ
せるくらいなら、キャラクターを増やしてそいつに使わせればいい
じゃないか。と言うことで、ボツになりました。

するとシンのデッキがドラグニティじゃなくなったので、名字を変
える事に、すると真紅眼 真紅 紅真 紅シンになりました。

竜騎はドラグニティⅡ竜騎士というイメージだったので、すぐ決め
ました。

朝風空は、名字が思いつかなかったんで、竜騎の双子にしました。
とりあえずヒロインにします。

使用デッキ？それはお楽しみに。

何故か1年最強とデュエル！？

新人生デュエルが終わって2週間ほどたった。

「今日はエクシーズ召喚の授業をするぞ。エクシーズ召喚とは同じレベルのモ……」

なんか眠くなって……きた。 z z z

「エクシーズモンスターのランクはレベルとは違う。だからレベル制限などの効果を受けないからな。……おい、紅。起きろ」

「先生おはようござ……」 z z z
「起きろーっ！ー！」

昼休み

「眠い……」

「授業中あんなに寝てたのに？」

「空か……ドローパン買ってきてくれ」

「また？たまには自分で行ったら？」

「そうだな……たまには運試しに行ってみるか……」

購買

「具無し……だと」

「ジャムパンだ」

「カードパックが入ってる」

中身は……

イレカエル

混沌の黒魔術師

ダーク・ダイブ・ボンバー

天使の施し

現世と冥界の逆転

ぜ、全部禁止カードなんて……

「ドンマイ」

と言って誰かが肩に手を置いてきた。

「竜騎か……」

竜騎とはこの2週間でかなり仲良くなった。

「お前何やってんだ？」

「運試し」

「今日は良くない事が起こるかもしれないな」

「……」

その後パックを6パック買ったが1枚も当たらない。
しかし竜騎は3パック買ってウルトラレアが1枚、スーパーレアが1枚、レリーフが1枚当たっていた。
空は先に帰っていた。

「はぁ、帰ろ」溜め息をつきながら教室に帰る事にした。

「見つけたわ！シン！」

彘？

「私のこと覚えてる？」

亓？

振り返るとそこにはオベリスクブルーの制服を着た金髪の小さな少女がいた。

「誰？」

「私のこと忘れたの？」

忘れたというよりまず憑依する前だから知らない。
記憶喪失になっているので正直に言うか。

「ゴメン……俺記憶喪失なんだ」

「嘘……よく見ると瞳の色が違う別人？」

「いや、俺は紅シンだけど3ヶ月以上前の記憶が無いんだ……」

「もう嘘をつくのは止めてよ！あの時言っただけね。私を守ってくれ

るって」少女はそう言つと泣き出して何処かへ行つてしまった。
「……」

一番恐れていた事が起こつた。
嘘ついてでも別人だと言つておけば良かった。
自分のせいで人に泣かれるのはとても辛い。

あの少女にとっては紅シンはよほど大切な人だったのだろう。
凄い気まずい空気だ。

周りのブルー男子から殺氣がする。

「姫さんを泣かせた罪は重いぞ」

1人のブルーの男子がそう言つと、他のブルーの男子が俺を捕まえ
ようと一斉にこっちに走り出した。

最悪だ今日は……

俺は生き残る為に走つた。

俺は今ダンボールの中に隠れている。

見つかりとブルーの男子に何をされるか分からない。

教室に帰れない。

授業があと少しで始まる。

間に合わない先生と先生の長い説教が待っている。しばらく此処に居る
かと考えていると突然ダンボールが持ち上げられた。

「！」

ダンボールを持ち上げたブルーの生徒がこちらを見ていた。

「紅シンだな」

「は、はい」

俺死んだ（＾Ｏ＾）

「放課後オレとデュエルしろ、勝ったら今日の騒ぎの事はどうにかしてやる。ただし負けたら奴らに差し出すからな」

「なんで？」

「ただお前とデュエルがしたいだけだ。」

「へえ。要するにお前に勝ったらあいつらに何もされないですむんだな」

「ああ、それからオレはオベリスクブルー１年の青島龍一だ」

「それってまさか１年最強と言われている……」

「そうだ。じゃあ放課後にデュエル場に来い。許可は取っておく」

「……」俺そんなに有名だったわけ？

勝てるかな？

今日は運が最悪だからな……

とりあえずブルーの１年に見つかったが龍一の説得で逃がしてもらえた。

しかし俺がコイツに勝ったら好きなようにしていいぞって言った。負けられない、二重の意味で……

教室に戻ると先生の長い説教があった。

そして放課後俺はデュエル場に向かった。

デュエル場は騒がしかった。

なんか殺せとか聞こえる……負けたら死ぬのか？
死ぬとかは冗談だけど……まあ無事では無いだろう。

「来たか……後ろが騒がしいが始めよう」

「ああ」

「デュエル!!」

2人の声がデュエル場内に響いた。

「先行は譲ってやる」

「じゃあ俺からか……」

「俺のターンドロー！」

「手札から愚かな埋葬を発動して、真紅眼の黒竜を墓地に送る。そしてワンフォーワンを発動して手札を1枚捨てて、レッドアイズ・シンクロンを特殊召喚」

DEF 1200

「さらに黒竜の雛を召喚」

ATK 800

「レベル1の黒竜の雛にレベル1のレッドアイズ・シンクロンをチューニング」

「未来へ導く不死身の鳥が今現れる！シンクロ召喚！希望の炎！シンクロチューナー、レッドアイズ・フェニックス！」

DEF 1500

赤い鳥が現れた。

目は何処なんだ？

「ターンエンド」

とりあえずシンクロ召喚は出来た……

あれ？そんなに手札が悪く無い？

「オレのターン！」

龍一はデッキからカードを引いた。

何故か1年最強とデュエル！？（後書き）

オリカ紹介

レッドアイズ・フェニックス

風属性

レベル2

炎族

攻200守1500

シンクロチューナー

このモンスターは戦闘では破壊されない。

相手のメインフェイズ時にこのモンスターを素材としてシンクロ召喚する事が出来る。

戦闘破壊されないシンクロチューナーです。

まだアクセルシンクロはしませんが、とりあえず出しておきます。

一昨日レッドアイズデッキを作りました。

これを書いていたら、作りたくなってしまい……

レダメは諦めてキムチ版にしました。

真紅眼の意地（前書き）

今日からしばらく毎日更新です。

真紅眼の意地

「オレは正義の味方カイバーマンを召喚！さらにカイバーマンをリリースして青眼の白龍を特殊召喚する！」

ATk3000

観衆が攻撃力3000のモンスターを1ターンで出しやがった、とか終わったな、とか言ってる。
たったの3000だぞ、効果もないし。

「ブルーアイズの攻撃！滅びのバーストストリーム！」

青眼の攻撃がレッドアイズ・フェニックスに直撃して、爆発が起る。

しかし煙の中から半分が消し飛んだレッドアイズ・フェニックスが出てきた。

更に消し飛んだ部分に炎があがり、再生した。

「何故だ？」

「レッドアイズ・フェニックスの効果で戦闘では破壊されない。」

「なかなかやるな。ターンエンド」

龍一

手札4

モンスター 青眼の白龍

伏せカード 無し

「俺のターン」

シンはデッキからカードをドローする。

「カードを伏せる。ターンエンドの時に墓地の真紅眼の飛竜を除外して真紅眼の黒竜を墓地から特殊召喚する」

DEF2000

「ターンエンド」

「オレのターン」

龍一はデッキからカードを引いた。

「残念だったな手札から魔法カード滅びのバーストストリームを發動！ブルーアイズがフィールド上に存在する時相手フィールド上のモンスターカードをすべて破壊する。だがこのターンブルーアイズは攻撃できない」

青眼の白龍の攻撃で俺のモンスターが全滅する。
拙い。

「さらに手札から魔法カード手札抹殺を發動、お互いに手札をすべて捨てて、捨てた枚数ドローする。さらに手札から捨てた2枚の伝説の白石の効果で青眼の白龍を2体デッキから手札に加える」

とりあえず伏せカードを發動しなくて良かった。

「オレは融合を發動！ブルーアイズ3体融合！現れよ青眼の究極龍！」

ATK4500

3つの首を持つブルーアイズが現れた。

「そして龍の鏡を発動！」

2体目の青眼の究極龍が現れた。

その時観衆が騒ぎ出した。

もう勝負はついただと。

「2体の青眼の究極龍の攻撃！アルティメットバアアアストオオオオオ！」

シンに究極龍の攻撃が直撃する……がシンは無傷だった。

LP 4000 4000

「バトルフェーダーの効果相手モンスターの攻撃宣言時にこのカードを特殊召喚してバトルフェイズを終了する」

「そう簡単に終わると面白く無いから……ター「エンドフェイズ時に伏せカードオープンレッドアイズスピリッツ！」何?!」

「このターン破壊されたレッドアイズと名の付いたモンスターを蘇生条件を無視して特殊召喚する。蘇れ真紅眼の黒竜！」

DEF 2000

「なかなかやるな！ターンエンド」

「俺のターン！」

シンはデッキからカードを引いた。

「俺は魔法カード闇の誘惑を発動、カードを2枚ドローして、その

後手札の闇属性モンスター1体をゲームから除外する。闇属性モンスターが手札に無い場合、手札をすべて除外する」

イチかバチかだ……

シンはカードを2枚 drew した。

えっ？勝った？

「手札の闇属性モンスターを除外する。そして黒炎弾を発動！」

レッドアイズが放った黒い炎の玉が龍一に直撃する。

LP 4000 1600

「カードを伏せてターンエンド」

「オレのターン！」

「アルティメットドラゴンの攻撃！アルティメットバアアストオオオオオオ！」

真紅眼の黒竜が青眼の攻撃に直撃した。

「伏せカードオープン！レッドアイズバーン！レッドアイズと名の付いたモンスターが破壊された時、お互いのプレイヤーはレッドアイズの攻撃力分のダメージを受ける」

シン

LP 4000 1600

龍一

LP1600

「なんだとオオオオオ！」

勝った。

なんか効果ダメージで勝つこと多いなパワー不足かな？

「オレが負けるとは、これで1年最強もお前だな……」

俺が……1年最強？

しまった！目立ってしまっ

ま、いいか……

「それじゃあ、また会おう」

と言って龍一は帰った。

そつえば今日の運はこのデュエルに全部行った気がする……

なんか嫌な予感がするんだよね……

シンが周りを見ると、さっきまでデュエルを見ていたブルーの生徒達がこっちに走って来ていた……が、しかし死ねやー、とか聞こえる……

「待て、俺は助かるんじゃないのか？」

「レッドに負けた奴の言うことなんて知らんわっ……！」

「そんな、理不尽な……」

「知るかつ！大人しく生け贄になれやっ」

少年の悲鳴が夕焼けの空に響いた。

真紅眼の意地（後書き）

レッドアイズ・スピリッツとレッドアイズ・バーンはアニメのGXに出てきたカードです。

レッドアイズ・スピリッツは蘇生条件を無視して出せるので、真紅眼の闇竜を蘇生出来ます。

レッドアイズ・バーンはレッドアイズと名の付いたモンスターが破壊された時お互いにその攻撃力分のダメージを受けます。

この2枚がカード化すれば良いのですが……

休日（前書き）

毎日更新2日目です。

休日

なんか龍一に勝ったことで、学校中で話題になっていた。

今日は金曜日、明日は休日である。

みんなが五月蠅いからすぐに帰った。

「待つてよ」

「なんだ空か……」

「明日休みでしょ、買い物行こうよ」

「ヤダ、俺は行きたい所があるんだ」

「じゃあ一緒に行こうよ」

「ヤダ」

「なんで？……はつまさか、えっ」

「待て、何故そうなる、俺はそれでもカードゲーム大好き少年だぞ
！」

「それでもそういう人は居るよ」

「分かった、一緒に行くぞ」結局一緒に行くことになった。

家に着いた。

デッキでも見とこ。

そういえばレッドアイズ・フェニックスはシンクロチューナーだったな……アクセルシンクロモンスターを持って無いから……欲しい。

翌日

なんか母さんに30分前には行きなさいって家を追い出された。しかも何故かニヤニヤしてたし……
何故DA?!

結局30分以上前に約束の場所に着いた。
でもすぐに空が来た。

「待った〜?」

「良かった」

「え?まさか私来ないと思ったの?」

「違う、こんなに早く来てくれるとは思ってなかった……30分以上前だぞ?早くない?」

「そうかな?」

「まあいいや。早く行こう」

「で、シンが行きたかったのが此处?」

「YES」

「カードショップだよ。少し古い建物だけど……」

「カードショップだと分かってるから来たんだ。前から何か有るよ
うな気がしてたから」

2人はカードショップに入った。

「いらつしゃいませ」

若い店員の声がした。

「アクセルシンクロモンスターって有りますか？」

「すいません売り切れなんですよ……こういうのなら有ります」

と言って、若い店員がカードを何枚か持って来た。

テキストなどが書かれていないカードだ……シンクロモンスター、融合モンスター、エクシーズモンスターの3枚だ。

だがこのカードから何かを感じる。

「このカードは特別なカードでして、下手すれば、神のカードのオリジナルを越えると言われています」

「オリジナル？」

「知らないんですか？」

シンは、はいと答えた。

「オリジナルと言うのはですね、普通のパックなどに収録されているカードと違い原作、アニメと同じ効果を持っていてその殆どが不思議な力を持つているカードです。オリジナルだけが不思議な力を持っているので、誰かが意図的に作り上げたのではないだろうかと言われています」

「此処にオリジナルのカードは有るんですか？」

「これだけなら……」

若い店員は1枚のカードを出した。
超融合だった。

やはり普通のカードと違い、何かを感じた。

シンはすぐに買う事にした。

「この4枚を買います」

「良いのかい？使いこなせないかもしれないよ」

「良いです。買います」

「4枚で4万円になります」

た、高アアアアアア！

結局買ったが、超融合だけで2万5千円した。

オリジナルのカードでは安い方らしい。

そしてテキストなどが書かれていないカード3枚……使いこなせるかな？

そういえば空は？

カードを見ていた。

「何か欲しいのあったか？」

「うん！これ」

空は1枚のカードを指差した。

始祖の守護者ティラスだ……

「買ってやろうか？」

「本当に？ありがとうございます！」

今日は金を沢山使った。

金を使うとスッキリする。

ま、後で後悔するけど。

そう、スターストライク・ブラストを買った後のように……

視点空

その後は、ショッピングモールに行って服とか買った。

最後にファストフード店でハンバーガー

を食べて帰った。

「今日はありがとね」

「別に気にしなくていいよ。そういえばお前友達殆どいないだろ」

「えっ?!」

「だって空が他のクラスメイトとしゃべってるところ見たこと無いし……」

「うん……」

嬉しかった。

シンが自分の事を心配してくれている事が……

「大丈夫だよ。普通に話し掛ければ仲良くなれるし、俺の時もそうだったらだろ?」

あの時はただ、あの強い竜騎に勝ったから、凄いと思って話し掛けただけだった。

「う、うん…… / / /」視点シン

その後空を家まで送ってから帰った。

何故か竜騎が五月蠅かったが気にしない事にした。

その夜、シンは今日買った3枚のテキストの書かれていないカード達とにらめっこしていた。

(俺に使いこなせるかな……?)

シンは次の日寝過ごしてしまい、後悔していた。
よりによって日曜日に寝過ごすとは……

また、だるい1週間が始まる。

休日（後書き）

テキストの無いカードはアクセルシンクロをしたかったからです。
融合とエクシーズはついでで、超融合のオリジナルは後で重要になります。

ライディングデュエル！全速前進DA！（前書き）

毎日連続更新3日目です。

ライディングデュエル！全速前進DA！

気が付くと6月になっていた。

やはりアクセルシンクロをする為には、ライディングデュエルでクリアマインドの境地に達しないといけないらしい。

面倒くさいけどライセンス取りますか。

このデュエルアカデミアでは毎年希望者のみライディングデュエルのライセンスを取る為の実習がある。

この実習では、早くて1週間程でライセンスが取れる。

此処はデュエルアカデミアから少し離れたライディングデュエル場、そこにレンタルしたDホイールに乗ったシンと龍一が居た。

「いくぞ、紅！」

「いくぜ、龍一！」

「「全速前進DA！！」」2人の乗ったDホイールが疾り出す。

しかし、最初のカーブで2人ともクラッシュしてしまった。

「何故だ……？オレは何も間違っていなかった筈だ……」

「曲がるタイミングが分からないな」

それから2時間程練習した後家に帰った。

それから1週間程たった。

今日はライセンス取得試験の日だ……

毎日Dホイルに乗ってたから、かなり上達した。

授業終わってからとかキツいと言う奴も居るが、普通じゃね？

部活とかやってたら普通に感じるぞ。

この世界に来てから部活やってないけど……

テニスやってた頃が懐かしい。

「今日はライディングデュエルのライセンス取得試験の日でしょ」

「そうだよ、ダリ」 「そんな事言わないの」

「空、早く帰ろう」

「うん、分かった。じゃあ頑張ってるね」

「それじゃ」

そういえば空は最近よくクラスの人々と喋るようになったな。

放課後ライディングデュエル場でライセンス取得の為の試験が始まった。

「オシリスレッドの紅シンです、よろしくお願いします」

「じゃあ早速始めよう」

スピード・ワールド2が発動する。

「ライディングデュエル！アクセラレーション！」

先に第1コーナーを取った方が先攻だ……って取られた！

「私のターンだ」

S P C O

「私はモンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン」

SPC0 1

「俺は黒竜の雛を召喚」

ATK800

「黒竜の雛の効果発動！このモンスターを墓地に送る事で手札から真紅眼の黒竜を特殊召喚する、現れる！レッドアイズ！」

ATK2400

真紅の瞳を持つ黒竜が雄叫びをあげる。

「更にのレッドアイズ・シンクロンの効果を発動！真紅眼の黒竜を召喚または特殊召喚した時手札から特殊召喚することが出来る」

ATK200

「レベル7の真紅眼の黒竜にレベル1のレッドアイズ・シンクロンをチューニング！邪眼を持つ魔竜よ今此処に蘇り、白き炎で全てを焼き尽くせ！シンクロ召喚！降臨せよ！真紅眼の伝説竜！」

ATK2500

「真紅眼の伝説竜の効果発動！1ターンに1度墓地のドラゴン族モンスター1体をゲームから除外して相手フィールド場に存在するカード1枚を墓地に送る」

「なっ？！魂を削る死霊がッ！」

「手札からワン・フォーワンを発動、手札を1枚墓地に送りレベル1モンスターをデッキから特殊召喚する。来いチューニング・サポーター」

ATK100

「スピードワールド2の効果でSP以外の魔法カードを使ったので2000ポイントのダメージを受けます」

LP4000 2000

「そこまでして出したいのか?!」

「はい!デッキトップを墓地に送ってグローアップ・バルブを特殊召喚します」

「レベル1のチューニング・サポーターにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング!未来へ導く不死鳥が今現れる!シンクロ召喚!希望の炎!シンクロチューナー、レッドアイズ・フェニックス!」

DEF1500

「君は凄いな1ターンに2体もシンクロ召喚するとは
そうかな?

前の世界では普通な気がする。

「ですがまだ行きますよ」

「そうか、君の全力を見せてくれ」

さあアクセルシンクロの準備は整った。

ライディングデュエル！全速前進DA！（後書き）

書くことがない！

とりあえずヒドウン3でフアランクスを当てて、喜んでいたら、入れる枠が無かった。

なんかドラグニティデッキなのに氷結界の龍ばかり使ってる気がする……、

ドラグニティナイト・ガジャ……いや、ブリューナク！とかデブリのせいでグングとかトリシュとか出てくる。

友達がトリシューラ恐怖症になったし、トリシューラが過労死しそう（シンクロ使うデッキ全てで使うから）。

失敗、アクセルシンクロ（前書き）

毎日連続更新4日目です。

失敗、アクセルシンクロ

「レベル8シンクロモンスター真紅眼の伝説竜にレベル2シンクロチューナーレッドアイズ・フェニックスをチューニング！」

シンのDホイールのスピードが上がった。

レッドアイズ・フェニックスが2つの光の輪になりシンの前方に行った。

「おお、アクセルシンクロか」

アクセルシンクロはこの世界では殆どの人が知ってるが、ほんの一部の人しか使えない。

「天より降りし幻の邪竜よ闇を引き裂き全てを焼き尽くせ！」

しかしこの時シンは本当に成功するのか、という不安と早くアクセルシンクロを使おうと焦っていた。
集中出来ない。

「ア、アクセルシンクロオオオ！」しかし、バキイイインという音と共に光の輪となっていたレッドアイズ・フェニックスが元に戻った。

アクセルシンクロ失敗だ……

シンはえっ？と言った。シンは頭の中が真っ白になった。

シンはバトルフェイズに入った。

「どうした？アクセルシンクロに失敗した事がショックなのか？」

「……はい」

「心配するな、使える方が奇跡と言ってもいいものだから」

しかし、このまま落ち込んで何も変わらない。

「真紅眼の伝説竜でダイレクトアタック、シャイニング・デス・フレア」伝説竜の吐いた白い炎が教官を飲み込む。

LP 4000 1500

「ターンエンド」

「私のターン」

SPC 1 2

「私は切り込み隊長を召喚」

ATK 1200

「切り込み隊長の効果で手札から俊足のギラザウルスを特殊召喚」

ATK 1400

「いったい何デッキなんだ？」

「レベル3の切り込み隊長とレベル3の俊足のギラザウルスをオーバーレイ、2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚！No.17リバイス・ドラゴン」

ナンバーズ？

「リバイス・ドラゴンの効果発動、エクシーズ素材を1つ取り除く事で攻撃力を500ポイントアップする」

2000 2500

「バトル！リバイス・ドラゴンで真紅眼の伝説竜に攻撃、バイス・ストリーム！」

リバイス・ドラゴンがブレスを吐く、伝説竜も攻撃した。
しかし、破壊されたのは、伝説竜だけだった。

「ナンバーズはナンバーズで無いと破壊出来ない」
「ッ！」

まさかオリジナルを持っている人と戦うとは思ってもいなかった。
だって試験だよ？
試験用デッキとか無いの？

「ターンエンドだ」

「俺のターン」

SPC 2 3

あれが来ない……

「手札からSPエンジェルバトンを発動！スピードカウンターが2つ以上ある時デッキからカードを2枚ドローしてその後手札からカードを1枚墓地に送る」

ドロップ！……これなら

シンは手札を1枚墓地に送った。

「エンドフェイズ時に墓地の真紅眼の飛竜をゲームから除外して、真紅眼の伝説竜を特殊召喚する！」

「ターンエンド」

「私のターン」

SPC 3 4

「リバイス・ドラゴンの効果発動！エクシーズ素材を取り除いて、攻撃力を500ポイントアップする！」

2500 3000

「レッドアイズ・フェニックスの効果発動！相手ターンのメインフェイズにこのモンスターを素材としてシンクロ召喚する事が出来る」
「なんだと?!」

レッドアイズ・フェニックスが光の輪になる。

「天より降りし幻の邪竜よ闇を引き裂き全てを焼き尽くせ！」

「アクセルシンクロオオオオオ！」

しかし、またバキイインという音がして、アクセルシンクロに失敗した。

「また失敗か……だが諦めずにチャレンジするのは良いことだ」
「……」

「バトル！リバイス・ドラゴンで真紅眼の伝説竜を攻撃、バイス・ストリーム！」

「ッ！」

LP 4000 3500

伝説竜が破壊された。

「ターンエンドだ」

「俺のターン」

SPC 4 5

「俺は真紅眼の飛竜を召喚」

ATK 1800

「レベル4の真紅眼の飛竜にレベル2のレッドアイズ・フェニックスをチューニング！真紅の瞳を持つ騎士よその黒き剣で敵を切り裂け！シンクロ召喚！現れる！レッドアイズ・ソードナイト！」

ATK 2300

「バトル！レッドアイズ・ソードナイトでリバイス・ドラゴンを攻撃！ダーク・スラッシュ！」

「バカな攻撃力はリバイス・ドラゴンの方が高いんだぞ？！」

「レッドアイズ・ソードナイトの効果、このモンスターと戦闘を行うモンスターの攻撃力は元々の攻撃力になる！」

ATK 3000 2000

「なッ！」

LP 1500 1200

「ターンエンド」

「私のターンだ」

SPC 5 6

「リバイス・ドラゴンを守備表示にしてターンエンド」

DEF 0

「俺のターン」

SPC 6 7

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

「私のターンだ」

SPC 7 8

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン」

SPC 8 9

「俺はランサー・ドラゴニートを召喚」

ATK 1500

「ランサー・ドラゴニートは貫通効果を持っている」

「何ッ?!」

「ランサー・ドラゴニートで攻撃!」

「甘いぞ、伏せカード発動! 聖なるバリアミラーフォース!」

「リバースカードオープン! スター・ライトロード! フィールド上のカードを2枚以上破壊するカードの効果が無効にして破壊する、さらにエクストラデッキからスターダスト・ドラゴンを特殊召喚する事が出来る! 来いスターダスト!」

ATK 2500

「なんだと?!」

そのままランサー・ドラゴニートの攻撃がリバイス・ドラゴンを貫通する。

LP 1200 0

「おめでとう、でも君はアクセルシンクロする事しか考えてなくて焦り過ぎて失敗したんだと思うよ」

結局アクセルシンクロは出来なかった。

やっぱり今回のデュエルではアクセルシンクロする事に執着し過ぎていた気がする。

ちゃんと使いこなせるようになるかな？

失敗、アクセルシンクロ（後書き）

なんかごめんなさい。

失敗とか……

まだアクセルシンクロするような場面では無かったので、アクセルシンクロはまた今度です。

面倒くさいデュエル（前書き）

毎日連続更新何日目ですか？

忘れた

とりあえず毎日連続更新は明日までですが、土曜にも更新出来きません。

日曜日は多分間に合わないと思います。

面倒くさいデュエル

Dホイールのライセンスは手に入れた。
後はクリアマインドの方だ。

そういえばDホイール持ってない！

ま、いいかレンタルすれば、

久しぶりにドローパンでも買いに行くか……

「おつ、シン！」

「竜騎、久しぶり」

「龍一がさ、新しく出たパックを沢山買ってるけど全部ハズレなんだ」

「そりゃドンマイだな」

「しかも次に買った人が毎回当たるんだぜ」

「うわぁ」

ドローパンを買った。

「また具無しパンだ……」

カードパックが入ってる。

中身は……

サウザンド・アイズ・サクリファイス

月読命

強奪

次元融合

ラストバトル！

「また全部禁止カードだ……」

「お前もドンマイ」教室に帰って寝よう……

「シ、シンッ！」

は？とシンは振り向いた。

この前の少女だ……

「この前はゴメンね。あの後みんなにボコボコにされたって聞いて、記憶喪失なのに……」

そういえば忘れてたよ、あれ。

あれは龍一に勝ってもアイツら約束守らなかったただだからな……

「別に気にしなくて良いよ」

「で、でも」

「それより名前は？」

とりあえず名前だけは知つた方が良いな。

「えっと、私は谷鳥姫乃。みんなからはヒメって呼ばれてるわ」

「分かったそれじゃあ」

「えっ？あっ」

なんか疲れるな……

しゃべり辛いし……

さて、外に出たよ。教室に帰ろうとしてたのに……

「おいッ！お前！」

「誰？」振り返ると3人の男がいて、真ん中の男が喋り出した。

「俺様は高崎修也だ！1年で3番目に強いと言われている！」

「何か……」

「とぼけるな！レッドごときがヒメさんに気安く話し掛けるな！」

「頼い奴だな……」

「話しといた方が身のためだぜ」

部下らしき男が言ってきた。

「頼い、黙ってろ」

「な、なんだとッ！俺はブルーなんだぞ、レッドごときに黙れと言われる筋合いは無い」

「で？何が言いたいの？」

「レッドが調子乗ってんじゃねーよ」

「お前には言って無いぞ、そっちの小物臭い奴に言ってるんだ」

「なかなか言ってくれる奴だな！良いだろう俺様はお前にデュエルを申し込む！確か龍一を倒したのはお前だったな？と言うことは、お前に勝てば龍一より強いと言うことだろう？」

「それは違うと思う俺に勝っても龍一に勝った訳じゃないし、大体そんな事言う奴はびびって戦った事が無い奴の台詞なんだよ」

「そんな訳があるかッ！」

「じゃあそんな事言うなよ」

「まあ良い！デュエルだ！」

「はあ……」

「「デュエル！」」

「先攻か……」

「俺のターン」

「モンスターをセット、カードを伏せてターンエンド」

「俺様のターン！ドロー！」

「俺様は儀式魔法エンド・オブ・ザ・ワールドを発動！手札からレベル8になるようにモンスターを捨てて、終焉の王デミスを儀式召喚！」 ATK 2400

「デミスの効果発動！ライフを2000ポイント払う事でこのカードを除くフィールド上のカードを全て破壊する！終焉の嘆き！」

LP 4000 2000

デミス以外のカードが破壊される。

なんか部下らしき2人がもう終わったなとか言ってる。
まあ次のターンでコイツ終わるけど。

「じゃあ破壊されたクリッターの効果で攻撃力1000以下のモンスターを手札に加える」

俺が加えるのは、黒竜の雛。

「そんな雑魚を手札に加えても、もう遅い！デミスで攻撃！」

LP 4000 1600

「じゃあ手札の冥府の使者ゴーズの効果、自分フィールド上にカードが存在しない時相手がコントロールするカードによってダメージを受けた時、手札から特殊召喚する」

ATK2700

「更に戦闘ダメージの場合攻撃力が受けたダメージと同じ冥府の使者カイエントークンを特殊召喚する」

ATK2400

「くッ！カードを伏せてターンエンドだ！」

「俺のターン」

「俺はサイクロンを発動！その伏せカードを破壊する」

「何ッ！ミラーフォースが?!」

「黒竜の雛を召喚」

ATK800

「黒竜の雛を墓地に送り真紅眼の黒竜を特殊召喚する！来いレッドアイズ！」

ATK2400

「バカな……」

「ゴーズでデミスに攻撃」

LP2000 1700

「レッドアイズでダイレクトアタック！ダーク・メガ・フレア！」

LP17000

「そんな、修也がレッドごときに負けるなんて
「見損なっただぜ」

なんか部下らしき2人が逃げた。

「くッ！覚えとけよ！」

「多分忘れるよ小物君」

なんか普通に小物だったな……

ライフ4000なら普通にワンキル出来るだろ……デミスなら……

まあゴーズが出て無かったらの話だけど……

アイツ召喚権使って無かったし……

なんか今日は疲れたな……

面倒くさいデュエル（後書き）

この話いらない気がしたのは僕だけですか？

デミスは初めて当てたレアカードだったので、出しました。

あの頃はデュエマをやっていて、従兄弟の親がデュエマと間違えて遊戯王を買って送ってきてくれたのが始まりです。
今はこんなにハマっているとは……

動き出した歯車（前書き）

毎日連続更新最終日です。

明日も更新しますが、一応予定していた毎日連続更新の分が今回までです。

動き出した齒車

視点???

デュエルアカデミアの会議室

その日は使う事がなかったので、誰も居ない筈だった……

「教頭、神のオリジナルを入手致しました」

会議室の中に入ってきたスーツ姿の男はそう言った。

そうか……と教頭と呼ばれたばっちゃんりして背の低い男、衣川富夫は答えた。

「3幻魔の次は3幻神を……」

こんな物をどうするおつもりですか？」

「神と幻魔をぶつける」

「あなたは一体何をするおつもりですか？」

「それよりちゃんとバレないようにしたんだろうな？」

「はい、一応コピーカードとすり替えておきました」また話を逸らされた、と男は思った。

「あんなコレクターが持つてるよりは、誰かに使って貰った方がカードにとっては嬉しいだろうな」

「そうですね。誰に渡すか決めているのですか？」

「一人はな」

衣川は生徒の名簿の中の一人の名前を指差した。

「オシリスレッド1年、紅シン……運命の子、そして真紅眼の悪魔に選ばれた少年ですね……」

彼に使いこなせるのでしょうか？」

「分かん。1枚は彼に渡せ、後はイエローに1人とブルーに1人、大会を開き、優勝した者に渡すと良い」

「かしこまりましたで、いつにしましょうか？」

「来週にでもしておけ」

「優勝者にはアカデミアからレアカードを贈呈と言うことで宜しいでしょうか？」

「それで構わん。」「ではそれは……？」

男は1つのデッキケースを指差した。

「これか？わしのデッキに入れておく」

衣川は1枚のカードを取り出して答えた。

そのカードは邪神アバター、もちろんオリジナルだ。

「準備はちゃんとしておかないとな」

「はい……」

此処はアカデミアの生徒会室、そこに3人の生徒が居た。

時刻は昼、時計は1時を指していた。

その内の1人、葛原鉄矢は頭を悩ませていた。

「お前らはなんとも思わないのか？」

「何が？」1人の少女が答えた。

「俺らの事だよ、何だよ四天王って！ダサいんだよ！古臭いんだよ！ポケモンか何かか？」

「また始まりましたか……」

「面倒くさいわね」「四天王って名乗るだけでハズいんだよ！」

「しょうがないでしょ」

「名乗るだけでハズいんだよ」

「しかし、それはしょうがないでしょう？」

「だいたい良い名前考えついたの？」

「くッ、な……無い、糞ッ！」

「やっと終わった」

彼らはアカデミアの四天王と呼ばれている。

四天王とはアカデミア3年の勝利数の高い4人が集められて結成する（無理やり）。

四天王というのは、最初のリーダーが考えてから、ずっとそのままである。

誰もグループ名とか興味なかったからだ。

鉄矢だけが拒絶反応をしている。

「で、今年、良い1年は入って来たの？」

「一応」

鉄矢は数枚の写真を取り出した。

「よくこんな物を撮ったわね」「自分で撮った訳無いぞ。ただちよつとハッキングしただけだ」

「犯罪よそれ」

「まあ良いじゃんか、とりあえず戦績を見てから、写真だけ手に入れた」

「なんで写真だけなのよ！」「写真が1番入手しやすかったからな……まあ弱みを握って貰っただけだからな」

「そんな事しなくても普通に手に入るでしょ」

「まあまあ、それでどうでしたか？」

「オベリスクブルーの龍一、ライエローの竜騎、そして、オシリスレッドの紅シン」

「オシリスレッド！？」

「そうだ」

「噂はよく聞きますよ彼は」

「確かに、ブルーの龍一と修也を倒したらしいからな」

「確かに凄いけど、どうするの？」

「俺が直接デュエルする。邪魔するなよ」「分かったわ」「どうせ何言っても無駄ですからね」

「久々に楽しめそうだ」

視点シン

「また具無しパンだ……カードパックの中身は……」
シンにまた禁止カードが増えた。

「お前が紅シンだよな？」

「誰ですか？」

「俺はオベリススクブルー3年葛原鉄矢だ」

「それで、何の用ですか？」

「単刀直入に言う、お前にデュエルを申し込む」

「別に良いけど」

「今日の放課後生徒会室に来てくれ」

「何で生徒会室なんですか？」

「色々忙しいからな」

「わかりました」

「ああ、面倒くせー」。

午後の授業が終わって、シンは生徒会室に行った。

視点 竜騎

「氷結界の龍？」俺は3枚のカードを見つけた。

母さんに聞いた話だと父さんの残して行つたカードらしい。

なんか昔、大切な人から貰つたカードって言つてたな……

ただ、カードが使つてくれって言つてゐる気がする。

こんなの初めてデッキ作つた時以来だ。

母さんに特別に許可を得てエクストラデッキに入れた。

視点???

「紅シン、真紅眼の悪魔に選ばれた少年」

暗い部屋の中でパソコンを使っている少年が居た。

「ヒヤヒヤッ！ やつと見つけたぜえ。デュエルアカデミア童実野校か……少し遠いが潰しに行くか……」

そう言うと彼はパソコンのコンセントを引き抜いた。

動き出した歯車（後書き）

今、スランプ中です。

元から文才が無いのにさらに酷くなってる気が……こつこつ時は明るく乗り切ろう！

次回予告！

シン「はあ、出しても出しても攻略される……、

いい加減嫌になってくるよ……、

次回は『スクラップの時間です』どうぞお楽しみに……これで良いだろ！」

シンは次回予告にあまり乗り気じゃ無いです。

スクラップの時間です

視点シン

生徒会室、生徒会室……此処か。

シンはドアをノックしてドアを開いた。

「失礼します」

「やっと来ましたね」

「早速デュエルだ」

「ちよつと自己紹介ぐらいさせなさいよ、私は長井麗子よろしく」

「僕は澤崎雅彦といえます、よろしく」

「紅シンです、よろしくお願いします」

「俺はさっきも言ったと思うが葛原鉄矢だアカデミアの四天王のリーダーだ」

「えっ？四天王ってダサく無いですか？」

シンの一言を聞いて鉄矢はシンの肩を掴んで言った。

「そうか……お前も分かるだろ、やっぱりダサいって……」

突然生徒会室のドアが勢いよく開いた。

「鉄っちゃん！鉄っちゃん！１年生とデュエルするって本当？」

腰の辺りまで髪伸びている少女が入って来た。

「あれっ？もしかして君が鉄っちゃんとデュエルする１年生？」

「紅シンっていいです、よろしくお願いします」

「そっか、私は西條光、よろしくねシンちゃん」

「は、はあ」

「そんな事より早くデュエルだ」

「はい」

俺は四天王（笑）の人達と一緒にデュエル場に行った。

「じゃあ始めるぞ」

「よろしくお願いします」

「デュエル！」

相手が先攻だ

「スクラップの時間の始まりだぜ！俺のターン！」

「俺はスクラップ・ビーストを召喚してカードを2枚伏せてターンエンド」

ATK1600

葛原鉄矢

LP4000

手札3枚

スクラップ・ビースト

伏せカード2枚

「俺のターン」

「俺は古のルールを発動！手札からレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚する！来い！真紅眼の黒竜！」

ATK2400

「更に未来融合フューチャーフュージョンを発動！エクストラデッキのF・G・Dを選択融合素材のドラゴン族モンスター5体を墓地に送る」

「バトル！レッドアイズでスクラップ・ビーストを攻撃！ダーク・メガ・フレア！」

「リバーズカードオープン！速攻魔法スクラップ・スコール、デッキからスクラップと名の付いたモンスター1体を墓地に送って1枚ドロ、そしてスクラップ・ビーストを破壊する」

「なら、レッドアイズでダイレクトアタック！」

「リバーズカードオープンくず鉄のかかし1ターンに1度相手モンスター1体の攻撃を無効にする。」

そしてこのカードは再びセットされる」

「カードを2枚伏せる」

「そして、通常召喚を行っていないエンドフェイズ時に墓地の真紅眼の飛竜を除外する事で墓地に存在するレッドアイズと名の付いたモンスターを特殊召喚する！来い！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！更にもう1体の真紅眼の飛竜を除外して、もう1体のレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！」

ATK2800×2

「ターンエンド」

紅シン

LP4000

手札1枚

真紅眼の黒竜

レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン×2

未来融合

伏せカード2枚

「俺のターン！」

「サイクロンを発動して未来融合を破壊」

未来融合が破壊された。

「俺はスクラップ・キマイラを召喚」

ATK1700

「キマイラの効果で墓地のスクラップと名の付いたチューナー、スクラップ・ビーストを特殊召喚する！」

ATK1600

「レベル4のキマイラにレベル4のビーストをチューニング！

鉄屑より生まれし龍よ、仲間の力で敵を圧殺せよ！シンクロ召喚！
現れよ！スクラップ・ドラゴン！」

ATK2800

鉄屑でできた龍が現れる。

「カードを伏せてから、スクラップ・ドラゴンの効果を発動、相手フィールド上のカードと自分フィールド上のカードを1枚ずつ選択して、選択したカードを破壊する。」

俺は今伏せたカードとお前のレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを破壊する」

レダメがスクラップにされた。

「さらに破壊した荒野の大竜巻の効果でもう1体のレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを破壊する」

突然発生した竜巻にレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンが巻き込まれて破壊された。

「バトル！スクラップ・ドラゴンで真紅眼の黒竜を攻撃、スクラップ・ストリーム！」

「ッ！」シン

LP 4000 3600

「リバーカードオープン！レッドアイズ・スピリッツ！このターンに破壊されたレッドアイズと名の付いたモンスター1体を蘇生条件を無視して特殊召喚する！来い！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン！」

ATK 2800

「ターンエンド」

「俺のターン」

「俺はレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果で真紅眼の

黒竜を墓地から特殊召喚する、来い！レッドアイズ！」

ATK2400

「真紅眼の黒竜が特殊召喚された事で手札からレッドアイズ・シンクロンを特殊召喚する」

ATK200

「レベル7の真紅眼の黒竜にレベル1のレッドアイズ・シンクロンをチューニング！邪眼を持つ魔竜よ、今此処に蘇り、白き炎で全てを焼き尽くせ！シンクロ召喚！君臨せよ！真紅眼の伝説竜！」

ATK2500

白い炎を身に纏ったレッドアイズが現れた。

「真紅眼の伝説竜の効果、1ターンに1度墓地のドラゴン族モンスター1体を除外する事で相手フィールド上のカード1枚を墓地に送る！俺は墓地のランサー・ドラゴニートを除外して、スクラップ・ドラゴンを墓地に送る！レジェンド・フレイム！」

白い炎にスクラップ・ドラゴンは呑み込まれた。

「スクラップ・ドラゴンの効果は破壊された場合のみ効果が発動する、よって墓地に送られたスクラップ・ドラゴンの効果は発動しない！」

「バトル！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンでダイレクトアタック！ダークネス・メタル・フレア！」

「リバーズカードオープン！くず鉄のかかし」

かかしがレダメの攻撃防いだ。

「真紅眼の伝説竜でダイレクトアタック！シャイニング・デス・フレア！」

白い炎の塊が鉄矢に直撃する。

「くっ！」

LP 4000 1500

「ターンエンド」

「この俺が押されている？ははっ、お前に俺の本気を見せてやる」

「本気じゃ無かったんですか？俺は相手に手を抜かれて勝つより相手に本気を出されて負けた方がいいですよ」

「お前気に入った、俺のターン！」

「俺は死者転生を発動、手札を1枚捨ててスクラップ・キマイラを手札に加える」

「俺はスクラップ・キマイラを召喚」

ATK 1700

「キマイラの効果で墓地のスクラップ・ソルジャーを特殊召喚する」

ATK 2100

「レベル4のキマイラにレベル5のソルジャーをチューニング！鉄屑の双頭龍よ、その力で全てを無に変えろ！シンクロ召喚！復活せよ！スクラップ・ツイン・ドラゴン！」

ATK 3000

「スクラップ・ツイン・ドラゴンの効果、自分フィールド上のカード1枚と相手フィールド上のカード2枚を選択する、選択した自分のカードを破壊して、選択した相手のカードを手札に戻す、俺が選ぶのは俺の伏せカードとレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンと真紅眼の伝説竜」

レダメが手札に、伝説竜がエクストラデッキに戻って来た。

「スクラップ・ツイン・ドラゴンの攻撃、ツイン・ストリーム！」

LP 3600 600

拙いな……

「ターンエンド」

「俺のターン」

「手札からライトニング・ボルテックスを発動、手札を1枚捨てて相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する」

「くッ！スクラップ・ツイン・ドラゴンの効果、破壊されて墓地に

送られた時、墓地に存在するスクラップと名の付いたシンクロモンスター以外のモンスターを特殊召喚する事が出来る。俺はスクラップ・キマイラを守備表示で特殊召喚する」

DEF500

「さらに自分フィールド上のスクラップ・サーチ以外のスクラップと名の付いたモンスターが破壊されて墓地に送られた時スクラップ・サーチを特殊召喚する事ができる、俺はスクラップ・サーチを守備表示で特殊召喚する」

DEF300

「リバーズカードオープン！リビングデッドの呼び声、効果で墓地の真紅眼の黒竜を特殊召喚する！蘇れ！レッドアイズ！」

ATK2400

「真紅眼の黒竜を墓地に送って真紅眼の闇竜を特殊召喚する」

ATK2400

「真紅眼の闇竜の効果で墓地のドラゴン族モンスターの数×300ポイント攻撃力がアップする！墓地のドラゴン族モンスターは3体よって900ポイントアップ」

ATK3300

「真紅眼の闇竜でキマイラに攻撃、ダークネス・ギガ・フレイム！」

スクラップ・キマイラは破壊された。

「ターンエンド」

「俺のターン！」

「このターンで終わらせる、カードを伏せて、スクラップ・キマイラを召喚」

ATK1700

「キマイラの効果でスクラップ・ソルジャーを特殊召喚」

ATK2100

「レベル4のキマイラにレベル1のサーチャーとレベル5のソルジャーをチューニング！大いなる鉄屑の龍よ、その圧倒的な力で敵をねじ伏せよ！シンクロ召喚！威圧せよ！アトミック・スクラップ・ドラゴン！」

「アトミック・スクラップの効果、自分フィールド上のカード1枚と相手の墓地のカード3枚を選択して、選んだ自分フィールド上のカードを破壊して、選んだ相手の墓地のカードをデッキに戻す、俺は伏せカードとお前の墓地のドラゴン族モンスター3体を選ぶ、これでお前の墓地にはドラゴン族モンスターがいない」

相手の伏せカードが破壊されて、俺の墓地のドラゴン族モンスターがデッキに戻っていく。

真紅眼の闇竜

ATK3300 2400

「アトミック・スクラップの攻撃！アトミック・ストリーム！」

LP6000

負けた……

「久しぶりに楽しめた」

「俺もです」

2人は握手をした。

すると、

「ハッハッハ、素晴らしいデュエルを見せて貰ったよ」

声のした方にはアカデミアの教頭、衣川富夫がいた。

「教頭?!」

「今日は紅シンに用があって来たただ君達は帰りなさい」

「そうですか……」

四天王（笑）の人達は帰って行った。

「紅君、君に渡したい物があってね」

そう言つて衣川は1枚の赤いカードを渡した。

「これって……」

「そう、オシリスの天空竜だ」

「そんな、なんで俺なんか……」

「君が使う事に意味があるんだ、君には期待しているよ」

「あ、ありがとうございます」

そう言っで、オシリスを受け取りシンは頭を下げた。

「オシリスの天空竜……か」

デッキを組み直さないといけないな……

去っていく衣川はニヤリと笑っていた。

えっ？何この展開（前書き）

間に合いました。

今日が土曜日だという事を忘れてました（笑）。

明日は確実に間に合いません。

日曜に授業参観とか……。

えっ？何この展開

視点 竜騎

今から1、2、3年でクラスごとの大会がある。

優勝者にはアカデミアからカードが贈呈されるらしい。

ライイエローとオベリスクブルーだけだ、

なんでオシリスレッドだけ無いんだ？

勝利数が一番多い人が優勝だから早速デュエルするか……

「あ、俺とデュエルしようぜ」

「1年か、いいぞ」

「「デュエル！」」

視点 シン

「空、オシリスレッドだけなんで通常通り実技なんだ？」

「知らないよ、そんな事」

「普通そう思うだろ誰でも」

「そつだね」

「ただ、実技の授業用のレンタルデッキは使い辛い」

「そうだね」

「お前聞いて無いだろ……」

「そうだね」

いつも通りの実技で午後は終わった。

「じゃあ竜騎を見に行くか」

「そうだね」

「お前さっきからそればかり言ってるだろ」

「それだね」

「ダメだこりゃ」

「そうだね」

仕方なく1人で行った。

おっ、竜騎だ。

「ダイガスタ・フェニクスの効果発動！エクシース素材を1つ取り除き、

ドラグニティナイト・ヴァジュランダをこのターン二回攻撃出来るようにする、
ヴァジュランダの効果発動！装備カードを墓地に送る事で攻撃力を倍にする！」

ATK1900 3800

「さらに墓地に送られたアキュリスの効果でお前のモンスターを破壊する！」

えげつねえ、

「しまった」

「ヴァジュランダでダイレクトアタック！」

「うわあああああああ！」

LPO

「よっしゃあ！」

帰ろ……。

視点 竜騎

ライイエローは2年と3年の優秀な人は殆どオベリスクブルーに行ってるから、

そんなに強い人がいないな……苦戦した人ならいたけど。

『大会は終了です。

結果は後日発表します』

やっと終わった。

結果が楽しみだ、優勝出来たかな？

翌日

視点 シン

竜騎からメール来てる……、空がおかしくなった？
とりあえず「昨日からだった」って返信。

今日は土曜だな……暇だ。

出掛けよう。

電話だ竜騎から？

「たたた大変なんだよ！そそそ空がおかしくなったんだ！そうだね
しか言わないし！」

「まだあのままなのかよ！」

「原因を知ってるか！？」

「知らないよ」

「使えない奴だな！」

イラッとしたよ。

「いいだろう、デュエルだ！ぶっ潰してやる！」
「そのデュエル、受けて立つ、ってその前に空が……」
「五月蠅い、さっさと来い！お前は俺を怒らせたんだ」
「分かった、行けばいいんだろ、行けば、って空が！」
「さっさと逝けばいいんだよ！」
「漢字が違っ！？」

数分後……

「竜騎！まずデュエルをして落ち着け！」
「わわわ分かった」

「デュエル！」

先攻は俺からだ。

「俺のターン！」

「俺はモンスターを伏せてターンエンド」

「おお俺のターン」

「ドラグニティ・ブランディストックを召喚、来い！ブラン！」

ATK600

忘れてたけどコイツもカードの精霊だったな……。

「ブランをリリースして、ドラグニティアームズ・ミスティルを特

殊召喚」

ATK2100

「ミスティルの効果で墓地のプランを装備、バトル！ミスティルで伏せモンスターを攻撃」

「伏せモンスターは魔導雑貨商人、効果山札をめくってで最初に出た魔法か罨を手札に加えて、残りを墓地に送る」

11枚めくってからようやく魔法カードが来た。

「俺はサイバーダーク・インパクト！を手札に加える」

「サイバーダーク？ミスティルで2回目の攻撃」

「リバーズカードオープン！パワー・ウォール、山札から21枚カードを墓地に送ってダメージを2100ポイント軽減する」

シンはデッキからカードを21枚バラまいて、ミスティルの攻撃を防いだ。

「くっ！ターンエンド」

「俺のターン」

「俺はサイバーダーク・インパクト！を3枚発動！手札、フィールド、墓地からサイバー・ダーク・ホーンとサイバー・ダーク・エッジとサイバー・ダーク・キールをそれぞれ1枚ずつデッキに戻して、鎧黒竜 - サイバー・ダーク・ドラゴンを融合召喚扱いとしてエクス

トラデツキから特殊召喚する」

ATK1000×3

「サイバー・ダーク・ドラゴンを特殊召喚した時、墓地のドラゴン族モンスターを1体装備して装備モンスターの攻撃力分攻撃力がアップする。」

俺は1体目にs i n t u ルース・ドラゴンを装備、2体目にタイラント・ドラゴンを装備、3体目にドラグニティ・アキュリスを装備、さらに墓地のモンスターの数×100ポイント攻撃がアップする。

俺の墓地のモンスターは18体、よって1800ポイント攻撃力がアップする！」

ATK7800

ATK4700

ATK3800

「竜装術を発動、効果でドラグニティ・ブランドイストックを攻撃力が一番高いサイバー・ダーク・ドラゴンに装備、竜装術の効果でドラグニティと名の付いたモンスターを装備しているモンスターの攻撃力は500ポイントアップする」

ATK8900

ATK3300

「ドラグニティ・フアランクスを通常召喚」

ATK500

「ブランディストックを装備しているモンスターは2回攻撃ができる、攻撃力8900のサイバー・ダーク・ドラゴンは2回攻撃が出来る。」

よって全モンスターで合計5の攻撃が出来る」

「……、」

「トドメだ、グオレンダ！」

竜騎

LP-20200

「落ち着いたか？」

「……、」

「ダメだ……心の底から折れてる、20000オーバーはやり過ぎたかな？」

「竜騎、どうしたの？」

「あれ？空、お前おかしくなったんじゃない」

「あれはただの芝居だよ」

「そうだったのか、竜騎良かったじゃん」

「そうだね」

「えっ？竜騎？」

「そうだね」

「おかしくなった！」

「そうだね」

「竜騎」

「そうだね」

「諦めよう」

「そうだね」

「「「そうだね……」」」

そして土日は終わった。

視点 竜騎

今日は結果発表があるぜ、何位かな？

体育館

『結果発表を始めます。まず、ラーイエローからです』

ドキドキ

『1位1年、朝風竜騎』

「よっしゃあああああ！」

思わず声をあげてしまった。

『優勝者はこちらへ来て下さい』

やっべー緊張してきた。

カードは教頭先生が渡してくれるそうだ。

「おめでとう」

渡されたカードは……ラーの翼神竜？！

視点 シン

学校が終わった。

帰る……

「待つてよ」

「空、早くしろよ」

「分かったから待って」

上を見ると今にも雨が降りそうな程曇っていた。

いつも通りの道で帰っていると、明らかに怪しい雰囲気で同じ年くらしいの少年がいた。

こういう場合は大抵敵か何かだ……多分。周りにいるカードの精霊が怯える。あつ！忘れてたけど、これは俺の精霊の瞳の力だ、カードの精霊を見る事が出来て、その精霊と会話したり、俺の身に迫る危険を察知して、教えてくれる能力だ、この前車に引かれそうになった時は危なかったな……、この世界でも交通事故で死亡とかシャレにならないからな。

「ヒヤヒヤッ！紅シン、見つけた」

「コスプレか何かですか？」

「ちげえよ、お前を潰しに来たんだよ」

「空、帰ろ」

「う、うん」

「待てよ」

「待てって言われて待つ馬鹿がいるかよ！」

「デュエルしろ」

「分かったよ……空、先に帰ってくれ」

「分かった」

「ヒヤヒヤッ！楽しませてくれよ」

「デュエル！」

「俺のターン」

「俺は古のルールを発動、真紅眼の黒竜を特殊召喚する」

ATK2400

「カードを伏せてターンエンド」

「ヒヤヒヤッ！ドロー！」

「カードを3枚伏せてターンエンド」

「俺のターン」

早いなターンが終わるの。

「俺は竜の尖兵を召喚」

ATK1700

「尖兵の効果、手札のドラゴンを捨てる事で捨てた枚数×300ポイント攻撃力がアップする！手札のドラゴンを2枚墓地に送る」

ATK2300

「バトル！真紅眼の黒竜でダイレクトアタック！ダーク・メガ・フレア！」

「ヒヤヒヤッ！トラップ発動！攻撃の無力化」

「止められたか……ターンエンド」

「ヒヤヒヤッ！ドロー」

「カードを伏せる、そしてこの3枚の伏せカードはトラップカードだ、この3枚を墓地に送ってヒヤヒヤッ！来い！神炎皇ウリア！」

地面が割れて、マグマが顔を出す。

そのマグマの中からオシリスのような胴が長い竜が現れた。

ATK 0

「これは……オリジナル?!」

「ヒヤヒヤッ！アカデミアの教頭とか言ってた奴がくれたんだよ」

「なんで……」

「ヒヤヒヤッ！ウリアの効果で墓地のトラップカード1枚につき攻撃力を1000ポイントアップする」

ATK 4000

「ヒヤヒヤッ！ウリアで竜の尖兵を攻撃」

ウリアの口から放たれた光線が竜の尖兵に直撃する。
ただ、それだけなら良かった……

（ソリッドヴィジョンじゃ無い?!）

シンの体は後ろに吹き飛んだ。

ウリアの攻撃で地面はえぐれていた。

LP4000 2300

「ヒヤヒヤッ！カードを伏せてターンエンド」

「俺の……ターン」

シンはゆっくりと起き上がって言った。

「早くくたばってくれよ」

「くッ俺は真紅眼の黒竜を守備表示に変更、カードを伏せてターン
エンド」

「ヒヤヒヤッ！そんな事しか出来ないとは……」

「ヒヤヒヤッ！俺は永続罫、最終突撃指令を発動だあ！これで真紅
眼の黒竜が攻撃になる」

「しまった……」

「ヒヤヒヤッ！速攻魔法縮小を発動！真紅眼の攻撃力を半分にする」

ATK2400 1200

「ウリアで攻撃イ」

終わった……とシンはゆっくりと膝をついた。

レッドアイズにウリアの攻撃が直撃した。

シンはウリアの攻撃がそれて地面にぶつかったため助かった。

シンはゆっくりと起き上がったが雰囲気がいつもと変わっていた。その瞳は真紅の色をしていた。

「ヒヤヒヤッ！やっと出てきたな真紅眼の悪魔」

「お前の幻魔のお陰でな……」

「ヒヤヒヤッ！デュエルしろ」

「無理だ……時間が無い」

「完全復活には程遠いと言う事が」

「そういう事だ、幻魔の力でシンの精霊の瞳の力が一時的に弱まっただけだからな……」

「ヒヤヒヤッ！そうかい。」

デュエル出来ないなら帰らせて貰うぜ」

「ああ」

真紅の瞳の少年は瞳を閉じるとゆっくりと倒れた。

シンは病院のベッドの上で目が覚めた。

「此処は……」

「だ、大丈夫?!」

「そ、空?!なんで?!」

「心配になって戻って来たらシンが倒れてたから」

「そっか……ゴメンな……」

そっいえばアイツの名前聞いてなかったな……

数日後、俺は退院した。

とりあえずまた学校生活が始まる。

えっ？何この展開（後書き）

サイバー・ダークは二度としません。

計算が難しいです。

間違っているかもわかりません。

あのデッキはミラフォでモンスター全滅ですね。

とりあえずウリアを出しました。

原作効果ア！

自分フィールド上の罨カード3枚を墓地に送った場合に特殊召喚することができる。

1ターンに1度だけ、相手フィールド上にセットされている罨カード1枚を破壊することができる。

このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、罨の効果を受けず、魔法・効果モンスターの効果は発動ターンのみ有効となる。このカードの攻撃力・守備力は自分の墓地の罨カード1枚につき1000ポイントアップする。

このカードが墓地に存在する時、手札の罨カードを墓地に送ることで、墓地のこのカードを特殊召喚することができる。

このターン自分フィールド上に他のモンスターが存在する場合、このカードは攻撃することができない。

長い……。

原作効果強いですね。

シン「俺って負け続きじゃね？」

竜騎「気にするな、次回は『意地のデュエル？空vs姫乃』だってさ」

次回のサブタイは変更される可能性があります。

意地のデュエル?!空vs姫乃(前書き)

今回は短めです。

意地のデュエル?! 空 vs 姫乃

今日も授業が始まった。

「魔法カードにはいろんな効果がある。例えばカードをドローしたり、相手のカードを破壊したり、モンスターを特殊召喚したりな」
そう言っただけ先生は黒板にモンスターの絵を書いた。
それは、まるで棒人間のようなものだ。

「先生、そのモンスターは何ですか？」

1人の生徒が質問をした。

先生は有り得ないといった表情で答えた。

「これは正真正銘、誰が見ても真紅眼の黒竜にしか見えないうろはろ？」
「！」

「ふざけるな！何処が真紅眼の黒竜だ！棒人間にしか見えないうろはろ！」

シンは先生の言葉を聞いてからそう言った。

「紅、貴様はいつも使っているカードのイラストも覚えて無いのか？」
「先生の絵がおかしいんですよ！」

「いい度胸だ！」

そしてシンと先生のリアルデュエルが始まった。

「普通にデュエルすればいいのに」

空は呟いた。

「こんな事でデュエルする事自体おかしいと思っよ」
1人の女子生徒が言った。

リアルデュエルは身体能力が常人よりも低いシンが勝てる筈も無くシンの敗北という形で幕を閉じた。

「紅、強さこそが正義だ！ストロング！イズ！ジャスティス！」

「「「「「ストロング！イズ！ジャスティス！」「「「「」

レッドの男子生徒は先生に同調して叫んだ！

「やつと昼休みだ……」

「大丈夫？先生とリアルデュエルするなんて……」

「大丈夫、それより今日の午後はブルーと合同で実技があるから、今の内にデッキでも、これあげるよ」

シンは一枚のカードを空に渡した。

「いいの？」

「どうせ使わないし」

「ありがとう！」

昼休みは終わり、ブルーと合同で実技の授業が始まった。

「頑張れよ、空」

「うん」

空は笑顔で振り向いて言った。

それを見てシンは笑顔を返す。

空は顔を真っ赤にして、慌てて前を向いた。

シンは当然その事に気づいていなかった。

シンはレッドの男子生徒から嫉妬の眼差しを受けた、シンはなんか複数の視線を感じたが気にしなかった。

「空の相手は、谷鳥姫乃？姫か……」

視点 空

シンってイケメンでなんでも出来そうだけど勉強も運動も出来ないんだよね……でもあの笑顔は反則だよ……。

「ちょっとアナタ、一体シンとどういう関係なの？！付き合ってるの？」

「えっ？そそそ、そんな事無いよ／＼／」

「とぼけないで！シンは私の物なんだから！」

視点シン

俺は物なのか？

シンがそう思っていると、周りからの視線が凄い事にシンは気付いた。

「先生、なんか此处居づらいです」

「紅、何故か分かるか？」

「サッパリです……俺何かしましたか？」

「自覚が無いとは……お前は一度顔面崩壊した方がいいぞ」
「えっ？」

精霊の瞳を使うと精霊達はシンに早く逃げろと言っていた。

視点 空

「「デュエル！」」

先攻は相手からだね。

「私のターンよ！」

「私はモンスターをセット、カードを2枚セットしてターンエンドよ」

「私のターン」

「私はサイバー・ドラゴンを特殊召喚」

ATK2100

「そして、カオスエンドマスターを召喚」

ATK1500

「レベル5のサイバー・ドラゴンにレベル3のカオスエンドマスターをチューニング！光の聖騎士よ、その聖なる力で敵を貫いて！シンクロ召喚！神聖騎士パーシアス！」

ATK2600

「バトル！パーシアスで伏せモンスターを攻撃」

伏せモンスターは霞の谷の見張り番だった。

DEF1900

「パーシアスには貫通効果があるよ」

「これくらい！」

ヒメ

LP 4000 3300

「ターンエンド」

「私のターンよ」

「私は霞の谷のファルコンを召喚」

ATK 2000

「さらにビッグバン・シュートをパーシアスに装備させるわ」

ATK 2600 3000

何で相手のモンスターの攻撃力を上げるの？

「バトル！霞の谷のファルコンでパーシアスを攻撃！攻撃宣言時にビッグバン・シュートを手札に戻すわ、ビッグバン・シュートの効果でパーシアスは除外！」

「強い……」

「ファルコンでダイレクトアタック！」
空

LP 4000 2000

「ターンエンド」

「わっ私のターン」

「どうしよう……」

「空！手札をよく見る！」

「シン?!」

なんか、見つけたぞ！とか追え！とか聞こえる。
シンは何処かに行っちゃった。

えつと手札は……トラスト・ガーディアン、サイバー・ドラゴン……
いける！

「私はサイバー・ドラゴンを特殊召喚」

「また？」

「トラスト・ガーディアンを召喚」

「レベル5のサイバー・ドラゴンにレベル3のトラスト・ガーディアンをチューニング！

光を抱きし聖なる竜よ、その力で敵を浄化して！シンクロ召喚！光
臨せよ、ライトエンド・ドラゴン！」

ATK2600

「バトル！ライトエンド・ドラゴンで霞の谷のファルコンを攻撃、
その時ライトエンド・ドラゴンの効果発動、攻撃力と守備力を50
0ポイント下げて戦闘を行う相手モンスターの攻撃力を1500ポ
イント下げる、ライト・イクスパンション！」

ATK2600 2100

DEF 2100 1600

ATK 2000 500

「な、何ですって?!」

「ライトエンド・ドラゴンの攻撃! シャイニングサプリメーション
!」

ヒメ

LP 3300 1700

「ターンエンド」

「私のターンよ!」

「私は霞の谷のファルコンを召喚」
ATK 2000

「また?」

「ビッグバン・シュートをライトエンド・ドラゴンに装備させる!」

ATK 2100 2500

「霞の谷のファルコンで攻撃の時にビッグバン・シュートを手札に
戻してライトエンドを除外する!」

「そんな……」

「霞の谷のファルコンでダイレクトアタック！」

空

LP20000

負けた……。

「なかなか強いわね！」

「そ、そんな」

「まだ私のライフを半分以上削ったのは10人くらいなのに」

「そうなんですか？」

「いちいち敬語使わなくても良いのに、同い年なのよ」

視点 シン

空が負けたか……。

まあ仕方ないな。

俺？今ダンボールの中、見つかったら何されるかわからないからな。
するとダンボールが持ち上げられた。

「！」

意地のデュエル?! 空 vs 姫乃 (後書き)

今回は1度書いたのが全部消えてしまい、やる気を失い短めになつてしました。

保存しながら書けば良かった……。

すいません。m(┐┌)m

ついでにシンクロ召喚時のセリフを考えるのに時間が……、特に今回は自分が使わないカードだったのでイメージが掴めず、いつもの倍くらい時間がかかってしまいました。

次回予告?

竜騎「今回は遂にシンが神のカード、オシリスを使うぜ!

次回『神のカード、オシリスの天空竜召喚!』お楽しみに」

次回のサブタイは変更される可能性があります。

神のカード、オシリスの天空竜召喚！（前書き）

シンがオシリスの天空竜初召喚です。
原作効果の神が強い……。

神のカード、オシリスの天空竜召喚！

視点シン

「できた！オシリスデッキ！」

それでもレッドアイズが入ったデッキだが

「ドジリスなんて言わせないからな！」

翌日

「遅刻確定！いや、まだ希望は有る、全速前進DA！」

近道の路地裏に入った時突然、男に話しかけられた。

「紅シンだな……」

「俺の全速前進を邪魔するな！」

横を通ろうとすると、男は俺の腕を掴んできた。

「H A N A S E！俺は遅刻しそうなんだ！」

「それは出来ない、女王様から連れて来いと言われてるんでな」

「知るか！ならデュエルだ」

此処は狭いがそんなの関係ねえ。

「いいだろう」

「デュエル！」

「俺のターン！」

「古のルールを発動し、真紅眼の黒竜を特殊召喚！」

ATK2400

「モンスターを伏せてターンエンド！」

「私のターンだ！ドロー！」

「私は切り込み隊長を召喚！効果でもう1体の切り込み隊長を特殊召喚！」

ATK1200×2

「切り込み隊長2体をオーバーレイ！」

2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築、エクシーズ召喚、グレンザウルス！」

ATK2000

「グレンザウルスで伏せモンスターに攻撃」

伏せモンスターはメタモルポット

「リバー効果でお互いは手札を全て捨ててデッキから5枚ドロースする」

シンのドロースしたカードの中に赤い枠のカードが1枚有る。
ドロースした後、メタモルポットを破壊された。

「グレンザウルスの効果でエクシーズ素材を取り除いて相手ライフに1000ポイントのダメージを与える」

シン

LP 4000 3000

「カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン」

「レッドアイズのレベルを1下げて墓地のレベルスティーラーを特殊召喚する」

ATK 600

「さらに手札を1枚デッキトップに戻してゾンビ・キャリアを特殊召喚」

「まさかトリシューラか?!」

「持って無い、俺はレッドアイズ、ゾンビ・キャリア、レベルスティーラーの3体を生け贄に捧げ、オシリスの天空竜を召喚!」

「か、神のカードだと?!」

胴が長くて、口が2つある赤い竜が現れた。

ATK X000

「オシリスの効果、攻撃力、守備力は手札の枚数×1000ポイントアップする! 俺の手札は5枚、よって攻撃力は5000になる」

ATK X000 5000

「わ、私はトラップを発動、奈落の落とし穴神は破壊させて貰う」

「神は畏の効果は受けない」

「なんだと?!」

「オシリスの天空竜の攻撃! サンダーフォース!」

????

LP 4000 1000

「ターンエンド」

「わ、私の……ターン」

「ははっ、私はN・グラン・モールを召喚」

ATK 900

「残念だったな、オシリスの効果で相手がモンスターの召喚に成功した時そのモンスターの攻撃力を2000ポイント下げて、0ポイントになったモンスターは破壊される、召雷弾」

ま、どっちにしろモンスター効果も受けないからグラン・モールの自爆特攻にしかないけどね。

オシリスの第二の口が開かれた。

「そんな……こんなの勝てる訳が無い……」

グラン・モールが破壊される。

「ターンエンド」

「俺のターン」

「オシリスの攻撃は1000アップだな」

ATK 5000 6000

「オシリスの攻撃、サンダーフォース！」

???

LP 1000 0

「お前のせいで遅刻確定じゃないか！だいたい女王様って誰だよ！奴隷かお前は！」

見つけたらワンキルしてやる。

「その内分かるさ……」

まあいいか、そのまま男を置いてアカデミアに全速前進DA！

遅刻した！

急いで教室に入らないと……。

シンが急いで教室のドアを開けた瞬間、シンの頭にチョークが直撃した。

「先生は預言者か?!」

「紅、お前くらい気配で分かる（足音で気づいただけ）」

「凄い……」

（馬鹿は扱いやすいな……）

「紅、職員室に行ったか？」

「はい！行きませんでした！」

「よしみんな、今から先生が戻って来るまで自習にする」

「良かった……」

「何がだ？」

紅、お前を職員室に連れて行くだけだぞ」

「マジすか」

シンは職員室に連れて行かれた。

昼休み

「やったよ空、今日初めてオシリス使ったよ」

「良かったね、いつデュエルする時間あったの？」

「朝急いでた時に変な男とデュエルした、なんか女王様に俺を連れて来いって言われてたらしいよ」

「それって何か変な事に巻き込まれてるって事じゃ無いの?!」

「その発想は無かった!」

「本当に馬鹿だね……」

「ハッハッハ、何とでも言っ方がいい」

「おい、シン!」

「竜騎?!」

「今日の午後の実技はお前と俺のデュエルだからな」

「マジで……」

「シン、竜騎なんか倒しちゃって」

「空、お前はどっちの味方なんだ？」

午後の実技が始まる。

「竜騎とデュエルするのは久しぶりだな」

「そうか？あのサイb……あああああああ！」

「おかしくなった！」

「潰してやる……神で潰してやる」

「早く始めよう」

「「デュエル！」」

先攻は俺からだ。

「俺のターン」

「俺は真紅眼の飛竜を召喚」

ATK1800

「カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン！ドロー！」

「手札からフィールド魔法竜の渓谷を発動！」

「竜の渓谷の効果、手札を1枚捨ててデッキからドラグニティード

ウクスを手札に加える、モンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「フィールド魔法の効果は俺も使える、手札を1枚捨ててデッキから真紅眼の黒竜を墓地に送る」

「バトル！真紅眼の飛竜で伏せモンスターに攻撃！」

「残念でした、伏せモンスターはシールド・ウィング1ターンに2回まで戦闘では破壊されない」

DEF900

「ターンエンド」

「俺のターン！」

「竜の渓谷の効果手札を1枚捨ててドラグニティ・ファランクスを手札に加えて、魔法カード調和の宝札を発動、ファランクスを捨てて2枚ドロ」

「俺はデブリ・ドラゴンを召喚、効果で墓地のスノーマンイーターを特殊召喚、カードを伏せてターンエンド」

ATK1000

ATK0

「レベル2のシールド・ウイングにレベル3のスノーマンイーターとレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！封印より解き放たれし最後の龍よ、その息吹で全てを終わらせろ！シンクロ召喚！氷結界の龍トリシューラ！」

魔法陣のような物が浮かび上がり、そこからトリシューラが出て来た。

ATK 2700

「最後の龍とか言うくらいなら最後に出せ！オリジナルかそれ？」

「知らない、別に良いだろ」

まあいいか、この手札の中から竜騎がオシリスを当てられる訳が無いだろ……。

神のカード、オシリスの天空竜召喚！（後書き）

原作効果の神は強いですね。

友達のあだ名がザツキーからコザツキーになってた……。

僕は海馬社長のセリフばかり言っていたのであだ名が社長になってしまいました（笑）。

次回予告

龍一「遂に現れたな氷結界の龍、ふつくしい……」。

シンは勝てるのだろうか？

次回『解放、氷結界の龍と太陽神の力』次回も全速前進DA！」

シン「社長の真似してるんだろっけど、声と髪型が似てないよ……」

解放、氷結界の龍と太陽神（前書き）

原作効果のラーの翼神竜はチートだ……。
なんでOCG効果はあんなに弱いのか？
弱くし過ぎな感じが……。
誰にも使って欲しく無いのかな？

解放、氷結界の龍と太陽神

視点 シン

前回までのあらずじ、竜騎がトリシューラ出したよ！
俺ピンチ！

「トリシューラの効果を発動！相手のフィールド、手札、墓地から1枚ずつ選んでゲームから除外する、俺は真紅眼の飛竜と墓地の真紅眼の黒竜、そして手札は一番右を選ぶ」

「オシリスが！！」

トリシューラの口から放たれた氷が直撃してカードが氷漬けになった！

「そう焦るなよ、まだデュエルは始まったばかりだぜ」

「もうオシリス出ねえよ！」

「バトル！トリシューラでグローアップ・バルブに攻撃！」

「リバースカードオープン！和睦の使者、このターンモンスターは戦闘では破壊されず、プレイヤーはダメージを受けない」

「ならターンエンドだ」

「俺のターン」

「モンスター2体を守備表示に変更して、モンスターをセット、カ

ードを伏せてターンエンド」

「俺のターン！ドロー」

「俺はデブリ・ドラゴンを召喚、効果でスノーマンイーターを特殊召喚」

ATK1000

ATK0

「レベル3のスノーマンイーターにレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！

解き放たれし第2の龍よ、その力で万物貫け！シンクロ召喚！凍てつくせ！氷結界の龍グングニール！」

ATK2500

「この手札は捨てられないな……、バトル！グングニールでグロアップ・バルブを攻撃！」

「リバーズカードオープン！攻撃の無力化！」

「ターンエンドだ……」

「俺のターン」

「カードを伏せてターンエンド」

「俺のターンだ！」

「俺はドラグニティ・ドゥクスを召喚、効果でファランクスを装備、ドゥクスの効果、フィールド上のドラグニティの数×200ポイント攻撃力がアップする。攻撃力は400アップだ」

ATK1500 1900

「ファランクスの効果で装備されているこのカードをフィールド上に特殊召喚する事が出来る、俺はファランクスを特殊召喚する」

ATK500

「レベル4のドゥクスにレベル2のファランクスをチューニング！解き放たれし第1の龍よ、凍てつく吐息で全てを無に返せ！シンクロ召喚！復活しろ！氷結界の龍ブリューナク！」

ATK2300

「出す順番逆じゃね？トリシューラ最後だろ」

「気にするな、ブリューナクの効果、手札を1枚捨てて、お前の伏せカードを手札に戻す」

「グングで破壊すれば良かったのに」

「バトル！ブリューナクでグローアップ・バルブに攻撃！」

「何故バルブを狙うんDA！」

「知らねえ」

バルブが凍らされた。

その後、モンスターは全滅した。

「ターンエンド」

「拙い、このままだとオーバーキルされる。
俺のターン」

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「勝った！俺のターン！」

「もう勝利宣言……だと」

「氷結界の三龍全てを生け贄に捧げ、ラーの翼神竜を召喚！」

「予想外デース」

トラップが効かない伏せカードはミラフォとグレイモヤ……勝てない。

「ラーの攻撃力は生け贄に捧げたモンスターの攻撃力の合計した数字になる」

ATK7500

「チートだ……」

「さらにラーの効果でライフを1になるように払ってラーの攻撃力

を払った数値アップさせる。
これで俺とラーが一体化するのラー」

竜騎

LP 4000 1

ATK 7500 11499

「語尾にラーが付いたラー……感染したんだラー！
つてか古代神官文字読まなくていいのかよ！」

「なあにそれえ？」

「ラーの攻撃！ゴッド・ブレイズ・キャノン！」

シン

LP 4000 0

負けた……。

「やったぜ！やっとなも無きモブ以外を倒せた！」

「今言っちゃいけない事を言ってた気が……」

「気にするな」

「気にするよ！」

竜騎に負けた……だと？！
今度、ワンキルしてやる！

「負けちゃたね」

「五月蠅い！」

「そんなに怒らなくても……」

「ラーとかチートだろ……」

放課後

「帰るか……」

「待つてよ」

「なんで待たないといけないの？」

「シンの意地悪」

「そういえばなんで竜騎がラーを持ってるんだ？」

「確かこの前アカデミアの大会で優勝した時貰ったって言ってたよ
うな」

「なんでだろう？」

シンは1枚のカードを取り出して言った。

「それってオシリスの天空竜？！
なんで持つてるの？！」

「教頭先生に貰った」

「凄いじゃん」

精霊の瞳で確認しとけば良かったな……

ライエローの優勝者がラーを貰ったって事はオベリスケブールの優勝者はオベリスクを貰ったと仮定できる。

その場合は俺だけタダで貰ったという事だ、何かあるぞ。

「考えるのは疲れる」

「何をが考えてたの？」

「難しい事」

「きつと足し算だね」

「俺はそこまで馬鹿じゃねえ〜！」

此处で今周りに人が居ない事に気づいた。

「なんかこの道人通って無いな」

「あゝら坊や彼女と家に帰る途中だった？」

「かかか彼女って／＼／」

「あら違うの？」

「誰だ?!」

精霊の瞳の能力を使った結果コイツは悪い奴だ（精霊達にとって）。

「あら知らない？朝部下を送っておいたのに」

「女王様ってのはお前の事か？！

何が目的だ？」

「私はただ貴方とデュエルしたいだけよ」

「最初から自分から出てくればいいのに」

「まあいいわ、デュエルよ」

「準備は出来てる」

すると突然携帯の着信音が鳴った。

「あら、電話だわ……何よ？……はあ？分かったわよ」

「早く早く」

「シン、キャラ変わってるしなんでそんなにノリノリなの？」

「早く帰りたいからに決まってるだろ！」

「残念ながら今日はデュエル出来ないわ」

「よっしゃああああああー！」

「喜びすぎ……」

「またすぐに会えそうだわ」

「二度と来ないで下さい」

女は何処かへ行った。

「何だったんだ？」

「さあ？……帰ろう」

視点 竜騎

「デュエルしよう」

突然話し掛けられた。

「誰だお前？」

「僕はブルー２年の御門茂雄、よろ」

「それで、何？」

「だからデュエルしよう」

「分かった」

デュエルする事になった。

「デュエル！」

先攻は御門さんからだ。

「僕のターン」

「僕はカードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターンだ！」

「俺は調和の宝札を発動、ファランクスを捨てて2枚ドロ、そしてドラグニティ・ドウクスを召喚ファランクスを装備させる」

ATK1500 1900

「ファランクスの効果で装備されているこのカードを特殊召喚する」

ATK500

「レベル4のドウクスにレベル2のファランクスをチューニング！魔を払う竜騎士よ、旋風を巻き起こせ！シンクロ召喚！現れる！ドラグニティナイト・ガジャルグ！」

ATK2400

「バトル！ガジャルグでダイレクトアタック！」

「リバースカードオープン、終焉の焰、効果で黒焰トークン2体を守備表示で特殊召喚するよ」

DEF 0 × 2

「ならガジャルグで黒焰トークン1体に攻撃」

「カードを伏せてターンエンド」

「僕のターン」

「僕は黒焰トークンをリリースして邪帝ガイウスをアドバンス召喚するよ」

ATK 2400

「ヤバッ！トラップ発動、風霊術・「雅」！効果でガジャルグをリリースしてガイウスをデッキの一番下に戻す」

「ならカードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターンだ！」

「俺は調和の宝札を発動、攻撃力1000以下のドラゴン族チューナーを捨てて、2枚ドロ」

「とりあえず永続罫、マクロコスモスを発動するよ、調和の宝札で捨てられたカードはコストだから除外されないけどね」

「俺はドラグニティ・ドゥクスを召喚して、ファランクスを装備」

ATK 1500 1900

「フアランクスの効果で装備されているこのカードを特殊召喚する」

ATK500

「レベル4のドウクスにレベル2のフアランクスをチューニング！封印から解き放たれし第1の龍よ、その力で全てを無に返せ！シンクロ召喚！氷結界の龍ブリューナク！」

ATK2300

「バトル！ブリューナクでダイレクトアタック！」

「手札のバトル・フェーダーの効果を発動するよ、ダイレクトアタックの時に手札から特殊召喚してバトルフェイズを終了させるよ」

「カードを伏せてターンエンド」

「僕のターン」

「僕は闇帝ディルグを召喚するよ」

ATK2400

「ディルグの効果、相手の墓地のカードを2枚まで除外するよ、君の墓地のドラグニティナイト・ガジャルグと調和の宝札を除外、そして除外した枚数相手のデッキの上から墓地に送るよ、マクロコスモスの効果で除外されるけどね、それとディルグは召喚、特殊召喚したターンには攻撃できないからターンエンドだよ」

「俺のターン」

手札が……。

「ブリーナクの効果、手札を捨てて捨てた枚数相手のカードを手札に戻す、俺は1枚捨ててマクロコスモスを手札に戻す」

「ブリーナクの効果は発動できないよ」

除外は嫌だ……。

「なんだって!?」「ならデブリ・ドラゴンを召喚、墓地のスノーマンイーターを特殊召喚」

ATK1000

ATK0

「レベル3のスノーマンイーターにレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

解き放たれし第2の龍よ、その力で万物貫け！シンクロ召喚！凍てつくせ！氷結界の龍グングニール！」

ATK2500

「グングニールも効果は使え無いよ」

「ならバトル！グングニールでディルグに攻撃！」

御門

LP4000 3900

「ブリーナクでダイレクトアタック！」

御門

LP 3900 1700

「カードを伏せてターンエンド」

「僕のターン」

「僕はモンスターを伏せてターンエンドだよ」

「俺のターンだ」「俺はドラグニティ・ミリトゥムを召喚する」

ATK 1700

「伏せておいた停戦協定を発動、裏側守備のモンスターを全て表側表示に変更して、表側表示で存在する効果モンスター1体につき相手ライフに500ダメージ与える。」

伏せモンスターは魂を削る死霊だ。

「効果モンスターは4体、よって2000ダメージだ！」

御門

LP 1700 0

「またデュエルしましょう」

視点 シン

「明日終業式じゃん」

7月だという事にも今気づいた。

「今頃気づいたの？」

「すっかり忘れてた」

「何かあったの？」

「終業式の日放課後に呼び出しが……」

「まさか何か悪い事でもしたの!？」

「してないし知らないし!とりあえず明日逝くか……」

「漢字が違うよ」

明日は終業式だ……。

呼び出しもあるし、ダルい……。

ここは欠席するという手もあるけど、

先生に何されるか分からないからな……。

頑張って乗り切ろう。

解放、氷結界の龍と太陽神（後書き）

ラー、流石に特殊召喚できるようにして欲しかった。

次回予告

シン「呼び出しとか……、何の為に呼ばれたんだろう？
次回『遂に激突、神と幻魔』
ってなんでまた俺が次回予告を？」

遂に激突、神と幻魔（前書き）

今回は原作効果の神と幻魔が全部出ます。

威嚇するほうこうの（ほうこう）って漢字が変換できません。

遂に激突、神と幻魔

視点シン

終業式が終わった。

今職員室の前にいる。

でも呼び出して俺何かしたか？

「先生、何で俺は呼び出されたんですか？」

「紅、そういえば教頭先生が呼んでたな」

教頭かよ！

「何で教えてくれなかったんですか！」

「まあ、良いだろ早く行け」

「はい……」

「教頭先生、何か用ですか？」

「やっと来たか……君に話があるんだこっちに来てくれ」

アカデミアの教頭、衣川富夫……。

一応精霊の瞳で確認するか……。

シンは精霊の瞳の力を使うが周りに精霊の姿は無かった。

何でだ？

そう考えている内に衣川の体から闇のような物が出ている事に気づいた。

「どうかしたのかね？」

「いえ、何でもありません」

「そうか、なら本題に入ろう、君は明日、この場所に来てくれ、地図は渡しておくから」

「はい」

面倒くさい……。

次の日

「竜騎がなんで来てるの？」

「教頭に此処に来るようにと言われたから」

「お前もか、龍一」

「オレは竜騎について来ただけだ」

「空は？」

「龍一と姫乃と一緒にだよ」

「だからいるのか……」

「なによ！空に買い物に行こうって言ったら此処に行くって言ったからついて来たのよ」

「お前らいつの間に仲良くなってるんだよ……それと、四天王（笑）の葛原先輩、なんで居るんですか？
それと、他の人達は？」

「（笑）なんて付けないで……余計恥ずかしくなるから、それとなんか居るだけで悪いみたいな言い方は無いだろ……他の奴は来てないよ、話して無いし」

「で、これから何があるんだ？」

「スルーか？先輩をスルーか？」

「みんな集まったかね？」

呼んで無い生徒まで来ているな、とりあえず船に乗ってもらおう」

「何処に行くんですか？」

「少し離れた無人島だよ、そこに居るデュエリストとデュエルしてもらおう」

「そこまでしなくても……」

「無人島に行つてまでデュエル？」

「来たまえ」

俺達は船に乗って無人島に行った。

「此処は何があつたんだ？」

「確かデュエルアカデミアだったよ」

「使われて無いね」

「うん、何年か前の地震と津波のせいで廃校になったんだよ」

「へえ」

GXのデュエルアカデミアと似てるな……。
相手のデュエリストは……

「ヒヤヒヤッ！久しぶりだな、紅シン！」

「えっ！？なんでお前が？」

「ヒヤヒヤッ！アカデミアの教頭から呼ばれてな、これタダでくれた人だからな」

神炎皇ウリア……、三幻魔の1枚だ。

「あら、久しぶりね坊や」

「嫌だ……会いたくなああああああい！」

これとは会いたくなかった。

「坊や、私そんなに嫌われてるの？」

「嫌いDA！」

「シン……そこまで言わなくても」

「さあ早く始めなさい、ルールはバトルロワイヤル形式だからな」

この教頭、何が狙いだ？

「ヒヤヒヤッ！始めようぜ」

「はあ」

「3対3のデュエルか」

「坊やもなかなか良いわね」

「うわあああああ！来るな来るなあああ！」

「行くぞ」

「……、」

「「「「「デュエル！」「「「「「」

「俺のターン」

俺のターンからだ……。

「俺は古のルールを発動、手札から真紅眼の黒竜を特殊召喚する」

ATK2400

「カードを伏せてターンエンド」

「ヒヤヒヤッ！俺のターン！」

「ヒヤヒヤッ！罨カードを3枚伏せて、墓地に送り、神炎皇ウリアを特殊召喚、墓地の罨の数攻撃力が1000アップだあ」

ATK0 3000

「ヒヤヒヤッ！バトルロワイヤルでは最初のターンに攻撃出来ないターンエンドだあ」

「俺のターンだ！」

「俺は調和の宝札を発動、フアランクスを捨てて2枚ドロ！」

「さらに死者蘇生を発動、フアランクスを蘇生、フアランクスをリリースしてドラグニティアームズ・ミスティルを特殊召喚、

フアランクスを装備、

フアランクスの効果でフィールドに特殊召喚、

フアランクスをリリースしてミスティルを特殊召喚、

フアランクスを装備、

フアランクスをフィールドに特殊召喚、

フアランクスをリリースしてミスティルを特殊召喚、
フアランクスを装備」

ATK2100×3

「ミスティル3体を生け贄に捧げて神のカード、
ラーの翼神竜を召喚、

ラーの攻撃力は生け贄に捧げたモンスターの攻撃力の合計になる」

ATK6300

「ただ引き強いんだよ、最近チートドロになってないか？少し
前まではあんなに悪かったのに……、
なんか俺だけ置いて行かれてる感が……。」

「俺はラーの効果でライフを1000払ってウリアを破壊する！
ゴッド・フェニックス！」

「なあにいい！？」

ウリアが破壊された。

「ターンエンド！」

「私のターンよ」

「私は魔法カードを3枚伏せて、墓地に送り降雷皇ハモンを特殊召喚するわ」

ATK4000

ほーら出たよ、どーせ俺だけなんだろ、
1ターンで出せないのは、
まあ最上級モンスターはだせるけどね。

「カードを伏せてターンエンドよ」

「俺のターン！」

「俺はサイバー・ドラゴンを特殊召喚、」

ATK2100

「ワン・フォーワンを発動、手札を捨ててスクラップ・サーチャーを特殊召喚、さらにデッキトップを墓地に送って、グロリアップ・バルブを特殊召喚」

ATK1000×2

「3体をリリースして、オベリスクの巨神兵を召喚」

ATK4000

一番意外な人が神を出した！

「カードを伏せてターンエンド」

「……俺のターン」誰だ？

見たこと無い人だ。

「……俺は手札抹殺を発動、
お互いの手札を全て捨て、
捨てた枚数ドローする……」

「俺、手札無いよ……ドロー出来ない」

竜騎ドンマイ、

俺はゾンビ・キャリアとグローアップ・バルブが落ちたよ。

「……墓地に捨てられた暗黒界の尖兵ベージを特殊召喚、
さらに墓地に捨てられた暗黒界の狩人ブラウの効果でカードを1枚
ドロー」

ATK1600

「もう1度手札抹殺を発動、
墓地に捨てられた暗黒界の軍神シルバを特殊召喚」

ATK2300

「……暗黒界の取引を発動、
お互いにカードを1枚ドローし、手札からカードを1枚捨てる」
「捨てられた暗黒界の尖兵ベージを特殊召喚」

ATK1600

「……3体を生け贄に捧げ、幻魔皇ラビエルを召喚する」

ATK4000

結局俺だけ置いて行かれた。

まあ次のターンは出るけどね。
ラビエルって原作効果の方が使いにくいな……。

「凄い……1ターンで神と幻魔があわせて5体も……」

そんな事言わないで！

神を出せなかった俺は何なの？

「……ターンエンド」

やっと回ってきた！

「俺のターン！」

「俺は手札の1枚をデッキトップに戻してゾンビ・キャリアを特殊召喚、さらにデッキトップを墓地に送ってグローアップ・バルブを特殊召喚」

ATK400

ATK100

「3体を生け贄に捧げオシリスの天空竜を召喚！」

ATK X000

「オシリスの攻撃力は手札の枚数×1000ポイントアップする、俺の手札は3枚、よってオシリスの攻撃力は3000」

ATK X000 3000

「オシリスでヒヤヒヤッ！とか言ってる奴にダイレクトアタック！
サンダー・フォース！」

「ヒヤヒヤッ！

……なあに！？」

LP 4000 1000

アイツはオシリスの攻撃をまともに受けて吹っ飛んだ。

「吹っ飛んだ！？
なんで？」

「……闇のゲームは始まってるよ……」

「ヤバいつて……
ターンエンド」

「ヒヤヒヤッ！俺のターン」

「ヒヤヒヤッ！俺は手札の罾カードを1枚捨ててウリアを特殊召喚
する」

ATK 4000

「墓地にトラップカードが増えたから攻撃力が上がった……」

「ヒヤヒヤッ！バトル！ウリアでオシリスに攻撃！」

LP4000 3000

「ヒヤヒヤッ！何も出来ないよなあ
ターンエンドだあ」

「俺のターンだ！」

「俺はラーでウリアに攻撃！
ゴッド・ブレイズ・キャノン」

LP1000 0

「ヒヤヒヤッ……なんで……俺ばかりに……」

「倒せる奴から先に倒すから、ターンエンド」

何この竜騎が有利な状況は？

だいたい余裕なプレイングするなよ、効果でハモン破壊してたら終わってたのに……。

「私のターンよ、

私はハモンで紅の坊やに攻撃！
失楽の霹靂！」

「俺は手札のバトルフェーダーを特殊召喚して相手のバトルフェイズを終了させる！」

DEF0

「ならターンエンドよ」

「俺のターン」

「オベリスクの効果を使うには2体のモンスターがいる……俺の手札にはスクラップ・キマイラが居ないから無理だ……」

言っでどうするんだよ！

「ターンエンド」

何もしないままターン終了しやがった。

次のアイツは何なんだ？

さっきからニヤニヤしてるし……。

「……俺のターン」

遂に激突、神と幻魔（後書き）

今更ながらタッグフォースルールにしておけば良かったと思いました（笑）。

今回はデュエル構成が難しい……ラー強い（効果使ってたら幻魔組は終わってた）竜騎は自分で倒したかったのであえて効果をつかわせなかったという事で。

それと、急いでいたのでミスが有りそうな感じになってしまいました（途中で書いていたのが少し消えたりもしたので）。

次回予告

シン「次回『混沌幻魔現る、逆転の超融合！光の創造神召喚！』
えっと作者から一言（ご都合主義ですいません）だそうです。
また次回予告俺かよ」

混沌幻魔現る！逆転の超融合、光の創造神召喚！（前書き）

今回はかなり短いです。

トドメはチートカードなので……。

やってしまった感があるのですが、
流石にあれは……。

混沌幻魔現る！逆転の超融合、光の創造神召喚！

「……俺のターン」

闇のデュエルの影響かやけに暗いな……。特にこのターンが始まってから更に暗く不気味な感じた。

「……俺は死者蘇生を発動して、そこに倒れている奴の墓地から神炎皇ウリアを特殊召喚する」

ATK0

「なんでトラップが墓地に無いのにウリアを……」

「……暗黒界の尖兵ベージを召喚」

ATK1600

「……手札から強制転移を発動、ハモンを選ぶ」

「ハモンを……」

「手札から魔法カード次元融合殺を発動、ラビエル、ハモン、ウリアを除外して混沌幻魔アーミタイルを融合召喚」

ATK0

「なんだと！？」
あれって弱くない？

一体一体の方が強く見えるの俺だけ？

「ふふっ、はははは」

おかしくなったよ。

「混沌幻魔アーミタイルの効果、相手モンスター1体に10000ポイントのダメージを与える！
オベリスクに攻撃！」

LP40000

ワンキルだ……。

「はははは、混沌幻魔アーミタイルの効果、このカードのコントロールを相手に移す事ができる、朝風お前に移す」

「なんで……」

「さらにアーミタイルの効果、このカードのコントロールを俺に戻し、コントロールしていたプレイヤーのフィールド上に存在するカードをゲームから除外する」

「そんな！」

「ターンエンド」

「俺のターン」

「手札は2枚……」

手札から真紅眼の壺を発動、レッドアイズと名の付くモンスターを除外してデッキから3枚カードをドローする」
これで勝てる！

「死者蘇生を発動、墓地から蘇れ！
オシリスの天空竜！」

ATK2000

「さらにリバースカードオープン！
神の復活、

ライフを1になるように払い、
墓地またはゲームから除外されているレベル10以上のモンスターを効果を無効にして持ち主のフィールドに特殊召喚する！
この効果はライフが0のプレイヤーにも適応する」

三幻魔とラーとオベリスクがフィールドに蘇る。

「シン！何やってんだ！

幻魔まで特殊召喚されるんだぞ！」

「そして、手札から超融合を発動！

手札を1枚捨てて、フィールド上に存在するオシリスの天空竜とオベリスクの巨神兵とラーの翼神竜を融合する！」

「神を融合！？」

「光の創造神ホルアクティを融合召喚！」

ATK

何も書かれていないカードにテキストなどが浮かび上がった。

「何だ？このモンスターは！？」

「ホルアクティの効果、召喚はいかなる効果にも無効にされず、このカードを融合召喚した時、ゲームに勝利する」

「『なっ！？』」

混沌幻魔と三幻魔は抵抗する間も無く灰になる。
眩い光で闇が消えていった。

L P O

L P O

L P O

デュエルの時、何か変な感じがしてたんだよ……
何か自分の中から出てくるような……、

「シン、お前何使ってたよ！」

「それより神を返してくれないか？」

あれ？なんで俺の墓地に……。

俺がオベリスクのカードに触れるとカードの形が崩れ、消滅した。

「『えっ！？』」

ラーとオシリスも消滅してしまった。

「なんで……俺のラーが……」

「く、苦しい……」

「紅ッ！大丈夫か？」

俺は苦しきのあまり倒れた。

みんなが近づいてきたと分かった時に俺の意識は途絶えた……。

混沌幻魔現る！逆転の超融合、光の創造神召喚！（後書き）

光の創造神ホルアクティ……

やってしまった感がハンパない……。

こんな効果でいいですよね？

今回しか使わない（もう使えない）ので見逃して下さい。

原作でも効果分かりませんし……。

シン「次回『真紅眼の悪魔の完全復活、龍一の切り札青眼の光龍』
もう次回予告は毎回俺確定か……」

真紅眼の悪魔完全復活、龍一の切り札青眼の光龍

視点 竜騎

ラーがラーがああああああ！

あれ？

シンが倒れた！？

「紅ッ！大丈夫か！？」

「シンッ！」

みんなが近づこうとすると、

突然シンが燃え上がった！？

炎でできた翼と尻尾のような物がある。

「何が起こっているんだ！？」

「久しぶりに太陽の光を浴びたな……」

「お前は誰だ？

紅じゃ無いな！？」

「そうそう、俺は紅シンでは無いぞ、人間には悪魔……

と呼ばれてたな

暇だから、最初の生け贄になって貰うぞ」

「あ、あの時の……」

「ヒメは知ってるの？」

「煩い、早く始めるぞ」

「龍一！」

「大丈夫だ」

「「デュエル！」」

「オレのターン」

「オレは古のルールを発動し青眼の白龍を特殊召喚、
ターンエンド」

龍一は1ターン目からブルーアイズを出したけど、
相手は何を使ってくるか分からないから安心出来ないな。

「俺のターン」

「俺は真紅眼の悪魔を召喚」

ATK200

「自分を召喚した！？」

「その程度ではブルーアイズに到底かなわんぞ！」

「真紅眼の悪魔の効果、
召喚に成功した時デッキからレッドアイズと名の付いたモンスター
を2体特殊召喚する！」

真紅眼の黒竜とレッドアイズ・シンクロンを特殊召喚、さらに真紅眼の黒竜が特殊召喚された事により手札からレッドアイズ・シンクロンを特殊召喚する！」

「レベル１のレッドアイズ・シンクロンにレベル７の真紅眼の黒竜をチューニング！」

邪眼を持つ魔竜よ、今ここに蘇り、白き炎で全てを焼き尽くせ！シンクロ召喚！

真紅眼の伝説竜！」

ATK2500

「レベル８の真紅眼の伝説竜にレベル３チューナー真紅眼の悪魔とレベル１チューナーレッドアイズ・シンクロンをダブルチューニング！」

ダブルチューニング！？

視点 龍一

ダブルチューニングだと！？

「魔竜と悪魔が一つになる時、真紅の炎で全てを焼き尽くす、シンクロ召喚！」

破壊の神！アンサラサクス・ドラゴン！」

ATK3500

「バトル！アンサラサクスでブルーアイズに攻撃！」

「クッ！」

LP 4000 3500

「さらにアンサラサクスの効果、相手モンスターを破壊した時、相手ライフに破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える！」

「なんだと！？」

LP 3500 500

「こ…この程度で」

「ターンエンドだ」

「オレのターン」

「オレは古のルールを発動してブルーアイズを特殊召喚、さらに正義の味方カイバマンを召喚、リリースしてブルーアイズを特殊召喚、

さらに魔法カード竜の鏡を発動、フィールド、墓地から素材を除外して、融合が出来る、

オレはブルーアイズを3体融合し、青眼の究極龍を融合召喚する！」

ATK 4500

「そして、青眼の究極龍をリリースしてブルーアイズの最終進化形態、青眼の光龍を特殊召喚する！」

ATK 3000

「光龍の攻撃力は墓地のドラゴン族モンスターの数×300ポイントアップする」

ATK 4200

「究極龍の方が強かったんじゃないのか？」

「攻撃力しか見て無いとは……恥を知れ！」

「なんかゴメン」

「気を取り直してブルーアイズの攻撃！
シャイニングバーストォ！」

「くッ！」

LP 4000 3300

「ターンエンド」

「俺のターン」

「スタンバイフェイズ時にライフを半分払い、
アンサラサクス・ドラゴンを墓地から特殊召喚する！」

LP 3300 1650

「なんだと!？」

「カードを伏せてターンエンド」

「オレのターン」

「オレは光龍の効果を発動する、このカードをリリースする事でフィールドの任意のカードを全て破壊する事が出来る、この効果は相手ターンでも発動出来る。

オレは貴様の伏せカードとアンサラサクス・ドラゴンを発動する! シャイニング・ノヴァ!」

青眼の光龍が光り輝いた。
少し眩しいな……。

「流石は神をも超えるカード……
だが甘かったなあ

アンサラサクスはカードの効果では場を離れない、俺のターンに使ってたら今頃終わってたなあ!」

「ふざけるな!」

「カードの効果だ、別にふざけてる訳じゃねえよ」「くッ!なら死者蘇生を発動し、光龍を特殊召喚する!」

ATK4200

「ヤバいな……」

「さらに竜の尖兵を召喚」

ATK 1700

「竜の尖兵の効果、手札のドラゴン族モンスターを捨てて捨てた枚数×300ポイント攻撃力がアップする、オレは1枚捨てて尖兵の攻撃力を300アップさせ、同時に墓地のドラゴン族が増えた事により、光龍の攻撃力もアップする」

ATK 1700 2000

ATK 4200 4500

「バトル！シャイニング・バーストオ！」

LP 1650 650

「竜の尖兵でとどめDA！」

「伏せカードを破壊されたのが拙かったか……
今回は俺の負けだ、楽しかったぞ……」

だが忘れるな、俺はその内またすぐ蘇るからな……」

「その時はもう一度倒してやる」

「そうか……」

LP 650 0

シンはそのまま倒れた。

真紅眼の悪魔完全復活、龍一の切り札青眼の光龍（後書き）

オリカ紹介

真紅眼の悪魔

闇属性

悪魔族

レベル3

チューナー

ATK200 DEF200

このカードの召喚に成功した時、手札またはデッキからレッドアイズと名の付いたモンスター2体を特殊召喚する。

アンサラサクス・ドラゴン

闇属性

ドラゴン族

レベル12

シンクロ

ATK3500 DEF3000

チューナー2体＋ドラゴン族シンクロモンスター1体。

このモンスターはカードの効果ではフィールドを離れない。

このモンスターが相手モンスターを破壊した時、次の効果の内1つを発動出来る。

・戦闘破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。
・相手の魔法、罠カードゾーンのカードを全て破壊する。

このカードは戦闘破壊された次の自分のスタンバイフェイズ時にライフを半分払い特殊召喚する事ができる。

次回予告

シン「上のカードチートだな……」。

今まで何があっただんだ？

次回『暇な夏休み突入、迫り来る邪神の脅威！？』

あの教頭先生は何企んでるんだ？」

夏休み突入、迫り来る邪神の脅威！？（前書き）

今回から新章になります。

夏休み突入、迫り来る邪神の脅威！？

視点？？？

「教頭、狙いはあれだったのですか？」

「ああ、だが負けるのは想定外だった……
計画が少し遅れる」

「そうですね……」

「君も頑張ってくれよ、これで」

「十分頑張ってますよ」

男は受け取った邪神ドレッド・ルートを見て言った。

視点 竜騎

シン……

大丈夫なのか……と思ってたら次の日普通に復活してた。

「昨日何があった？

神が消滅した後辺りから覚えて無いんだけど……」

「ああ、すっかり忘れてたよ、ラーを返せ！」

「H A N A S E !

融合したら消滅するとは思わなかったんだ！」

「知るか！」

「やめろおおおおお！
うわあああああ！」

シンは逃げ出した！！

「全速前進DA！」

「捕まえた」

（ ^ ^ ） - （ ・ | ・ ）

「えっ？」

そしてシンの悲鳴が近所に響いた。

「そ、そこまで…しなくても……」

「あー、すっきりした」

「帰る」

「頑張れよ」

「ああ、意識がもつろうとしてきたよ」

視点？？？

「何？ライティングデュエルの大会を開けたと！？」

「はい、この地域でライティングデュエルをさらに発展させる為に
す」

「それなら早速準備に取りかかろう……」

それにおぬしとわしの仲じゃからな」

「それではお願いいたします」

「そうじゃな……」

視点 シン

「死ぬかと思った……」「竜騎がここまでやるなんて……
神を失った事が相当ショックだったのかな？」

「そりゃそうだろ、世界に1枚しか無いカードなんだから……
まあ超弱体化したのなら何万枚もあるけどね」

「あれは流石に使わないよね」

「でも、ブルーアイズマウンテン……普通のコーヒーとの違いが分からない」

「ちよつと、それ一杯3000円するんだよ!？」

ちなみに今家の近くのカフェに来ている。

「正直一度飲んでみたかっただけなんだけど……
おかげで財布の中身を粉砕 玉砕 大喝采されそうだ……」

財布ポイント

6000 3000

「お前はこのコーヒーの素晴らしさが分からのか!？」

「龍一!?!いつの間に!?!」

「紅、この前の借りを返して貰う」

「えっ?」

数分後

「うわあああああ!」

財布ポイント

30000

「テメエ自分の金で飲めよ」

「ふうん、この前の恩を忘れたとは言わせんぞ」

「覚えてねえよ!はあ、今月の小遣いが……まあいいや、明日はみんなが集まるう」

「また奢ってくれるのか!?!」

「もう奢らねえよ!」

「なんで?」

「大事な話があるから」

「わかった」

視点???

「これが邪神のカードか……
なんだか誰にも負ける気がしないぜ」

「では、期待してますよ」

「ああ、任せとけ」
視点 シン

次の日！
昨日のカフェに俺と竜騎と龍一と空と姫乃が集まった。

「なんでカフェなんだ？」

「居心地がいいから。
それとみんなに集まって貰ったのはこれに参加して貰いたいからだ」

「何？」

「ライティングデュエルの大会？」

「そう、チームで出場する大会だ」

「オレと紅はまだしも他のメンバーはライセンスすら持って無いんだぞ」

「ねえ、Dホイルは？」

「「あ、」

「コイツら本物の馬鹿だぜ」

「それなら私のパパがDホイールを作ってる会社の社長だから頼めば……」

「マジか!？」

「奇跡が起きたと言っのかああああ!」

「ライセンスは？」

「まだ時間がある」

「いつからなの？」

「8月の盆休み終わってすぐ」

「ギリギリじゃん!」

「あとは整備士だな……誰か出来る？」

「なら私がするわ」

「姫乃!ここで意外な存在感が……」

「出番が少なかったから頑張らなくちゃ」

「なんのはなしだ？」

「俺も出来るぞ」

「なんかみんなノリノリだな……
予想外デース」

「シン！駄目だよこんなテレビ分解するような人は」

「どれだけ信用無いんだ竜騎？」

「やめてくれ」

「じゃあ2人に任せた」

「「わかった」」

「紅、チーム名は？」

「あ……」

「とりあえず今度決めよう、
まだ出れると決まった訳じゃ無いし」

「そうだな、今日は解散」

「流石はブルーアイズマウンテンだ……」

「龍一、自腹だろ？それ」

「なんだと！？
金を持って来て無いぞ！」

「残念、俺は値段を計算して使う分だけしか持って来て無い」

「バカな……勉強できない紅が計算して来るなんて……
奇跡を起こしたと言うのかああああ！」

「小学校の計算ぐらい出来るわ！
それじゃあ」

「待ってくれ」

その後龍一は……言わないでおこう。

まだ夏休みは始まったばかりだ。

「暇だあ」

既に夏休みの宿題の事を忘れてる人。

「紅シンだな……」

「逃げろおおおおお！」

全速前進全速前進喘息DA！」

シンは逃げ出した！

「フツ、逃げたか……」

「ママ、あの人かっこつけてるけど、かっこ悪いよ」
「あんな人を見てはいけません！」

「……、」

家に着いた……。

変な人居たけど気にしないぜ！

デッキ編集をしないと、SP^{スピードスベル}も集めないと……。

夏休み突入、迫り来る邪神の脅威！？（後書き）

かわいそうな人がいましたが気にしないで下さい。
しばらくライティングデュエルがメインになります。

シン「新章突入！

次回予告消滅！？

よっしやあああああ！」

空「喜びすぎだよ」

チーム『真紅の風』結成、予選開始！（前書き）

今回は凄く短いです。
省略し過ぎた結果です。
すいません。

チーム『真紅の風』結成、予選開始！

視点シン

いつものカフェにみんな集まっている。

「Dホイルの事パパに頼んだら良いって言われたわ」

「「よつしゃああ！」」

「これでは登録するだけだな」

「チーム名は？」

「「あ」」

「まだ考えてなかったの？」

「すっかり忘れてた」

「ふうん、それならチーム『ブルーアイズ』にするぞ！」

「煩い、チーム『ドラグニティ・ドライブ』だろ！」

「それストラクチャー・デッキじゃん！」

「リーダーの俺が決めるよ」

「紅、お前はいつからリーダーなんだ！？」

「最初から、俺が言い出した事だし」

「わかった……」

「チーム『真紅の風』にしよう」

「ふざけた真似をおおお！」

「「「それにしよう！」」「」」

「何だと……」

こうしてチーム名は『真紅の風』になった。

次の日、チームで大会に登録した。

数日後、Dホイールができたと言ったので、受け取りに行った。

普通タイプのDホイールだが十分過ぎる程だ。

ついでにガレージまで貰った。

姫乃のお父さん太っ腹。

とりあえずみんな一緒だとどれがどれか分からなくなるから、塗装を変えた。

俺は黒と赤

龍一は青

竜騎は黄緑とオレンジ

空は白

姫乃はピンク

なんでピンクなんだ？

一週間程たった。

竜騎、空、姫乃は無事にライセンスを取る事ができた。

「明後日から大会が始まるから作戦会議だ！」

「確か参加チームは16チームだったよな？」

「そうだけど」

「初戦は誰が出るの？」

「とりあえず予選は竜騎、龍一、俺の順で」

「わかった」

「しかし流石ブルーアイズマウンテン……」

「お前いくら使った？」

「じゃあ今日は解散、明日も此処に集合な」

帰りにカードショップでSPとトラップカードを沢山買った。
スピードスベル

帰ろうとしたら誰か居たよ。

「紅シンだな……」

「お前誰？」

「この前はよくも無視したな」

「あの時の」

「貴様も出場するのだろう?。」

「ああ、そうだけど」

「貴様を倒す、邪神で……」

「幻魔の次は邪神かよ!

じゃあ、お前が三邪神の内の1枚の所有者なのか?。」

「違う……正確にはリーダーのカードだ」

「帰っていいすか?。」

「いいぞ」

次の日

「明日から予選が始まるから、SPの魔法カードをみんなに渡す、今日デッキをもう一度編集してくれ」

「なんで1日前に……」

「忘れてたから昨日買った」

「おい!。」

「みんなのデッキに合うカードにしたから、これが竜騎なのでこれが龍一のそれが空なのでこれが姫乃のだから」

シンは一つ一つ指差して言った。

「俺は昨日編集したから」

「明日か……なんか緊張するな」

「絶対優勝するぞ！」

「当たり前だろ、やるからには優勝狙わないと」

予選当日

開会式があったけど長い話があつて、殆ど寝てたな……。

「予選リーグの初戦はチーム『終焉』だつて」

「それは修也のチームだ」

「ああ、あのデミス使ってた奴か……
それじゃあ俺の出る幕は無いかな？」

省略

「さあチーム『終焉』のラストホーラー、修也！
チーム『真紅の風』のファーストホーラー、竜騎のライフを0に

したぁ！」

「デミスとか……」

「後は任せろ」

「頼んだぜ龍一！」

龍一

LP 4000

修也

LP 2000

「龍一！今日こそ倒してやる！」

「お前がオレに勝てる訳が無かろう！
オレのターン！」

龍一

SPC 45

修也

SPC 1112

「オレは正義の味方カイバーマンを召喚、カイバーマンをリリース
し青眼の白龍を特殊召喚する」

ATK 3000

「ブルーアイズでデミスに攻撃！滅びのバーストストリーム！」

「さらに手札のオネストの効果発動！
このカードの説明など不要だな……、
行けえ！ブルーアイズ！」

ATK 3000 5400

「それでも俺は1年で二番目に強いと言われてるんだぞ！？」

LP 2000 0

予選の最初は余裕だったな……。

「次の相手はアクセルシンクロを使ってくるらしいよ」

「アクセルシンクロか……
俺も早く使いたいな」

「相手に不足は無いぜ！」

「次も勝つぞ！」

予選二戦目がもうすぐ始まる。

チーム『真紅の風』結成、予選開始！（後書き）

シン「なんか真紅眼の悪魔ってカードがあっただけど……
みんなが使っなくなって言ってくる、いいカードなのに……」

空「絵が変わったね」

シン「前はどんなのだった？」

空「紅い瞳シンって感じだったよ」

シン「へえ」

絶体絶命！？（前書き）

ライティングデュエルは思ったより大変でした。

絶体絶命！？

視点シン

次の相手の使用デッキは1人目がマジシャンデッキで2人目がヒーローデッキで3人目がシンクロンデッキ……、
なんかおかしいな？
何か忘れてるような……。

「シン、もう始まるぜ」

「今行くよ」

ファーストホーラーは龍一だ。
相手は真浩って名前だ。

「「ライティングデュエルアクセレーション！」」

龍一が先にコーナーを取った。

「オレのターン」

S P C O

「オレはカイザー・シーホースを召喚」

A T K 1 7 0 0

「カードを2枚伏せターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

S P C 0 1

「俺はモンスターを伏せて、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「オレのターン」 S P C 1 2

「オレはカイザーシーホースをリリースし、青眼の白龍をアドバンス召喚する！」

A T K 3 0 0 0

「ブルーアイズの攻撃！滅びのバーストストリーム！」

「甘いぜ、リバーズカードオープン！
魔法の筒！」

「何だと！？」

龍一

L P 4 0 0 0 1 0 0 0

「くッ！ターンエンドだ」

拙いな……

龍一のライフがあと1000しか無い。

「俺のターン、ドロー」

S P C 2 3

「俺はマジシャンズ・ヴァルキリアを召喚」

ATK1600

「さらに伏せていたマジシャンズ・ヴァルキュリアを反転召喚」

ATK1600

「ロックだと!？」「そうだが、マジシャンズ・ヴァルキリアにはこのカード以外の魔法使い族モンスターには攻撃できなくさせる効果があるからな」

「俺はカードを伏せてターンエンドだ」

「オレのターン」

SPC3 4

「オレはカードを伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

SPC4 5

（手札のSPは1枚、スピード・ワールド2の効果を使っても相手ライフを0にできない）

「俺はモンスターを伏せてターンエンドだ」

「オレのターン」

SPC 5 6

「オレはSP・スピード・フュージョンを発動する！
ブルーアイズを3体融合し、
現れよ青眼の究極龍！」

ATK 4500

「ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

SPC 6 7

「俺はSP・ハーフ・シーズを発動、スピードカウンターが3つ以上ある時、相手の表側表示モンスターの攻撃力を半分にしてダウンした数値分自分のライフを回復する」

「何だと!?!」

青眼の究極龍

ATK 4500 2250

真浩

LP 4000 6250

「伏せモンスターとマジシャンズ・ヴァルキリアをリリースしてブラック・マジシャンをアドバンス召喚」

ATK 2500

「ブラック・マジシャンでブルーアイズに攻撃！
ブラック・マジック！」

「さらにリバースカードオープン！
マジシャンズ・サークルを発動、お互いにデッキから攻撃力2000
以下の魔法使い族モンスターを特殊召喚する。
俺はブラック・マジシヤンガールを特殊召喚」

ATK 2000

龍一

LP 1000 750

「マジシャンズ・ヴァルキリアでダイレクトアタック！」

龍一

LP 750 0

龍一がライフを減らせずに負けた！？

「竜騎、頼んだぞ」

「任せとけて」

竜騎が負けたらヤバいな……

1人も倒せないで俺に回って来るって事は無いよな……。

「俺はターンエンドだ」

「俺のターン」

SPC 7 8

「俺はSP・エンジェル・バトンを発動、2枚ドロ―して手札を1枚捨てる」

「俺はドラグニティ・ドウクスを召喚」

ATK 1500

「効果でドラグニティ・フアランクスを装備、フアランクスの効果で装備されているこのカードを特殊召喚する」

ATK 500

「レベル4のドウクスにレベル2のフアランクスをチューニング！封印されし第一の龍よ、凍てつく吐息で全てを無に返せ！シンクロ召喚！解き放て！氷結界の龍ブリューナク！」

ATK 2300

「ブリューナクの効果、手札を捨てて、捨てた枚数カードを手札に戻す。

俺2枚捨ててブラック・マジシャンとブラック・マジシヤンガ―ルを手札に戻すぜ！」

「くッ！」

「バトル！ブリューナクでマジシャンズ・ヴァルキリアを攻撃！」

真浩

LP 6250 5550

「カードを伏せてターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

SPC 89

「俺はカードを伏せてターンエンド」

「俺のターンだ」

SPC 910

「俺はデブリ・ドラゴンを召喚」

ATK 1000

「デブリ・ドラゴンの効果で墓地の攻撃力500以下のモンスター1体を特殊召喚できる、俺はスノーマンイーターを特殊召喚」

ATK 0

「レベル3のスノーマンイーターにレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

第二の龍よ、その力で万物貫け！

シンクロ召喚！凍てつくせ！氷結界の龍グングニール！」

ATK 2500

「グングニールの効果発動、手札2枚までを捨てて捨てた枚数カードを破壊する。」

俺は手札を1枚捨てて、その伏せカードを破壊するぜ！」

「甘いぜ、リバーズカードオープン！天罰を発動、手札を墓地に送り相手モンスターの効果の発動を無効にして破壊する！」

「何！？」

「ならバトル！ブリューナクでダイレクトアタック！」

真浩

LP 5550 3250

「ターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー！」

SPC 10 11

「俺はSP・スピード・フュージョンを発動！

ブラック・マジシャンとバスター・ブレイダーを融合して、超魔導剣士・ブラック・パラディンを融合召喚する！」

ATK 2900

「ブラック・パラディンの効果、お互いのフィールド上及び墓地の

ドラゴン族モンスター1体につき攻撃力が500ポイントアップする！

ドラゴン族モンスターの合計は4体、よって2000ポイントアップ！

ブラック・パラディン

ATK 2900 4900

「バトルだ！ブラック・パラディンでブリューナクに攻撃！超魔導無影斬！」

竜騎

LP 4000 1400

「ターンエンドだ」

「俺のターン！」

SPC 11 12

「俺は伏せカード、リミット・リバースを発動して、スノーマンイーターを特殊召喚する」

ATK 0

「さらにデブリ・ドラゴンを召喚」

ATK 1000

「デブリ・ドラゴンの効果で墓地のシールド・ウィングを特殊召喚

するぜ！」

ATK 0

「レベル4のデブリ・ドラゴンにレベル2のシールド・ウイングとレベル3のスノーマニターをチューニング！」

封印より解き放たれし最後の龍よ、その力で世界を終わらせろ！

シンクロ召喚！神を超えろ！氷結界の龍トリシューラ！」

ATK 2700

「トリシューラの効果発動！」

フィールド上のブラック・パラディンとその手札と墓地のブラック・マジシャンを除外する！」

「なんだと！？」

「トリシューラでダイレクトアタック！」

真浩

LP 3250 550

「さらにスピードカウンターを4つ取り除いて手札のSPの数×800ポイントのダメージを与える、

俺の手札のSPは1枚、よって800ダメージだ！」

真浩

LP 550 0

相手チームのセカンドホイラーは英雄って名前か……

なんか違和感が……。

「デューエル！」

竜騎

LP 1400

英雄

LP 4000

竜騎は強制的にターンエンドだな……。

「いくぜ！俺のターン！」

竜騎

SPC 89

英雄

SPC 12

「俺はSPエンジェル・バトンを発動、2枚ドロして手札を1枚墓地に送る」

「さらに墓地のE・HEROネクロ・ダークマンの効果、

このカードが墓地に存在する限り1度だけ、レベル5以上のE・HEROと名の付いたモンスターを1体をリリースなしで召喚できる！俺はE・HEROネオスを召喚する！」

ATK 2500

「でも、トリシューラには勝てないぜ！」

「俺はスピード・ワールド2の効果を発動！
スピードカウンターを10個取り除いてトリシューラを破壊する！」

「しまった！？」

英雄

SPC 1 2 2

「バトル！ネオスでダイレクトアタック！
ラス・オブ・ネオス！」

竜騎

LP 1 4 0 0 0

やっと俺の番だけど、
2人も相手しなきゃいけないのか……。
こりゃ大変だ。

絶体絶命！？（後書き）

シン「なんで2人も相手しなきゃいけないんだ！？」

龍一「すまない……」

竜騎「俺も頑張ったぜ……」

シン「龍一！なんだよ！あれは酷いぞ！
レベルは低かったし！」

竜騎「そこまで言わなくても……」

シン「相手のライフを減らせないどころか増やしやがって！」

龍一「orz」

クリアマインド（対戦相手が）！（前書き）

初めて主人公以外がオリカを使った気がする。

クリアマインド（対戦相手が）！

「俺のターン」

シン

SPC9 10

英雄

SPC2 3

「俺はSP - エンジェル・バトンを2枚発動」

「2枚も！？」

「手札を1枚デッキトップに戻してゾンビ・キャリアを特殊召喚」

ATK400

「さらにデッキトップを墓地に送ってグローアップ・バルブを特殊召喚する」

ATK100

「墓地のボルト・ヘッジホッグを特殊召喚する」

ATK800

「レベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル2のゾンビ・キャリアをチューニング！」

仲間達の怒りが力の矢となり敵を射抜く！シンクロ召喚！貫け！レツドアイズ・アーチャー！」

ATK2000

「俺は黒竜の雛を召喚」

ATK800

「黒竜の雛を墓地に送って真紅眼の黒竜を特殊召喚する！」

ATK2400

「レベル7の真紅眼の黒竜にレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

邪眼を持つ魔竜よ、今ここに蘇り、白き炎ですべてを焼き尽くせ！シンクロ召喚！降臨せよ！真紅眼の伝説竜！」

ATK2500

「さらにスピード・ワールド2の効果発動、スピードカウンターを10個取り除いて相手のカード1枚を破壊する、俺はネオスを破壊する！」

「しまった！」

「2体でダイレクトアタック！」

英雄

LP40000

次がラストホーラーの星也か……。

「俺はターンエンドか……」

「俺のターン」

星也

S P C 3 4

シン

S P C 0 1

「俺はS P - エンジェル・バトンを発動する」

使用率高いな、エンジェル・バトンは……。

「俺はアンノウン・シンクロンを特殊召喚する」

A T K 0

「手札を捨ててクイック・シンクロンを特殊召喚する」

A T K 7 0 0

「墓地のボルト・ヘッジホッグを特殊召喚する」

A T K 8 0 0

「レベル2のボルト・ヘッジホッグにレベル5のクイック・シンク

ロンをチューニング！

集いし叫びが木霊の矢となり空を裂く！光さす道となれ！
シンクロ召喚！いでよ、ジャンク・アーチャー！」

ATK2300

「ジャンク・アーチャーの効果、1ターンに1度相手モンスター1
体をエンドフェイズ時まで除外する事ができる！
俺はレッドアイズ・アーチャーを除外する！
デイメンジョン・シュート！」

「そしてレベル7のジャンク・アーチャーにレベル1のアンノウン・
シンクロンをチューニング！

集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！シンクロ召喚
！飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン！」

ATK2500

「俺は金華猫を召喚」

ATK400

あれ？相手はまだ召喚権使ってなかったっけ？

「金華猫の効果発動！墓地に存在するレベル1のモンスター1体を
特殊召喚する！俺はアンノウン・シンクロンを特殊召喚する」

「レベル1の金華猫にレベル1のアンノウン・シンクロをチューニ
ング！

集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。光さす道となれ！シンクロ

召喚！希望の力、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロン
！」

DEF1500

「いくぞ！」

星也が突然Dホイールのスピードを上げた。

「揺るぎなき境地クリアマインド！」

「まさかアクセルシンクロ！？」

「レベル8シンクロモンスター、スターダスト・ドラゴンにレベル
2シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロンをチューニング！
集いし夢の結晶が新たな進化の扉を開く。光さす道となれ！
アクセルシンクロオオオオオ！」

星也とモンスター達が消えた。

「「消えた！？」」

竜騎と龍一は驚いてるな……。

「生来せよ、シューティング・スター・ドラゴン！」

後ろから星也と機械のような翼を持った龍……シューティング・ス
ター・ドラゴンが現れた。

「ふつくしい」

龍一が変なこと言ってるけど気にしない。

「シューティング・スター・ドラゴンの効果発動！

山札の上から5枚確認し、その中のチューナーの数だけこのターン攻撃することができる！」

チートドローでも始まるのか？

星也是デッキの上から5枚を確認した。

「チューナーは2体よってシューティング・スターは2回攻撃ができる！」

1回目のバトル！シューティング・スターで真紅眼の伝説竜に攻撃！
スターダスト・ミラーージュ！」

伝説竜が突撃してきたシューティング・スターに貫かれて倒された。

シン

LP 4000 3200

「2回目のバトル！シューティング・スターでダイレクトアタック！
スターダスト・ミラーージュ！」

「手札のバトル・フェーダーの効果、相手のダイレクトアタックの時にこのカードを特殊召喚してバトルフェイズを終了させる」

DEF 0

「ならターンエンド」

「俺のターン」

星也

SPC 4 5

シン

SPC 1 2

「俺はカードを伏せてターンエンドだ……」
レッドアイズ・アーチャーが帰ってきた。

「俺のターン！」

星也

SPC 5 6

シン

SPC 2 3

「俺は金華猫を召喚」

ATK 400

「金華猫の効果で墓地のアンノウン・シンクロンを特殊召喚する！」

ATK 0

「レベル1の金華猫にレベル1のアンノウン・シンクロンをチューニング！」

集いし光が新たな希望に変わる。光さす道となれ！シンクロ召喚！
シャイン・ウォリアー！」 ATK 300

見た事無いぞあんなカードは！？

「シャイン・ウォリアーの効果、フィールド上のシンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻し、シンクロ召喚に使用したモンスターを墓地から特殊召喚する！
シューティング・スター・ドラゴンをデッキに戻してスターダスト・ドラゴンとフォーミュラ・シンクロンを特殊召喚する」

ATK 2500

DEF 1500

星也が再びDホイルの速度を上げた。

「紅シンと言ったな……お前に見せてやる、新たな境地！
オーバートップクリアマインド！」「レベル8シンクロモンスター、スターダスト・ドラゴンにレベル2シンクロモンスター、シャイン・ウォリアーとレベル2シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロンをチューニング！」

星也が金色になった！？

俺は絶対にしたくないな……これは。

「あまりに非科学的DA！」

また龍一が何か言ってるけど気にしない。

「集いし星が1つになるとき、新たな絆が世界を照らす！光さす道となれ！」

リミットオーバー・アクセルシンクロオオオオオ！
進化の光、シューティング・クエーサー・ドラゴン！」

ATK4000

「バトル！シューティング・クエーサー・ドラゴンでレッドアイズ・アーチャーを攻撃！」

天地創造撃ザクリエーションバースト！」

「星也、お前は強かったよ、俺ができなかったアクセルシンクロをやってみせた、だけど俺には勝てない！」

リバーズカードオープン！超融合！」

「なんだと！？」

そりゃそうだろ……SP以外の魔法カードを使ったらスピード・ワールド2の効果でライフを2000も削られるからな。

「手札を捨てて、戦士族のレッドアイズ・アーチャーとドラゴン族シンクロモンスターのシューティング・クエーサー・ドラゴンを融合する！」

現れる！波動竜騎士ドラゴエクイテス！」ATK3200

「スピード・ワールド2の効果によりSP以外の魔法を使った俺は2000ポイントのダメージを受ける」

シン

LP3200 1200

「そこまでして……」

「負けたく無いからな……」

「くッ！ターンエンド」

「俺のターン」

星也

SPC 6 7

シン

SPC 3 4

「スピード・ワールド2の効果、スピードカウンターを4つ取り除いて手札のSPと名の付いた魔法カードの数×800ポイントのダメージを与える」

星也

LP 4000 3200

「ドラゴエキテスでダイレクトアタック！」

星也

LP 3200 0

勝った……ギリギリだったけど。

「やったな！」

「よくやった」「2人連続で勝てたのは奇跡かな？」

「紅シン、まさかアクセルシンクロが敗れるとは思っていなかった、強いな君は」

「星也、お前も十分強かったよ、それとクリアマインドの事も少しわかった気がする」

その後、テキトーに握手した。

明日に予選の最終試合があつて、その次の日に決勝トーナメントがある。

今日は帰って寝よう。

クリアマインド（対戦相手が）！（後書き）

オリカ紹介

レッドアイズ・アーチャー

レベル4

闇属性 戦士族

ATK2000 DEF1200

シンクロ/効果

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上。

このモンスターは相手プレイヤーにダイレクトアタックすることができる。

そうした場合、相手が受けるダメージは半分になる。

このモンスターが相手の守備表示モンスターに攻撃した場合、そのモンスターの守備力をこのモンスターの攻撃力が上回っていた場合、その数値分相手に戦闘ダメージを与える。

シャイン・ウォリアー

レベル2

光属性 戦士族

ATK300 DEF200

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上。

このモンスターのシンクロ召喚に成功した場合、自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻し、シンクロ素材にしたモンスターを墓地から特殊召喚することができる。

シャイン・ウォリアーはシンクロキャンセルが使えない事に気付いて慌てて考えたモンスターです。

ライティングデュエルでSP以外の魔法カードを使うのはシンクロです（使うだけでライフを2000も払わないといけないので）。

邪神現る

視点シン

いよいよ予選最後の試合が始まる。

相手チームは……、なんか見覚えのある人がいる。
まあいいや。

「ライティングデュエル！アクセラレーション！」

ファーストホーラーは竜騎だ……。

「俺のターンだ」

SPC0

「俺はモンスターを伏せてターンエンド」

「……、ドロー」

SPC0 1

「……、モンスターを伏せてターンエンド」

「俺のターンだ！」

SPC1 2

「モンスターを伏せる、カードを伏せてターンエンドだ」

「ドロー」SPC23

「……伏せてあるモンスターをリリースして軍神ガープをアドバンス召喚」

ATK2200

「ガープの効果、このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、フィールド上に存在するモンスターは全て表側攻撃表示となり、表示形式は変更できない、ついでにリバース効果は発動しないよ」

「マジかよ」

スノーマンイーター

ATK0

シールド・ウィング

ATK0

「……バトル、ガープでスノーマンイーターに攻撃」

「くッ！」

竜騎

LP4000 1800

「ターンエンドだよ」

「俺の……ターン！」

SPC 3 4

「俺はデブリ・ドラゴンを召喚」

ATK 1000

またデブリだ……竜騎のデッキ、ドラゲニティじゃなくてデブリ・ドラゴンデッキでよくね？

「デブリ・ドラゴンの効果でスノーマンイーターを特殊召喚する」

ATK 0

「レベル3のスノーマンイーターとレベル2のシールド・ウィングにレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！

封印より解き放たれし最後の龍よ、その息吹で全てを終わらせろ！シンクロ召喚！氷結界の龍トリシューラ！」

ATK 2700

「トリシューラの効果でガーブと手札1枚と墓地のモンスターを除外する！」

「バトル！トリシューラでダイレクトアタック！」

敵

LP 4000 1300

「……自分の名前が無い!?」

「カードを伏せてターンエンドだ」

「……、ドロ」

SPC 4 5

「……、モンスターを伏せ、カードを伏せてターンエンド」

「俺のターンだ」

SPC 5 6

「俺はSP・エンジェル・バトンを発動してデッキからカードを2枚ドロして、手札を1枚捨てて、ドラグニティ・ドウクスを召喚」

ATK 1500

「ドウクスの効果で墓地のファランクスを装備、ファランクスの効果で装備されているこのカードを特殊召喚する」

ATK 500

「レベル4のドウクスにレベル2のファランクスをチューニング！魔を払う竜騎士よ、旋風を巻き起こせ！シンクロ召喚！現れる、ドラグニティナイト・ガジャルグ！」

ATK 2400

「ガジャルグの効果でデッキからデブリ・ドラゴンを手札に加えて、ドラグニティ・アキュリスを墓地に送る、バトル！トリシューラで攻撃！」

「……伏せてあるカードを使う、攻撃の無力化」

トリシューラの攻撃が時空の渦にのみこまれた。

「ターンエンド」

「……、ドロー」

SPC 6 7

「……モンスターを伏せ、カードを伏せてターンエンド」

「俺のターンだ」

SPC 7 8

「ガジャルグの効果でドラグニティ・ブランディストックを手札に加えてそのまま捨てる、バトル！トリシューラで攻撃！」

「……伏せてあるカードを使う、聖なるバリア・ミラーフォース」

「しまった！？」

「モンスターを伏せてターンエンド」

「……、ドロー」

SPC 8 9

「……キラー・トマトを召喚」

ATK 1400

「……バトル、キラー・トマトで攻撃」

「リバースカードオープン、サンダー・ブレイクを発動、手札を1枚捨ててキラー・トマトを破壊する」

「……ターンエンド」

「俺のターンだ」

SPC 9 10

「俺はデブリ・ドラゴンを召喚」

ATK 1000

「効果でシールド・ウィングを特殊召喚」

ATK 0

「裏守備モンスターを表側攻撃表示に変更、シールド・ウィング」

ATK 0

「レベル2のシールド・ウィング2体にレベル4デブリ・ドラゴン
をチューニング！」

槍を束ねし竜騎士よ、全てを終わらせ勝利せよ！シンクロ召喚！集
え、ドラグニティナイト・バルーチャ！」

ATK2000

「バルーチャの効果、墓地のドラグニティと名の付いたドラゴン族
モンスターを任意の数装備できる、俺は墓地のフランクス、アキ
ユリス、ブランドイストック、ピルムを装備する！」

さらに攻撃力は装備モンスターの数×300ポイントアップする」

ATK2000 3200

「装備されているドラグニティ・ピルムの効果でバルーチャはダイ
レクトアタックができる、ただし与えるダメージは半分になる、
バルーチャでダイレクトアタック！」

敵

LP13000

次はセカンドホイーラーとのデュエルが始まる。

「デュエル！」

「我がターン」

SPC1011

「我はスピードカウンターを4つ取り除いき、手札のSPの数×800ダメージを与える、我が手札にSPは1枚」

「くッ！」

敵

SPC117

竜騎

LP1800 1000

「キラ・トマトとダーク・リゾネーターを反転召喚」

キラ・トマト

ATK1400

ダーク・リゾネーター

ATK1300

「レベル4のキラ・トマトにレベル3のダーク・リゾネーターをチューニング！」

天頂に輝く死の星よ、地上に舞い降り生者を裁け、シンクロ召喚、天刑王ブラック・ハイランダー」

ATK2800

「ブラック・ハイランダーの効果、装備カードを装備したモンスター1体の装備カードを全て破壊し、破壊した枚数×400ポイントのダメージを与える、

我はドラグニティナイト・ブルーチャを選択する」

「なんだって!？」

竜騎

LP 1000

竜騎が負けたか……、次は俺だな。

「1人しか倒せなかった」

「1人で十分だって」

「頼んだぞ!」

と言われても、ブラック・ハイランダーが居たらシンクロ召喚できないもんな……。

「デュエル!」

「俺のターン!」

シン

SPC 1 1 1 2

敵

SPC 7 8

「俺はトラップカード、

同調中止を発動、自分フィールド上のシンクロモンスター1体を墓地に送ってシンクロ素材にしたモンスターを特殊召喚する、デブリ・

ドラゴンとシールド・ウイング2体を特殊召喚する！」

デブリ・ドラゴン

ATK1000

シールド・ウイング

ATK0×2

「貴様は何がしたいのだ？」

ブラック・ハイランダーの効果でシンクロはできんだぞ」

「確かに、シンクロはできないけど、俺のデッキのエクストラデッキはシンクロモンスターだけじゃ無い」

「まさか！？」

「俺は真紅眼の飛竜を召喚」

ATK1800

「さらにシールド・ウイング2体をオーバーレイ！

2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、現れる！
ガチガチガンテツ！」

DEF1800

「ガチガチガンテツの効果で自分フィールド上に存在するモンスターの攻撃力、守備力はこのモンスターの下にあるエクシーズ素材の数×200ポイントアップする！」

DEF 2200

「さらにデブリ・ドラゴンと真紅眼の飛竜をオーバーレイ！
2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシー
ズ召喚！

現れる！真紅眼の翼竜！」

ATK 2500

「ガチガチガンのツので攻撃力が400ポイントアップする！」

ATK 2900

「バトル！真紅眼の翼竜でブラック・ハイランダーを攻撃！」

「くっう」

敵

LP 4000 3900

「真紅眼の翼竜の効果発動、エクシーズ素材を1つ取り除いて破壊
したモンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える」

「何イ！？」

敵

LP 3900 1500

「さらにスピードカウンターを4つ取り除いて手札のSPの数×8
00ダメージ相手に与える、俺の手札のSPは2枚、よって160

0ダメージ受けてもらっ」

シン

SPC128

敵

LP15000

相手のラストホイラーは……。

「ははっ！今なら負ける気がしないぜ！
邪神の力でなあ！」

「デュエル！」

「俺のターンだぜ！」

SPC89

「俺はサイバー・ドラゴンを特殊召喚する！」

ATK2100

「さらに俊足のギラザウルスを特殊召喚、貴様の墓地からモンスターを1体特殊召喚してもいいぞ」

ATK1400

「ならドラグニティナイト・ガジャルグを特殊召喚する」

ATK2400

「レベル4以下のモンスターが特殊召喚されたことにより、TGW
ーウルフを特殊召喚する」

ATK1200

コイツ、さっき邪神とか言ってたよな……拙い、来る！

「3体のモンスターを生け贄に捧げ、現れよ、他の神を抹殺する神、
邪神イレザー」

ATK？

オシリスのような竜が現れた。

邪神現る（後書き）

オリカ紹介

真紅眼の翼竜^{レッドアイズ・ウイングドラゴン}

風属性 ドラゴン族

ランク4

ATK2500 DEF2000

エクシーズ/効果

レベル4モンスター×2

このモンスターが相手モンスターを破壊した時、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動する。

破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える。

同調中止

罨カード

自分フィールド上に存在するシンクロモンスターを墓地に送り、シンクロ素材にしたモンスターを墓地から特殊召喚する。

到達、クリアマインド！（前書き）

今回はオリカが多いです。

到達、クリアマインド！

視点 シン

なんだ邪神イレイザーかよ、超弱いじゃん。

「お前はもう終わりだあ！」

なんでそんなに自信が？

「イレイザーの攻撃力は相手フィールド上のカード1枚につき1000アップする」

ATK3000

「バトルだ、イレイザーで真紅眼の翼竜を攻撃イ！」

シン

LP4000 3500

ダメージが現実のものになってる……。

「でも、邪神イレイザーの攻撃力は下がる！」

ATK3000 2000

「ターンエンドだぜ！」

「俺のターン！」

「俺はSP・エンジェル・バトンを発動して、2枚ドロして、手札を1枚捨てる」

「悪あがきか？」

「そんな雑魚相手になんで悪あがきしないといけないんだ？」

「お前……邪神を馬鹿にするとは……」

「邪神イレイザーの効果は破壊された時フィールド上の全てのカードを破壊する効果だった筈だ……、バトル！ガジャルグで邪神に攻撃！」

ガジャルグがイレイザーの首を斬り落とした。

敵

LP 4000 3600

「イレイザーの効果でフィールドの全てのカードを道連れにする」

斬られたイレイザーの首から大量の黒い血が出てきてカードを引きずり込む。

「ガチガチガントツは効果でエクシーズ素材を1つ取り除いて破壊されない」

「甘いな邪神の力からは逃れられない」

ガンテツも血の海に沈んでいった。

「なんだ！？血が……」

邪神の血が身体にまとわりついてきて、
気がつくとはりは闇に包まれた。

対戦相手しか見えないのにDホイールがどこにもぶつからないのが
不思議なくらいだ。

「ひひ……」

アイツ……おかしくなってる……。

「くッ、俺はカードを1枚伏せてターンエンド」

邪神の効果を確認しとかないと……神属性！？

「俺の……ターン」

S P C 1 1 1 2

「俺は……カードを2枚、伏せてターンエンド」

「俺のターン」

S P C 1 2

「俺はスピードカウンターを7つ取り除いて、デッキからカードを
1枚ドロースる」

シン

SPC125

「俺は伏せカードのリビングデッドの呼び声を発動、ドラグニティナイト-ガジャルグを特殊召喚する」

ATK2400

「さらにSP-シンクロ・チェンジを発動、このカードはスピードカウンターが4つ以上ある時にフィールド上のシンクロモンスターをエクストラデッキに戻し、同じレベルのシンクロモンスターをエクストラデッキからシンクロ召喚扱いとして特殊召喚する！
ガジャルグをエクストラデッキに戻して、現れる！レッドアイズ・ソードナイト！」

ATK2300

「俺もリビングデッドの呼び声を発動させてもらっ……蘇れ、邪神イレイザー！」

ATK3000

「さらにおジャマトリオも発動させてもらっ……」

「しまった!？」

DEF1000x3

「これで邪神の攻撃力が上がった……ひひひ……」

ATK3000 6000

「カードを3枚伏せてターンエンド……」

「ひひひ……俺のターン」

シン

SPC 5 6

敵

SPC 1 2

レッドアイズ・ソードナイトはバトルする相手モンスターの攻撃力を元の数値にする効果があるからダメージは与えられる。

「俺は邪神の使い魔を召喚」

ATK 1500

「このカードはフィールドに邪神が存在する限り、相手モンスター1体の効果をそのモンスターとこのモンスターがフィールド上に存在する時、無効にする。俺はレッドアイズ・ソードナイトの効果を無効にする」

「しまった!？」

「対策も無いデッキなんて作る訳ねえだろ? バトルだあ! イレイザーで攻撃イ!」

「リバースカード、オープン! ガード・ブロック、効果で戦闘ダメージを無しにして、デッキからカードを1枚ドローする」

「悪あがきを……なら、邪神の使い魔でおジャマトークンを攻撃イ!

破壊したから300ポイントのダメージを受けてもらう」

シン

LP3200

「でもリバースカード、オープン！レッドアイズ・スピリッツを發動！

蘇れ、レッドアイズ・ソードナイト」ATK2300

「そんな雑魚を呼び戻しても邪神の前では無意味だ」

邪神イレイザー

ATK4000

俺の場のカードが減ったからイレイザーの攻撃力が下がったな……。

「カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン」

シン

SPC67

「俺はスピードカウンターを7つ取り除いてカードを1枚ドロースる」

シン

SPC70

「ひひひ……何枚ドロしようともう遅い」

「俺は手札を1枚デッキトップに戻してゾンビ・キャリアを特殊召喚する」

ATK400

「レベル6のレッドアイズ・ソードナイトにレベル2のゾンビ・キャリアをチューニング！」

邪眼を持つ魔竜よ、今ここに蘇り白き炎で全てを焼き尽くせ！シンクロ召喚！降臨せよ！真紅眼の伝説竜！」

ATK2500

「さらにデッキトップを墓地に送り墓地のグローアップ・バルブを特殊召喚する」

ATK100

「デッキから墓地に送られた時、真紅の火種を特殊召喚する！」

ATK300

「レベル1の真紅の火種にレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

未来へ導く不死身の鳥が現れる！シンクロ召喚！希望の炎、シンクロチューナー、レッドアイズ・フェニックス！」

DEF1500

「なんでまだ希望を求めるんだ？」

諦めて楽になればいいのになぁ！」

「俺は絶対に諦めない！」

希望がある限り、

クリアマインド！」

Dホイールの速度を限界まで上げた。

「レベル8シンクロモンスター、真紅眼の伝説竜にレベル2シンクロチューナー、レッドアイズ・フェニックスをチューニング！
僅かな希望が輝く未来へ導く時、幻の竜は現れる！」

イレイザーが出した闇が少しずつ消えてきた。

「馬鹿だな！その速度ではカーブを曲がりきれないぞ」

闇が消えると、

目の前はカーブだった。

しかし、シンは気にしなかった。

「アクセルシンクロオオオオ！」

壁に激突すると思った瞬間にシンは消えた。

「消えた！？何処に行った！？

何？」

カーブを曲がり終えた所で後ろからシンと光輝いている竜が現れた。

「光来せよ！」

ミラージュ・デステイニー・ドラゴン！」

ATK 3300

「なんだ……？」

「バトル！ミラージュ・デステイニー・ドラゴンで邪神イレイザーを攻撃！

ミラージュ・ブラスト！」

「甘い！リバーズカード、無力者の復活、相手の墓地に存在するレベル2以下のモンスターを効果を無効にし、相手の場に攻撃表示で特殊召喚する！

真紅の火種をお前のフィールドに特殊召喚だあ！

これでイレイザーの攻撃力が上回った！これでお前の切り札は消える」

ATK 300

邪神イレイザー

ATK 4000

「それはどうかな」

「まだ何かあるのか！？」

「ミラージュ・デステイニー・ドラゴンの効果発動！

メインフェイズとバトルフェイズに1度ずつ墓地のシンクロモンスターの効果をエンドフェイズまで得ることができる！

この効果は相手ターンにも発動できる。

俺はレッドアイズ・ソードナイトの効果をミラージュ・デステイニ

ー・ドラゴンに与える！
エフェクト・ミラーージュ！」

「止める……」

「さらに永続トラップオープン！

シンクロ・ストライカー・ユニット、このカードは発動後に自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体の装備カードとなり攻撃力を1000ポイントアップする。

ただしエンドフェイズ毎に攻撃力は800ポイントずつダウンする」

「ああ……」

邪神はミラーージュ・デステニー・ドラゴンの攻撃に抵抗もできずに破壊された。

敵

LP 3600 0

あれ？結構苦戦した気が……。

「シン！やったな！」

「オレの出番が……」

「あ……俺ラスト・ホーラーじゃなかった、でも予選突破したからいいじゃん」

「そうだな」

視点???

「邪神を使用しても勝てませんか……
返していただきます」

「止める……俺から邪神を奪わないでくれ」

「それでは、さよなら」

視点 シン

「遂に本戦か……」

「正確には決勝トーナメントだね」

「デュエルするのはあと2回か……」

「決勝まで行くならな」

「そうだな」

明日は遂に決勝トーナメントが始まる。

到達、クリアマインド！（後書き）

オリカ紹介

ミラージュ・デステイニー・ドラゴン
レベル10

光属性 ドラゴン族
ATK3300 DEF2200

シンクロモンスターのチューナー+チューナー以外のシンクロモンスター1体

・このカードはメインフェイズとバトルフェイズ時に1度ずつ墓地に存在するシンクロモンスター1体の効果をエンドフェイズ時まで得ることができる。

この効果は相手ターンにも発動することができる。

・相手モンスターの攻撃宣言時にこのモンスターをゲームから除外することですそのモンスターの攻撃を無効にすることができる。

この効果を発動したターンのエンドフェイズ時にゲームから除外されているこのモンスターを特殊召喚する。

真紅の火種
レベル1

炎属性 炎族
ATK300 DEF300

このカードがデッキから墓地に送られた時にこのカードを特殊召喚する。

SP・シンクロ・チェンジ

スピードカウンターが4つ以上あるとき発動できる。

自分フィールド上に存在するシンクロモンスター1体をエクストラデッキに戻し、同じレベルのシンクロモンスター1体をエクストラデッキからシンクロ召喚扱いとして特殊召喚する。

邪神の使い魔

レベル4

闇属性 悪魔族

ATK1500 DEF1000

自分フィールド上に邪神が存在する限り、

相手フィールド上に存在するモンスター1体の効果を無効にすることが出来る。

無力者の復活

罨カード

相手の墓地に存在するレベル2以下のモンスター1体を効果を無効にして攻撃表示で特殊召喚する。

ナンバーズvsアケセルシンクロ(前書き)

今回はいつもより長いです。

ナンバーズvsアクセルシンクロ

今日、遂に決勝トーナメントが始まった。
決勝トーナメントに進んだのは僅か4チーム、優勝する為にはあと2勝しなければならない。

「えっと、龍一を交代して空を入れる」

「なんだと!？」

「ホントに!？」

「と言う訳でファースト・ホイーラーは竜騎、
セカンド・ホイーラーは空、

ラスト・ホイーラーは俺だから、姫乃、出せなくてゴメンな」

「別にいいわよ、ライディングデュエルでは弱いだろうし」

「オレは？」

「残念ながら戦力外通告だよ」

「orz」

「それじゃ」

決勝トーナメント第一回戦が始まった。

「「ライディングデュエル、アクセラレーション！」」

ファーストホーラーは竜騎だ。

相手チームのファーストホーラーは三郎って名前だ……。

「俺のターンだ」

SPC 0

「俺はモンスターを伏せてカードを2枚伏せてターンエンドだ」

「僕のターン」

SPC 0 1

「僕はライオウを召喚」

ATK 1900

「バトル、ライオウで伏せモンスターを攻撃」

「残念、シールド・ウィングは1ターンに2回まで戦闘では破壊されない」

「ターンエンド」

「俺のターンだ」

SPC 1 2

「俺は伏せカードの風霊術「雅」を発動、シールド・ウィングをリ

リリースしてライオウをデッキの一番下にもどすぜ！」

「そんな」

「さらにSP・エンジェル・バトンを発動、2枚ドロして、手札を1枚墓地に送る、そしてもう1枚エンジェル・バトンを発動する。デブリ・ドラゴンを召喚」

ATK1000

「デブリ・ドラゴンの効果で攻撃力500以下のスノーマンイーターを召喚」

ATK0

「レベル3のスノーマンイーターにレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！」

封印より解き放たれし第二の龍よ、その力で万物貫け！

シンクロ召喚！氷結界の龍グングニール！」

ATK2500

「さらに伏せカードのリビングデッドの呼び声を発動して、ドラグニティ・フランクスを特殊召喚する」

ATK500

「フランクスをリリースしてドラグニティアームズ・ミスティルを特殊召喚する」

ATK 2100

「ミスティルにファランクスを装備させる」

「バトル！2体でダイレクトアタック！」

三郎

LP 4000 0

まず1人、次は二郎って名前だ……って名前テキト～だな！

「俺たちのターン」

SPC 2 3

「俺たちはモンスターを伏せてカードを伏せてターンエンド」

「俺のターンだ」

SPC 3 4

「氷結界の龍グングニールの効果発動、手札を2枚まで捨てて、捨てた枚数カードを破壊する！

俺は手札を2枚捨ててお前の伏せモンスターと伏せカードを破壊する」

「甘いよ、俺たちはカウンタートラップの天罰を破壊してグングニールを破壊するよ」

「しまった！」

グングニールが破壊された。

「ならファランクスの効果で装備されているこのカードを特殊召喚する」

ATK500

「レベル6のミスティルにレベル2のファランクスをチューニング！
風を操りし竜よ、風の力で敵を斬り裂け！シンクロ召喚！吹き荒れろ！」

ウィンド・マスター・ドラゴン！」

ATK2800

見たこと無いカードだ……遂に竜騎もオリカを……って俺は誰に話してるんだ？

「ウィンド・マスター・ドラゴンで伏せモンスターを攻撃！」

「甘いよ、伏せモンスターはライトロード・ハンターライコウ、そのモンスターを破壊するよ」

「ウィンド・マスター・ドラゴンの効果発動、戦闘を行う相手モンスターの効果が無効にする。

さらにリバーズ効果も無効にできる！」

「なんだって!？」

ライコウが何もできずに破壊された。

「カードを伏せてターンエンドだ」

「俺っちのターン」

SPC 4 5

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターンだ」

SPC 5 6

「バトル！ウィンド・マスター・ドラゴンでダイレクトアタック！」

「甘いよ、トラップカード、魔法の筒を発動、相手モンスターの攻撃を無効にして相手ライフにそのモンスターの攻撃力分のダメージを与えるよ」

「でも、まだライフは残ってる」

「でももう1枚のトラップカード、ダメージ倍増装置を発動、ライフを2000払って相手に与える効果ダメージを倍にして、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊するよ」

二郎

LP 4000 2000

「チートだ……」

竜騎

LP 4000

「空、頼んだぞ」

「わかった」

「「デュエル！」」

「俺っちのターン」

SPC 67

「俺っちはモンスターを伏せてターンエンド」

「私のターン」

SPC 78

「私はSP・エンジェル・バトンを発動、2枚ドロして1枚捨てる、

さらにデッキから手札に加えられた時、ワタポンを特殊召喚するよ」

ATK 200

「ワタポンをリリースして天空騎士パーシアスを召喚」

ATK 1900

「バトルだよ、パーシアスで伏せモンスターを攻撃」

「伏せモンスターはメタモルポット、リバーズ効果でお互いは手札を全て捨てて、捨てた枚数カードを引くよ」

「あ、パーシアスは貫通効果を持ってるよ」

「なんですと!?!」

二郎

LP 2000 700

「そして1枚ドロ」

「カードを伏せてターンエンドだよ」

「俺たちのターン」

SPC 8 9

「俺たちはモンスターを伏せてターンエンド」

「私のターン」

SPC 9 10

「私はパーシアスで伏せモンスターを攻撃」

伏せモンスターは魂を削る死霊か……

二郎

LP7000

相手チームのラストホイーラーは一郎って名前だ。

「デュエル！」

「僕のターン」

SPC1011

「僕は手札からSP - 分裂を発動、自分フィールド上にレベル3のモンスターが存在する時、デッキからレベル1モンスター3体を特殊召喚して、その後、レベル3のモンスターを破壊する、僕はデッキからグローアップ・バルブと三連星のトリオンとアンノウ・シンクロンを特殊召喚する」

「グローアップ・バルブと三連星のトリオンとアンノウ・シンクロンをオーバーレイ！3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築！エクシーズ召喚！NO・83ギャラクシー・クイーン！」

DEF500

「さらに僕は、ゴブリンドバグを召喚」

ATK1400

「このカードを召喚した時、手札からレベル4以下のモンスターを

1体特殊召喚できる、僕は聖鳥クレインを特殊召喚する」

ATK1600

「クレインを特殊召喚した時、1枚ドロ―する」

「効果を発動したゴブリンドバ―グは守備表示になる」

DEF0

「レベル4のゴブリンドバ―グとレベル4のクレインをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！NO・39希望皇ホープ」

ATK2500

「バトル！ホープでパ―シアスに攻撃！ホープ剣・スラッシュ！」

空

LP4000 3400

「カードを伏せてターンエンド」

「私のターン」

SPC11 12

（進化する翼……ハネクリボーが居ないから使えないよ）

「私はモンスターを伏せてターンエンド」

「僕のターン」

S P C 1 2

「僕は切り込み隊長を召喚、効果でB F・疾風のゲイルを特殊召喚する」

A T K 1 3 0 0

「レベル3の切り込み隊長とレベル3の疾風のゲイルをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！グレン・ザウルス」

A T K 2 0 0 0

「さらに、ギャラクシー・クイーンの効果発動、エクシーズ素材を墓地に送って次の自分のターンの始めまで自分のモンスター全ては不死身になり、貫通効果を得る」

「そんな……」

「バトル！ホープで伏せモンスターに攻撃！ホープ剣・スラッシュ！」

「マシマロンの効果を発動するよ、裏側表示のこのモンスターを攻撃したモンスターのコントローラーはダメージ計算後に1000ポイントのダメージを受けるよ」

空

L P 3 4 0 0 1 4 0 0

一郎

LP 4000 3000

「グレン・ザウルスでマシユマロンを攻撃！」

空

LP 1400 0

「ゴメン」

「大丈夫だって」

「シン、後は頼んだぜ」

「わかってるって、じゃあ行ってくるよ」

「デュエル！」

「俺のターン」

SPC 12

「俺はSP・エクストラ・ドローを発動、エクストラデッキからシンクロモンスターを墓地に送ってデッキから2枚ドローする、俺はレッドアイズ・アーチャーを墓地に送って2枚ドロー！」

「手札からレッドアイズと名の付いたモンスターを墓地に送って真紅の同調者を特殊召喚する」

ATK700

「レベル3のマシユマロンにレベル5の真紅の同調者をチューニング！
グ！」

邪眼を持つ魔竜よ、今ここに蘇り、白き炎で全てを焼き尽くせ！シンクロ召喚！降臨せよ！真紅眼の伝説竜！」

ATK2500

「バトル！真紅眼の伝説竜でグレン・ザウルスに攻撃！シャイニング・デス・フレア！」

これでホープの効果を使ってくる筈……。

「トラップ発動、くず鉄のかかし」

予想外だ……攻撃がかかしに当たった。

「カードを伏せてターンエンド」

「僕のターン」

SPC12

「僕は召喚僧サモンプリーストを召喚このカードは召喚した時、守備表示になる」

DEF 1600

「サモンプリーストの効果、手札の魔法カードを1枚捨ててデッキからレベル4のモンスターを1体特殊召喚する、僕はジェネティックス・ワーウルフを特殊召喚する」

ATK 2000

「レベル4のサモンプリーストとレベル4のジェネティックス・ワーウルフをオーバーレイ！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！ジェムナイト・パール」

ATK 2600

「ギャラクシー・クイーンの効果発動、エクシーズ素材を取り除いて次の自分のターンまで自分フィールド上のモンスターは不死身になり、貫通効果を得る。」

バトル！ジェムナイト・パールで真紅眼の伝説竜に攻撃！」

伝説竜が破壊された。

シン

LP 4000 3900

「ホープでダイレクトアタック！ホープ剣・スラッシュ！」

シン

LP 3900 1400

「トドメだ！グレン・ザウルスでダイレクトアタック！」

「リバースカードオープン！」

レッドアイズ・スピリッツ！

真紅眼の伝説竜を特殊召喚する！」

ATK2500

「なら、カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン！」

SPC12

「諦める？」

「いや、俺はSP・エンジェル・バトンを発動、2枚ドローして、手札を1枚捨てる。

デッキトップを墓地に送ってグローアップ・バルブを特殊召喚」

ATK100

「真紅の火種を召喚」

ATK300

「レベル1の真紅の火種にレベル1のグローアップ・バルブをチェーンング！」

未来へ導く不死身の鳥が今現れる、シンクロ召喚！希望の炎、シンクロチューナー、レッドアイズ・フェニックス！」

DEF1500

Dホイールの速度を限界まで上げた。

「俺は諦めない！これが俺の全力だ！
クリアマインド！」

「レベル8シンクロモンスター、真紅眼の伝説竜にレベル2シンクロチューナー、レッドアイズ・フェニックスをチューニング！」

「まさか！？あれをやるのか！？」

「僅かな希望が輝く未来へ導く時、幻の竜が現れる！
アクセルシンクロオオオ！」

アクセルシンクロの瞬間、シンクロモンスターと一緒にシンも消えた。

「消えた！？」

後ろからシンとドラゴンが現れた。

「光来せよ、ミラージュ・デステイニー・ドラゴン！」

ATK3300

「さらにSP・アクセル・ブラストを発動、エクストラデッキからアクセルシンクロモンスター1体を墓地に送り、自分フィールド上のシンクロモンスターの攻撃力を1000ポイントアップする！
俺はシューティング・スター・ドラゴンを墓地に送ってミラージュ・

デステイニー・ドラゴンの攻撃力を1000アップさせる！」

ATK3300 4300

「ミラージュ・デステイニー・ドラゴンの効果発動、メインフェイズとバトルフェイズに1度ずつ墓地のシンクロモンスターの効果を得ることができる！」

俺はシューティング・スター・ドラゴンの効果をミラージュ・デステイニー・ドラゴンに与える。

エフェクト・ミラージュ！」

「ミラージュ・デステイニー・ドラゴンに与えたシューティング・スター・ドラゴンの効果発動！デッキの上からカードを5枚確認し、その中のチューナーモンスターの数だけこのターン攻撃することができる！」

「無理だね、ホープの効果で2回、くず鉄のかかしの効果で1回攻撃を無効にできるから最低4回は攻撃しないと攻撃は通らないよ！」

「それでも諦めない！」

まず1枚目、チューナーモンスター、レッドアイズ・シンクロン！
2枚目、チューナーモンスター、ゾンビ・キャリア！

3枚目、チューナーモンスター、アンノウン・シンクロン！

4枚目、チューナーモンスター、真紅眼の悪魔！

そして5枚目！チューナーモンスター、BF - 空風のジン！」

「なんだって！？

合計5回の攻撃！？」

「行け！ミラージュ・デステイニー！」

デステイニー・ミラージュ！」

ミラージュ・デステイニー・ドラゴンが5体に分身した。

「1回目のバトル！」

グレン・ザウルスに攻撃！」

「くず鉄のかかしで攻撃を無効！」

かかしに攻撃が当たる。

「2回目のバトル！」「ホープの効果発動、エクシーズ素材を取り除いて攻撃を無効、ムーン・バリア！」

ホープの翼が攻撃を防ぐ。

「3回目のバトル！」

「もう1度ホープの効果を使って攻撃を無効、ムーン・バリア！」

再びホープが攻撃を防いだ。

「4回目のバトル！」

「トラップカード、攻撃誘導アーマー、攻撃対象を守備表示のギャラクシー・クイーンに変更する、これでこのターンは耐えられる！」

「それはどうかな!？」

ミラージュ・デステイニーはバトルフェイズにも1度墓地のシンクロモンスターの効果を得ることができる。

俺はレッドアイズ・アーチャーの貫通効果を与える！」

「しまった!？」

でもナンバーズはナンバーズとの戦闘でないと破壊されない!」

「ダメージは受けてもらう!」

「なら、トラップカード、ガード・ブロックを発動、戦闘ダメージを0にして、1枚ドローする」

見えない盾に攻撃を防がれた。

「最後のバトル!ミラージュ・デステイニー・ドラゴンでNo.8
3ギャラクシー・クイーンに攻撃!」

ミラージュ・デステイニー・ドラゴンがギャラクシー・クイーンに
突撃し、ギャラクシー・クイーンを貫いた。

一郎

LP3000 0

危なかった……。

「ここまでモンスターを出して負けるとは思わなかったよ」

「諦めなければ勝機は必ず来るからな」

「耐えればの話でしょ」

「まあね」

当たり前的事言っなよ!と言いたくなった。

遂に次は決勝戦だ……。

ナンバーズvsアクセルシンクロ（後書き）

シン「グオレンダ！」

空「あれはスカッとしたね」

竜騎「俺の新しい切り札はなんだっ たんだ……」

シン「なら効果を見てみよう」

ウィンド・マスター・ドラゴン

レベル8

風属性 ドラゴン族

ATK2800 DEF2400

風属性チューナー+チューナー以外の風属性モンスター1体以上。
このモンスターが戦闘を行う時、戦闘を行う相手モンスターの効果を無効にする。リバー効果も無効になる。

1ターンに1度装備カードとなっているドラゴン族モンスター1体を墓地に送ることで自分フィールド上に存在する風属性モンスター全ての攻撃力はエンドフェイズまで1000ポイントアップする。

シン「……微妙、リバー効果も無効にできるのは強いと思うけど、素材の縛りが」

空「魔法、罫には弱いね」

シン「普通にドラグニティ専用じゃね？」

空「ここまで不遇な扱いを受けたオリカは初めてだね」

竜騎「orz」

抹殺、恐怖、そして全てを超える者

決勝戦が始まる。

「決勝戦は龍一を入れて空を外すから」

「それは本当か!？」

「うん」

「よっしゃあああ!」

「龍一はセカンドホイラーだから」

「ふうん、紅の出番は無いだろうな」

「本当にそうだと良いんだけど……なんか嫌な予感がする」

「じゃあ、行ってくるぜ!」

「竜騎、頼んだぞ」

「ああ」

デュエルが始まる。

相手チームは誰かわからないな……データもなかったし。

「「ライディングデュエル、アクセラレーション!」」

「俺のターンだ！」

S P C 0

「俺はモンスターを伏せてカードを2枚伏せてターンエンドだ」

「私のターン！」

S P C 0 1

「私はモンスターを伏せてカードを伏せてターンエンド」

「早いな……俺のターンだ」

S P C 1 2

「俺はS P - エンジェル・バトンを発動、2枚ドローして、1枚捨てる」

「ドラグニティ・ファランクスを召喚」

A T K 5 0 0

「ファランクスをリリースしてドラグニティアームズ・ミスティルを特殊召喚」

A T K 2 1 0 0

「ミスティルの効果で墓地のファランクスを装備、ファランクスの効果で装備されているこのカードを特殊召喚」

「レベル6のミスティルにレベル2のフランクスをチューニング！
風を操りし竜よ、風の力で敵を引き裂け！シンクロ召喚！ウィンド・
マスター・ドラゴン！」

ATK2800

「バトル！ウィンド・マスターで伏せモンスターに攻撃！」

伏せモンスターはレベル・ステイラーだ。

「カードを伏せてターンエンドだ」

「私のターン」

SPC2 3

「私は手札のレベル5以上のモンスターを捨てて、ダーク・グレフ
アーを特殊召喚する」

ATK1700

「ダーク・グレフアーの効果により、手札の闇属性モンスターを捨て
て、デッキから闇属性モンスターを墓地に送る、さらに墓地に送
った、D・HEROディアボリックガイの効果でこのカードを除外
してデッキからディアボリックガイを特殊召喚する」

DEF800

「さらに墓地のレベル・ステイラーの効果でレベル6のディアボ
リックガイのレベルを1下げて、レベル・ステイラーを特殊召喚」

ATK600

「通常召喚もしないで3体もモンスターを……」

「3体をリリースして邪神イレイザーを召喚！」

ATK?

「イレイザーの攻撃力は相手フィールド上のカード1枚につき1000ポイントアップする」

ATK2000

「カードを伏せてターンエンド」

「俺のターンだ」

SPC34

「俺は伏せておいた、風の導きを発動する。このカードは手札の風属性モンスターを相手に見せて、見せた枚数×400ポイント自分フィールド上に存在する風属性モンスターの攻撃力を上げる！俺はドラグニティ・ドウクス、アキュリス、ブランドイストックを見せてウィンド・マスター・ドラゴンの攻撃力を1200ポイントアップさせる」

ウィンド・マスター・ドラゴン

ATK28004000

「バトル！ウィンド・マスター・ドラゴンで邪神イレイザーに攻撃！
ウィンド・マスター・ドラゴンはバトルする相手モンスターの効果を無効にする効果がある！

だから、イレイザーの攻撃力は0だ！」

「なんだと！？」

敵

LP 4000 0

「しかし、イレイザーが破壊され墓地に送られた時、フィールド上のカード全てを道連れにする」

「血が……」

イレイザーから黒い血が出てきた。

「ははは、墓地から罨カード、抹殺神再臨を発動、このカードは邪神イレイザーの効果によって墓地に送られたターンのエンドフェイズに墓地から発動できる、このターン破壊された邪神イレイザーを特殊召喚する！」

「何！？」

邪神イレイザー

ATK 0

拙い……邪神が場に残ったままセカンドホイーラーに回った。

「「デュエル！」」

竜騎のターンは強制的に終了される。

「私のターンですよ」

S P C 4 5

「私はS P - エンジェル・バトンを発動して2枚ドロをして、手札を1枚捨てます。

墓地のディアボリックガイの効果でディアボリックガイ除外して、ディアボリックガイをデッキから特殊召喚します」

A T K 8 0 0

「ディアボリックガイのレベルを1下げてレベル・ステイラーを特殊召喚し、もう1度ディアボリックガイのレベルを1下げてレベル・ステイラーを特殊召喚します」

A T K 6 0 0 x 2

「拙くないか？」

「シン、どうしたの？」

「多分相手チームは全員邪神を使ってくると思う。そして相手デッキにディアボリックガイを2枚ずつデッキに入れていたら、あと3枚あるってこと、レベル・ステイラーが墓地に2枚あるから、いつでも邪神が出せるんだ」

「じゃあ、除外できたら……」

「相手はまた墓地に1枚送らないといけなくなる」

「私は3体を生け贄に捧げ、邪神ドレッドルートを召喚します」

ATK4000

オベリスクのようなモンスターが現れた。

「なんだよ、これは？」

ウィンド・マスター・ドラゴン

ATK2800 1400

「バトルを行います。」

邪神ドレッドルートでウィンド・マスター・ドラゴンを攻撃します」

「リバースカード、くず鉄のかかしを発動して攻撃を無効にする」

「邪神に罠は効きませんよ」

「何!？」

でも、ウィンド・マスターの効果でバトルを行う相手モンスターの効果を無効にする」

ウィンド・マスター・ドラゴン

ATK1400 2800

竜騎

LP 4000 2800

邪神イレイザー

ATK 2000 1000

「邪神イレイザーでダイレクトアタックです」

「くッ！」

LP 2800 1800

「ターンエンドです」

「お、俺の…ターン」

SPC 5 6

（何だ？この感じは……？）

「ドレッドルートに恐怖して下さいね」

（そうか、これは恐怖なのか……）

「カードを2枚伏せて……ターンエンド」

「私ターンです」

SPC 6 7

「バトルです、邪神ドレッドルートでダイレクトアタックです」

（勝てない……）

「リバースカード、活路への希望を発動、ライフを1000払って相手とのライフの差1000ポイントにつき、1枚ドローする」

「チェーンでリバースカードのネクスト・ホープを発動、相手ターンにドローした魔法、罠カードは全てドローした後に伏せる」

竜騎

LP 1800 800

「引いたカードの内2枚は魔法、罠カード、2枚を伏せる」

竜騎

LP 800 0

ドレッドルートの攻撃で竜騎のライフは0になった。

「竜騎！大丈夫か！？」

「……一応」

「ダメージが現実の物になったりとか……」

「そんなのは無かった……龍一、頼んだ」

「では行ってくる」

「デュエル！」

「オレのターン」

SPC 7 8

（竜騎が伏せたカードは……ふうん）

「オレはSP・スピード・フュージョンを発動、手札のブルーアイズ3体を融合して、現れよ！我が最強のモンスター！
青眼の究極竜」

ATK 4500 2250

「バトル！アルティメット・ドラゴンで邪神ドレッドルートを攻撃
イ！

アルティメット・バーストオ！」

「青眼の究極竜はドレッドルートの効果で攻撃力が半減している筈
ですよ」

「リバースカードオープン！冥界からの手助け、このカードは墓地に存在するモンスターの効果を自分フィールド上のモンスターに与える、ウィンド・マスター・ドラゴンの効果を青眼の究極竜に与える！

よってバトルする相手モンスターの効果は無効となる！」

青眼の究極竜

ATK 2250 4500

「そうですね……」

ドレッドルートは破壊された。

敵

LP 4000 3500

「私は結構前から出てたのに名無しですか!？」

「何を言っている!カードを伏せてターンエンドDA!」

「私のターンです」

SP 8 9

「私はカードを2枚伏せてターンエンドです」

何もなかった!?

「オレのターン」

SP C 9 10

「オレはリバースのリビングデッドの呼び声を発動しブルーアイズを特殊召喚する」

ATK 3000

「イレイザーの攻撃力が上がりますよ」

ATK 4000

「リバーiscardオープン、ドラゴン・ストライカーを発動、自分フィールド上に存在するドラゴン族モンスター1体を破壊して、破壊したモンスターの攻撃力の半分の攻撃力を自分のドラゴン族モンスター1体に与える。」

オレは青眼の白龍を破壊しアルティメット・ドラゴンの攻撃力を1500ポイントアップする！」

青眼の究極竜

ATK4500 6000

イレイザー

ATK4000 1000

「終わりですね」

「アルティメット・バーストオ！」

敵

LP3500 0

「しかし、イレイザーの効果で全てのカードは道連れですよ」

「そんな事はわかっている」

相手のラストホイラーは……衣川富夫！？

教頭何やってんすか！？

「デュエル！」

「教頭……何故此処に？」

「わしのターン」

S P C 1 0 1 1

（聞いて無いだど！？）

「わしはカードを3枚伏せてターンエンド」

「オレのターン」

S P C 1 1 1 2

「オレはカードを伏せてターンエンド」

（スピードカウンターは紅に取っておいた方がいいな）

「わしのターン」

S P C 1 2

「わしは墓地のディアボリックガイを除外し、デッキからディアボリックガイを特殊召喚する」 A T K 8 0 0

過労死しそうです。……ってディアボリックガイが言った気がした。

「わしはディアボリックガイのレベルを2下げてレベル・ステイラーを2体特殊召喚」

A T K 6 0 0

「3体を生け贄に捧げ……邪神アバターを召喚する！」

ATK?

雰囲気が変わったな。

「アバターの効果発動、アバターの攻撃力はフィールド上で1番攻撃力の高いモンスターの攻撃力+1になる」

「だがモンスターはアバターしか居ないから1だな」

「伏せカード、邪神復活を発動、このカードは邪神を召喚した時発動でき、墓地の邪神を全て特殊召喚する。」

さらに、邪神は破壊されたターンのエンドフェイズに復活する」

「なんだと!？」

邪神イレイザー

ATK? 1000

邪神ドレッドルート

ATK4000

「フィールドで1番攻撃力が高いのは邪神ドレッドルート、よって邪神アバターの攻撃力は4001になる」

邪神アバター

ATK4001

「バトル!邪神アバターでダイレクトアタック!」

龍一

LP4000

龍一もやられたか……。

「龍一、大丈夫か？」

「ああ、だがあそこまで恐怖を感じたのは久しぶりだ」

龍一はいつもどおりに見えたのに……やっぱり恐怖を感じてたのか。

「……紅、頼んだぞ伏せカードも見ておけ」

「シン、負けないでね」

「わかった、じゃ行ってくる」

……と言われても邪神が3体も並んだ相手をどうやって……。

「「デュエル!!」」

抹殺、恐怖、そして全てを超える者（後書き）

邪神は微妙に原作効果ではありません。

邪神の共通効果

神属性 邪神獣族

レベル10

このモンスターを召喚する場合、モンスターを3体リリースしなければならぬ。

このカードは畏カードの効果を受けず、魔法、効果モンスターの効果は発動ターンのみ有効になる。

原作と違う所はランクが無く、魔法と効果モンスターの効果が発動ターンのみ有効になった所です。

でも、以前使った三幻神（アニメ効果）に近くしてみただけなんですけど（笑）。

運命の3ターン（前書き）

いいサブタイが思いつかなかった……。

運命の3ターン

「俺のターン」

SPC12

「俺はSP・エンジェル・バトンを発動、2枚ドローして、手札を1枚捨てる」

「黒竜の雛を召喚」

ATK800

「黒竜の雛を墓地に送って真紅眼の黒竜を特殊召喚する」

ATK2400 1200

「さらに手札から真紅眼の黒竜が召喚、特殊召喚された時、手札からレッドアイズ・シンクロンを特殊召喚する」

ATK200 100

「墓地のグローアップ・バルブをデッキトップを墓地に送って特殊召喚する」

ATK100

落ちたカードが真紅の火種じゃ無かった。

「ならリバースカード、威圧する巨竜、このカードは自分フィールド上にレベル7以上のドラゴン族モンスターが存在する時発動できる。」

相手は自分フィールド上に存在するモンスター1体につき1ターン、バトル・フェイズを行えない。

俺の場には3体のモンスター、よって3ターンバトルフェイズを行えない。

これが俺の……俺達の運命を決める3ターンだ」

「悪あがきか」

「レベル7の真紅眼の黒竜にレベル1のレッドアイズ・シンクロンをチューニング！シンクロ召喚！真紅眼の伝説竜」

「俺はカードを伏せてターンエンド」

「わしのターン」

S P C 1 2

「わしはスピード・カウンターを10個取り除いて真紅眼の伝説竜を破壊する」

衣川

S P C 1 2 2

真紅眼の伝説竜が破壊された。

「リバースカードオープン！レッドアイズ・スピリッツ！蘇れ！レッドアイズ」

ATK 2500 1250

「ターンエンド」

「俺のターン」

シン

SPC 12

衣川

SPC 2 3

「俺はSP・アクセル・ドローを発動、スピード・カウンターが7つ以上ある時、自分のエクストラデッキからアクセルシンクロモンスター1体を墓地に送りデッキから2枚ドローする。
俺はシューティング・スター・ドラゴンを墓地に送り2枚ドロー！」

「カードを伏せてターンエンド」

「わしのターン」

シン

SPC 12

衣川

SPC 3 4

「ターンエンド、そしてわしは次のターンからバトルフェイズを与える」

「俺のターン」

シン

SPC12

衣川

SPC45

「俺はスピード・カウンターを7つ取り除いてカードをドロウする」

シン

SPC125

「事故か……」

「俺はレベル・スティーラーを召喚」

ATK600300

「レベル1のレベル・スティーラーにレベル1のグローアップ・バ
ルブをチューニング！シンクロ召喚！レッドアイズ・フェニックス
！」

DEF1500750

「まさか……シン」

「アクセルシンクロか！？」「真紅眼の伝説竜の効果発動、墓地の
ドラゴン族モンスター1体を除外して相手フィールド上に存在する
モンスター1体を墓地に送る、俺は真紅眼の黒竜を除外して、邪神

「アバターを墓地に送る」

「無駄なことを……」

「クリアマインド！

レベル8シンクロモンスター真紅眼の伝説竜にレベル2シンクロチューナー、レッドアイズ・フェニックスをチューニング！

僅かな希望が未来へ導く時、幻の竜が姿を現す！」

「アクセルシンクロオオオオ！」

「消えた……」

「光来せよ、ミラージュ・デステイニー・ドラゴン！」

ATK3300 1650

「じゃが、邪神ドレッドルートの効果で攻撃力は半分」

「ミラージュ・デステイニー・ドラゴンの効果発動！

メインフェイズとバトルフェイズに1度ずつ、墓地のシンクロモンスターの効果を得る、俺は墓地のシューティング・スター・ドラゴンの効果を与えて発動！

デッキの上からカードを5枚確認し、その中のチューナーの数だけこのターンバトルすることができる！」

「それでも馬力不足で邪神の攻撃で返り討ちになるはず」

「俺が引いたカードのチューナーは3枚、よって3回の攻撃ができる！行けえ！」

デステイニー・ミラージュ！」

「1回目のバトル！邪神ドレッドルートの攻撃！」

「紅シン、お前に絶望を見せてやるう、トラップ発動！リビングデッドの呼び声、効果でアバターを特殊召喚。

攻撃力は邪神ドレッドルートの攻撃力4000+1」

ATK？ 4001

「アバターを復活させなかったら

俺は今の攻撃で自滅してたぜ！

永続罠オープン！

パワー・グラヴィティ、このカードは相手フィールド上に存在するモンスターの攻撃力が変化した時に発動できる。

発動後、自分フィールド上に存在するモンスター1体の存在カードとなり、装備モンスターの攻撃力を0にして、変化した相手モンスターの攻撃力分攻撃力をアップさせる！

このカードは装備モンスターが戦闘を行ったターンのエンドフェイズに破壊される」ミラージユ・デステイニー・ドラゴン

ATK1650 4001

「だが、邪神ドレッドルートの効果で攻撃力は半分になる」

「ミラージユ・デステイニー・ドラゴンの効果、バトルフェイズにも墓地のシンクロモンスターの効果を得ることができる！

俺はウィンド・マスター・ドラゴンの効果を与え、バトルする相手モンスターの効果を無効にする！」

「なんだと！？」

衣川

LP 4000 3999

「2回目のバトル！邪神アバターに攻撃！アバターの効果は無効、よって攻撃力は0になる！」

「手札のクリボーを捨てて戦闘ダメージを0にする」

「だが、3回目のバトル！

邪神イレイザーに攻撃！

デステイニー・ミラージュ！」

衣川

LP 3999 0

「三邪神が……負けた？」

「やった、優勝だ……ん？」

破壊した邪神から闇が出てきた。

そして邪神から出てきた闇に2人はのみこまれた。

運命の3ターン（後書き）

今更ですがライティングデュエルで邪神出したのが間違이었다気がする……。

暗闇の世界で……（前書き）

短めです。

暗闇の世界で……

今、俺は邪神から出てきた闇の中だ。
何故か人と物は見える。

教頭先生はDホイールから投げ出されて、地面に2、3回バウンドした。

「大丈夫ですか!？」

「ああ」

すると、俺と教頭以外にもう1人此処に居る事に気づいた。

「お前は……」

「久しぶりだな……」

真紅の瞳の自分……。

「わしを覚えているか？」

「前の紅シンがこの世界に来た時、巻き込まれたジジイか……」

「え？」

何の話した？

「わしもお前と同じ、別世界の人間だ……」

「なんで……」

「俺が説明してやろう、お前の…紅シンの身体には俺の魂が封印されていた、最初に復活した時は最初のシンが6歳の時だった…俺は長い眠りから覚めた、そして最初のシンを殺した…その後、この身体は俺の力に耐えられなくなり、カードの精霊達が俺を封印して、死んだ紅シンの魂の代わりに平面世界の紅シンの魂をその身体に憑依させるといふ事だ、しかし俺は毎年復活して、同じ事を何度も繰り返している。

だが、別世界からシンの魂を入れる時、その世界で1度何らかの理由で紅シンを死なせ、この世界の紅シンの魂を身体に入れる、その時に巻き込まれて死んだ人間はそのジジイのように別の人間に憑依するんだ…」

「長いわー!」

「今回はいろいろあって復活が早かったな…ちなみに今は邪神の力で無理やり引きずり出されただけだな…」

「まだ続けるのかよ……」

「そんな事はどうでもいい、早く消滅しろ!」

「そうしたいが、死にたく無いのでな…」

「お前のせいで悲しむ人をこれ以上増やす訳にはいかないからな」

教頭……意外に良い人だ……。

「ジジイのくせに…それで、俺に対抗できる力を持つ、幻神、邪神、

幻魔、極神、地縛神の内の最弱の邪神を使って…」

「邪神が最弱……！？」

そりゃそうだろ……三幻神はチートだし…

「まあ良い、ジジイ…始めるぞ」

「「デュエル！！」」

「わしのターン」

「勝手に始めやがって…」

「わしは手札のディアボリックガイを捨て、ダーク・グレファアを特殊召喚」

ATK1700

「ダーク・グレファアの効果で手札のネクロ・ガードナーを捨て、ゾンビ・キャリアを墓地に送る。

手札の1枚をデッキの一番上に戻しゾンビ・キャリアを特殊召喚」

ATK400

「ディアボリックガイを除外して、デッキからディアボリックガイを特殊召喚」

ATK800

「3体をリリースして邪神ドレッドルートを召喚！」

ATK4000

「ターンエンド」

「俺のターン…」

「俺は真紅眼の悪魔を召喚」

ATK300 150

「効果で真紅眼の黒竜と真紅眼の飛竜をデッキから特殊召喚する」

ATK2400 1200

ATK1800 900

「魔法カード融合を発動、場の真紅眼の黒竜と手札のデーモンの召喚を融合し、ブラック・デーモンズ・ドラゴンを融合召喚する」

ATK3200 1600

「ドレッドルートの前ではどのようなモンスターも恐怖で攻撃力は半減だ」

「そうだな…カードを2枚伏せてターンエンド」

「わしのターン」

「わしは邪神ドレッドルートでブラック・デーモンズ・ドラゴンに攻撃！」

「おっと、バトルフェイズに入る前に手札のエフェクト・ヴェーラを捨て邪神ドレッドルートの効果を無効にする……」

「これで、お前のモンスターの攻撃力が元に、しかし邪神ドレッドルートの方が攻撃力は上だ。
バトル！」

「くず鉄のかかし」

邪神の攻撃が身代わりのかかしに当たった。

「ターンエンド、これでお前のモンスターの攻撃力が半減する」

「俺のターン」

「俺は3体を生け贄に捧げ、オベリスクの巨神兵を召喚する」

ATK4000

「か、神だと！？
消滅した筈では……」

「手札から終焉の焰を発動してトークンを2体特殊召喚する」

「オベリスクの効果発動、自分のモンスター2体を生け贄に捧げて
攻撃力を にする！

ソウル・エナジー・MAX！！」

ATK4000

「攻撃力 ！？」

「ゴッド・ハンド・インパクト！」

「な……」

衣川

LP40000

「二度と雑魚の邪神を俺の前にだすな！」

「……おい」

「なんだ？」

「なんで神を持ってるんだ？」

「これか、お前に渡しておく」

3枚のカード……オシリス、オベリスク、ラー。

「なんで渡すんだ？」

「俺に必要無いからな……次はまた復活した時に会つだろう……今はバーニング・ソウルも使えない状態だからな……お前とデュエルはできない……」

「それなら、どうやって此処から出るんだ？」

「すぐに出れるさ……此処から出ても外ではまばたき1回分の時間しか経ってないからな……」

突然闇の中からあたたかい光が差し込んできた。
気がつくと、ライティングデュエルのコースに居た。

太陽の光が眩しい。

（神のカードどうしよう……）

その後、表彰式があつて大会は終わった……。

暗闇の世界で……（後書き）

ブラック・デーモンズ・ドラゴン……懐かしい。
意味も無くだしてしまいましたが、次に出る時は活躍させます。
レッド・デーモンズ・ドラゴンじゃないよ。

夏休み最後の日という名の地獄（前書き）

今日は2話同時更新です。

どちらも短いですが……。

今回はオマケみたいな物で、前話に入れようと思ったのですが、なんかサブタイと合わないんで別々にしました。

夏休み最後の日という名の地獄

今日は夏休み最後の日、明日からは二期が始まる。

「あちい」

「そんな事言わないの」

「暑いもんは暑いんだ！

まだセミが煩いし」

「そういえば明日から学校だね、宿題終わったの？」

「宿題ねえ…宿題？宿題！！

まだ触つてすらねえ！？」

……という訳で今、シンは夏休みの宿題という名の地獄を体験している。

「はっはっは、流石俺、全然分かん」

今、シンは数学の宿題をしている。

「中一の復習の筈なのに……全然分かん……メールがきてる、竜騎からだ」

内容は……

今、お前の家の前：

ホラー映画かよ！と思ったらまたメールが来た。

今、お前の家の玄関前：

慌ててドアを開けると竜騎が居た。

「何が目的だ！？」

「空から聞いたぜ！まだ夏休みの宿題終わってないんだってな！」

「ひょっとして手伝いに……」

「まさか、邪魔しに来た」

「帰れよ！！」

「断る！」

「何故！？」

「面白いから」

「ならば力ずくで追い返してやる！
デュエルだ！」

「いいぜ！」

「「デュエル！！」」

「愚かな埋葬でレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを墓地に送る。」

真紅眼の飛竜を召喚、カードを伏せてターンエンド」

ATK1800

「俺のターン」

「俺は未来融合・フューチャーフュージョンを発動、F・G・Dを選んでドラゴン族を5体墓地に送る。」

「ドラグニティ・ファランクスを召喚」

ATK500

「ファランクスをリリースして、ドラグニティアームズ・ミスティルを特殊召喚、ファランクスを装備」

ATK2100

「装備されているファランクスを特殊召喚」

ATK500

「速攻魔法、地獄の暴走召喚、デッキ、手札、墓地からファランクスを2体特殊召喚する。」

真紅眼の飛竜も可能な限り特殊召喚していいぜ！」

「ならデッキから2体守備表示で特殊召喚」

DEF 1600

「レベル6のミスティルにレベル2のファランクスをチューニング！王者の鼓動、今ここに列をなす、天地鳴動の力を見るがいい！シンクロ召喚！我が魂、レッド・デーモンズ・ドラゴン！」

ATK 3000

「竜騎にしては意外なカードだ……（ファランクスが2体？まさか……）」

「さあ行くぜ！レベル8のレモンにレベル2のファランクス2体をダブルチューニング！」

王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ、天地創造の叫びをあげよ。シンクロ召喚！いでよ、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！」

ATK 3500

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は墓地のチューナーの数×500ポイントアップだ！俺の墓地のチューナーは8体、よって4000ポイントアップ！」

ATK 3500 7500

（か、勝てない……orz

伏せカードはグレイモヤ……、

スカーレッド・ノヴァは効果で破壊できない……奴に勝つ手段は……無い！）

「スカーレット・ノヴァ・ドラゴンで真紅眼の飛竜に攻撃！
バーニング・ソウル！！」

シン

LP40000

「これで、スッキリした+邪魔できるぜ」

「orz」

結局宿題は終わらなかった。

夏休み最後の日という名の地獄（後書き）

シン「俺のクリアマインドと」

竜騎「俺のバーニング・ソウルで……」

シン「竜騎、バーニング・ソウルはオリカのカードでやれよ……」

竜騎「そうだな！」

龍一「俺は……？」

一学期だってさ(前書き)

最近モバゲーばかりやってて時間が……。

二学期だつてさ

二学期初日、宿題が終わってなかったが、提出日が今日じゃなかった。それでシンは命拾いした。

しかし、有名人になっていた。

今日は始業式だったので早く終わった。

「暑い……9月なのに暑い……」

「シン、帰りにソフトクリーム食べよう」

「バカ！殺す気か！？喉乾くわ！！」

「なんかゴメン」

「ふうん、ならオレとデュエルするといい」

「よし、空行こう」

「うん」

「ちょっと待て」

「お前……いつの間に……」

「ふうん、オレの新たな切り札が貴様と闘いたいようだ」

「え」

「いいから来るんDA!？」

「H A N A S E ! !」

「行つてらっしゃーい」

「裏切り者!!」

「わかった、わかった、デュエルすれば良いんだろ？」

「そうだ!! 今日こそ貴様を葬つてやる!!」

「「デュエル!!」」

「先攻は譲つてやる」

「俺のターン」

「俺は古のルールを発動、真紅眼の黒竜を召喚してカードを伏せてターンエンド」

A T K 2 4 0 0

「オレのターン、ドロー!!」

「オレは古のルールを発動し、ラビードラゴンを特殊召喚する」

（カッコ悪い。ウサギみたい）

ATK2950

（見た目の割には攻撃力高あ！？）

「さらに正義の味方カイバーマンを召喚、リリースし、青眼の白龍を召喚する！！」

ATK3000

「バトル！！ラビードラゴンで雑魚モンスターに攻撃イ！」

「相棒に雑魚って言うな！！」

シン

LP4000 3450

「ブルーアイズの攻撃イ！

滅びのバーストストリーム！！」

「トラップ発動、くず鉄のかかし」

「ターンエンドだ」

「俺のターン、手札から思い出のブランコを破壊し真紅眼の黒竜を特殊召喚」

ATK2400

「魔法カード、黒炎弾を発動」

龍一

LP4000 1600

「ターンエンド」

「オレのターン、ドロ」

「オレはレベル8、通常モンスターの青眼の白龍とラビードラゴンをオーバーレイ!!」

2体のモンスターでオーバーレイ、ネットワークを構築、エクシース召喚、

サンダーエンド・ドラゴン!!」

ATK3000

「新しい切り札ってオリカじゃないのか……」

「フハハハ、サンダーエンドの効果を発動、オーバーレイユニットを1つ取り除くことでこのカード以外の全てのカードを発動する」

「まじかよ……」

サンダーエンド以外の全てのカードが破壊された。

「オネストを召喚」

ATK 1100

「俺オワタ＼（ハ－ハ）／」

「2体でダイレクトアタック!!」

シン

LP 3450 0

「フフフフハハハハハ」

「おかしくなってるぞ」

「強靱！無敵！最強!!」

「おーい……」

その後龍一は3時間笑い続けたという……。

翌日

「テストだああああああ!!」

1時間目

「もう……わからない……」

2時間目

「…………」zzz

3時間目

「なあにこれえ？」

4時間目

「全く意味がわからんぞ!!」

オワタもう確実にオワタ

＼(^○^)/

「シン、テストどうだった？」

「もう駄目だ……実技に全てを賭けるしか方法は……無い!!」

「かわいそうに……」

「見るなあ、そんな目で俺を見るなあ!!」

「実技は明日だから頑張ってね」

次の日

「遂に実技だ!!」

「相手は……龍一!？」

「ふうん、凡骨が相手とは……」

「凡骨って言うな!!」

「デュエル!!」

「オレのターン、ドロ」

「オレは正義の味方カイバーマンを召喚、リリースし青眼の白龍を特殊召喚する!!」

ATK3000

「カードを伏せてターンエンドだ」

「俺のターン」

「俺は召喚僧サモンプリーストを召喚、このカードを召喚した時守備表示になる」

DEF1600

「サンプリの効果、手札の魔法を1枚捨てて、デッキからレベル4モンスターを特殊召喚する。

真紅眼の飛竜を特殊召喚する」

ATK1800

「古のルールを発動して、真紅眼の黒竜を特殊召喚する」

「レベル4の真紅眼の飛竜とサモプリをオーバーレイ！！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚、真紅眼の翼竜」

ATK2500

「カードを伏せてターンエンド」

（伏せカードは収縮だ……）

「オレのターン、ドロ」

「オレは伝説の白石を召喚」

ATK300

「ふうん、リバーiscardオープン！！
エネミーコントローラー！！」

「何！？」

「このカードはコマンド入力することで効果を発動することができる、AB右左右A

このコマンドにより、自分フィールド上のモンスターをリリースすることで相手モンスターのコントロールをエンドフェイズまで得ることができる。

伝説の白石をリリースし、貴様の真紅眼の黒竜をいただく」

（レッドアイズが……）

「伝説の白石の効果によりデッキから青眼の白龍を手札に加える。
古のルールを発動し青眼の白龍を特殊召喚する」

「魔法カード、サイクロンを発動し、貴様の伏せカードを破壊する」

「じゃあ、収縮を発動して、青眼の白龍の攻撃力を半分にする」

青眼の白龍

ATK3000 1500

「ふうん、バトル！！ブルーアイズの攻撃イ！滅びのバーストスト
リーム！！」

シン

LP4000 3500

「滅びのバーストストリーム2発目DA！！」

「バトル・フェーダーを特殊召喚して、バトルフェイズを終了させ
る！」

「ふうん、ターンエンドだ。

レッドアイズは貴様のフィールドに戻る」

「俺のターン」

「俺はレッドアイズ・シンクロンを召喚」

ATK200

「愚かな埋葬を発動して、レベル・スティーラーを墓地に送る」

「真紅眼の黒竜のレベルを1下げて、レベル・スティーラーを特殊召喚する」

ATK600

「速攻魔法、スター・チェンジャーを発動し、真紅眼の黒竜のレベルを1下げる」

「レベル5になった真紅眼の黒竜とレベル1のレベル・スティーラーとバトル・フェーダーにレベル1、レッドアイズ・シンクロンをチューニング!!」

仲間達の想いが、魔神の魂を目覚めさせる、シンクロ召喚!現れる!レッドアイズ・デストロイヤー」

ATK3000

「レッドアイズ・デストロイヤーの効果発動、シンクロ召喚したタインのエンドフェイズ時まで、シンクロ素材にしたチューナー以外のモンスターの数×200ポイント攻撃力をアップして、シンクロ素材にしたチューナー以外のモンスターの数このターン攻撃することができる。」

チューナー以外のシンクロ素材の数は3体、よってこのターン攻撃力は600ポイントアップし、3回攻撃ができる」

ATK3000 3600

「1回目のバトル!青眼の白龍に攻撃」

「バカな……」

龍一

LP 4000 3400

「2回目のバトル！」

龍一

LP 3400 2800

「そしてこれが最後のバトル！」

「ぐわああああああ!!」

龍一

LP 2800 0

とりあえず勝てた。

でも筆記で赤点取ったらオワタ（^o^）/だな……。

一学期だつてさ（後書き）

シン「レッドアイズ・デストロイヤーはチートカードだ……」

竜騎「封印するのか？」

シン「当たり前だつまらんだろ！！」

竜騎「別に普通だと思うけど……」

シン「次の弾の情報だ……銀河眼の光子竜！？」

竜騎「No. は2体出るのか……」

龍一「そんな事はどうでもいい、銀河眼の光子竜……ふつくしい……
…次はこのモンスターで紅を粉碎してやる！！」

シン「はいはい」

体育祭、そしてシンの暴走（前書き）

遂にPV50000を超えました。
皆さん応援ありがとうございました。
記念に……何をしよう……。

体育祭、そしてシンの暴走

「今年も来たよ、地獄の時期が……」

「そんなに嫌なの？」

「そうさ、徒競走でビリ以外取った事無い俺には、地獄だ……」

「全然そんな感じには見えないけど……なんか運動してるって体格だし」

「人を見た目で判断するんじゃない!!」

「なんかゴメン……」

「体育祭の練習なんて早く終われば良いんだよ!」

ちなみに昼休みにはシンは力尽きていた。

「やっと終わった。」

昼からは実技の授業だ……」

午後の授業が始まる。

「相手は空か……」

「じゃあ初めよっか」

「「デュエル!!」」

「私のターン」

「私はハネクリボーを召喚」

ATK300

「コート・オブ・ジャスティスを発動してレベル1のハネクリボーがいるから効果を発動、手札からパーシアスを特殊召喚するよ」

ATK1900

「カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「古のルールを発動して真紅眼の黒竜を特殊召喚、さらに黒竜の雛を召喚、墓地に送り真紅眼の黒竜を特殊召喚する」

ATK2400×2

「とりあえずモンスターだけでも全滅させとくか……」

バトル！！レッドアイズでパーシアスに攻撃、ダーク・メガ・フレア！！」

「伏せておいた、進化する翼を発動するよ」

「彘！？」

「ハネクリボーと手札2枚をコストにして、ハネクリボーLV10

を特殊召喚するよ」

ATK300

「ハネクリボーLV10の効果発動、このカードをリリースして、相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊して、破壊したモンスターの攻撃力の合計分のダメージを相手に与えるよ」

「レッドアイズが……」

レッドアイズ2体の攻撃力の合計は4800。

シン

LP40000

「まさかのワンキル……orz」

「やったあ！」

「orz」

次の日、また体育祭の練習があった。

「俺にとってはこの時期は毎日が地獄だよ……」

「シン、デュエルしようよ」

「今日は勝つてやる!!」

「始祖の守護者ティラスで攻撃」

シン

LP3900 3100

「クリスティアでダイレクトアタック！」

「バトル・フェーダーで……無理か……orz」

「無理だね」

シン

LP3100 300

「もけもけでダイレクトアタック」

シン

LP3000

「なんか最近勝てない……」

「そっといえば明後日だね体育祭」

「解放される時が近づいてきた……！」

ちなみに体育祭でシンは徒競走でビリだったり、リレーでバトンを落したり、担任の先生にリアルデュエルで負けたり、クラスメイト達にボコボコにされたりと散々な結果だった。

ちなみに女子からの人気が落ちたらしい（本人は人気があったのに気づいて無いが）。

2日後……。

「デメエら！まとめて掛かって来い！！」

「シンのキャラ崩壊が始まってる！？」

シンはレッドの生徒全員相手にエクゾディアでワンキルした。

「エクゾード・フレイム！！」

ふはははははは

「シン！！俺とデュエルしろ！！」

「竜騎か……お前もワンキルされに来たのか？」

「「デュエル！！」」

「先攻ワンキルはつまらんからお前からでいいぞ！」

「俺のターンだ！」

「禁止令を2枚発動、王立魔法図書館と成金ゴブリンを選択する」

「なあに！？」

「ドラグニティ・フアランクスを召喚、リリースして、ドラグニティアームズ・ミスティルを特殊召喚、フアランクスを装備」

ATK2100

「ターンエンド」

「貴様あああああ！」

「今、お前を救い出してやるからな!!」

「俺のターン」

「モンスターを伏せてターンエンド」

「俺のターンだ！」

「俺は愚かな埋葬を発動しドラグニティアームズ・レヴァティンを墓地に送る」

「ドラグニティと名の付いたカードを装備しているドラグニティアームズ・ミスティルをリリースして墓地からドラグニティアームズ・レヴァティンを特殊召喚！
効果でファランクスを装備」

ATK2600

「装備されているファランクスを特殊召喚」

「レベル8のレヴァティンにレベル2のファランクスをチューニング！
グー!!」

地獄の竜よ、怒りの業火で全てを焼き尽くせ！
シンクロ召喚！現れろ！トライデント・ドラギオン!!」

ATK3000

「トライデント・ドラギオンの効果発動、自分フィールドのカードを2枚まで破壊して、破壊した枚数追加攻撃ができる！俺は禁止令2枚を破壊する！！」

「止めるおおおお」

「バトル！トライデント・ドラギオンで伏せモンスターを攻撃い！！」

「伏せモンスターはクリッター、効果で俺が手札に加えるのは封印されしエクゾディア！！」

「揃っちまったのか！？」

「いいや」

「なら2回目の攻撃い！！」

シン

LP4000 1000

「トドメだ！！」

「止めるおおおお」

シン

LP1000 0

「大丈夫か？」

「……orz」

「おい？」

「……俺は外道になる」

「お前いい加減目を覚ませ!!」

「なんで勝てない……」

「それは自分のデッキを信じて無いからだ、だからエクゾディアなんか使ったんだろ？」

「……そうだ」

「自分のデッキを信じれば必ず勝てる」

「それは流石に無理がある!」

「流石に無理か……」

（でもシンって体育祭があると毎年あんななるのか？）

その後、シンはいつも通りに戻ったという事は言っまでもない。

体育祭、そしてシンの暴走（後書き）

今回はキャラ崩壊し過ぎた……。

エクゾディアは気分です。

外道ビートにしようと思ったのですが竜騎が勝てない……。

文化祭だってさ(前書き)

最近短めですいません。

文化祭だってさ

もうすぐ文化祭がある。

殆どの生徒が準備で忙しいのに、1人暇そうにしている生徒が居た……暇そうにしているというよりサボっているという方が正しい。

「どれにしようか迷うな……」

シンはドローパンを選んでいた。

その内の1つを買って開けると具無しパンだった。

「また具無し!？」

「いや、パックが入ってるし……」

シンは期待を胸にパックを開けた……。

「嘘だ!! また全部禁止カードだと!？」

「これで禁止カードコンプリートだぞ!？」

シンは具無しパンに入っているパックだけで禁止カードを全て揃えてしまった。

「こんな所に居たの!？」

「先生が怒ってたよ」

「空か…… 多分大丈夫だろ」

「ほう」

「ゑ？」

「あ、先生……」

「に、逃げろおおおおお！！」

シンは先生から逃げられる訳が無く、すぐに捕まった。

（文化祭の出し物は3班に別れてやるのか、俺はたこ焼き屋？
嫌だ、俺はずっと逃げ続けてやる！）

文化祭当日

（逃げられた……捕まったら死ぬな、人混みの中に隠れておこつ）

「お、シン！」

「うわッ！！」

「なんでそんなにびびってんだ？」

「竜騎か、空かと思った」

「何やってんだ？」

「逃げてる」

「そういう事が……体育館に行かないか？」

「何かあるの？」

「ブルーがデュエル教室やってんだ、それで姫乃に強い奴連れて来
いって言われたんだ」

「なんでだ？」

「実際にデュエルをして、デュエルの楽しさを子供達に知って貰い
たいからじゃないのか？」

「デュエルしたいから行こう」

体育館の中は子供達で賑わっていた。

「子供がたくさん居るな……」

「皆将来のアカデミアの生徒かもしれない子供達だぜ」

「そんな事はわかってる」

「竜騎、アンタ誰か連れて来たの？」

「居るだろ目の前に……」

「よっ」

「シ、シン！？」

「俺じゃ悪かったかな？」

「そ、そんな事無いケド……」

「とにかくデュエルがしたいんだ!!」

「わかったわ、相手してあげる」

こうして大勢の子供達に見守られながらデュエルが始まった。

「「デュエル!!」」

「私のターンよ」

「私はモンスターを伏せて、カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「俺は黒竜の雛を召喚」

ATK800

「黒竜の雛を墓地に送り、真紅眼の黒竜を特殊召喚する!!」

ATK2400

レッドアイズが出ると、

子供達がカッコいい騒ぎだした。

「バトル!レッドアイズで伏せモンスターに攻撃!!」

「ダーク・メガ・フレア!!」

伏せモンスターはドラゴンフライだ。

「ドラゴンフライが戦闘で破壊され墓地に送られた時、デッキから攻撃力1500以下の風属性モンスターを攻撃表示で特殊召喚するわ。」

私は霞の谷の祈祷師を特殊召喚」

ATK1200

「カードを伏せてターンエンド」「私のターンよ」

「私は霞の谷の見張り番を召喚するわ」

ATK1500

「レベル4の見張り番にレベル3の祈祷師をチューニング！！シンクロ召喚！霞の谷の雷神鬼！！」

ATK2600

「セリフは？」

「は、恥ずかしいでしょ／＼／」

「気を取り直して、私は真紅眼の黒竜にビッグバン・シュートを装備させるわ」

レッドアイズ

ATK2400 2800

「霞の谷の雷神鬼の効果発動、1ターンに1度自分フィールド上の

カードを手札に戻して攻撃力を500ポイントアップさせるわ、私はビッグバン・シュートを手札に戻すわ」

ATK2600 3100

「ビッグバン・シュートがフィールドを離れた事により、真紅眼の黒竜は除外されるわ」

「チートだ……」

「雷神鬼でダイレクトアタック！」

シン

LP4000 900

「ターンエンドよ」

「俺のターン」

「俺は古のルールを発動して、真紅眼の黒竜を特殊召喚する……！」

ATK2400

「手札から魔法カード黒炎弾を発動、レッドアイズの攻撃力分のダメージを与える」

姫乃

LP4000 1600

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「私のターンよ」

「私はビッグバン・シュートを真紅眼の黒竜に装備させるわ」

レッドアイズ

ATK 2400 2800

「雷神鬼の効果を発動するわ」

「なら手札からエフェクト・ヴェーラーの効果を発動して、雷神鬼の効果をエンドフェイズまで無効にする」

「いいわ、雷神鬼の効果は相手ターンにも発動できるから、ターンエンドよ」

「俺のターン」

「俺は真紅眼の黒竜で霞の谷の雷神鬼に攻撃！
ダーク・メガ・フレア！！」

「……え？雷神鬼の効果は相手ターンにも発動できるのよ？」

「そんなのわかってるさ」

「なら雷神鬼の効果を発動するわ」

「トラップ発動！イクイップ・シュート！

装備カードを相手モンスターに移し、バトルする。

でも雷神鬼の効果で……」

「そんな……除外!？」

「レッドアイズでダイレクトアタック！
ダーク・メガ・フレア!！」

姫乃

LP 1600 0

「流石ね」

「久しぶりに勝った……」

「どんだけ嬉しいんだよ……」

「ほお、こんな所に居たのか」

「なん……だと!？」

先生が現れた!!
シンは逃げ出した。

「遅い!!」

しかし回り込まれてしまった!!

「ちょ、」

シンは先生からリアルグォレンダをともに受け、ボロ雑巾のようにされ、ひきずられて行った。

そしてミュージカルとか色々あつて、文化祭は終わった。

文化祭だつてさ（後書き）

シン「なんでイクイップ・シュートなんて入れてたんだろう？」

竜騎「さあ？

5D'sの遊星はライディングデュエルなのに入れてたしな」

シン「そうだな、気にしないでおう」

もう冬休みか……（前書き）

しばらくテストなので更新出来ません。
次回からは番外編をします。

もう冬休みか……

「もう12月24日？」

「早いね」

「特に何も無かったから早いな……」

今日は12月24日、クリスマスであり終業式の日でもある。
もう終業式は終わったが……。

「明日から暇だ」

「宿題はちゃんとしないとね」

「忘れてた……」

「今度こそは忘れないようにしないとね」

「くそお、なんで宿題なんかあるんだ」

「そんな事言わないの、そういえばお腹すいたね」

「今日は早く終わったからな……ならそこのファミレスで食つか」

「え？シンと一緒に？」

「ゴメンゴメン、嫌だった？」

「そ、そんな訳じゃ……／＼／」

「どっちなんDA!？」

「じゃあ、行こうよ」

「嫌なのか？嫌なら行かないけど？」

「もう!!いいから行くよ!!」

（わかりにくいな……やっぱり嫌なのか？）

シンは空に連れられてファミレスに入った。

2人はハンバーグを食べて、ファミレスを出た。

「ファミレスとか久しぶりだった」

「この前皆で来た時は4時間も居たんだ」

「なん……だと!？4時間も？何を？」

「いや、皆で喋ってたら……」

「よくそんなに喋ってられるな……」

「はははは」

「それじゃ、お前そっから右だろ」

「うん、じゃあね」

シンは1人になった。

別に気配がしたとかそういう事は無かったが、言ってみた。

「お前……誰だ」

「気づいてたか……」

黒いマントを羽織り、黒いフードを被った男が現れた。

「本当に居た!？」

「気づいて無かったのか!？」

まあ良いせつかく此処までついて来たんだ」

「何コイツ? ストーカー? 変態だ! 警察に変態が居るって連絡しなきゃ、しかも黒マントに黒フードっていつの時代の敵キャラ? 正直ダサいんだけど、100パーセント変態だ!! よって警察に通報するZE!!」

「止める……」

心のライフ

4000 100

「もしもし、ストーカーがいまーす。
場所は……」

「……orz」

心のライフ

1000

結局、変態？は警察に逮捕された。

シンはそのまま何事も無く家に帰って寝た。

（デュエルくらいしてやれば良かったな）

翌日

「竜騎、何しに来た？」

「暇潰し」

「わかった、帰れ」

「帰らないぜ」

「ならデュエルで勝ったらいいぞ」

「ならデュエルだ」

「「デュエル！！」」

「俺のターン」

「真紅眼の飛竜を召喚」

ATK1800

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターンだ」

「俺はフィールド魔法、竜の渓谷を発動。
効果で手札を1枚捨て、デッキから光と闇の竜を墓地に送る」

「さらに未来融合・フューチャー・フュージョンを発動、F・G・
Dを選択して、デッキからドラゴン族モンスター5体を素材にする」

「ドラグニティ・レギオンを召喚、墓地のドラグニティ・アキュリ
スを装備」

ATK1200

「ドラグニティと名の付いたモンスターを装備しているモンスター、
レギオンを除外して、ドラグニティアームズ・レヴァティーンを特殊
召喚。

光と闇の竜を装備する」

ATK2600

「トラップ発動、奈落の落とし穴」

「シンがそんなカードを!?!」

「俺だって使うんだぞ」

「ならカードを3枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン」

「俺は、黒竜の雛を召喚」

ATK800

「黒竜の雛を墓地に送って真紅眼の黒竜を特殊召喚する」

ATK2400

「トラップ発動、奈落の落とし穴」

「お前も!？」

「お返しだ」

「ターン…エンド」

「俺のターンだ」

「俺はドラグニティ・アキュリスを召喚」

ATK1000

「アキュリスの効果でドラグニティ・ドウクスを特殊召喚してアキュリスを装備させる」

「ドウクスを除外して、ドラグニティアームズ・レヴァティンを特

殊召喚、ファランクスを装備」

ATK2600

「ファランクスの効果で装備されているこのカードを特殊召喚する」

ATK500

「レベル8のレヴァティンにレベル2のファランクスをチューニングー！」

シンクロ召喚！トライデント・ドラギオン」

ATK3000

「効果で自分フィールドのカード2枚まで破壊し、破壊した枚数このターン、追加攻撃ができる！

俺は2枚の伏せカードを破壊する。

よってこのターン3回攻撃ができる。行け、トライデント・ドラギオン、サンレンダア」

LP4000 - 5000

「結局何もできなかった！！」

「バーカバーカ」

「糞ッ」

「糞がどうした？」

「煩い、少し黙ってる!」

そして竜騎は一週間程、毎日家に来た。

シンは全く宿題が進まない事に頭を悩ませていた。

(そうだ!!夜にすれば!!)

シンは毎日宿題をしようとするが、毎晩睡魔に邪魔されていた。

(宿題が進まない……しかも全くわからない……orz)

もう冬休みか……（後書き）

シン「変態を通報してやったZE!!」

竜騎「だからどうしたんだ、勝てる気しなかったから通報したんじゃないのか？」

シン「あの時はあまりに相手が変だったからだよ」

竜騎「本当なら良いけど」

PV50000突破記念番外編！！精霊界行ってきたZ E！ 前編（前書き）

お待たせしました。

テストが終わったので、久しぶりの更新です。

PV50000突破記念番外編！！精霊界行ってきたZE！ 前編

「暇だあゝ」

コタツに入りながらシンは呟いた。

「みかんしか食うのが無い……うまいけど、食い過ぎると飽きてくるな」

シンがみかんの皮を剥きながら呟いていると……。

『た…け…下…い』

「なんか聞こえた!？」

『たす……下さ……』

あまりに怖かったのでシンは精霊の瞳の力を使った。

『助けて下さい!-!』

力を使った瞬間に耳元で叫ばれたため、シンは慌てて耳をふさいだ。

「なんだよ!-!」

シンが声の主を方を見ると、ガスタの巫女ウインダだった。

『助けて下さい!早くしないと皆が……』

「わかったわかった、でどうすれば良いんだ？」

『精霊界に来て！』

「どうやって？」

『精霊の瞳の力を使って精霊界に行きたいと願えば行けるよ』

「さあ行くZ E！！」

シンが精霊界に行きたいと願うと……。

「マジで……本当に行くの！？」

気がつくと、草原の中に立っていた。

「すげー、こんな力があつたなんて……」

『着いたね……』

ウィンダが言うには此処はミスト・バレーの湿地帯だそうだ。

そしてシンはデッキに入れてたモンスターの精霊を呼び出す事が出来るらしい。

「でも、なんか寂しいな……何があつたんだ？」

此処では生き物の気配が感じられなかった。

『リチュアが資源を求めて此処に攻めて来たの、戦いが激しくなってきたある日、突然インヴェルズっていうのが来て、無差別に攻撃

してきたの、ガスタモリチュアも大きな被害を受けたけど、インヴェルズは私達の住んでた所にまで攻めて来たのそして……』

「大体分かった」

シンとウィンダは小さな村に着いた。

しかし、そこにはばらばらになった肉塊がそこら中に転がっていて、小さな虫が肉塊を食べていた。

（ってこれインヴェルズじゃねえか！？）

インヴェルズが居る事に気づいたシンはBF - 空風のシンを呼び出した。

『拙者はいつも闇の誘惑で除外されてばかり、でも遂に拙者の出番が来たでござる！……！』

シンはハイテンションでインヴェルズの雑魚どもを一刀両断していた。

インヴェルズの雑魚は悲鳴を上げながら逃げていた。

シンは初めてデッキに入れてて良かったと思った……が、しかし……

『おろ？』

突然シンの攻撃が止まった。

『しまった、門番でござる！？』

シンはインヴェルズの門番の反撃で簡単にやられてしまった。

シンは門番って名前だから此処には居ないと思っていた。

「なら、来い！！レッドアイズ！！」

インヴェルズ達に黒い炎が空から降り注いだ。
すると、上空から真紅の瞳の黒い竜が舞い降りた。

「良くやった！流石相棒」

インヴェルズを殲滅したがシンはウィンダが居ない事に気づいた。

「ウィンダ、どこに居るんだ？」

（まさか、雑魚と一緒に）

『ホッホッホッ、よくも私の部下達をやってくれましたね』

「誰？」

『申し遅れました、私はモースと申します』

「ウィンダをどこへやった？」

『知りませんね』

「もう……いい、やれレッドアイズ」

『そのドラゴン、私と同等の力を持っているようですね……でも私には勝てません』

モースは足元に落ちていたインヴェルズの雑魚を一匹手に取り、食べた。

『レッドアイズ……さよなら』

「は？」

レッドアイズが吹き飛ばされた。

シンには何が起こったのか分からなかった。

『あなたには此处で……消えて貰いますか！』

「くッ！！来い、エメラルド・ドラゴン」

『邪魔が入りましたね』

「相討ちしろ！！」

エメラルド・ドラゴンの吐いたブレスに身体の半分を失いながらモースは最後の力を振り絞ってエメラルド・ドラゴンの首を吹き飛ばした。

『私が……こんな……』

（意外と呆気なかったな……）

『シン……何やってるの？』

シンが声のした方を向くと、大きなガスタ・ガルドに乗ったウィンダが居た。

「ウィンダー!どこ行ってたんだ!？」

『ちょっと急用ができて、スターダスト様の所に行ってきた!..!』

「.....は?なんで?」

『風霊術「雅」!..!』

「ちょっと待.....」

気がつくと、シンはスターダスト・ドラゴンの前に立っていた。

『紅シンか.....』

「あの、何か用でしょうか?」

『お前にはカードの精霊が居なかっただろう?..!』

「はあ、それで?」

『これからお前にカードの精霊を与える』

スターダストがそう言うと、1枚のカードがゆっくりと落ちてきた。シンはそねカードを手を取った。

「黒竜の雛!?良かった、2枚しか持ってなかったんだよ!..!」

『きゅー、きゅー』

「よろしくな名前は……クロでどうだ!？」

『精霊に名前を付けるとは……しかもシンプルに』

「シンプルが一番だろ!！」

『まあいい、デュエルディスクを持ってきてないようだな……』

「ああ、突然だったから、忘れてきた」

『デュエルモンスターズでないと、勝てる可能性は低いだろうから渡しておく』

スターダストに遊戯達が使っていたタイプのデュエルディスクを渡されたのでシンは腕に装着した。

『ついでに我がカードも渡しておく』

スターダスト・ドラゴンはスターダスト・ドラゴンのカードを渡してきた。

「いいや、そんな使わないし」

『そう言わずに貰ってくれ』

「いらねー」

『ホログラなら』

「そいつをこっちに渡せ!！」

シンはスターダスト・ドラゴンのホログラフィックレアを手に入れた。

『仲間を増やせ、精霊界には沢山の部族がある、力を合わせればインヴェルズごとき、楽に倒せる』

「お前は戦わないのか？」

『ああ、我々シグナーの龍は1体につき1つの属性を1体で守護しているが、闇属性にレッド・デーモンズ・ドラゴンとブラックフェザー・ドラゴンがおって、どちらかが水属性を守護しなければならなくなつてな、激しい戦闘を行つておるのだ、我はそれを止めなければならん』

「何やってんだ、あの2体……相性悪過ぎだろ……」 『まあ、後は頼んだ』

「へーい」

気がつくのと元の場所に戻っていた。

『どうだった？』

「普通、とりあえず味方を増やすか、此処から一番近い所は？」

『霞の谷だけど、今雷神鬼が暴れてるらしいよ、氷結界も近いけど……』

「仕方ない、氷結界に行くか……」

『氷結界はトリシューラが暴走してるらしいから行かない方が……』

「分かったよ、ラヴァルでも行くか……」

『ラヴァルは好戦的だから注意してね』

『……で、我々にインヴェルズと戦えと？』

「そっだ、ジエムナイトを攻撃してる暇があるなら、一緒に戦え」

『突然介入してきたヴァイロンも同じような事を言っていたな……
よからう』

「本当か!？」

『ああ、そっだ貴様にこれを渡そっ』

シンは渡されたカードを見て言った。

「ラヴァルバル・イグニス?いらねー」

『何故だ!？』

「弱いから、こんなの使っぐらいならリバイス・ドラゴン使っし普通」

『でも相手が攻撃してきた時に……』

「効果知らないやつが相手の時にしか使えないじゃん」

『……orz』

こうしてシンはガスタ、ラヴアル、ジェムナイト、リチュア、ヴァイロンを味方につけてインヴェルズとの所へ向かった。

PV50000突破記念番外編！！精霊界行ってきたZ E！ 前編（後書き）

シン「負ける気がしない……インヴェルズなんて根絶やしにしてやる！！」

竜騎「それ、悪役のセリフ」

シン「気にするな」

突然だがシンは今、インヴェルズ・グレズの目の前に居る。
何があったか？

簡単に説明すると、連合軍を率いてインヴェルズのボス、インヴェルズ・グレズの根城まで来た。
色々あってインヴェルズ・グレズの方から出てきたんだ。

『貴様が紅シンだな？』

「ああ」

大量のインヴェルズが出てきてヴァイロン、ガスタ、リチュア、ラヴァル、ジェムナイト……連合軍のモンスター達に攻撃を開始した。
『貴様ごときが我を倒せるのか？』

「デュエルでな！！」

『そちらの方が勝敗がはつきりするからな、よかるう』

グレズがそう言うと、一部のインヴェルズが石版になってグレズの所に集まった。

石版はカードになってグレズの腕のデュエルディスクのような所に入っていた。

『そして、我のカードを入れる』

グレズがインヴェルズ・グレズのカードをデッキに入れるとデッキ

は自動シャッフルされた。

『我は準備ができたぞ』

「こつちもできてる」

「『デュエル!!』」

「俺のターン」

「俺はモンスターをセットして、カードを2枚伏せてターンエンド」

『我のターン』

『我はインヴェルズの魔細胞を特殊召喚する』

ATK0

『インヴェルズの魔細胞をリリースしインヴェルズ・モースをアドバンス召喚』

ATK2400

『インヴェルズ・モースの効果を発動インヴェルズと名のついたモンスターをリリースしてアドバンス召喚した時、1000ライフポイントを払って貴様のカードを2枚まで手札に戻す。

我はモンスターと真ん中の伏せカードを選ぶ』

「はいはい」

『バトルだ、モースでダイレクトアタック!!』

「リバーズカード、ガード・ブロック、ダメージを0にして1枚ドロ―する」

『くッ、カードを伏せてターンエンドだ』

「俺のターン」

「俺は黒竜の雛を特殊召喚する。
来いッ！―クロ」

『きゅーきゅー』

ATK800

「俺は黒竜の雛を墓地に送り、真紅眼の黒竜を特殊召喚する！―」
『きゅー！―！』

クロが大きくなった。

ATK2400

「真紅眼の黒竜をリリースして真紅眼の闇竜を特殊召喚する」

ATK2400 2700

「リバーズカードの魔法反射装甲・メタルプラスを発動、真紅眼の闇竜に装備させる。

メタルプラスを装備した真紅眼の闇竜をリリースしてレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚する！―」

ATK 2800

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの攻撃力は募集のドラゴン族モンスター1体につき400ポイントアップする」

ATK 2800 3600

「さらに未来融合・フューチャー・フュージョンを発動、エクストラデッキからF・G・Dを選択して、ドラゴン族モンスター5体、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴン2枚と真紅眼の飛竜2枚にミンゲイ・ドラゴンを素材にする」

ATK 3600 5600

「バトル！！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンでインヴェルズ・モースに攻撃！

ダークネス・メタル・フレア！！」

『くッ』

グレズ

LP 4000 800

「カードを伏せてターンエンド」

『我のターン』

『我はモンスターを伏せてカードを2枚伏せてターンエンドだ』

勝ったかな？……とシンは思った。

「俺のターン」

「俺は竜の尖兵を召喚」

ATK1700

「手札のドラゴンを墓地に送って攻撃力を上げる」

ATK1700 2000

「バトル、竜の尖兵で伏せモンスターに攻撃」

『伏せモンスターはキラ・トマトだ、効果でインヴェルズ万能体を特殊召喚』

ATK1000

「レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンでインヴェルズ万能体に攻撃！」

ダークネス・メタル・フレア！！」

『トラップ発動、聖なるバリア・ミラーフォース！！』

「しまった！？」

「エンドフェイズに真紅眼の飛竜を2体除外してレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンを2体特殊召喚して、ターンエンド」

ATK2800×2

『今さらOCG効果の雑魚を呼んだ所で我に勝てる訳が無かるう。
我のターン』

『我はトラップカード、侵略の波紋を発動し、ライフを500払い、
墓地のインヴェルズの魔細胞を特殊召喚する』
グリーズ

LP800 300

ATK0

『インヴェルズ万能体とインヴェルズの魔細胞をリリースし、現れ
よ我が化身インヴェルズ・グリーズ』

ATK3200

『インヴェルズ・グリーズの効果発動、ライフを半分払い、このカー
ド以外に存在する全てのカードを破壊する!!』

「何ッ!?!」

グリーズ

LP300 150

『インヴェルズ・グリーズでダイレクトアタック!!』

シン

LP4000 800

『ターンエンドだ』

「俺のターン」

「ミンゲイ・ドラゴンを特殊召喚してカードを1枚伏せてターンエンド」

ATK400

「私の勝ちのようだな、私のターン!!」

「伏せカードが邪魔だな……インヴェルズ・グリーズの効果、ライフを半分払いこのカード以外に存在するカードを全て破壊する!!フハハハ、消え去れ!!紅シン!!」

グリーズ

LP150 75

「トラップ発動、スターライト・ロード、フィールド上のカードを2枚以上破壊する効果を無効にし破壊する!!」

「しまった!?!はめられた!!」

「そしてスターダスト・ドラゴンを特殊召喚することができる。飛翔せよ、スターダスト・ドラゴン!!」

ATK2500

「馬鹿な……我が負けた……」

手札に逆転のカードが無い事を確かめてグリーズは言った。

『ターン……エンド』

「俺のターン」

「手札から思い出のブランコを発動して、墓地から真紅眼の黒竜を特殊召喚する！！蘇れ！レッドアイズ！！」

ATK2400

「レッドアイズでダイレクトアタック！！ダーク・メガ・フレアア！！」

『グアアアア！！』

グレス

LP750

「ギリギリだったけど勝ったな……グレスの効果使われなかったら負けてたけど」

インヴェルズ達は跡形も無く消滅していた。

（なんだ？体が……）

シンは自分の体が消えかかっている事に気づいた。

『待つてー！！』

（ウイ ندا……）

最後にウィンドは何か言ったがシンに聞こえる事は無かった。

「で、なんで俺は此处に居るんだ？
スターダスト？」

『いやあ、代わりにインヴェルズを滅ぼしてくれたからなあ』

「ふざけんな!!」

『まあいいじゃないか』

「帰ろ……」

『お前、しばらく精霊界に来れないから』

「なんで！？俺の力で来たんだよ!？」

『シグナーの龍の力で』

「お前になんの得があるんだ!？」

『精霊の瞳の力では3年は来れないからな』

「話を聞け!!
ってか3年って長ッ!？アカデミアを卒業してるし!!」

『まあよかるつ、帰れ』

「何故上から!?!」

『じゃあ、さらばじゃ』

「ちよつ!?!」

気がついたら元の場所に戻っていた。

「夢……か?」

時計を確認すると、時間が全く進んでいなかった。

『きゅーきゅー』

「クロ!?!」

シンの精霊の黒竜の雛が頭に乗っていた。

（やっぱり夢じゃ無かったのか?）

シンは机の上にカードが置いてある事に気づいて手に取った。

（ガスタの希望 カムイか……）

シンは窓から雲一つ無い青空を見上げた。

（宿題終わってねえ……まだ時間があるからいいか……）

しかし、シンの宿題は終わらなかった事は言うまでもない……。

PV50000突破記念番外編！！精霊界に行ってきたZE！！

後編（後書き）

インヴェルズを全部出す予定だったのに……モースとグリーズしか出て無い……。

シンのデッキのレダメはアニメ効果1枚とOCG効果が2枚です。

PV50000達成記念なので、何かしようと思いましたが、こんなのが出来なくてすいません。

いつも見て下さってありがとうございます。
そしてこれからも応援お願いします。

始まる三学期と新たな敵？

冬休みが終わり、今日から三学期が始まる。

（宿題終わってねえ……）

しかし、シンは宿題すら終わって無かった。

量的には少ない方なのだが、彼にとっては地獄の量だった。

「シン、おはよう」

「宿題とか……」

「また終わってないの？」

「orz」

「あと、どれくらい？」

「4分の3」

今日は始業式だけなので、早く終わった。

「アンティールで人の一番大切なカードを奪うデュエリスト？」

「そう、アンティールで勝ったらその人の一番大切にしてるカードを奪っていくの」

「その時点でデュエリストじゃねえ。」

はつきり言っ て屑だ」

「しかもね、不思議な事に相手の一番大切なカードが何故か分かるの」

「それで？」

「一番大切なカードを賭けるまでデュエルしないの？」

「俺だつたら冷静に逃げるけどな……」

「逃げらんないらしいよ」

「嘘だ！！信じられるか！！非科学的だ！！」

「でも実際に被害にあった人が居るんだもん。オシリスレッドだけでも半分の人が……」

「俺がそいつを徹底的に潰してやる！！」

「それより、シンに精霊居たんだ。髪と一体化してたから気づかなかった」

空はシンの頭に乗っているクロに気づいた。

「こいつか？クロっていうんだ、そういえばお前のマシユマロンは何故俺の腕に噛みついてるんだ？」

「聞いてみたら？」

「そうだな」

シンは精霊の瞳の力を使った。
すると、マシユマロンは実体化した。

「ぎゃあああああ！！H A N A S E ！！」

マシユマロンは数分後に離れた。

「それじゃあ、私こつちだから」

「ああ」

何故かデジャヴを感じたがシンは気にしなかった。

「お前の一番大切なカードを賭ける……」

シンよりも少し小さな少年がいた。

シンは自分に冷静になれと言い聞かせて直ぐに行動に移した。

「逃げろおおおおお！！」

……って逃げらんねー」

何故か走っているのにそれ以上進めなかった。

「無駄だよ」

「今日はデッキ持ってきてないんだよ」

「じゃあそのデッキケースは？」

「違う、バトスピだ！！」

「嘘はつかない方がいいよ」

「はあ、なら徹底的に叩き潰してやるよ」

「何を賭けるの？」

「じゃあ、仮面竜で……」

「ダメだよ」

「なら、F・G・Dならどうだ？高いんだぞ、俺5枚持ってるけど」

「ダメだよ、僕はカードの価値には興味無いんだ、君の最も信頼していて、一番大切なカードが欲しいんだ」

「分かったよ、真紅眼の黒竜を賭けてやるよ」

「真紅眼の黒竜か……そのようだね。
でもそんな雑魚、まだ使ってた人居たんだ」

「雑魚……だと!？」

「まあいいや、始めよう」

「「デュエル!!」」

「俺のターン」

「俺は黒竜の雛を召喚」

ATK 800

「黒竜の雛を墓地に送り、真紅眼の黒竜を特殊召喚する!!」

ATK 2400

「手札から黒炎弾を発動、2400のダメージを受けろ」

敵

LP 4000 1600

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「僕のターン」

「僕は手札のからダーク・アームド・ドラゴン、裁きの龍、神獣王バルバロス、ガーディアン・エアトス、マシンナーズ・フォートレス、エクストラデッキから剣闘獣ガイザレス、ギガンテック・ファイター、BF・アーマード・ウィング、ミスト・ウォーム、TGハルバード・キャノンを墓地に送り、エクストラデッキから現れよ、堕天使ベルフェゴル」

ATK?

「なんだ……?」「ベルフェゴルの攻撃力は墓地に送ったモンスター1体につき1000ポイントアップするよ」

ATK 10000

「バトル、ベルフェゴルでレッドアイズに攻撃」

「トラップ発動！！聖なるバリア・ミラーフォース！！」

「ベルフェゴルは魔法、罫の効果は受けないし、カードの効果でフィールドを離れないよ」

「何！？」

シン

LP 4000 0

「弱い弱過ぎるよ君！！」

「チートな……」

「早く雑魚を渡してよ」

「雑魚なんて言うな」

シンは真紅眼の黒竜を渡した。

「後2枚は？」

「全部渡せって事かよ」

結局全部渡す羽目になった。

「それじゃあ、二度と会う事は無いと思うから」

「……、」

翌日

「レッドアイズを取られたの!？」

「ははは……」

「どうするの?」

「また買おうと思ったけど、あいつを潰して取り返したいからな……新しいデッキも作ったし」

「へえ」

「紅、お前でも勝てない相手とはな」

突然後ろから声が聞こえた。

「龍一!？」

「そんな奴このオレが粉碎してやる!!」

「できるのか?」

「お前の目の前でな」

「よし、今日からあいつが現れるまでお前と竜騎と一緒に帰るか
らな」

「いいだろう……」

「……で、なんで俺までこんな目に」

ちなみに竜騎はシンと龍一に無理やり連行されて此处に居る。

「お前まだ被害にあって無いだろう？」

「ああ」

「ふうん、オレは奴を探してくる！」

「龍一！？待て！！」

龍一は無視して走り去ってしまった。

「あの馬鹿」

シンと竜騎が龍一の走って行った方に進むと、龍一がデュエルをしていた。

「ふうん、貴様から来るとは」

「君の先攻だよ、早くしてよ」

「オレのターン！！」

「オレは融合を発動し、ブルーアイズ3体を融合し、青眼の究極竜を融合召喚する！！いでよ、ブルーアイズ・アルティメット・ドラゴン！！」

ATK4500

「さらに、アルティメット・ドラゴンをリリースし、青眼の光龍を特殊召喚する！！」

ATK3000 4200

「カードを伏せてターンエンド」

「僕のターン」

「僕は手札のモンスター5体とエクストラデッキからモンスター5体を墓地に送って堕天使ベルフェゴルを特殊召喚するよ」

ATK? 10000

「な……10000だと！？」

（言っだけは良かった）

「ベルフェゴルの攻撃力は墓地に送ったモンスター1体につき1000ポイントアップするんだよ」

「馬鹿な……だが、シャイニング・ドラゴンの効果発動、フィールド上のカードを任意の数破壊する！！オレはベルフェゴルを破壊する。シャイニング・ノヴァ！！」

ベルフェゴルは破壊された。

「ふうん、たいしたこと無いモンスターだな」

「しょうがないなら、墓地のモンスター10体を除外して、エクストラデッキから堕天使ルキフェルを特殊召喚するよ」

「このモンスターは召喚する時に除外したモンスターの数×1000ポイントアップするんだよ」

ATK10000

「バトル、ルキフェルでダイレクトアタック」

「馬鹿な……」

龍一

LP40000

「じゃあ、ブルーアイズを渡して貰おうか」

「くッ!!」

「龍一!!」

「なんだい？」

「俺とデュエルしろ!!」

「君は初めてだね。」

「いいよ」

「待て竜騎、俺にやらせてくれ」

「君は昨日の……ダメだよ」

「そんな事はどうでも良いんだよ!!」

「俺はお前がシンを倒さないとしなせ」

「しょうがないな」

「じゃ、竜騎、トリシューラ貸して」

「なんでだよ」

「ミスト・ウォームじゃ役不足だから」

「はいはい」

「早くしてよ、君に使う時間はあまり無いから」

「レッドアイズは返して貰うからな」

お互いはデュエルディスクにデッキを入れて、自動シャッフルされてからカードを5枚引いた。

「「デュエル!!」」

始まる三学期と新たな敵？（後書き）

今回はちよつとチートなオリ力を出してしまった気が……敵だから良いですよね？

始まり（前書き）

サブタイが全然思いつかない……orz

始まり

「デュエル!!」

2人のデュエルが始まった。

「先攻は君に譲るよ」

相手の戦術を知っているので先攻を譲る理由をシンは知っていた。
普通なら断るがシンは余裕そうに答えた。

「じゃ、先攻は貰うよ。
俺のターン」

「俺は手札抹殺を発動、お互いに手札を全て捨てて、捨てた枚数ドローする」

「俺はミラーージュ・ドラゴンを召喚」

ATK1600

「え？」

相手に意味が分からない、といった表情で見られた。

「ははは、何を出すかと思ったらそんな雑魚？
まず僕は罠カードを使わないよ」

「良い情報をありがとう」

「なっ！？まさか罫を使わないか確かめる為に!？」

相手は焦って答えた……が

「いや、偶然だよ」

あっさり否定された。

それ以前にシンがそんな事考える訳が無いが。

「俺は二重召喚を発動して、もう1度通常召喚ができる。

真紅眼の飛竜を召喚」

ATK1800

「デッキトップを墓地に送りグローアップ・バルブを特殊召喚する」

ATK100

「レベル4のミラーージュ・ドラゴンと真紅眼の飛竜にレベル1のグローアップ・バルブをチューニング!!」

世界が凍りつく時、三首の龍が眠りから覚める。

シンクロ召喚!!氷結界の龍トリシューラ!!」

ATK2700

「トリシューラの効果でお前の真ん中の手札と墓地の堕天使アスモデウスを除外する」

「いきなりトリシューラ!？」

馬鹿じゃないのか」

と言われたがシンは無視した。

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「僕のターン」

「僕は山札の上からカードを10枚墓地に送り、墮天使マンモンを特殊召喚する」

ATK5000

「あれ？お前の使うカードにしては低いな」

まあ普通に考えたら高いのだが……。

「このカードは墓地に送ったカード1枚につき500アップだからね」

「さらに僕は手札5枚とエクストラデッキから5枚墓地に送って墮天使ベルフェゴルを特殊召喚するよ」

ATK10000

「バトル、マンモンで攻撃するよ」

「トラップ発動、和睦の使者」

「ならターンエンドだ」

「俺のターン、ドロー」

「俺は金華猫を召喚、効果で墓地のグローアップ・バルブを特殊召喚する」

「レベル1の金華猫とバルブをチューニング！！シンクロ召喚！！フォーミユラ・シンクロン」

DEF1500

「フォーミユラ・シンクロンの効果で1枚ドローする」

「なんの為にシンクロチューナーを……？」

「お前はなんの為に人の大切なカードを奪うんだ？」

「決まってるじゃん、楽しいからだよ」

シンの質問に無邪気な笑み浮かべて答えた。

「悪い事だとは思わないのか？」

「そんな事思わないよ、だって弱い人からカードを取るだけだよ」
くだらないとシンは思った。

「それが大切なカードだとね、その人がね面白い顔するんだ」

「もう黙って良いぞ……クリアマインド」

シンは目を閉じた。

「レベル9、シンクロモンスター、氷結界の龍トリシューラにレベル2、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロンをチューニング！」

新たな氷の鼓動が究極の氷結界の龍を進化させる！

アクセルシンクロオオオオオ！！」

白紙のカードにイラストやテキストが浮かび上がる。

「現れよ！！究極氷結神龍トリシューラ！！」

「なんだよ！？このモンスターは……！！」

ATK4000

腕や足が細くなって、胴体が長くなったトリシューラが現れた。

「究極氷結神龍の効果で相手の手札、フィールド、墓地からカードを2枚ずつ除外する。

俺はフィールドの2体と墓地から、適当に2枚と手札の1枚を除外する」

「あつ、ああ……」

モンスターは居ない、手札も無い、墓地から発動できるカードも無かった。

「バトル……究極氷結神龍でダイレクトアタック」

少年はそのカードをシンの手から全て取り、破り捨てた。
そのカードから大量の闇が出て行った。

「僕は……」

「分かった、他の人にもカードを返してやれよ……、
いや、返しにくいか…… 竜騎頼んだ、俺疲れたから寝る」

「なんで俺に押し付けるんだよ!？」

「あ、トリシューラを返しとく」

トリシューラを渡す時、シンの瞳は真紅に輝いていた……。

「お前……」

「どうかしたか？」

もう1度見ると、シンの瞳は元の緑色に戻っていた。

「いや」

その後、竜騎は少年とカードを返しに行った。
もちろん1日じゃ終わらなかったが。

（あのカードは人の欲望を増幅させる力が……？まさかね）

その日を境にナンバーズの所持者達に異変が起こった。
それから数日、シンは毎日面倒事に巻き込まれていた。

「またナンバーズ？」

「まただよ」

「倒すの面倒だな……」

面倒な理由は、OCG効果だということだ。

そして別に遠い宇宙から来た謎の生命体が居る訳でも、ナンバーズハンターでも無い彼は人のナンバーズを奪う事はできない。

ナンバーズ所持者はデュエルで倒せば元に戻るからシンはナンバーズに興味が無かった。

（あいつが所持者か）

「ははは、もうお前らみたいな雑魚には興味は無い！！
強い奴は居ないのか！？」

「あいつ、いつも喋らない奴なのに……」

シンはナンバーズ所持者を見て言った。

「俺が相手してやるよ」

「ははは、俺は今すつげえ調子が良いんだ、このカードを手に入れてからなあ！！」

「こりゃ重症だな」

シンはデュエルディスクにデッキを入れて自動シャッフルされてからカードを5枚引いた。

「デュエル！！」

「俺のターン！！ドロー！！」

「俺はモンスターを伏せて、カードを2枚伏せターンエンドだ！！」

「煩い奴だ、俺のターン」

「俺は古のルールを発動し、真紅眼の黒竜を特殊召喚」

ATK2400

「さらに黒竜の雛を召喚」

ATK800

「黒竜の雛を墓地に送り、真紅眼の黒竜を特殊召喚」

ATK2400

「バトルレッドアイズで伏せモンスターに攻撃、ダーク・メガ・フレア！！」

レッドアイズが吐いた黒い炎は相手の伏せモンスターを吹き飛ばした。

「ちっ、魂を削る死霊は戦闘では破壊されない」

「なら、カードを伏せてターンエンドだ」

「俺のターン！！」

「ははは、俺は切り込み隊長を召喚、効果で俊足のギラザウルスを特殊召喚」

ATK1200

ATK1400

「レベル3のモンスター3体をオーバーレイ！！3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！！現れる！！No.34電算機獣テラ・バイト！！」

（出たよナンバーズ、これがOCG効果だったらどんなに楽だったか……）

なんて事をシンは考えていた。

「カードを伏せてターンエンド！！」

「俺のターン」

「俺はエネミー・コントローラーを発動、このカードはコマンド入力する事により効果を発動できる。」

右左A右左左B、このコマンドによりテラ・バイトを攻撃表示にする」

ATK0

「バトル！！レッドアイズ2体でテラ・バイトを攻撃、ダーク・メガ・フレア！！」

「うわあああああ!!」

ナンバーズのカードからは闇のようなのが出ていった。

倒れていた男はしばらく経つとゆっくりと起き上がった。

「あれ？俺は今まで何を……？」

シンは大丈夫だと確認して帰った。

「はあ……眠い……寝る」

シンは眠りについた。

シンは気がついたら真っ白な空間に居た。

目の前には真紅の瞳以外は自分と同じ容姿の少年が居た。

「お前は……？」

『久しぶりだな…俺が完全に力を取り戻した。

紅シンの身体が保たなくなるから、お前とのデュエルも時間の問題だ…』

「そつか……」

シンが何か言いかけた所で……。

「シン、起きて」

空に起こされた。

「んゝ、夢か……?」

「何が?」

「なんでもない」

適当にごまかして家に帰る事にした。

「眠い……早く帰って寝よ」

とシンが言うと……

『初めようか……』

シンは脳に直接声が聞こえたような気がした。
すると急に頭痛がした。

「あんな寝てたのに?
……ってシン!??」

シンは地面に倒れた。

始まり（後書き）

次回は多分一番長いデュエルになる予定です。
いつも短いのですが（笑）。

今回登場した究極氷結神龍トリシューラはアストラル様の作品の遊
戯王デュエルモンスターズGXの氷のデッキの使い手のオリカで
す。
いつもありがとうございます。

一進一退の攻防

何も無い真っ白な空間……そこに2人は居た。

シンは目の前に居た少年の顔を見た。

自分と同じ容姿をしていて、紅くて寂しそうな瞳をしていた。

悪魔……本当にそうだろうか？

シンは考えていた。

『このデュエルに敗れた者の魂は消滅する』

悪魔は言った。

「ビビらせたつもりかよ」

シンは平然と答えた。

「早くしてくれ、家に帰って寝たい」

シンが真顔でそんな事を言うので、

『フツ、お前くらいだよ、そんな事言う奴は……』

「いいから早くしてくれ」

『ああ』

すると突然紅い炎が2人を囲む。

悪魔から炎の翼と尻尾のような物が出てきた。

「なんだなんだ？」

「ブラシドみたいに見ただけ変わってデッキは変わって無いとかそういうパターンか？」

『意味も無くそんな事する訳無いだろ……このカードが使えるか使えないかの違いだ……』

「2枚のシンクロモンスターのカードだ……」。

「まあいいや」

「『デュエル!!』」

「俺のターン」

「俺は黒竜の雛を召喚」

ATK800

「黒竜の雛をリリースして、真紅眼の黒竜を特殊召喚!!」

ATK2400

「黒炎弾を発動!!真紅眼の黒竜の元々の攻撃力分のダメージを相手に与える!!」

『くッ!!』

悪魔

LP 4000 1600

「カードを2枚伏せてターンエンド」『俺のターン』

『俺は融合を発動、真紅眼の黒竜とデーモンの召喚を融合し、ブラック・デーモンズ・ドラゴンを融合召喚!!』

ATK 3200

「出たな……ブラック・デーモンズ……」

『ブラック・デーモンズ・ドラゴンで真紅眼の黒竜を攻撃!!メテオ・フレア!!』

ブラック・デーモンズは黒い炎を吐いた。
レッドアイズ抵抗できず、破壊された。

「くッ!!」

シン

LP 4000 3200

『さらに、速攻魔法、融合解除を発動しブラック・デーモンズをエクストラデッキに戻し、真紅眼の黒竜とデーモンの召喚を特殊召喚』

ATK 2400

ATK 2500

『デーモンの召喚でダイレクト・アタック』

「トラップ発動、ガード・ブロック！
ダメージを0にして1枚ドロー！！」

デーモンの召喚の攻撃はシンには届かなかった。

『なら真紅眼の黒竜でダイレクト・アタック！！
黒炎弾！！』

レッドアイズの黒い炎がシンを呑み込む。

「うわああああ！！」

シン

LP 3200 800

シンは膝をついた。

『カードを伏せてターンエンド』

「俺の……ターン」

シンは起き上がりながらカードを引いた。

「俺は古のルールを発動し、真紅眼の黒竜を特殊召喚する」

ATK 2400

「真紅眼の黒竜が特殊召喚された事により、手札からレッドアイズ・シンクロンを特殊召喚」

「レベル7の真紅眼の黒竜にレベル1のレッドアイズ・シンクロンをチューニング!!」

シンクロ召喚!! 降臨せよ、真紅眼の伝説竜」

ATK2500

白い炎を身に纏った、真紅眼の黒竜が現れた。

「真紅眼の伝説竜の効果で墓地からドラゴン族モンスターの黒竜の雛を除外して、デーモンの召喚を墓地に送る」

白い炎でデーモンの召喚は灰になる。

「バトル!! 真紅眼の伝説竜で真紅眼の黒竜を攻撃、シャイニング・デス・フレア!!」

悪魔

LP1600 1500

「俺はレッドアイズ・スピリッツを発動して、破壊された真紅眼の黒竜を特殊召喚する」

ATK2400

「カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「俺は真紅眼の悪魔を召喚」

『効果でデッキからレッドアイズ・シンクロン2体を特殊召喚する
！！』

『レベル7の真紅眼の黒竜にレベル1のレッドアイズ・シンクロン
をチューニング！！シンクロ召喚！！』

真紅眼の伝説竜！！』

ATK2500

相手フィールドにも現れた白い炎の竜。

『レジェンド・ドラゴンの効果により、墓地のドラゴン族モンスター
の真紅眼の黒竜を除外して、お前の真紅眼の伝説竜を墓地に送る』

「くッ」

『バーニング・ソウル！！』

レベル8のレジェンド・ドラゴンにレベル1のレッドアイズ・シン
クロンと真紅眼の悪魔をダブルチューニング！！

魔竜と悪魔が交わる時、地獄の業火が敵を焼き尽くす！！
シンクロ召喚！！我が化身

アンサラサクス・ドラゴン！！』

ATK3500

「これは……！？」

『お前は初めて見たんだな……』

「ああ……」

『バトル！！アンサラサクスでダイレクト・アタック！！』

「トラップ発動、ガード・ブロック」

また攻撃は届かず、シンは1枚カードをドローする。

『ターンエンド』

「俺のターン」

「俺はグローアップ・バルブを召喚」

「さらに、チューナーが自分フィールドに存在するため、ブースト・ウォリアーを特殊召喚する」

「レベル1のブースト・ウォリアーにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！！」

集いし願いが新たな速度の地平へ誘う。

シンクロ召喚！！希望の力、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロン」

「フォーミュラ・シンクロンの効果でカードを1枚ドローする」

「さらにリビングデッドの呼び声を発動し真紅眼の伝説竜を特殊召喚」

「クリアマインド、レベル8シンクロモンスター、真紅眼の伝説竜にレベル2シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロンをチュ

ーニングー！！

僅かな希望が幻の竜を呼び覚ます。
アクセルシンクロオオオオー！！」

「光来しろー！！ミラージュ・デステイニー・ドラゴンー！！」

ATK3300

光輝く竜が現れた。

「俺は手札からアクセル・ブラストを発動して、シューティング・スター・ドラゴンを墓地に送り、ミラージュ・デステイニー・ドラゴンの攻撃力を1000ポイントアップさせるー！！」

ATK3300 4300

「ミラージュ・デステイニー・ドラゴンの効果で墓地のシューティング・スター・ドラゴンの効果を得る。
効果発動、デッキの上からカードを5枚確認してチューナーの数だけ攻撃できるー！！」

シンはデッキの上からカードを5枚引き、確認した。

「俺が引いたチューナーは3体、よって3回の攻撃ができる」

「バトルー！！デステイニー・ミラージュー！！」

『トラップ発動、和睦の使者』

攻撃は無意味になった。

「ターンエンド」

『俺のターン』

『バトル！！アンサラサクスでミラージュ・デステイニーを攻撃！』

「ミラージュ・デステイニーの効果で除外して相手モンスターの攻撃を無効にする」

『カードを伏せてターンエンド』

耐えた……とシンは思った。

攻撃を防げるのは1体のみ、シンのライフは僅か800、モンスターの召喚されたら負ける。

「俺のターン」

「カードを伏せてターンエンド」

『俺のターン』

『バトル！！アンサラサクスでミラージュ・デステイニーを攻撃！』

「トラップ発動、シンクロ・ストライカー・ユニット！！
装備したモンスターの攻撃を1000ポイントアップして、エンド
フェイズ毎に800ポイントずつダウンする」

ATK3300 4300

『なっ!?!』

悪魔

LP 1600 800

『ターンエンド』

ATK 3300 3500

「俺のターン」

「カードを伏せてターンエンド」

ATK 3500 2700

『何もできないか…俺のターン』

『俺はシンクロ・キャンセルを発動してアンサラサクスをエクストラデッキに戻し、真紅眼の伝説竜とレッドアイズ・シンクロン、真紅眼の悪魔を特殊召喚。』

さらに真紅眼の悪魔をリリースする事でデッキから真紅眼の使い魔を2体特殊召喚する。

レッドアイズ・シンクロンを召喚』

『レベル1の真紅眼の使い魔にレベル1のレッドアイズ・シンクロンをチューニング!!シンクロ召喚、レッドアイズ・フェニックス!!』

さらにもう1体のレッドアイズ・フェニックスもシンクロ召喚する』

真紅の瞳の不死鳥が現れた。

『レベル8シンクロモンスター、真紅眼の伝説竜にレベル2シンクロチューナー、レッドアイズ・フェニックス2体をチューニング!!
地獄の業火よ、今地上に蘇り、敵を焼き尽くせ!!

シンクロ召喚!!インフェルノ・ブラスター・ドラゴン!!』

ATK4000

黒い竜が姿を現した。

その竜は体中から気味の悪い炎を吹き出している。

「なんだよ……これ!？」

運命

体のいたる所からどす黒い炎を出している竜はミラージュ・デステイニー・ドラゴンを睨みつけていた。

『バトル！！インフェルノ・ブラスター・ドラゴンでミラージュ・デステイニー・ドラゴンを攻撃！！』

気味の悪い炎が真つ白な空間を黒く染めていく。

「トラップ発動、黒竜の飛翔！！」

このカードは相手が自分のドラゴン族モンスターより攻撃力の高いモンスターで攻撃してきた時、お互いのモンスターを破壊し、俺は真紅眼の黒竜を特殊召喚する。

その後相手モンスターと自分モンスターの元々の攻撃力の差分、700ポイント俺はダメージを受ける。現れる！！レッドアイズ！！」

お互いのモンスターは破壊され、爆発し光と闇が打ち消し合った。

ATK2400

そしてシンのエースモンスターが再びフィールドに舞い降りた。

シン

LP800 100

『何だと！？なら貪欲な壺を発動し、真紅眼の黒竜とデーモンの召喚、レッドアイズ・フェニックスにレッドアイズ・シンクロン、真紅眼の悪魔をデッキに戻し、2枚ドロー、古のルールを発動し、デ

「モンの召喚を特殊召喚」

ATK2500

『ターンエンド』

「俺のターン」

「なあ」

『…なんだ？』

「お前は何でこんな負けたら死ぬようなデュエルをするんだ？」

『俺だって……本当はしたく無いんだ』

「じゃあ何で……」

『お前が死んで、俺が身体を手に入れても、また俺は封印され、新しい魂が入ってくる……俺が消えるだけで全てが終わるのに死にたく無いという感情が邪魔して……』

「もう喋らなくて良いぞ……俺は貪欲な壺を発動して、墓地の真紅眼の黒竜、真紅眼の伝説竜、フォーミュラ・シンクロン、ブースト・ウォリアー、シューティング・スター・ドラゴンをデッキに戻し2枚ドローする」

シンは引いたカードを確認してその内の1枚を発動した。

「俺は超融合を発動！！手札を1枚捨てる」

そのカードを見て悪魔は全てを諦めた。

泣いてるような顔で笑い、寂しそうな瞳は、死んだ魚のような瞳に変わっていた……。『はは……デーモンの召喚とレッドアイズを融合して、ブラック・デーモンズを召喚してとどめか……』
しかし、シンは……

「俺が対象に選ぶのは俺とお前の魂だ」

『……は？』

悪魔は意味が分からなかった。
光の渦が2人の頭上に現れる。

『お前は何を言って……』

「お前は死にたく無いんだろ？それに、悲しみの連鎖はもう終わいだ……」

『馬鹿な奴だな……お前は』

「馬鹿つてのは、昔からだからな」

『甘すぎるんだよ……お前は』

悪魔の顔から涙がこぼれ落ちた。

「これから、どうなるか分からないけど、一緒に頑張ろう……」

『ああ……』

2人は光の渦の中に呑み込まれた。

しばらくして、シンは目を覚ました。
右目が全く開かないが……。

「シン、大丈夫？」空が心配そうに言った。

「ああ、俺どのくらい寝てた？」

「え？今倒れて、すぐ起きたよ」

「嘘……？」

（夢……だったのか？）

その後、家に帰って寝た。

翌日

シンは自分が自分なのか分からなくなっていた事に気づいた。
とりあえず顔でも洗おうと洗面台の所に行った。

「嘘だ……」

シンは鏡に映った自分を見て呟いた。
右目が緑色だった筈なのに、真紅の色をしていた。

「オッドアイってやつか…… かけえとか思ってたけど、リアルになると気持ち悪いな……」

『俺の力を使っているからだ…… 早くコントロールできるようになれよ』

突然の声にシンはびっくりした。

「お前！？なんで此処に……？」

『気付かなかったのか？』

魂は融合しても、人格は別々になっていたんだぞ…… だからお前は多重人格者になったんだ。

デュエルの時に助言くらいはするが……？』

「嘘だ…… 夢じゃ無かった」

こうしてシンは古代エジプトの名も無きファラオのようで、誰かと超融合したカードの精霊のようで、宇宙から来た謎の生命体のような感じの相棒を手に入れた。

「で、お前の力を使うと何か変わるのか？」

『簡単に説明してやる。』

使ったカードのモンスターが実体化する』

有り得ない…… とシンは思ったが、実際にやってみるとソリッド・ヴィジョンにしてはリアルだったし、庭からワイトさんが復活したり、木が燃えたりしたため、止めた。

「こりゃサイコ・デュエリストより便利だ……」

『サイコ・デュエリストは嫌われてるだろ……あんまり使うなよ、その力』

「分かってるって」

日曜日には力を完全に使いこなせるようになった。

翌週からはまたナンバーズの事件に巻き込まれた。

運命（後書き）

やっと此処まで書けた。

とりあえず次回からシンに色々と変化が起きます。

悪夢（シリアスな意味ではありません）（前書き）

シンがかわいそうなキャラになりつつある気が……。

悪夢（シリアスな意味ではありません）

月曜日、休み明けでやる気が出ない1日だ……。だが、シンはいつもと違った……。

「全速前進DA!!」

シンはいつもはだるそうに学校に行くが今日はいつもと違った。

「あれ？シンだよね……？」

その様子を見て後ろから話しかけようとした空が言った。

今日のシンは授業を真面目に受けていた。

（おかしい……）

空がそう思ったのもおかしくは無い。

そんな事はさておき、もう2月の下旬、卒業式が間近に迫っていた。殆どの生徒が進路が決まっていたが、まだ決まっていない生徒も数名いた。

卒業式では卒業デュエルという物があり、卒業式の最後に成績がトップの生徒が後輩を1人指名し、その生徒とデュエルする、このアカデミアの伝統的行事である。

今年の成績トップの生徒……葛原鉄矢は相手を選ぶため、1人で頭を悩ませていた。
すると声が聞こえた。

「こつちから鉄っちゃんの反応が!？」

その声に反応して、逃げなくては!!と彼の本能が伝えていた。鉄矢は慌てて逃げようとするが、何かに後ろから抱きつかれた。

「鉄っちゃん、捕つまゝえた!!」

光だ……。

彼は逃げられない事を悟った……

「誰か……助け……」

彼の声は誰にも届かなかった。

その頃シンは竜騎、空、龍一と一緒に購買に居た。

「今日は普通のたまごパンか……」

竜騎は残念そうに食べた。

「シンは食べないの?」

シンの顔を覗き込むようにして空がシンに聞いた。

「っ!?!空……顔近いって……／＼／」

「えっ!?!顔近い?シンはいつも気にしないのに?」

「いや……だから……本当に近いって／＼」

シンが顔を真っ赤にしながらそんな事を言うので竜騎と龍一は絶句した……シンのこの反応は何だ？……と

「龍一く多分今日は超巨大竜巻が発生するぞ」

「そうだな……天変地異が起こっても、オレは驚かんぞ」

すると購買に姫乃が入ってきた。

2人は姫乃に

「「今日で世界は終わりだ……」」

とか言うので姫乃は

「????」

なんて言えばいいか分からなくなった。

鉄矢はやっと逃げられた……が、昼休みの半分を無駄にしまった。

鉄矢が生徒会室に入ると、アカデミアの四天王の1人、麗子が居た。

「ちょうど良かった。

相談があるんだけど……」

麗子は鉄矢の後ろを指差しながら

「別にいいけど……後ろ」

鉄矢が慌てて振り返ると、そこには光が居た。

「鉄っちゃんには何も言ってくれないにい」

光は頬を膨らませて鉄矢に言う、鉄矢は……

「俺は……どうすれはいいんだ……」

諦め……その後、光にO H A N A S Iされた。
結局昼休みは何もできなかった。

鉄矢は放課後も逃げていた。

何故ならば昼休みのO H A N A S Iの最後に光から「続きは放課後だからね！」なんて言われたからである。

鉄矢は校門の所でブルーとイエローとレッドの生徒と一緒に居るのに気づいた。

（確か……ブルーの奴が龍一でイエローは竜騎、レッドはシンだったな……あいつらはライディングデュエルの大会で優勝してたな……シンはレッドなのに一番活躍してたしな……）
なんて考えていると……

「鉄っちゃん、待ちなさい!!」

小悪魔の声が聞こえてくる。

正直鉄矢にはどこに隠れても逃れられる事はできないと感じていた。

放課後、シンは竜騎と龍一と一緒に竜騎の家に行った。

そして竜騎の部屋に入れられた。

「今日、空は忙しくて帰りが遅くなるらしいな」

「だから？」

「勉強でもするか」

「なんで勉強？」

期末テストは終わっただろ？」

シンが聞いた。

「じゃあシン、お前は中学の時、保健の授業真面目に受けてたか？」

竜騎の質問にシンは

「いや、寝てた……だから何？」

答えたシンに龍一は言った。

「甘いぞ紅！！ならば早速初めようか、性教育を……！！」

「せ、性教育？」

シンはよく分からなかった。

「そうだ！！生き物なら知らねばならん事が……そして次の世代へ続く果てしない未来へのロードが……！！」

「意味不明！！つかお前ら今日、なんかおかしいぞ！！」

シンは逃げようとするが、竜騎に捕まり……

「ちよっ！！お前らっ！？」

シンは椅子に縄で縛り付けられていた。

こいつらがそこまでして俺に教えないといけない事なのか？とシンは考える。

将来を生きていく上で本当に大事な事なのか？

とシンは考えた。

勉強を教えるのに目の前に居る2人は笑っていた……しかも悪魔のような笑いだ……これを見ると自分の中に居る悪魔の方がよっぽど人間らしく見えた。

「さあ、初めようか」

（誰か助けてくれ！！）

シンの心の叫びだった。

しかし、それは届いたが……

『残念ながら俺には無理だ……諦めろ、死にはしないさ』

届いたが、無意味だった。

その後、2人にいろいろと教えられ、1時間後、帰ってきた空に救助された。

2人が空に説教されている内にシンは帰してもらった。

シンにとってあれは悪夢だった……。

悪夢（シリアスな意味ではありません）（後書き）

次回で1年生編は終わりです。

新キャラの名前考えないと……ネーミングセンス無いorz

卒業デュエル スクラップvsレッドアイズ（前書き）

1年目は今回で終わりです。

卒業デュエル スクラップvsレッドアイズ

今日はアカデミアの卒業式の日。
卒業式は体育館で行われていた。
まあ、シンは寝てたが、

『しょうがない奴だ……』

(zzz)

悪魔に任せてた。

そして卒業デュエルの時はやってきた。
卒業生代表の鉄矢がステージに上がり、在校生代表を指名した。

「俺がデュエルするのは、オシリスレッド1年……紅シンだ」
シンは在校生代表に選ばれた。

すると体育館中で批判の声があがる。
それも無理は無い、1年でしかも落ちこぼれのクラスのオシリスレッドの生徒だからである。

『起きろ、デュエルだぞ?』

(ん?デュエルか!?)

シンは起きて、ステージに上がる。

「久しぶりだな」

「鉄矢先輩!？」

「どうした？俺とデュエルしてくれないのか？」

「いや、1度負けてますから、リベンジしたい所だったんですよ」

「そうか、なら始めようか」

相変わらず体育館は騒がしいが気にせず、2人はデュエルを開始した。

「デュエル!!」

「先攻は譲りますよ、先輩」

シンは余裕たっぷりの表情で言った。

「ならば、俺のターン!!」

「俺は召喚僧サモンプリーストを召喚、このカードは召喚された時
守備表示になる」

DEF 1600

「サモンプリーストの効果発動、手札の魔法カードを1枚墓地に送り、デッキからレベル4のモンスターを1体特殊召喚する。
俺はスクラップ・ビーストを特殊召喚!!」

ATK 1600

「レベル4のサモンプリーストにレベル4のスクラップ・ビーストをチューニングー！」

鉄屑より生まれし龍よ、仲間の力で敵を圧殺せよ！！シンクロ召喚！！現れる、スクラップ・ドラゴン」

ATK2800

鉄屑が集まってできた龍が現れた。

「カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「俺は黒竜の雛を召喚」

ATK800

卵が現れ、その殻を破り小さな竜の雛が顔を出した。

「さらに黒竜の雛を墓地に送り、真紅眼の黒竜を特殊召喚する！！現れる、レッドアイズ！！」

ATK2400

殻から雛が飛び出し、大きくなる。

「レッドアイズか」

「はい、全力で行きますよ、先輩！！
手札から融合を発動、手札のレッドアイズとデーモンの召喚を融合

して、ブラック・デーモンズ・ドラゴンを融合召喚する！！」

ATK3200

「バトル！！ブラック・デーモンズでスクラップ・ドラゴンに攻撃！！」

鉄矢

LP4000 3600

「やるな、スクラップ・ドラゴンが相手によって破壊された時、シンクロモンスター以外のスクラップと名のついたモンスターを墓地から特殊召喚する。」

俺はスクラップ・ビーストを特殊召喚」

DEF1300

「ならレッドアイズでスクラップ・ビーストに攻撃！！
ダーク・メガ・フレア！！」

「速攻魔法、スクラップ・スコールを発動、スクラップ・ビーストを選択し、デッキからスクラップ・キマイラを墓地に送り、カードを1枚ドロウする。」

そしてスクラップ・ビーストを破壊、スクラップ・ビーストの効果でスクラップ・キマイラを手札に加える」

鉄屑の雨が降り注ぎ、スクラップ・ビーストは破壊された。

「ならレッドアイズでダイレクトアタック！！」

鉄矢

LP3600 1200

（攻撃が通った！？）
意外だった。

「流石は俺のお気に入り」

「ありがとうございます。先輩」

「お前……なんか変わったな」

鉄矢はシンに違和感があった。

「なんか前みたいに生意気な所も気に入ってたんだが……」
「そうですか……カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「俺は愚かな埋葬を発動して、スクラップ・ソルジャーを墓地に送る。」

スクラップ・キマイラを召喚、効果で墓地からスクラップ・ソルジャーを特殊召喚する！！」

ATK1700

ATK2100

「レベル4のスクラップ・キマイラにレベル5のスクラップ・ソルジャーをチューニング！！」

鉄屑の双頭龍よ、その力で全てを無に変えよ！！シンクロ召喚！！
スクラップ・ツイン・ドラゴン！！」

ATK3000

「カードを伏せて、スクラップ・ツインの効果発動、自分フィールドのカード1枚と、相手フィールドのカード2枚を選択して、自分フィールドのカードは破壊して、相手フィールドのカードは手札に戻す。

俺は自分フィールドから伏せカードとお前のフィールドからレッドアイスとブラック・デーモンズを選択」

「くッ！！」

レッドアイズは手札に戻され、ブラック・デーモンズはエクストラデッキに戻される。

「バトル！！スクラップ・ツインでダイレクトアタック！！」

シン

LP4000 1000

「ターンエンド」

「俺のターン」

「俺はモンスターを伏せてターンエンド」

「俺のターン」

鉄矢は引いたカードを確認した。

（スクラップ・ゴーレムか……）

「バトル！！スクラップ・ツインで伏せモンスターに攻撃！！」

「伏せモンスターはメタモルポット、お互いは手札を全て捨て、5枚ドローする」

2人はデッキからカードを5枚引いた。

メタモルポットが破壊される。

「ならカードを伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「俺は手札から思い出のブランコを発動して、墓地からレッドアイズを特殊召喚する」

ATK2400

「魔法カード、手札抹殺を発動、お互いは手札を全て捨て、捨てた枚数カードをドローする」

「真紅眼の黒竜をリリースして、真紅眼の闇竜を特殊召喚、墓地にドラゴン4体、よって1200アップする」

ATK2400 3600

「さらにリバースカード、魔法反射装甲メタルプラスをレッドアイ

ズに装備、

メタルプラスを装備した真紅眼の闇竜をリリースしてレッドアイズ・
ダークネスメタルドラゴンを特殊召喚！！」

ATK 2800 4400

「よ、4400！？」

（だが伏せカードは収縮、フィールド上の表側表示モンスター1体の攻撃力を半減させるカード、これで返り討ちだ）

「バトル！！レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンでスクラップ・ツイン・ドラゴンを攻撃！！
ダークネス・メタル・フレアア！！」

「伏せカード収縮を発動、レッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの攻撃力を半減させる」

「ならレッドアイズ・ダークネスメタルドラゴンの効果を発動、このカードを対象にする魔法の効果と発動を無効にして破壊する」

「な……」

鉄矢

LP 1200 0

「強くなつたな。

だが、次は負けないからな」

「先輩、俺は次も負けませんよ」

「そうか……」

「そういえば、先輩はこれからどうするんですか？」

「俺はプロリーグに挑戦するよ」

「そうですか、なら俺もそのつもりですから、次はプロで……」

「生き残ってたらだな、でもすぐにまたデュエルできるぞ」

「え？」

「来年にあるバトルシティでまあ会おう」

「バトルシティ？マジで？」

シンはこの世界でもやってるなんて知らなかった。

体育館は静まり返っていた。

卒業生代表が在校生代表……いや、1年のオシリスレッドの生徒に
負けたからだ。

それからしばらく経ち、終業式も終わり、明日から春休みだ。

「春休み終わったら俺達もう2年生かゝどんな可愛い後輩が……」

竜騎は後輩に期待しているようだ。

「甘いぞ！現実にはブスばかりだ……だから竜騎、お前も二次元の世界に……」

龍一の発言に竜騎は呆れて一言

「分かったよ、だからお前はモテないんだな」

「なんだと！？……だがそんな事はどうでもいい、紅はどうした？」

「は？オシリスレッドは終わるの早かったからな……知らね」

その頃シンと空は一緒に帰っていた。

「じゃ、お前そっちだろ」

「シン」

「な、何？」

「えっと、私、シンのことが……いや、なんでも無い／＼」

「そっか」

2人はそのまま帰った。

『シンは鈍感だな』

（え？なんで？）

『もういい』

(なんだよ……)

「疲れた早く寝よ」

『早っ!!まだ昼だぞ』

こうして長いようで短い1年目は終わった。

卒業デュエル スクラップvsレッドアイズ（後書き）

エクストラパック4にスクラップのカードが4種類も確定！？
出せば良かった（じゃあ出せよ！！）。

それより、やはり来たか、XX-セイバーダークソウル
ってかコアキメイルまだ増えるの！？

シン「もう2年生だ、早く終わりそうだな、問題はバトルシティ
か……」

竜騎「面倒くさそうだな」

シン「どんな後輩くるか楽しみだな」

竜騎「ああ！！」

新たな始まり（前書き）

遅くなってすいませんm（| |）m
内容が思い浮かばなかったなので遅くなりました。

新たな始まり

春休みはあっという間に終わり、2年目が始まった。

竜騎と空とシンは一緒にアカデミアに向かっていった。

「シン……お前寝癖ついてるぞ」

「そうか？どくでもいいや」

シンは自分の黒い髪を触りながら言った。

「竜騎、お前いつからブルーになってんだ？」

竜騎はブルーの制服になっていた。

「今日から。」

お前はなんでまだレッドなんだ？」

「そういえば、いきなりブルーに昇格とか言われたけど断った」

「なんて奴だ……」

「でも俺はレッドの方が似合うだろ？」

「悪かった。」

お前がブルーとか考えられないな」

「だろ？」

竜騎は納得したようだ。

「シン……なんで昇格断ったの？
シンも昇格したと思ったのに……」

「空！？」

空はイエローの制服を着ていた。

「あのな、鉄矢先輩を倒した俺がイエローなんて中途半端な所に昇格すると思ったのか？」

「そうだった！？」

「ブルーに昇格の話来たけど断った」

「はぁ……」

空は溜め息をついた。

あの時、シンに自分の気持ちを伝えなかった事を後悔していた。

「じゃあな」

シンは最近違和感を感じていた。

（なあ）

『ん？』

シンは自分の中に居る、悪魔に聞いた。

（俺さ、この世界に来てからさ、自分が自分じゃないような感じがしてただけど、もちろんお前と超融合する前から）

悪魔は少し考えてから答えた。

『多分、世界の慣れだと思う。平面世界は無限に存在すると考えられているから、その世界によって、歴史が微妙に変わっていたり、人々の考え方が違ったりするからな。』

別世界に行くと、慣れるにつれ、その世界の考え方になるんだ。ただ、違和感を感じる事は無い筈なんだが……』

（大体分かった）

数日後、新入生にデュエルを挑まれた。
イエローの制服を着た生徒だ。

「先輩、俺とデュエルをしてください！！」

「別にいいけど、名前は？」

「流也、ライイエロー1年、光道流也です」

「こつどう？って読むの？珍しいね」

「はい、兄を倒した紅先輩とデュエルしてみたかったです」

「兄？」

「ライディングデュエルの時に先輩が倒した、星也の弟です」

「星也の弟！？まあいいや、始めよう」

「はい！！」

2人はデュエルディスクにデッキをセットして、自動シャッフルされてからカードを5枚引いた。

「デュエル！！」

「先攻は貰いますよ、先輩！俺のターン！！」

「俺はスターライト・シンクロンを召喚！！」

ATK500

「スターライト・シンクロンはシンクロ召喚する時、他の素材を1体まで手札から選ぶ事ができます。」

俺は手札のレベル5のスターライト・ワイバーンにレベル3のスターライト・シンクロンをチューニング！！

星の光が集まる時、新たな力が目覚める、光よ導け！！シンクロ召喚！！

輝け！！スターライト・ドラゴン！！」

スターダストのような美しい龍が現れた。

ATK2500

（見た事無いモンスターなんだが……）

『悪い、俺も……』

「カードを伏せてターンエンドです!!」

「俺のターン」

（ならこつちも全力で行かせてもらっ）

「俺は黒竜の雛を召喚して墓地に送り、真紅眼の黒竜を特殊召喚する!!」

ATK2400

「さらに真紅眼の黒竜が特殊召喚された事により、手札からレッドアイズ・シンクロンを特殊召喚。

レベル7の真紅眼の黒竜にレベル1のレッドアイズ・シンクロンをチューニング!!

闇と光が交わる時、希望の力が白き炎を宿す。シンクロ召喚!!現れる、真紅眼の伝説竜!!」

ATK2500

白い炎を身に纏ったレッドアイズが現れる。

「レッドアイズ・レジェンド・ドラゴンの効果発動、墓地のドラゴン族モンスター、黒竜の雛を除外して、相手モンスター1体を墓地に送る」

「スターライト・ドラゴンの効果発動、相手モンスターの効果が発

動した時、このカードをリリースして、効果の発動を無効にし、破壊する。リリースしたこのカードはエンドフェイズに特殊召喚される」

スターライト・ドラゴンはレジェンド・ドラゴンを翼で包み込み、どこかへ引きずり込んだ。

「マジで？状況悪化！？」

『どうやら』

「ならカードを2枚伏せてターンエンド」

光が集まり、スターライト・ドラゴンが現れる。

「俺のターン！！」

「俺はスターライト・シンクロンを召喚」

ATK500

「手札のレベル2、ボルト・ヘッジホッグにレベル3、スターライト・シンクロンをチューニング！！」

集まる光が無限の力を呼び覚ます。

光よ導け！！シンクロ召喚！！

スターライト・ウォリアー！！」

ATK2200

「このカードは自分フィールド上のこのカード以外のモンスター1

体につき攻撃力が300ポイントアップします」

ATK2200 2500

「バトル！！2体でダイレクトアタック！！」

「くっ！！リビングデッドの呼び声を発動して、レジェンド・ドラゴンを特殊召喚」

ATK2500

「なッ！？攻撃を中止してターンエンドです」

「俺のターン」

「さて、反撃開始だ」

「ッ！？」

「俺は手札から死者蘇生を発動して、真紅眼の黒竜を特殊召喚する」

ATK2400

「俺は真紅眼の悪魔を召喚、効果でデッキからレッドアイズと名のついたモンスターを2体特殊召喚する」

「なら、スターライト・ドラゴンをリリースして無効にする！！」

スターライト・ウォリアー

ATK2500 2200

「しまった!？」

「俺は最初からスターライト・ドラゴンを倒す気なんて無かったんだよ!

レジェンド・ドラゴンでスターライト・ウォリアーを攻撃!！」

流也

LP 4000 3700

「レッドアイズでダイレクトアタック!!
ダーク・メガ・フレア!！」

流也

LP 3700 1300

「ターンエンド」

「なら、スターライト・ドラゴンはエンドフェイズに特殊召喚される」

「カウンターラップ、王者の看破を発動、レベル7以上の通常モンスターが表側表示で存在する場合、魔法・罫の発動、モンスターの召喚、反転召喚、特殊召喚のどれか1つを無効にし破壊する」

集まる光はかき消され、スターライト・ドラゴンの特殊召喚は無効化された。

「そんな!？」

「どうした?お前のターンだぞ」

「俺のターン!!」

「俺はカードを伏せてターンエンドです」

（大丈夫だ、伏せカードはミラーフォースだから）

「俺のターン」

「俺は手札から黒炎弾を発動、相手ライフに真紅眼の黒竜の元々の攻撃力分のダメージを与える」

「そんな……」

流也

LP 1300 0

「やっぱり強いですね」

「そうか？まあいいや、俺帰る」

「待ってください、一緒に帰りましょう」

「別にいいけど」

とある公園、そこに1人の少女とうさぎ(?)が居た。
少女はブルーの制服を着ていて、幼い顔立ちに黒髪緑眼だった。

「ニンジン美味しい？バニーラ」

バニーラは必死にニンジンを食べている。

「バニーラ？」

バニーラはまだニンジンに夢中だ。

その光景をシンと流也は見ていた。

「なんじゃありゃ？」

シンが言うと流也が

「分かりません。

でもあの子可愛い！！」

「そっちかい！！」

シンはツッコみつつ、悪魔と会話した。

（なんだ？カードの精霊だよな？実体化してるぞ）

『精霊の瞳の保持者はお前だけじゃ無いしな』

（マジで！？）

「流也、行くぞ」

2人はそのまま帰った。

新たな始まり（後書き）

とりあえずオリカを1枚紹介します。

スターライト・ドラゴン

光属性

ドラゴン族

レベル8

ATK2500 DEF2000

チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

このカードはスターダスト・ドラゴンとしても扱う。

相手モンスターのモンスター効果が発動した時、このカードをリリースする事でその発動を無効にし破壊する。

この効果を適用したターンのエンドフェイズ時、この効果を発動するためリリースされ墓地に存在するこのカードを、自分フィールド上に特殊召喚する事ができる。

遊の名を持つデュエリスト

「面倒な事になった!!」

シンは竜騎に言った。

「突然どうした!？」

シンがあまりに慌てていたので竜騎はびっくりした。

「俺のファンクラブ的な何かが出来た!？」

「良かったじゃん。」

まあ、あんなだけ目立ってれば普通だろ」

「良くないわ!!もう学校に来たくない……」

「落ち着け!!とりあえず、顔面崩壊か死亡のどちらかを選べ」

「そんな事したらお前が何されるか……ってなんでそんな物があるんだよ!？」

竜騎はどこから取り出したチェーンソーを手に持っていた。

「そうだった。ファンクラブがあるって事はシンに危害を加えたら俺が……」

「そついう問題!？」

てか、オシリスレッドに居れば、そんなのできないと思ってた」

「ゴメン、俺がブルーの昇格断った事をみんなに言いふらした」

「竜騎、てめえ!!」

「やるのか？こつちには『これ』があるんだぜ」

竜騎はチェーンソーを見せて言った。

「この卑怯者！」

「聞こえないな」

「げ！？もう昼休み終わる!!」

「なら教室に戻る」

「お前、チェーンソーどうするんだよ？
え？」

竜騎はチェーンソーを解体し始めた。

「こんなの2分あれば解体できるからな」

「……お前来る学校間違ってね？」

「そうか？」

竜騎はあっさりと解体して、鞆に入れようとするが……。

「入らねー、デュエルディスクも解体するか……ってどれがどのパーツが分からなくなるな」

「って、その選択肢普通出てこないぞ!!」

仕方なく竜騎はデュエルディスクを腕に装着して、教室に戻る事にした。

そして廊下の角でシンは……

「だからさ……ってうわっ!？」

「きゃっ!？」

早速女の子とぶつかった。

女の子の方は尻餅をついてしまった。

「おっ!?!早速フラ……ぐぼあ!!」

シンはうざかったから竜騎に一撃くらわせてから、女の子に手を差し伸べて言った。

「ごめん、大丈夫だった?」

すると、1人の女の子と一緒に歩いてたオシリスレッドの男子生徒が前に出てきて言った。

「おい、アンタ!!ユキに何すんだよ!!」

すると女の子が

「こら、ユウ!!前見てなかった私が悪いんだから、すいません。

ユウは私の事になるといつもこうなんです」

「こっちも前見てなかったし、お互い様って事で……」

「そんな事で納得できるか！！アンタ、俺とデュエルしろ！！」

「ユ、ユウ」

（なんか第3者に何か言われるはなあ、
竜騎を倒さなけりゃ良かった）

「分かった」

「今日の放課後、待ってるからな！！逃げんなよ！！
ユキ、行こう」

「す、すいませんでした」

2人は去って行った……
そしてシンは思った。

（あれ？どこに行けばいいんだ？）

『自分で探せよ……』

（面倒くさいよ）

『はあ……』

とりあえずシンは倒れてる竜騎を起こす事にした。

「竜騎、起きろ」

すると竜騎は

「シン……俺はもうダメだ死ぬ……最期に聞いてくれ」

「竜騎！死ぬとか言うな！！」

「あんな対応じゃ……ファンが……増えるだけだぞ……ぐはっ」

「竜騎、竜騎イイイイイ！！」

そして竜騎は永遠の眠りについて……はいなかった。

シンは

「って何させてんだよ！！最後わざとらしかったぞ、起きろ！！」

「ちよっ、やめっ！！」

竜騎をたたき起こした。

「痛いって」

「悪かったな」

放課後、シンは場所を聞いていなかったの、わざわざ探す羽目になった。

「お前……場所くらい言えよ」

「げ、忘れてた……まあ、いいや」

「やめなよ、ユウが先輩に勝てる訳無いよ」

「ユキは黙ってる!!」

「早くしてくれ!!」

「そっいえば、名前聞いてなかったな」

「俺は工藤遊徒、アンタは？」

「紅シン、じゃあ始めるか」

「「デュエル!!」」

「先攻はアンタに譲ってやるよ」

「なら、俺のターン」

「俺は黒竜の雛を召喚」

ATK800

すると、遊徒は

「随分とかわいいモンスターを召喚しますね先輩、舐めてるんですか？」

（ム力つく……）

『落ち着け!!』

「煩い、俺は黒竜の雛を墓地に送り、真紅眼の黒竜を特殊召喚」

ATK2400

「なんだ、見かけ倒しのレッドアイズか……」

「うぜえ、カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー!!」

「俺はモンスターを伏せて、永続魔法、進化の宿命を発動、カードを2枚伏せてターンエンド」

（何?あれ?）

『知らないのか……後で教える』

（教えてくれないのかよ……）

「俺のターン」

「俺は真紅眼の飛竜を召喚」

ATK1800

「バトル、レッドアイズで伏せモンスターを攻撃!!
ダーク・メガ・フレア!!」

「なら伏せモンスターのエヴォルド・ヴェストロのリバース効果で、エヴォルダー・ケラトをデッキから特殊召喚」

ATK1900

(エヴォル？)

『今頃気づいたのか？あれは厄介だぞ……』

「エヴォルダー・ケラトの効果発動、エヴォルドと名のついたモンスターの効果によって特殊召喚に成功した時、攻撃力が200アップする!!」

ATK1900 2100

「じゃあ、カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロ―!!」

「俺は手札抹殺を発動」

「ありがとう、事故ってたから」

「残念ながらこのターンでアンタは終わりだ!!」

(えゝ?)

『下手したら本当に終わるぞ』

(マジかよ)

「俺はエヴォルド・オドケリスを召喚」

ATK500

「オドケリスの効果で、手札からエヴォルダー・ウルカノドン等特殊召喚」

ATK1200

「ウルカノドンの効果で、墓地からエヴォルダー・ディプロドクスを特殊召喚、効果で右の伏せカードを破壊」

ATK1600

（確かにヤバそうだ）

「ウルカノドンとディプロドクスをオーバーレイ！！
2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！！」

現れる！！エヴォルガイザー・ラギア！！」

ATK2400

（なんかヤバそうなのが）

『大丈夫だ、何か発動されない限り、レッドアイズは超えられない』
「バトル！！エヴォルガイザー・ラギアでレッドアイズに攻撃！！」

『相打ち狙いか！？』

「俺はメタル化魔法反射装甲を発動」

「エヴォルガイザー・ラギアのエクシーズ素材を2つ取り除いて、無効にして破壊する」

（こりゃ、ヤバそうだ）

レッドアイズとラギアが相討ちする。

「エヴォルダー・ケラトでワイバーンを攻撃!!」

シン

LP 4000 3700

「ユキ、見たか!？」

先にダメージを与えたぜ!!

エヴォルド・オドケリスでダイレクトアタック!!」

シン

LP 3700 3200

「ターンエンドだ!!」

「俺のターン」

「俺は思い出のブランクを発動して、レッドアイズを特殊召喚し、レッドアイズをリリースして、真紅眼の闇竜を特殊召喚する」

ATK 2400 3300

「そんな……3300……?」

「俺はエヴォルド・オドケリスを召喚、効果でウルカノドン等特殊召喚、

効果でディプロドクスを特殊召喚、効果で伏せカードを破壊」

ATK500

ATK1200

ATK1600

（懲りませんな）

『つか、さつきと一緒にだ……』

「俺はケラトとウルカノドンとディプロドクスをオーバーレイ！！
3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシー
ズ召喚！！」

（レベル4を3体、3体？レベル4を？）

「現れる！！ヴァイロン・ディシグマ！！」

突然現れたヴァイロンにシンと悪魔は顔を見合わせた。

（『こりゃ予想外だ！！』）

「ディシグマの効果で、レッドアイズ・ダークネス・ドラゴンを吸収する」

「げ」

「バトル!! デイシグマでレッドアイズに攻撃!!」

戦闘を行う時、効果で吸収したカードと同じ、閥属性のカードをダメージ計算を行わず破壊する」

レッドアイズが破壊される。

(戦闘ダメージ受けなかったぞ、良かった)

「なら、レッドアイズ・スピリッツを発動して、レッドアイズを特殊召喚」

ATK2400

「ならカードを伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「手札から、黒炎弾を発動、2400ダメージ与える」

「な……くそッ!!」

遊徒

LP12000

「お前さ、ラギアを相討ちに使うとかおかしいぞ、普通攻撃力上げるだろ……破天荒な風とか使ってみるよ」

「煩い、アンタの言う事なんか聞か!!」

(うわぁ、なんかこいつムカつく)

『シン、落ち着け!!』

「じゃあ、帰るから」

「あの、ユウが……すいませんでした」

(なんか色々と面倒くせー)

シンは無視して帰った。

(疲れた、なんかデュエルでストレス溜まったの初めてだ)

『俺が出とけば良かった気がしたよ』

(じゃ、家までよろしく、

そしてお休み)

『ちよつと待て』

(zzz)

『はぁ……』

そして、翌日

「先輩、遊徒を倒したらしいッスね」

「流也、あいつ強いのか？」

「強いッスよ、俺負けましたから」

「お前弱っ！！」

「エヴォルガイザー・ラギアが強いッスね。

スターライト・ドラゴンの召喚を無効にされて、とどめでしたから」

（相打ちしてこなかったら、閻魔の召喚を無効されて負けてたかも……）

『合計攻撃力5100、負けだな』

（負けてたな……）

「あいつ、ただの馬鹿だろ、相打ちとかしてくるし」

あんなのに負けてたら今頃どうなっていたらろうか、とシンは考えたが、やめた。

遊の名を持つデュエリスト（後書き）

遊徒はもつと主人公っぽいキャラにしたかったのになあ、
どこで間違えたんだろう。

エヴォルは使ってみただけです。
最後、遊徒にレスキューラビットを使わせよう思ったのですがやめました。

精霊の瞳を持つ少女

「やりましたよ先輩!!」

流也が嬉しそうに言った。

「煩い！」

で？何かあったのか？」

「遂にあの子の名前が分かりました。
シナって名前ですよ!!」

「へえ変わった名前だな、そんじゃ」

シンは興味なさそうに歩きだした。

「待ってくださいよ、
名字聞き忘れたんで聞いて来てください」

「なんで俺が聞かなきゃいけないんだよ、
自分で聞いて来い!!」

……ほら、本人があそこに居るから」

『噂をすればやってくるってのは本当みたいだな』

（そうだな……）

廊下の向こうの方からシナは歩いて来ていた。

「あわわ、なんて話しかけよう」

慌てている流也にシンは言った。

「普通に話しかける、さあ行け。

俺はお前が玉砕しようが知った事じゃ無いしな」

「酷い!!」

すると、シナは何かに気づいたのか、走って来た。

「こっち来たぞ、ほら運命の出会いだ、正面衝突させてやろうか？」

「遠慮しますよ!」

『シン、ひかかえせ』

(なんでだよ、お前最近おかしいぞ、右に行けとか、左に曲がれとか……)

シナはシンの前に来て言った。

「シン兄ちゃん、久しぶり」

「え?」

「ちよっ!先輩!!妹なんて聞いてませんよ」

「違う!!」

妹じゃ無い……はずだ」

（どゆこと！？）

『シナは、お前の従妹だ……』

悪魔は怯えているように言った。

（お前、何びびってんだよ）

『お前はシナの恐ろしさを知らないからな……』

どうやらトラウマのようだ。

「先輩、どういう関係なんすか？」

「従妹……」

「そんな事より、シン兄ちゃん！！
デュエルしよ！！」

『シン、やめろー！！』

勝てる訳が無い、逃げろ』

（大丈夫だって、死にはしないさ普通に）

「先輩……従妹だった聞いて無いっスよ」

「お前はD A M A R E！！」

とりあえずデュエル場に行った。

「デュエル」

『もうお終いだ……』

「俺のターン」

「俺は古のルールを発動、真紅眼の黒竜を特殊召喚」

ATK2400

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「私のターン」

「私はバニーラを召喚」

ATK150

「なんか可愛いうさぎが……攻撃力たったの150？バニーラモンスターだし」

『守備力を確認してみろ』

（2050？なんで伏せなかったんだ？）

「私はワンショット・ブースターを特殊召喚」

DEF0

「さらに地獄の暴走召喚を発動、ワンショット・ブースターを2体特殊召喚。」

シン兄ちゃんもレッドアイズを特殊召喚しても良いよ」

（自爆特攻？まあ伏せカードはどっちも蘇生カードだし）

『違うだろ……てか負けフラグ立てんな』

「とりあえずレッドアイズを2体特殊召喚」

「ならワンショット・ブースター3体をオーバーレイ、3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！」

（素材が3体……どんな強力なモンスターが……）

「現れて、ベビー・トラゴン」

ATK900

「エ？」

「そして、さらに地獄の暴走召喚を発動、バニラを2体特殊召喚！そして、真ん中のバニラちゃんに団結の力を2枚装備」

ATK150 6550

「なんか……無理やりだな」

『大丈夫だ、前のシンなんか、グランエルにシンクロを吸収されて、
グラント・スローター・キャノンでぶっ飛ばされたからな』

「ベビー・トラゴンの素材を取り除いて、攻撃力を上げたバニーラ
ちゃんてダイレクト アタック！」

（普通にレッドアイズを攻撃しても終わってね？）

ベビー・トラゴンの上にバニーラが乗り、レッドアイズ達をスルー
してバニーラがシンの後ろに回り込んだ。

（『実体化してる……だと！？』）

直撃を受ける前に2人は気づいたが、時すでに遅く、
シンは後頭部にリアルダイレクトアタックを喰らった。

シン

LP40000

意識が遠くなる……。

（うう………？）

シンはそのまま地面に倒れた。

シンが目を覚ましす、保健室ベッドだった。

(うう……)

『痛かったな……』

(どれくらい寝てた?)

『俺も気絶してたから分らない……でも、昼休みは終わってるな』

(マジか……学校で気絶とか先生になんて説明すれば……まあいいや、寝よ)

シンはそのまま寝て、午後の授業をサボった。

「パパ、シン兄ちゃんに会ったよ!」

家に帰ったシナが父親に言うと、父親はシナにカードを渡して言った。

父親の名は紅聡こうさう、弟の紅徹こうとつと共に、有名なプロデュエリストだ。

「そうか、それとこれ渡しとくからな」

シナはカードを受け取ると、嬉しそうに言った。

「パパ！ありがとう……機皇帝グランエル？
これ持つてるよ」「ああ、これはパーツだからな」
聡はさらにカードを渡す。

「グランエルT、A、G、C？それにグランド・コア？」

「そうだ」

すると、奥の部屋から30代くらいの外国人っぽい女性が出てきた。

「あら、シナおかえり」

「ただいま、ジェシカさん。
あれ？マナブさんは？」

「マナブならまだ帰ってないわ」

「そうですか」

ちなみにジェシカとマナブは居候である。
がしかし、2人もプロデュエリストだ。

「みんな、バトルシティが終わると、また行っちゃうんですね……」
シナが寂しそうに言う。

「心配するな、母さんが居るだろ」

その頃、シンは帰っていた。

（まさかバニーラにやられるとは……）

『あのチートドロー娘め……』

（そういえばお前、シナとデュエルした事あるの？）

『無いが、前のシンがグランエルで……』

（OCG効果じゃライフ削られてなくても攻撃力2000しかないか？）

『シンクロを吸収されたからな……ワンキルだった』

（マジか……）

シンは家に着く、入ると、40代くらいの男が居た。

（誰……？）

『紅徹……お前の父親だ』

精霊の瞳を持つ少女（後書き）

シン「機皇帝グランエル だと!?!」

悪魔「H A H A H A H A H A ! ! 如何なるモンスターもグランエルの敵ではないわあ! ! !」

シン「スキルドレイン! ! !」

悪魔「やめろおおおおお! ! !」

流也「何やってるんですか……」

機皇帝？何それうまいの？

「父……さん？」

「久しぶりだな、シン……おっとお前は初めてだったな……」

なんで知ってるんだ……とシン思った。

「ごめんな……俺は何もしてやれない……」

（こういう場合は、なんて言えば……）

『俺のせいだけだな……』

（気にすんな）

「父さん……気にする事は無いよ、俺が全部終わらせたから……」

とか言ってみるが……

「何を、終わらせたんだ……？」

（てか、なんだこの重苦しい空気は！？）

『すまない……俺なんかが存在したからだ……生まれてきてゴメン
ナサイ……』

（喋りづらい……）

翌日、シンは逃げるように家を出た。

「すつげえ喋りづらい……」

『生まれてきてゴメンナサイ生まれてきてゴメンナサイ生まれてきてゴメンナサイ生まれてきてゴメンナサイ』

（落ち着け！！）

「はぁ……」

シンはため息をついた。

ぼーっとしてたらすぐに放課後になった。

足取りは重く、帰る気になれなかった。

（どうしよう……）

「あのーすいません」

メガネを掛けた男に話しかけられた。

「はい？」

「アカデミアの生徒ですよね？」

良かったらデュエルしませんか？」

「良いけど……」

2人は近くの公園に行った。

「準備はいいですか？」

「いいですけど……」

「デュエル！」「」

すると一瞬下が の形に光った気がした。

（今何か光らなかったか？）

『俺の力を使つて解析してみろ』

（お前の力？モンスターが実体化するくらいじゃなかったのか？）

シンの質問に悪魔は

『残念だったな、モンスターの実体化だけじゃなく、異能の力を解析、異世界移動能力などがあるのだ！！
便利だろー』

と自慢げに答えた。

（いらんだろそれ……）

『ちなみに異世界移動はどこに行くか分からない』

（さらにいらねー。

ま、いいか）

シンは右目が紅くなり、オッドアイになる。

『解析完了、ダメージ体感システムっぽいけど、リアルダメージ量がハンパないな……』

(とりあえず危険という事だな)

『だな、行くぞ相棒』

「俺のターン」

「俺は真紅眼の竜兵を召喚」

ATK1200

真紅の瞳に槍を構えた竜が現れた。

「真紅眼の竜兵の効果発動、手札からレベル3以下のモンスターを特殊召喚する事ができる。

俺はグローアップ・バルブを特殊召喚」

ATK100

「レベル3の真紅眼の竜兵にレベル1のグローアップ・バルブをチューニング!!」

魔眼の弓士よ、その矢で敵を射抜け!

シンクロ召喚!! レッドアイズ・アーチャー」

ATK2000

「カードを伏せて、ターンエンド」

「僕のターンです」

「僕はワイズ・コアを召喚します」

「『ワイズ・コア!?!』」

「カードを3枚伏せてターンエンドをします」

(どうする……?)

『伏せカードは当然破壊効果だろう、それもワイズ・コアを巻き込める効果の』

(うう……考えてもしょうがない)

「俺のターン」

「俺は古のルールを発動して、真紅眼の黒竜を特殊召喚する!!」

「バトル!!レッドアイズでワイズ・コアを攻撃、ダーク・メガ・フレア!!」

「罠カード、ツイン・ボルテックスを発動しますよ。
ワイズ・コアと真紅眼の黒竜を破壊します」

「げ!?!」

『拙いな……』

ワイズ・コアとレッドアイズが雷で破壊される。

「ワイズ・コアの効果が発動します。

このカードがカード効果によって破壊された時、自分フィールド上のモンスターを全て破壊して、自分の手札、デッキ、墓地から機皇帝ワイゼル、ワイゼルT、ワイゼルA、ワイゼルG、ワイゼルCを特殊召喚します。

合体して下さい、機皇帝ワイゼル!!」

ATK2500

『やはりな……』

(かつこいい……)

『おい!!』

「仕方がないな、レッドアイズ・アーチャーの効果発動、相手にダイレクトアタックができる。

ただし、受けるダメージは半分になる」

レッドアイズ・アーチャーが弓を引き、射る。

「ワイゼルGの効果発動、攻撃対象をこのカードに移し替える」

ワイゼルが矢を右腕で防ぎ、右腕は破壊された。

DEF1800 600

(やっぱり、厄介だ)

「カードを伏せてターンエンド」

「僕のターンですよ」

「僕はワイゼルGを召喚します」

ATK2500 2500

（攻撃表示だから、助かったな……）

「罾カードを発動します、ワイズG3、自分フィールドのワイゼルGを墓地に送り、手札からワイゼルG3を特殊召喚します」

ATKDEF600 2600

（拙い、強くなった）

「さらに罾カードワイズA3を発動します。

ワイゼルAを墓地に送り、ワイゼルA3を特殊召喚します」

ATK2500 2900

「機皇帝ワイゼルの攻撃で、シンクロモンスターのレッドアイズ・アーチャーを吸収させてもらいます」

ワイゼルの胸から触手のような何かが出てきて、レッドアイズ・アーチャーを捕まえて引きずり込んだ。

「ワイゼルの攻撃力は吸収したシンクロモンスターの攻撃力分アップします」

ATK 2900 4900

「バトルです。」

ワイゼルでダイレクトアタックします!!」

『伏せカードを発動しろ!!』

「分かってるよ、速攻魔法サイクロンを発動！
装備されたレッドアイズ・アーチャーを破壊する!!」

ATK 4900 2900

シンLP 4000 1100

「くッ!？」

リアルダメージがシンを襲う。

『大丈夫か!？』

(ああ……別に、怪我とかはしてないから)

「カードを伏せてターンエンドをします」

「俺のターン」

「俺は真紅眼の悪魔を召喚、効果でデッキから、レッドアイズ・シンクロンと真紅眼の黒竜を特殊召喚する。
ワンショット・ブースターを特殊召喚、さらにデッキトップを墓地に送り、グローアップ・バルブを特殊召喚、

レベル1のワンショット・ブースターにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング!!

シンクロ召喚!!フォーミュラ・シンクロン!!
効果で1枚ドロ。

レベル7の真紅眼の黒竜にレベル1のレッドアイズ・シンクロンをチューニング!!

シンクロ召喚!!スターダスト・ドラゴン!!

DEF 1500

ATK 2500

「まさか……?」

「クリアマインド!!」

「レベル8、シンクロモンスター、スターダスト・ドラゴンにレベル2、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロンをチューニング!!」

集いし夢の結晶が、新たな進化の扉を開く」

「アクセルシンクロオオオオ!!」

生来せよ、チューニング・スター・ドラゴン」

ATK 3300

「シューティング・スター・ドラゴンの効果発動、デッキの上から5枚確認し、その中のチューナーの数だけ、このターン攻撃できる」

シンはデッキの上からカードを5枚引き、確認した。

「俺が引いたカードのチューナーは3枚、よって3回攻撃できる。
行け、シューティング・スター・ドラゴン!!! スターダスト・ミラ
ージュ!!!」

シューティング・スターが3体に分身した。

「1回目のバトル、機皇帝ワイゼル を攻撃!!!」

「ワイゼルG3の効果で攻撃対象をこのカードに移し替える。
このカードは1ターンに1度の戦闘では破壊されません」

ワイゼルの右腕が攻撃を防ぎ、シューティング・スターの分身は消える。

「2回目のバトル、ワイゼル を攻撃」

ワイゼルはシューティング・スターの攻撃で破壊された。

マナブ

LP 4000 3600

「機皇帝ワイゼル が破壊された時、お前のモンスターは全て破壊
される」

機皇帝のパーツも破壊される。

「3回目のバトル、相手プレイヤーにダイレクトアタック」

マナブ

LP3600 300

「永続罫、リビングデッドの呼び声を発動して、レッドアイズを特殊召喚する!!」

ATK2400

「レッドアイズでダイレクトアタック!!
ダーク・メガ・フレア!!」

マナブ

LP3000

「ふう……」

『とりあえず勝ったな……』

（1回しか攻撃できなかったら、ヤバかったな。
シューティング・スターが吸収されるとか、シャレならん）

シンはそのまま家に帰って行った。

「マナブに機皇帝は無理だったか……流石のマナブにも、使いにくかったか」

聡はマナブのワイゼルを回収した。

「マナブ、起きろ」

「あ、聡さん……すみません。
負けちゃいました」

「いつも使ってるデッキと全然違うんだ。
仕方ないだろ、さあ帰るぞ」

「はい……」

シンは自分の部屋に居た。

（機皇帝まで出てきたぞ）

『アクセルシンクロじゃ勝てないかもな……』

（もうエクシーズをメインにデッキを作るか？）

『ん〜、そうするか？』

すると、別の声が聞こえてきた。

『待つのだ、我の力を使え』

「この声はスターダスト!!」

『そうだ……少し精霊界に来い……』

「はぁ……面倒だからエクシーズで機皇帝に立ち向かいたかったの
に……ディシグマで機皇帝を吸収したりさ……」

『いいから来るのだ』

精霊界に行く事になった。

機皇帝？何それうまいの？（後書き）

シン「後書き？何それうまいの？」

流也「終わらせた！？」

あっという間に過ぎる時間（前書き）

2話連続……と言いますが、超短いです。
すいませんm（　　）m

あっという間に過ぎる時間

精霊界に連れてこられた。

「で、何か用？」

シンはスターダストに聞いた。

『ああ、お主のアクセルシンクロモンスターじゃ、機皇帝に吸収されてしまうからな』

そう言つて、スターダストにカードを渡された。

「シューティング・スター・ドラゴンのオリジナル？」

『ああ、メインフェイズにも除外して、相手モンスター1体の攻撃を封じれる。』

あと、白紙のカードもミラーージュ・デスティニー・ドラゴンにして
おこつ』

「えー、いろんなシンクロモンスターになるから、そのままの方が
……」

『バトルシティでは、1度参加者のデッキを確認するから……白
紙のカードじゃ、使用できない可能性がある』

「ならしょうがないな……」

白紙のカードはミラーージュ・デスティニー・ドラゴンになった。

「ついでに融合とエクシーズの白紙のカードも何かにしてくれ」

『いいが……それに、赤き龍の力も渡そう』

セイヴァードラゴンともう1枚、シンクロモンスターを貰い、融合とエクシーズのカードも固定化してもらい、帰った。

気がついたら夏休みになっていて、

シンは父親とも普通に話すようになっていた。
セミの鳴き声が煩い。

「あゝ暇だああああ！」

とシンが言つと、隣に居た竜騎が言った。

「お前、宿題とかあるだろ……」

「俺は思つんだ、宿題やつてる時間こそが暇な時間なんだと」
「そんな事言つてると、また終わらないぞ」

「お前が邪魔さえしなければ、終わるんだよ」

「だが、今回はまだしてないぜ」

「知るか!?!」

毎回宿題をするのを竜騎に邪魔されているシンだった。

「で、竜騎、お前はどれくらい宿題は終わってんだ？」

「3分の2くらいだったか？」

「早ッ！？お前、夏休み始まってまだ一週間と少ししか経ってないぞ！？」

家に帰ると、シンは早速宿題を始める。

(zzz)

『俺に任せやがって……』

まあ人任せだが。

『最近テスト、いや授業まで俺に任せやがる……まあいいけど』

一週間後

「竜騎、俺はもう宿題終わったぞ」

「なん……だと！？シンがこんなに早く、俺の嫌がらせが始まる前に終わらせただと！？
予想外だぜ！」

『まあ頑張ったのは俺なんだがな……』

(やった、今回は竜騎の嫌がらせにあわずに済む。
サンキュー)

『ああ……』

時間はあっという間に過ぎていった。

かき氷の食べ過ぎで腹壊したり、海に行って溺れかけたりしている内に夏休みは終わった。

二学期は体育祭の徒競走でビリになったり、文化祭はずっと逃げてたり（いろんな意味で）してたら終わった。

そして今日は12月24日、クリスマスイブだった……。

あつという間に過ぎる時間（後書き）

バトルシティが長くなりそうだから、一気に飛ばしました。
と言っても、間に入れる話が思いつかなかっただけですけど。

モバゲーでバニーラを愛する会ってのがあったから入った。
バニーラ可愛いよ。

シン「何故クリスマスイブで止めた!？」

流也「クリスマスと言えばあれですよね。
大事なイベントが……」

シン「まさかサンタクロース!？」

流也「え？」

シン「え？」

クリスマス・イブ（前書き）

今思うと、無理なジャンルに手をだしてしまったなあと思います。

クリスマス・イブ

12月24日クリスマスイブ、この日シンは慌てて走っていた。
7時に空と約束をしていたのだ、腕時計の針はすでに7時を通り過ぎていた。

（ヤバいな……）

『馬鹿、女性との約束は30分前には行かないといけないんだぞ』

（聞いた事ねえよ）

まあシンなら仕方ないが、

『とりあえず急げ、あと今日は寝るよ』

悪魔……いや、シンのもう1つの人格は眠りについた。

（寝るの早いな……まあいいや、先を急ぐか）

一方、空はシンと待ち合わせをしていた場所、そこは大きな広場になっていて、広場の中心には巨大なクリスマスツリーがある場所。たくさんのカップルが待ち合わせ場所にしていた。空は他のカップルを眺めながら

「シン、遅いな……」

と他人に聞こえないほど小さな声でつぶやいた。

シンはしばらくして待ち合わせ場所に着いた。20分ほど遅れていた。

空は白いコートにミニスカで口まで隠れてしまいそうなマフラーを首に巻き、珍しくポニーテールにしていた。
対するシンは黒いコートを着ていて、黒髪は夜だというのに、まだ寝癖がついていた。

「ごめん、遅れた……」

シンが言つと、空は

「もう、遅い」

と頬を膨らませながら言つた。
シンはごまかそうと

「その服、似合ってるね」

と笑顔で言つた。

すると、空は顔を真っ赤にして

「そ、そうかな……／＼／」

という反応だった、効果はあったようだ。

「じゃあ、行こうか」

「う、うん／＼」

そんな2人を遠くから見ている人物が居た。

「流也、うまくいつてるみたいだ」

竜騎が言つと、流也は呆れたような顔で

「こんな事のために呼んだんですか？」

と言つた。

「こんな事つて言つなよ、俺は空とシンを応援してんだぜ」

「応援してるんスカ……俺の妹は渡さん！とか言つタイプじゃないんスカ？」

「シンは信頼できるんだよ」

「え？突然なんスカ！？」

「今言つた通りだぞ」

「つてもうこんな時間だ！？」

流也は腕時計を見て言い、竜騎のセリフはスルーされた。

「どうした？」

「彼女と約束」

「なん……だと!？」

竜騎は絶望した。

まさか流也に彼女が居るとは!？

「あ、ああ……」

「ちなみにシナって子です。

シン先輩の従妹の」

流也はそう言っで、走って行った。

「ああ……」

竜騎はみんなに置いて行かれた感じがした。

「何故だ、何故、この成績優秀な俺がモテないんだ!？
顔も悪くは無いはずだ!？」

「ふうん、貴様はモテないみたいだな」

竜騎が振り返ってみると、龍一が居た。

「そういうお前もモテねーじゃん」

「オレは二次元の女で十分だ!!
だから竜騎!! 貴様も二次元に……」

すると、後ろから女性の声がした。

「ちょっといいかしら？」

「はい？」竜騎が振り返ると、

金髪に青い瞳、まさに外国人だった。

腕にはデュエルディスクを装着していて、それを見て竜騎は

「デュエルですか？」

「そうよ、私はジェシカって名前よ」

「俺は竜騎だ」

竜騎は腕につけていたデュエルディスクを展開し、デッキを入れた。

「オレは龍……」

「デュエル……」

足下が光った気がしたが、気にしなかった。

「先攻は譲るわ」

「日本語ペラペラだな……俺のターンだ！」

「俺はドラグニティ・アキュリスを召喚」

ATK1000

「アキュリスの効果でドラグニティ・ミリトゥムを特殊召喚して、アキュリスを装備する」

ATK1700

「ミリトゥムの効果で装備されているアキュリスを特殊召喚」

「レベル4のミリトゥムにレベル2のアキュリスをチューニング！！シンクロ召喚、ドラグニティナイト・ガジャルグ！！」

ATK2400

「ガジャルグの効果でデッキからデブリドラゴンを手札に加えて、手札からドラグニティ・フランクスを墓地に送る」

（伏せるカードが無い）

「ターン……エンド」

「私のターン」

「私はスカイ・コアを召喚するわ」

ATK0

「カードを3枚伏せてターンエンド」

（スカイ・コア？どんな効果だ……？）

「俺のターン！！」

「俺は愚かな埋葬を発動して、スノーマンイーターを墓地に送る。
デブリドラゴンを召喚」

ATK1000

「効果で墓地からスノーマンイーターを特殊召喚」

ATK0

「レベル3のスノーマンイーターにレベル4のデブリドラゴンをチ
ューニング!!」

シンクロ召喚、氷結界の龍グングニール!!」

ATK2500

「バトル、グングニールでスキエルに攻撃」

「罠カードツイン・ボルテックスを発動するわ、スカイ・コアとグ
ングニールを破壊よ」

「マジかよ……」

「そして、スカイ・コアがカード効果で破壊された時、デッキ、手
札、墓地から機皇帝スキエル、スキエルA、スキエルT、スキエ
ルC、スキエルGを特殊召喚するわ。
合体しなさい」

ATK2200

「さらに、罠カード、スカイA3とスカイC3を発動して、スキエ

ルA3とスキエルC3を特殊召喚」

ATK2600

（攻撃力が上がった！？）

「くっ！！ガジャルグを守備表示にして、カードを伏せてターンエンド」

「私のターン」

「私は機皇帝スキエルの効果でドラグニティナイト・ガジャルグを吸収するわ」

「なッ！？」

スキエルから触手のような物が出て、ガジャルグを捕まえて、スキエルが吸収した。

ATK5000

「攻撃力……5000！？」

「バトル、スキエルでダイレクトアタックよ」

「なら、バトル・スタン・ソニックを発動、攻撃を無効にし、手札からファランクスを特殊召喚する」

ATK500

「カードを伏せて、ターンエンドよ」

「俺のターン！！」

「俺はファランクスをリリースして、ドラグニティアームズ・ミスティルを特殊召喚する。
ファランクスを装備」

ATK2100

「装備されているファランクスの効果でこのカードをフィールドに特殊召喚する」

「手札から地獄の暴走召喚を発動、ファランクスをデッキ、手札、墓地から可能な限り特殊召喚する事ができる。

俺は墓地とデッキから特殊召喚。

レベル6のミスティルにレベル2のファランクスをチューニング！！
シンクロ召喚、レッドデーモンズ・ドラゴン！！」

ATK3000

「バーニング・ソウル！！」

レベル8のレッドデーモンズ・ドラゴンにレベル2のファランクス2体をダブルチューニング！！

シンクロ召喚！！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！！」

ATK3500

「スカーレッド・ノヴァの攻撃力は墓地のチューナーの数×500、俺の墓地のチューナーは5体、よって攻撃力は6000だ！！」

ATK 3500 6000

「バトル！！スカーレット・ノヴァでスキエルに攻撃！！
バーニング・ソウル！！」

スキエルは破壊され、周りのパーツも破壊された。

LP 4000 3000

「やるわね。」

私はサレンダーするわ」

「え……？」

「それじゃあね」

ジェシカは帰って行った。

気のせいかな、左腕を押さえていた。

「なんだったんだ？」

竜騎は呆然と立ち尽くしていた。

「オレは……？」

ちなみに流也の方は……

シナにデュエルしない？と言われ始めたが……

流也の前には黄色い巨大ロボットが居た。

ATK4000

「グ、グランエル!？」

「グランエルの効果でスターライト・ドラゴンを吸・収……!」

「じゃあスターライトをリリースして無効にして破壊するよ」

「グランエルの効果でその効果を無効にするよ」

触手のような物にスターライト・ドラゴンは捕まり、吸収された。

ATK4000 6500

「攻撃力6500!？」

「凄いでしょー、ダイレクト・アタック!!」

「嘘……?」

流也

LP4000 0

しかし、流也にはリアルダメージが発生しなかった。

シナがダメージ体感システムの強化版を使わなかったただけだが。

「やっぱり強いねシナは」

「流也君だって強かったよ、グランエルじゃなかったら負けてたもん。」

「じゃあ、行こー」

「え、うん」

シナが流也の腕を引っ張る。

その頃……シンと空は

「ねえ、シン」

「ん、何？」

空は立ち止まって言った。

「えつとき、私、シンの事が……好き」

突然の一言にシンは驚いた表情で空を見た。

「え……？」

「私ね、シンが好きな理由がイケメンだからだ、顔で選んでたと思ってたの……でも全然違った。」

シンはいつも優しくて、いつもはダメなのに……いざとなると頼れて、一緒に居ると安心できる。
だから好き」

空の告白に対してシンは……

「俺は……俺も空の事が好きだ、でも……」

『……』

俺に言う資格はあるのか？

俺は悪魔と融合した。

もう人間じゃないかもしれない。

化け物と言われてもおかしくは無い。

化物が人を好きになって良いのか？

シンは言った。いや、言ってしまった。「空は……俺なんか好きになるよりも、他のもっと良い奴を好きになった方が幸せになれるよ……」

それを聞いた空は、急に悲しい顔をして

「なんで……なんでそんな事言うの？

私には……シン以外ありえないよ……」

そう言ってどこかへ行ってしまった。

『シン……』

(……俺なんか)

建物のガラスに映るシンの右目は真紅の色に変わっていた。

（そうだよな、俺は化物なんだよな……）

化物と呼ばれたくなかったから隠してきた力だ。

人を傷つけるかもしれない力……

いや、左右の瞳の色が違う、それだけで人は気味悪がられるだろう。

「俺は……どうすれば」

シンは上を見上げると様々なイルミネーションが光り輝いていた。

しかし、その先には闇しかなかった。

闇しか見えなかった。

クリスマス・イブ（後書き）

暗くなってしまったorz

最初はここで明るい雰囲気にして、そのままバトルシティ！！って感じだったので……暗い！！

バトルシティ開幕

雪が降り始めた。

『シン、なんであんな事を言ったんだ？』

シンは答えようとしない。

『お前は今まで自分を化物だと考えた事はなかったはずだ。なのに何故、あの場面でそんな事を考えた？』

「……」

『この力は、お前なら一生隠して生きる事もできる。誰も傷つけずに、いやお前なら誰も傷つける事はできないはずだった……』

シンはようやく口を開いた。

「それでも……もし、この力を制御できなくなったら……」

『ああ、お前は自分で今、そんな状態にしたんだ』

「そうか……」

『もう一度聞くぞ、なんであんな事を言ったんだ？』

「空が……そこまで俺の事を……想ってるとは思ってなくて……恐かった。この力を知られたら……どう思われるか」

『だが、逆効果だ』

「俺は……化物だよな？」

『そんな事は自分で考えろ』

シンは足を引きずるようにして歩いていた。
しばらく歩いていたが、シンは突然足を止めた。

「空……」

空が居た。

「さっきは……ごめん……」

シンは空にゆっくりと近づく。

「来ないで……！」

空は振り向くこと無く走り去っていく。

「あ、あ……」

「でも……見られなくて……良かったかな……」

シンは紅くなっている右目を手で覆い隠して言った。

それからシンは次第に他の人とも関わらなくなっていた。

そして年が明け……しばらく経ち、バトルシティが始まる。

『大丈夫か？』

（大丈夫……それに俺にはお前がいるだろ相棒）

『だが、本当は寂しいんだろ？』

（大丈夫だ……大丈夫だから気にすんな）

まず、開会式があった。参加人数は800人、今日の朝9しばらくから夜の9時まで、勝利数の多かった8人が決勝トーナメントに進む。

パズルカード？んなもん集めてたら何日かかると思ってたんだ？

ルールはバトルシティルール、アニメのルールと思ってもらえない。

ちなみにアンティルールは廃止されている。

開会式が終わる。

デュエリストは紙を渡され、その紙に書かれた場所に行かなければならない。

（ショッピングモール……買い物してる人に迷惑にならないように

しないとな……）

『ショッピングモールは10時からだぞ』

（そうだったけ？）

シンはショッピングモールの前に着く、時計を確認すると、8時50分……あと10分で開始だ。

（やっぱり入れないか……）

「おや、奇遇ですね」

「お前は……確か機皇帝を使ってた……」

「マナブです。最初の相手にどうですか？」

「とりあえず売られたデュエルは買っよ……」

大会参加者はデュエルをバトルシティが始まるまで、行っ事はできない。

10分が長く感じる。

9時ジャスト、デュエルディスクが勝手に展開する。

「デュエル」

そこから同じかけ声が聞こえる。

「僕のターンです」

「僕はTGカタパルト・ドラゴンを召喚します」

DEF1300

(TG!?)

「カタパルト・ドラゴンの効果を発動します。

手札からレベル3以下のTGと名のついたチューナーを1体特殊召喚します。

僕はTGジェット・ファルコンを特殊召喚」

ATK1400

「レベル2のカタパルト・ドラゴンにレベル3のジェット・ファルコンをチューニング!!」

シンクロ召喚!!!TGハイパー・ライブラリアン!!!」

ATK2400

「ジェット・ファルコンがシンクロ素材として墓地に送られた時、相手ライフに500ダメージ与えます」

「くっ!!」

シン

LP4000 3500

「カードを2枚伏せてターンエンドです」

「俺のターン」

「俺は……アンノウン・シンクロンを特殊召喚」

DEF0

「古のルールを発動して、真紅眼の黒竜を特殊召喚……」

ATK2400

「レベル7のレッドアイズにレベル1のアンノウン・シンクロンをチューニング、白き炎から新たな竜が目覚める。
シンクロ召喚、現れる。

真紅眼の伝説竜」

ATK2500

「俺は黒竜の雛を召喚」

DEF500

「愚かな埋葬を発動して、グローアップ・バルブを墓地に送り、デ
ッキトップを墓地に送り、グローアップ・バルブを特殊召喚」

DEF100

「レベル1の黒竜の雛にレベル1のバルブをチューニング。
シンクロ召喚、レッドアイズ・フェニックス」

DEF1500

（これで揃った）

「クリアマインド!!」

レベル8、シンクロモンスター、真紅眼の伝説竜にレベル2、シンクロチューナー、レッドアイズ・フェニックスをチューニング」

しかし、何も起きなかった。

「え……?」

復活

「え……？」

シンはアクセルシンクロに失敗して啞然としている。

『やはり、今のシンはアクセルシンクロはできない……瞳のコントロールができて、クリアマインドは無理だったか……』

「どうしたんですか？」

「くっ……カードを2枚伏せてターンエンド」

『馬鹿っ！！何故攻撃しなかった！？』

「僕のターンです」

「僕はTGサイバー・マジシャンを召喚」

DEF0

「このカードは他のシンクロ素材を手札から選択できます。

手札のレベル4のラッシュ・ライノとレベル1のサイバー・マジシャンをチューニング！！

シンクロ召喚、TGワンダー・マジシャン」

ATK1900

「ワンダー・マジシャンの効果で魔法、罫を1枚破壊します。右の

伏せカードを破壊」「その前にライブリアンの効果で1枚ドロ―して、その後、伏せカードを破壊します」

レッドアイズ・スピリッツが破壊される……。

「クリアマインド、

レベル5、シンクロモンスターのハイパー・ライブリアンにレベル5、シンクロチューナーのワンダー・マジシャンをチューニング
！！

アクセルシンクロ！！

TGブレード・ガンナー」

ATK3300

「ならこつちも、

クリアマインド！」

しかし、何も起きない……。

（なんで……今までこんな事無かったのに……）

「バトルです。ブレード・ガンナーで真紅眼の伝説竜に攻撃」

「……」

シン

LP3500 2700

「ターンエンドです」

「俺の……ターン」

「俺は……カードを伏せてターンエンド……」

「僕のターンです」

「僕はTGX3-DX2を発動、墓地のTG、サイバー・マジシャン、ラッシュ・ライノ、カタパルト・ドラゴンをデッキに加えてシヤッフルし、2枚ドローします」

「僕はブレード・ガンナーの攻撃力を1000ポイント上げてTGギア・ゾンビを特殊召喚、バスター・ショットマンを召喚」

「レベル1のバスター・ショットマンにレベル1のギア・ゾンビをチューニング!!」

シンクロ召喚、TGレシプロ・ドラゴンフライ」

ATK300

「レシプロ・ドラゴンフライの効果でブレード・ガンナーをデッキに戻し、素材の2体を特殊召喚します」

「レベル4以下のモンスターが特殊召喚されたので、TGワールフを特殊召喚」

ATK1200

「トップ・クリアマインド!!」

レベル5のハイパー・ライブラリアンとレベル2のレシプロ・ドラゴンフライにレベル5のワンダー・マジシャンをチューニング!!
デルタアクセル!!

TG ハルバード・キャノン!!」

ATK 4000

「TG1-EM1を発動して、レッドアイズ・フェニックスとTG
ワールフのコントロールを入れ替えます」

「……あ」

「バトルです。」

ハルバード・キャノンでワールフに攻撃」

シン

LP 2700 0

シンは手も足も出なかった……。

『今のお前では、誰にも勝てない』

（俺は……どうすれば……）

（あの人のモンスター、実体化してる……）

空

LP1400

空はある男とデュエルしていた。

その男の召喚するモンスターは全て実体化し、辺りに居たギャラリ
ーも恐怖で逃げて、この場には空と男の2人しかいなかった。

「残念だったな……エクシーズ召喚！！No.61ヴォルカザウル
ス！！」

ATK2500

「でも、攻撃力2600のパーシアスには勝てないよ」

「だから、残念だったなって言っただろ？」

ヴォルカザウルスの効果発動、エクシーズ素材を1つ取り除く事で、
相手モンスター1体を破壊し、その攻撃力分のダメージを相手に与
える。

……死ね」

「そんな……」

空は諦めて地面に膝をついた。

「今のままじゃ勝てない……か、ん？」

よく見えないが神聖騎士パーシアスが見えた。

（まさか……空？）

そして、球体のような物がモンスターになる。
ナンバーズだ……。

（あれはナンバーズ！？）

走って近づく。

案の定デュエルをしていたのは空だった。

『シン！！あのナンバーズは実体化してるぞ！！』

「な……」

「ヴォルカザウルスの効果発動、エクシーズ素材を1つ取り除く事で、相手モンスター1体を破壊し、その攻撃力分のダメージを相手に与える。

……死ね」

そのナンバーズは効果を発動しようとしていた。

「そんな……」

諦めて膝をつく空……。

（あんなのまともに喰らったら死んじゃう……）

シンは走りだした。

助けられる力があるから、ここで助けなかったら絶対後悔するから。

「行け！！レッドアイズ！！」

シンは真紅眼の黒竜のカードをデュエルディスクに叩きつけた。
その刹那、爆発が起こる。

「ははははは！！死んだか？」

男は笑いながら言う。

しかし、次の瞬間、男は目を疑った。

そこには、真紅の瞳をした黒い竜が居たのだ。

空は目をつぶった。

自分は死んだと思った。

しかし……。

「空……大丈夫……？」

聞き覚えのある声が……聞くと安心できる優しい声が聞こえた。

「……シン？」

空を見ると、目の前にシンが居た。しかし、いつもと違い、オッドアイで、今にも泣きそうな笑顔でこっちを見ていた。

間に合った……とシンは安心した。

「ごめん……俺、化物だから……恐いだろ？人を傷つけるかもしれないぞ？」

だから俺……！？」

言ってる途中で空の唇が邪魔をして、最後まで言えなかった。

シンは慌てて空から離れた。

「そ、空！？」

「シンは化物なんかじゃ無いよ……だって私を助けてくれたし、シンが人を傷つけられるわけ無いよ……」

「俺、恐かったんだ……みんなが知ったら、どんな目で見られるか……周りから誰も居なくなるのが恐かった。

忘れかけてたけど、空の想いを知ると、急に思い出して、俺なんか人を好きになっちゃいけないのかな？って思った……」

「ごめんね……シンがそこまで思い詰めてたのに、気づけなくて……」

「なんで謝るんだよ……」

シンは聞こえないように呟いた。

「なんだよ！お前は、まあいい、代わりにお前を殺してやる」

「ごめん、レッドアイズ……」

シンはそう言うと、真紅眼の黒竜のカードをデッキに戻した。

「お前……サイコデュエリストだな？」

「お前こそ、そうだろ？」

「似たようなもんだけど……始めるか」

「絶対にぶつ殺してやる」

「「デュエル!!」」

「俺のターン」

「俺は古のルールを発動して、真紅眼の黒竜を特殊召喚」

ATK2400

「グローアップ・バルブを召喚」

ATK100

「レベル7のレッドアイズにレベル1のバルブをチューニング!!
白き炎から新たな竜が目覚める、シンクロ召喚!!」

真紅眼の伝説竜」

ATK 2500

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー」

「サイバードラゴンを特殊召喚」

ATK 2100

「手札のモンスターを捨て、クイック・シンクロンを特殊召喚」

ATK 700

「レベル5の2体をオーバーレイ、2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！！
現れる、No.61ヴォルカザウルス！！」

ATK 2500

「ヴォルカザウルスの効果発動、エクシーズ素材を1つ取り除き、相手モンスター1体を破壊し、その攻撃力分のダメージを相手に与える。」

真紅眼の伝説竜を破壊」

「レッドアイズ、ちょっとだけ我慢してくれ！！」

レッドアイズがその身でシンの身体へのダメージを防ぐ。

シン

LP4000 1500

「随分と主人想いの竜だな……だが残念ながら、お前は死ぬ。ヴォルカザウルスでダイレクトアタック!!」

「チートだな、トラップ発動、ガード・ブロック!!
ダメージを0にして、1枚ドロー」

ヴォルカザウルスの攻撃はシンに届かない。

「ちッ、カードを伏せて、ターンエンド」

「なら、エンドフェイズにレッドアイズ・スピリッツを発動し、真紅眼の伝説竜を特殊召喚」

ATK2500

「そして、俺のターン」

「俺はシンクロ・ドローを発動、エクストラデッキのシンクロモンスターを墓地に送り、カードを2枚ドローする。

俺はシューティング・スター・ドラゴンを墓地に送り、デッキから2枚ドローする」

「俺は黒竜の雛を召喚」

DEF500

「グロリアップ・バルブの効果でデッキトップを墓地に送り、墓地から特殊召喚する」

DEF100

「レベル1の黒竜の雛にレベル1のバルブをチューニング！！
シンクロ召喚！！
フォーミュラ・シンクロン！！」

DEF1500

「フォーミュラの効果で1枚ドロー！！」

「クリアマインド！！」

レベル8、シンクロモンスターの真紅眼の伝説竜にレベル2、シンクロチューナーのフォーミュラ・シンクロンをチューニング！！
絡み合う運命が、幻の竜を呼び覚ます、
アクセルシンクロオオオオオオ！！
光臨しろ！！ミラーージュ・デステイニー・ドラゴン！！」

フィールドに光輝く竜が舞い降りた。

ナンバーズハンター？俺、ナンバーズ持ってないよ

「光臨しろ！！ミラージュ・デステイニー・ドラゴン！！」

ATK3300

「ミラージュ・デステイニー・ドラゴンの効果発動、墓地のシンクロモンスターの効果をメインフェイズとバトルフェイズに1度ずつ得ることができる。」

俺はシューティング・スター・ドラゴンの効果をミラージュ・デステイニー・ドラゴンに与える。
エフェクト・ミラージュ！！」

ミラージュ・デステイニー・ドラゴンがシューティング・スター・ドラゴンの姿になる。

「お前さ……楽しいか？……デュエル」

「楽しいさ、俺はデュエルで人を殺せる」

「本当に楽しんでるか？」

「ああ！！」

このナンバーズを手に入れてからは、楽しくて楽しくて仕方ないね」

「その前は……？」

「さあな、何故だかデュエルするのが恐かったさ……」

「人を傷つけるのか？」

「お前だってそうたる？」

「……俺だってもう……傷つけるのは嫌だ」

「やつと本音が聞けたよ、ミラージュ・デステイニーの効果発動！デッキの上から5枚確認し、その中のチューナーの数だけこのターン攻撃することができる」

シンはデッキの上からカードを5枚引き、確認する。

「チューナーの数は……5枚！！」

「バカな！？」

ミラージュ・デステイニーは5体に分身した。

「1回目のバトル！！ヴォルカザウルスに攻撃！！」

シューティング・スター・ドラゴンの姿になったミラージュ・デステイニー・ドラゴンがヴォルカザウルスに突撃する。

「ナンバーズはナンバーズとの戦闘でないと破壊できない」

「だが、ダメージは受けて貰う！！」

男

LP 4000 3200

「2回目のバトル！！」
男

LP 3200 2400

「3回目のバトル!!」

男

LP 2400 1600

「4回目のバトル!!」

男

LP 1600 800

「5回目のバトル!! No. 61ヴォルカザウルスに攻撃!!
デステイニー・ミラージュ!!」

「ナンバーズを使って負け……た？」

男

LP 800 0

「お前……さつきはモンスターが実体化してたのに、なんで今、実体化してないんだ？」

サイコデュエリストなんだろう？」

「えーっと、サイコデュエリストじゃなくて……」

んー、簡単に言うと、これは俺の力じゃないんだよな」

（って言えばいいかな？）

『まあ間違っではないが……』

「てか俺にもよく分かんない」

「そうか……それじゃあ、また会おう」

「ああ……」

男は去って行った。

「空、お待たせ」

「シン、ごめんね……キ、キスとかしちゃって……／＼／」

「え？あ……／＼／

「ってかびつくりしたー、でも流石にあんなファーストキスは残念だったな……」

「えっ！？初めてだったの！？」

「え？」

その頃……

「ナンバーズが！？お、お前は……！？」

「トドメだｗｗｗ銀河眼の光子竜、破滅のフォトン・ストリームｗｗ」

「うわああああ！！！」

「ナンバーズをゲットwww」

その男はナンバーズのカードを見ながら言った。

その後ろでは、ナンバーズを使っていた男が魂を抜かれたように倒れていた。

「次は誰を狙おうかなwww」

時刻は3時を過ぎた頃。

「流石にキツイ……」

『これで27勝だな』

（ああ、あと6時間だ）

「ちょっとwwwいいかなwww？」

（なんだ……コイツ？）

「ナンバーズって知ってるかなwww」

「知ってるけど……何か？」

「なら君の魂ごとナンバーズを狩らせてもらおうwww」

緊張感の無い声で言ってくるので、シンは呆れていた。

「俺、ナンバーズ持ってないんだけど」

「なら、魂だけ狩らせてもらおうwww」

「そんな恐ろしい事を言っなよ……」

「「デュエル!!」」

「俺のターンwww」

「俺はレスキューラビットを召喚www」

DEF100

「レスキューラビットの効果発動wwwこのカードを除外して、デツキからレベル4以下の同名通常モンスター2体を特殊召喚するwww。
ww。」

俺はレスキューラビットを除外し、ジェネティク・ワーウルフ2体をデツキより特殊召喚するwww」

ATK2000x2

「行くぞwww攻撃力2000以上のモンスター2体をリリースし、銀河眼の光子竜を特殊召喚www」

ATK3000

（ギャラクシーアイズ・フォトン・ドラゴン……？
いったいどんな効果なんだ……？）

『知らんのかい……』

「俺はカードを2枚伏せてターンエンドｗｗｗ」

「俺のターン」

「俺は古のルールを発動して、真紅眼の黒竜を特殊召喚」

ATK2400

「レッドアイズ・ブラック・ドラゴンｗｗｗｗ！……懐かしいｗｗ

」

「行くぜ、レッドアイズ……！」

ナンバーズハンター？俺、ナンバーズ持っていないよ（後書き）

最近、勢いだけで書いてる気がする……。

煌めけ！！セイヴァー・レジェンド・ドラゴン！！

「行くぜ、レッドアイズ！！」

「でもwww攻撃力2400のレッドアイズじゃギャラクシーアイズには勝てないしwww」

「俺は召喚僧サモンプリーストを召喚」

DEF1600

「サモンプリーストの効果発動、手札の魔法カードを1枚墓地に送り、デッキからレベル4のモンスターを特殊召喚する。」

俺は手札の古のルールを墓地に送り、真紅眼の飛竜を特殊召喚」

ATK1800

「レベル4のサモンプリーストとワイバーンをオーバーレイ！！2体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！！」

現れる、真紅眼の翼竜！！」

ATK2500

（真紅眼の翼竜は素材を取り除いて戦闘で破壊した相手モンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える……なら）

『待て』

「俺は団結の力を真紅眼の翼竜に装備させる」

ATK 2500 4100

「バトル！！真紅眼の翼竜でギャラクシーアイズに攻撃！！」

「甘いwwwギャラクシーアイズの効果発動、戦闘を行うお互いのモンスターをゲームから除外するwww」

真紅眼の翼竜とギャラクシーアイズの2体はフィールドから消えた。

「そんな効果が……なら、レッドアイズでダイレクトアタック！！
ダーク・メガ・フレア！！」

「だから甘いつてwww攻撃の無力化発動wwwそしてwwwバトルフェイズ終了時www除外されたお互いのモンスターを特殊召喚するwww」

真紅眼の翼竜とギャラクシーアイズがフィールドに現れる。

「あれ？素材が……」

「ギャラクシーアイズの効果で除外した相手モンスターがモンスターエクシーズだった場合wwwギャラクシーアイズの攻撃力は除外したモンスターエクシーズのオーバーレイ・ユニットの数×500ポイントアップするwwwオーバーレイ・ユニットを吸収しろwww」

ATK 3000 4000

「ならカードを伏せてターンエンド」

「俺のターンwww」

「ギャラクシーアイズでレッドアイズに攻撃www破滅のフォトン・ストリームwww」

「くッ!」

シン

LP4000 1400

「ターンエンドwww」

「俺のターン」

「真紅眼の翼竜を守備表示に変更してターンエンド」

「俺のターンwww」

「ギャラクシーアイズで真紅眼の翼竜に攻撃www破滅のフォトン・ストリームwww」

真紅眼の翼竜も破壊される……。

「ターンエンド」

「俺のターン」

「俺はアンノウン・シンクロンを特殊召喚、死者蘇生を発動して、真紅眼の黒竜を特殊召喚。」

レベル7のアンノウンにレベル1のレッドアイズをチューニング!!
シンクロ召喚、真紅眼の伝説竜」

ATK2500

「真紅眼の伝説竜の効果発動、墓地のドラゴン族モンスター1体をゲームから除外して、相手モンスター1体を墓地に送る」

「ならwww手札からエフェクト・ヴェーラーを捨てて無効www」
「ならターンエンド」

「俺のターンwww」
ブラッド・ヴォルスを召喚」

ATK1900

「トドメだwwwギャラクシーアイズで真紅眼の伝説竜を攻撃www破滅のフォトン・ストリームwww」

「攻撃の無力化発動!!」

「ターンエンドwww」

（よく考えたらこのターンで何もできなかったら負け……だよな？）

「俺の……ターン!!」

（これって!?)

「俺は救世竜セイヴァー・ドラゴンを召喚」

DEF0

「チューナーが存在するからブースト・ウォリアーを特殊召喚」

DEF 200

「レベル8の真紅眼の伝説竜とレベル1のブースト・ウォリアーにレベル1のセイヴァー・ドラゴンをチューニング!! 聖なる光に導かれし伝説の竜が次元を超えて現れる。シンクロ召喚!!」

煌めけ!! セイヴァー・レジェンド・ドラゴン!!」

ATK 3900

細長なつて翼が4枚になった真紅眼の黒竜のような竜が現れた。

「バトル!! セイヴァー・レジェンド・ドラゴンでブラッド・ヴォルスに攻撃!!」

ブラスター・メガ・フレア!!」

「な……」

セイヴァー・レジェンド・ドラゴンは翼を折りたたみ、白い炎を纏ってブラッド・ヴォルスに突撃した。

敵

LP 4000 2000

「セイヴァー・レジェンド・ドラゴンの効果発動!!」

戦闘によって相手モンスターを破壊した時、そのモンスターの攻撃力をこのモンスターに加え、もう1度相手モンスターに攻撃することが出来る!

行け、ブラスター・メガ・フレア!!」

白い炎が真紅の炎に変わる。

ATK 3900 5800

「セイヴァー・レジェンド・ドラゴンの効果発動！！
戦闘を行う相手モンスターの効果を無効にする」

ATK 4000 3000

「そんな……馬鹿な……」

セイヴァー・レジェンド・ドラゴンがギャラクシーアイズの身体を貫いた。

敵

LP 2000 0

「くそッ、次は負けないから覚えておけ！！」

「はいはい」

『流石にお前が銀河眼の光子竜の効果を知らないとは思わなかったぞ……』

（いいだろ別に）

『ま、使ってる人少なそうだしいいか』

（ん？）

『どうした？』

シンの目の前には魂を抜かれたようになっていり人が倒れていた。

（さっきの奴……魂ごと狩らせてもらおうとか言ってたけど……まさか……本当に？）

『た、多分……結構ヤバかったよな……負けてたら……』

そして2人はしばらく考えて、目の前の現実から目を背いて、倒れている人は見なかった事にするという選択をした。

（無いな……うん）

『そうだな……人の魂を抜くなんて……無いな』

（てか、ナンバーズハンターまで出てきた）

『気にしない気にしない』

日は既に傾き始めていた。

予選終了

「ドラグニティナイト・ヴァジュランダでダイレクトアタック!!」

「うわああああ!!」

「これで109勝……か」

日は既に落ちていた。

竜騎は自分の勝利数を数えてから歩きだそうとすると、

「おい、そこのお前、デュエルだ」

「休む暇も無いな」

「デュエル」

「俺のターン」

「俺は手札からダンディライオンを墓地に送り、クイック・シンクロンを特殊召喚」

ATK700

「ダンディライオンが墓地に送られたことにより、綿毛トークンを2体場に出す」

DEF0×2

「レベル1の綿毛トークン2体にレベル5のクイック・シンクロン

をチューニング、シンクロ召喚、
ジャンク・バーサーカー」

ATK2700

「カードを伏せてターンエンド」

「俺のターンだ」

「俺は未来融合・フューチャー・フュージョンを発動、F・G・D
を選んで、デッキからファランクス、アキュリス2体、ブランドイ
ストック2体を墓地に送る。

そして俺はドラグニティ・ドゥクスを召喚し、ファランクスを装備」

ATK1500 1900

「装備されているファランクスを特殊召喚」

ATK500

「ファランクスをリリースして、ドラグニティアームズ・ミスティ
ルを特殊召喚して、ファランクスを装備」

ATK2100

「装備されているファランクスを特殊召喚し、地獄の暴走召喚を発
動！！デッキからファランクスを2体特殊召喚」

ATK500×3

「なんと！？バーサーカーは1体しか入ってないし、そもそもエク

ストラデツキだから出せない」

「レベル6のミスティルとレベル2のファランクスをチューニング
！！

シンクロ召喚！！レッド・デーモンズ・ドラゴン！！」

ATK3000

「バーニングソウル！！レベル8のレッド・デーモンズ・ドラゴン
にレベル2のドラグニティ・ファランクス2体をダブルチューニン
グ！！

シンクロ召喚！！スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！！」

ATK3500

「スカーレッド・ノヴァ・ドラゴンの攻撃力は墓地のチューナーの
数×500ポイントアップする。

墓地のチューナーは7体、よって3500アップ！！」

ATK3500 7000

「攻撃力7000！？……だと！？」

「行け、スカーレッド・ノヴァ・ドラゴン！！ジャンク・バーサー
カーに攻撃！！

バーニングソウル！！」

「掛かったな！！聖なるバリア……」

「甘いぜ！！スカーレッド・ノヴァは魔法、畏、効果モンスターの

効果では破壊されない！！
だから破壊されるのはドウクスだけだ！」

「しまっ……」

スカーレッド・ノヴァはジャンク・バーサーカーをあっさり粉砕してしまった。

LP40000

「これでやっと110勝だな」

そう言うと、竜騎は歩き出した。

「龍………？」

「久しぶりだな……紅、貴様とは決勝トーナメントで……と思っていたが、ここで決着をつけてやる……」

「なら始めるか」

「デュエル……」

「オレのターン」

「オレは正義の味方カイバーマンを召喚、カイバーマンをリリースし、青眼の白龍を特殊召喚する……現れよ、ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン……」

ATK 3000

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「俺は黒竜の雛を召喚、黒竜の雛を墓地に送り、真紅眼の黒竜を特殊召喚！！来い！！レッドアイズ！！」

ATK 2400

「ふうん、またレッドアイズか……」

「そつちこそ、またブルーアイズだな。」

手札から融合を発動、手札のレッドアイズとデーモンの召喚を融合し、ブラック・デーモンズ・ドラゴンを融合召喚！！」

ATK 3200

「バトル、ブラック・デーモンズでブルーアイズに攻撃」

「くッ」

龍一

LP 4000 3800

「レッドアイズでダイレクトアタック！！ダーク・メガ・フレア！！」

「ぐわああああー!!」

龍一

LP 3800 1400

「ターンエンド」

「オレのターン」

「オレは死者蘇生を発動し、墓地のブルーアイズを復活させ、融合を発動、手札のブルーアイズ2体と場のブルーアイズを融合!! 融合召喚!!」

我が最強の下僕、
青眼の究極竜!!」

ATK 4500

「アルティメット・ドラゴンでブラック・デーモンズ・ドラゴンに攻撃イ、アルティメット・バースト!!」

シン

LP 4000 2700

「ターンエンド」

「俺のターン」

「俺はカードを伏せてレッドアイズを守備表示に変更して、ターンエンド」

「ふうん、何もできんか……オレのターン」

「アルティメット・ドラゴンの攻撃イ！アルティメット・バアアアストオオー！！」

「トラップ発動、サンダー・ブレイク！！
手札を1枚捨て、青眼の究極竜を破壊する」

「甘いぞ！！融合解除を発動し、ブルーアイズ3体を特殊召喚する
！！」

ATK3000×3

「行けエ！滅びのバースト・ストリーム！！」

ブルーアイズ3体が同時に放った攻撃はレッドアイズに直撃し、爆発した。

「ふうん、1撃でも通れば、オレの勝利だ流石に3回は耐えられる
い」

しかし、爆煙の中からレッドアイズが現れる。

「バカな！？」

「墓地に送ったネクロ・ディフェンダーを除外して、レッドアイズはこのターン破壊されなくしたんだ」

「サンダー・ブレイクでそんなカードを……ふうん、流石だな。
カードを伏せてターンエンド」

（拙いな……）

耐えたとはいえ、龍一の場合にはブルーアイズが3体、伏せカードの無いシンはこのターンで何かしないと負けてしまう。

「俺の……ターン」

「よし、手札から黒炎弾を発動！！
これで俺の勝ちだ」

「バカな……奇跡を起こしたというのかああ！！」

「喰らえ！黒炎弾！！」

レッドアイズの口から黒い炎が吐かれる。

「ぐわああああ！！」

龍一

LP 1400

「なかなかやるようだな」

「お前だって……っってもう9時だ！？」

終了の合図が鳴り、参加者は広場に集まる。

いろいろ長い話があった後、最後に決勝トーナメント出場メンバーと組み合わせは明日発表しますとの事を言われ、終わった。

決勝トーナメント1回戦 竜騎vsシナ（前書き）

遅くなりました。 すいませんm（――）m
今回はミスがあると思います。

お盆で親の実家に帰っていて、カードを調べる事ができなかったの
で。

決勝トーナメント1回戦 竜騎vsシン

予選が終わった翌日、参加者全員が広場に集まった。

「残れたかな？」

『あれだけ倒したからな……』

すると、ビルにある巨大なスクリーンにトーナメント表のようなのが映し出された。

「あ……俺の名前があった!？」

ちなみに

1回戦 竜騎対シン

2回戦 マナブ対徹

3回戦 鉄矢対聡

4回戦 ジェシカ対シン

というトーナメントだ。

「竜騎も居た……」

「シン!」

「空!?!……と竜騎」

空と、隣に竜騎が居た。

「……シン」

2人の表情が暗くなる。理由はわかんと思うが2人は少し前から全く喋っていなかった。

「竜騎……頑張れよ」

「……………ああ」

決勝トーナメント出場者は控え室に集められた。

1回戦は竜騎とシナだ。

2人は控え室から出て、デュエル場に向かった。

デュエル場はバトルシティのスポンサーの会社の本社ビルの屋上にある。

2人以外の決勝トーナメントのメンバーは控え室のテレビで見ている。

2人のデュエルが始まるようだ。

「「デュエル!!」」

先攻はシナだ。

「私のターン、私はバニーラちゃんを守備表示で召喚」

DEF2050

可愛いウサギが現れた。

「カードを2枚伏せて凡骨の意地を発動して、ターンエンド」

「俺のターンだ!!」

「俺はドラグニティ・アキュリスを召喚、アキュリスの効果で手札からドラグニティ・ミリトゥムを特殊召喚し、アキュリスを装備させる」

ATK1700

「ミリトゥムの効果で装備されたアキュリスを特殊召喚」

ATK1000

「レベル4のミリトゥムにレベル2のアキュリスをチューニング！！シンクロ召喚！！ドラグニティナイト・ヴァジュランダ！！」

ATK1900

「アキュリスを装備させる。

ヴァジュランダの効果で装備したアキュリスを墓地に送り、攻撃力を倍にする」

ATK1900 3800

「墓地に送られたアキュリスの効果発動、フィールド上のカード1枚を破壊する。俺はバニーラを破壊する！！

行け！！アキュリス！！」

アキュリスが矢のようにバニーラに一直線に飛んでいった。

「リバーズカード、同姓同名同盟！！バニーラちゃんをデッキから2体」

DEF 2050 × 2

バニーラが増えたあと、アキュリスが最初から居たバニーラと相殺した。

「なら、ヴァジュランダでバニーラに攻撃!!」

「リバースカード、D2シールド、攻撃対象に選ばれたバニーラちゃんの守備力を倍にするよ」

DEF 2050 4100

「しまった!？」

竜騎

LP 4000 3700

「カードを伏せてターンエンド」

「私のターンドロ、通常モンスター、凡骨の意地の効果でもう1枚ドロ、通常モンスターだからもう1枚ドロ」

シナは次々に通常モンスターを引いてドロしていく。

10数枚引いてから

「あちゃ、封印されしエクゾディアだ。ドロにだけは自信あるのに」

「エクゾディア!？」

「ワイトさんを召喚」

DEF200

「バニーラちゃん2体とワイトさんをオーバーレイ、3体のモンス
ターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！！
巨星のミラ」

DEF1000

「ターンエンドだよ」

シナは増えすぎた手札を捨てて言った。

（巨星のミラ？ 守備力が上昇してるバニーラを残した方が……）

「俺のターン」

（……レギオン）

「俺はドラグニティ・レギオンを召喚、墓地のアキュリスを装備」

ATK1200

「レギオンの効果でアキュリスを墓地に送り、ミラを破壊、チェー
ンで墓地に送られたアキュリスの効果でミラを破壊」

「ミラの素材を取り除いて破壊を防ぐよ」

ミラは一気に2枚の素材を失った。

「バトル、レギオンでミラに攻撃」

「最後の素材を使っよ」

（これでミラの素材は無くなった）

「ヴァジュランダでミラに攻撃」

ミラが破壊される。

（それでも傷1つ与えられない、か）

「サイクロンを発動、凡骨の意地を破壊してターンエンド」

シナの場合にはカードが何もなかったが、竜騎は勝った気がしなかった。

エクゾディアの脅威は去っていない。あと1枚で揃うなら、次のドロで負けるかもしれない。

「私のターンドロ」

（揃った……か？）

「私はモンスターを伏せてカードを伏せてターンエンド」

（守備力2000以上ならライフを削りきれないかも……）

「俺のターンだー!!」

（きた！！）

「俺はフィールド魔法、竜の渓谷を発動、効果で手札を捨てて、ド
ウクスを手札に加えて、召喚してフアリンクスを装備」

ATK1500 2100

「フアリンクスの効果で装備されたこのカードを特殊召喚」

ATK500

「レベル4のドウクスにレベル2のフアリンクスをチューニング！！
シンクロ召喚！！ドラグニティナイト・ヴァジュランダ！アキュリ
スを装備」

ATK1900

「ヴァジュランダの効果でアキュリスを墓地に送り、攻撃力を倍に
する！！」

アキュリスの効果で伏せモンスターを破壊」

「そんな」

「3体でダイレクトアタック！！」

シナ

LP4000 0

「負けちゃった、次は……最後の左手だ」

「俺、すつげえ危なかったじゃん!？」

1回戦は竜騎の勝利で幕を閉じた。

決勝トーナメント1回戦 竜騎vsシナ（後書き）

全然進まないorz

家族に見られるとヤバいので、隠れて執筆しています。

決勝トーナメント2回戦 徹VSマナブ（前書き）

ギリギリ間に合いました。

決勝トーナメント2回戦 徹vsマナブ

2回戦は父さんとマナブって奴だ……。

控え室のテレビには2人の姿が映っていた。

「いきなり徹さんが相手ですか……」

マナブは嫌そうな顔で言った。

「なんだ？嫌そうだな」

「そんな事ありませんよ、始めましょう」

「ああ」

「デュエル!!」

「俺のターン」

先攻は父さんだ。

「モンスターをセット、カードを2枚伏せてターンエンド」

父さんのターンはすぐに終わった。そういえば、父さんはどんなデッキを使うんだろう？何度かデュエルしたが、同じデッキは使ったことがなかった。

「僕のターンです」

「僕はTGストライカーを特殊召喚します」

DEF 0

「レベル4以外モンスターを特殊召喚したので、TGワーウルフを特殊召喚します」

DEF 0

「レベル3のワーウルフにレベル2のストライカーをチューニング！！シンクロ召喚！！TGハイパー・ライブラリアン！！」

ATK 2400

「TGカタパルト・ドラゴンを召喚します」

DEF 1300

「カタパルト・ドラゴンの効果でTGジェット・ファルコンを特殊召喚します」

「レベル2のカタパルト・ドラゴンにレベル3のジェット・ファルコンをチューニング！！シンクロ召喚！！

TGワンダー・マジシャン」

ATK 1900

「ライブラリアンの効果でドロー、ワンダー・マジシャンの効果で左の伏せカードを破壊します」

「ならば、神の柙楯グレイブニルを発動、極星天ヴァルキュリアを

手札に加える」

「バトルです。ライブラリアンで伏せモンスターに攻撃します」

伏せモンスターは極星獣タンギリスニだった。

「タンギリスニが戦闘で破壊された時、レベル3のトークンを2体特殊召喚する」

2体のトークンが現れた。

「ワンダー・マジシャンでトークンに攻撃します」

「なら、攻撃の無力化を発動」

「くっ……カードを伏せてターンエンドです」

「俺のターン」

「相手フィールドにシンクロモンスターが存在するから、極星獣グルファクシを特殊召喚」

ATK1600

「レベル3のトークン2体にレベル4のグルファクシをチューニング！」

星界の扉が開くとき、古の戦神がその魔鎧を振り上げん。大地を揺るがし轟く雷鳴とともに現れよ。シンクロ召喚！！光臨せよ、極神皇トール！！」

ATK3500

フィールドに神が現れた。

「いきなり神ですか……」

「どうした？怖じ気づいたか？」

「まさか、そんな訳ありませんよ。
ライブラリアンの効果でドロー」

「なら、トールの効果発動、このターンライブラリアンの効果は無効にし、トールにその効果を与える。

そして、極星天ヴァルキュリアを召喚」

ATK800

「手札を2枚墓地に送り、トークン2体を特殊召喚する」

「レベル4のトークン2体にレベル2のヴァルキュリアをチューニング！」

北辰の空にありて、全知全能を司る神よ！今こそ、星界の神々を束ね、その威光を示せ！！シンクロ召喚！！天地神明を統べよ、最高神、極神聖帝オーデイン！！」

ATK4000

2体目の神が現れた。しかし、トールと比べて大きさが尋常じゃない。

「いきなり最高神を出しましたか……」

「じゃあ、シンクロ召喚したからライブラリアンから奪ったトールの効果で1枚ドロ―。」

バトル!!

極神皇トールでライブラリアンに攻撃、サンダー・パイル!!」

「くっ!!」

マナブ

LP 4000 2900

「オーデインでワンダー・マジシャンに攻撃!!ヘヴンスジャッジメント!!」

マナブ

LP 2900 800

「極星宝グングニルを発動、オーデインを除外し、トールを破壊」

「……な」

「ターンエンド。」

エンドフェイズに破壊されたトールが蘇る。

トールがこの効果で復活した場合、相手ライフに800ポイントのダメージを与える」

トールが出した雷がマナブを襲う。

マナブ

LP 8000

「ワンターン……キル？」

「神……」

このデュエルは徹の勝利で終わった。

決勝トーナメント3回戦 鉄矢VS聡

「先輩……」

シンは鉄矢に話しかけた。

「絶対勝って、準決勝でデュエルしましょう」

「ああ」

鉄矢はそう言って、控え室を出て行った。

鉄矢と聡はデュエル場に着いた。

「デュエル!!」

先攻は聡だった。

「俺のターン、手札抹殺を発動、お互いは手札を全て捨て、捨てた枚数ドロウする。」

俺はカードを伏せてターンエンド」

「俺のターン!!」

「俺はスクラップ・キマイラを召喚」

ATK1700

「キマイラの効果で墓地のビーストを特殊召喚」

ATK1600

「レベル4のキマイラにレベル4のビーストをチューニング！！シンクロ召喚！！スクラップ・ドラゴン！！」

ATK2800

「罨カード、機皇創世を発動、手札のワイズ・コア、スカイ・コア、グランド・コア3枚を墓地に送り、手札、デッキ、墓地から機皇神マシニクル 3を特殊召喚する。

このカードによって特殊召喚したモンスターは、魔法・罨・効果モンスターの効果では破壊されず、効果を無効化されない。
現れる、絶望の魔神、機皇神マシニクル 3！！」

ATK4000

「何！？」

「どうする？」

「俺はスクラップ・ブレイカーを特殊召喚する」

DEF700

「このカードは相手フィールド上にモンスターが存在する場合、特殊召喚できて、この効果で特殊召喚した時、自分フィールドのスクラップと名のついたモンスター1体を発動する。俺はスクラップ・ドラゴンを破壊する」

スクラップ・ドラゴンが破壊される。

（スクラップ・ブレイカーの特殊召喚はメリットになる時に使いたかったが、マシンクルにスクラップ・ドラゴンが吸収される方が厄介だからな……）

「俺はカードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー」

「俺は機皇兵ワイゼルアインを召喚」

ATK1800

「バトル！ワイゼルアインの効果でマシンクルに貫通効果を与え、機皇神マシンクル 3でスクラップ・ブレイカーに攻撃！！
ザ・キューブ・オブ・ディスペア」

マシンクルの攻撃がスクラップ・ブレイカーを破壊し、鉄矢に襲いかかる。

鉄矢

LP4000 700

「くッ！」

「ワイゼルアインでトドメだ」

「聖なるバリア・ミラーフォースを発動」

「マシンクルの効果破壊はできないが、ワイゼルアインは破壊され

る……。

このターンで勝てるかもしれないというつまらん希望を与えてやがって……ターンエンド」

「俺のターン!!」

「俺は死者転生を発動、手札のスクラップ・ソルジャーを捨て、墓地のスクラップ・キマイラを手札に加えて、スクラップ・キマイラを特殊召喚!!」

ATK1700

「キマイラの効果で墓地のスクラップ・ソルジャーを特殊召喚!!」

ATK2100

「レベル5のソルジャーにレベル4のキマイラをチューニング!!シンクロ召喚!スクラップ・ツイン・ドラゴン!!」

「スクラップ・ツイン・ドラゴンの効果発動、俺の伏せカードを破壊、マシニクルと伏せカードを手札に戻す」

「マシニクルの効果発動、手札の機皇帝パーツを墓地に送り、その効果を発動する。」

俺は手札のグランエルTを墓地に送り、スクラップ・ツイン・ドラゴンの効果を無効にする」

「なら、スクラップ・オイルゾーンを発動、墓地のスクラップ・ビーストを特殊召喚する。効果は無効だが……。」

バトル!!スクラップ・ツイン・ドラゴンでマシニクルに攻撃!!」

「攻撃力3000じゃマシンクルに勝てないぞ」

「知るかよ!!速攻魔法、スクラップ・ポリッシュを発動、ビーストを破壊し、このターン、全てのスクラップの攻撃力を1000ポイントアップする!!」

スクラップ・ツイン・ドラゴン

ATK3000 4000

「絶望でも味わってもらうか、マシンクルの効果で墓地の機皇帝パーツを除外して、マシンクルの破壊を無効にする」

「な……」

スクラップ・ツイン・ドラゴンだけが破壊された。

「た……ターン……エンド」

「俺のターン、ドロー」

「フィールド魔法、機動要塞フォルテシモを発動、効果で手札の機械族モンスター1体を特殊召喚する。俺は機皇兵ワイゼルアインを特殊召喚する」

ATK1800

「機皇兵スキエルアインを召喚」

ATK1200

「機皇モンスターが3体以上存在する。

俺は機皇神龍アステリ斯克を特殊召喚!!」

ATK 0

龍というよりワームみたいなモンスターが現れた。

「アステリ斯克は自分フィールドの機皇モンスターの攻撃力の合計分、攻撃力がアップする」

ATK 0 7000

「バトル!! 機皇神龍アステリ斯克でダイレクトアタック」

鉄矢

LP 7000

決勝トーナメント4回戦 シンvsジェシカ

「先輩が……負けた？」

『シン、次は俺達のデュエルだ、行くぞ』

（先輩を倒した相手……いや、今デュエルする相手はその人じゃない）

シンはデュエル場に向かった。

デュエル場では外人の女性が退屈そうに待っていた。

「やっと来たわ……シンだったかしら？」

「始めましょう」

「「デュエル!!」」

「俺のターン」

「俺はガード・オブ・フレイムベルを召喚」

DEF2000

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「私のターン、ドロー」

「私はフィールド魔法、Sin Worldを発動するわ」

(S i n ! ?)

「私はデッキから究極宝玉神レインボー・ドラゴンを墓地に送って、S i n レインボー・ドラゴンを特殊召喚するわ」

A T K 4 0 0 0

美しい翼が白と黒に染まっていて、白と黒の仮面のようなものを付けたレインボー・ドラゴンが現れた。

「さらに、エクストラデッキからサイバー・エンド・ドラゴンを墓地に送って、S i n サイバー・エンド・ドラゴンを特殊召喚するわ」

A T K 4 0 0 0

レインボー・ドラゴンと同じく、白と黒の仮面のようなものを付けたサイバー・エンド・ドラゴンが現れた。

「バトル、S i n サイバー・エンド・ドラゴンで守備表示モンスターに攻撃」

「トラップ発動、チューナーズ・バリアッ……! ? 」

シン

L P 4 0 0 0 2 0 0 0

モンスターは破壊されなかったが、シンはダメージを受けた。

「S i n サイバー・エンド・ドラゴンには貫通効果があるわ」

（貫通効果？OCG効果じゃないのかよ）

『墓地に送って特殊召喚する時点で気づけよ！並べられる時点で気づけよ！』

「ターンエンドよ」

「俺のターン」

「俺はBF・空風のジンを召喚」

ATK600

「古のルールを発動して、真紅眼の黒竜を特殊召喚！！」

ATK2400

「レベル1のガード・オブ・フレイムベルにレベル7のレッドアイズをチューニング！！」

シンクロ召喚！！真紅眼の伝説竜！！」

ATK2500

「真紅眼の伝説竜の効果発動！！墓地のドラゴン族モンスター、ガード・オブ・フレイムベルを除外して、Sinサイバー・エンド・ドラゴンを墓地に送る」

Sinサイバー・エンド・ドラゴンを白い炎が呑み込んだ

「バトル！！空風のジンでSinレインボー・ドラゴンに攻撃！！」

S i n レインボー・ドラゴンの守備力は空風のジンの攻撃力よりも低い、よってダメージ計算を行わず、破壊する!!」

S i n レインボー・ドラゴンは空風のジンに真つ二つにされた。

「真紅眼の伝説竜でダイレクトアタック!!
シャイニング・ヘル・フレア!!」

ジェシカ

L P 4 0 0 0 1 5 0 0

「なかなかやるわね……」

「カードを伏せてターンエンド」

「私のターン、S i n W o r l d の効果でドロウする代わりにデッキからS i n と名のついたモンスターをランダム手札に加えるわ」

「私はエクストラデッキからスターダスト・ドラゴンを墓地に送って、S i n スターダスト・ドラゴンを特殊召喚するわ」

A T K 2 5 0 0

「S i n パラレルギアを召喚」

D E F 0

「レベル8のS i n スターダスト・ドラゴンにレベル2のS i n パラレルギアをチューニング!!次元の裂け目から生まれし闇、時を超えた舞台に破滅の幕を引け!シンクロ召喚!!S i n パラドクス・

ドラゴン!!」

ATK4000

白と黒の体の巨大な竜が現れ、それを見てシンは一言

「なんか、その、カッコ悪いな……」

「見た目なんか気にしなくていいの、Sinパラドクス・ドラゴンの効果、このカードのシンクロ召喚に成功した時、自分の墓地に存在するシンクロモンスター1体を召喚条件を無視して特殊召喚するわ。」

私が選んだのは、スターダスト・ドラゴン」

ATK2500

「バトルよ、Sinパラドクス・ドラゴンで真紅眼の伝説竜に攻撃!!」

「ッ!!」

シン

LP2000 500

「トドメよ、スターダスト・ドラゴンで空風のジンに攻撃」

「トラップ発動、ガード・ブロック!!」
戦闘ダメージを0にし、デッキからカードを1枚ドローする!!」
「その場しのぎね……カードを伏せてターンエンドよ」

（なんとか凌いだか……）

「俺のターン！」

「俺は伏せていた、リビングデッドの呼び声を発動、真紅眼の伝説竜を特殊召喚する！！」

ATK2500

「救世竜セイヴァー・ドラゴンを召喚」

DEF0

「ブースト・ウォリアーを特殊召喚！！」

DEF200

「セイヴァー！？」

「レベル8の真紅眼の伝説竜とレベル1のブースト・ウォリアーにレベル1のセイヴァー・ドラゴンをチューニング！！」

聖なる光に導かれし伝説の竜が次元を超えて現れる、シンクロ召喚！！

煌めけ！！セイヴァー・レジェンド・ドラゴン！！」

ATK3900

体が細長くなり、翼が4枚になったレッドアイズが現れる。

「何よ、そのモンスターは！？」

「バトル！！セイヴァー・レジェンド・ドラゴンでスターダスト・ドラゴンに攻撃！！」

ブラスター・メガ・フレアア！！」

「くっ！！」

ジェシカ

LP1500 100

「セイヴァー・レジェンド・ドラゴンの効果発動、戦闘で相手モンスターを破壊したとき、相手フィールドにモンスターが存在する場合、戦闘で破壊したモンスターの攻撃力をこのカードの攻撃力に加え、そのモンスターに攻撃することができる。」

行け！！ブラスター・メガ・フレア！！」

セイヴァー・レジェンド・ドラゴン

ATK3900 6400

「攻撃力……6400！？」

真紅の炎がパラドクス・ドラゴンを呑み込んだ。

ジェシカ

LP1000

（伏せておいたカードはSin Paradigm Shift…パラドクス・ドラゴンが破壊された時、自分のライフを半分にして、手札・デッキ・墓地からSintウルス・ドラゴンを特殊召喚するカード……ライフが保たなかったわね……）

（なんとか勝てたな）

『俺、何もやってない……』

（お前はいつも、相手の使うカードの効果知ってても教えてくれないだろ！！）

シンは控え室に戻った。

決勝トーナメント4回戦 シンvsジェシカ（後書き）

Sin強いね。

え、シン？弱いだろ。

シン「なんだと！？」

今、セイヴァーがマイブームです。

シン「おい、作者！！」

セイヴァー・デモン強え……。

シン「おい、無視すんな！」

それでは、また。

シン「なんだ……コイツ？」

準決勝 第1戦 徹VS竜騎

次は徹と竜騎のデュエルだ。

2人は控え室を出て、デュエル場に向かった。

（父さんと竜騎のデュエルか）

「デュエル！！」

デュエルが始まった。

「俺のターンだ！！」

先攻は竜騎だ。

「俺は愚かな埋葬を発動、デッキからドラグニティ・フアランクスを墓地に送る。」

ドラグニティ・ドウクスを召喚。

効果でフアランクスを装備」

ATK1500 1900

「フアランクスの効果で装備されているこのカードを特殊召喚する」

ATK500

「レベル4のドウクスにレベル2のフアランクスをチューニング！！シンクロ召喚！！ドラグニティナイト・ガジャルグ！！」

ATK2400

「ガジャルグの効果でデッキからドラグニティ・レギオンを手札に加え、手札のドラグニティ・アキュリスを墓地に送る。
カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「俺は手札抹殺を発動、お互いは手札を全て捨て、捨てた枚数デッキからカードをドローする」

「せっかくサーチしたのに」

2人は手札を墓地に送り、デッキからカードをドローした。

「俺はジャンク・フォアードを特殊召喚。」

このカードは自分フィールドにモンスターが存在しない場合、特殊召喚できる」

DEF1500

「ジャンク・フォアードをリリースし、サルベージ・ウォリアーをアドバンス召喚」

ATK1900

「サルベージ・ウォリアーはアドバンス召喚に成功した時、手札・墓地からチューナーを1体特殊召喚できる。

俺は墓地から極星霊デックアールヴを特殊召喚する」

ATK1400

「レベル5で攻撃力1400!?
いったいどんな効果が……」

「俺はサルベージ・ウォリアーのレベルを1つ下げ、レベル・ステ
イラーを特殊召喚」

ATK600

「レベル4になったサルベージ・ウォリアーとレベル1のレベル・
ステイラーにレベル5の極星霊デッキアールヴをチューニング!!
星界より生まれし気まぐれなる神よ、絶対の力を我らに示し世界を
笑え!!シンクロ召喚!!
光臨せよ、極神皇ロキ!!」

ATK3300

「バトル!!極神皇ロキでガジャルグに攻撃!!ヴァニティバレッ
ト!!」

「待っていたぜ!!リバースカードオープン、次元幽閉!!除外す
れば神も復活しない!!」

「甘かったな、極神皇ロキの効果発動、このカードの攻撃宣言時、
相手が発動した魔法、罠を無効にし破壊する」

「な……」

次元幽閉は無効にされ、ガジャルグは戦闘で破壊された。

竜騎

LP 4000 3100

「カードを伏せてターンエンド」

「俺のターンだ!!」

「俺はデブリ・ドラゴンを召喚」

DEF 2000

「デブリ・ドラゴンの効果で墓地のスノーマンイーターを特殊召喚」

DEF 1900

「レベル3のスノーマンイーターにレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング!!」

シンクロ召喚!! 氷結界の龍グングニール!!」

ATK 2500

「グングニールの効果発動、1ターンに1度、手札を2枚まで墓地に送り、墓地に送った枚数、相手フィールド上に存在するカードを破壊する。」

俺は手札を2枚捨て、ロキと伏せカードを破壊する!!」

グングニールが出した無数の氷弾がロキと伏せカードを破壊した。

「バトル!! グングニールでダイレクトアタック!!」

徹

LP 4000 1500

「今のは効いたぞ……」

「カードを伏せてターンエンド」

「エンドフェイズにロキは復活する」

次元の裂け目のような場所からロキが出てきた。

「ロキが自身の効果で復活した時、墓地の罨カード1枚を手札に加える。」

俺は極星宝レーヴァテインを手札に加える」

「くそっ、どうすれば……」

「俺のターン」

「俺は極星天ヴァルキュリアを召喚」

ATK 800

「ヴァルキュリアの召喚に成功した時、手札を2枚墓地に送り、エインヘリアル・トークンを2体特殊召喚する」

DEF 1000 x2

「レベル4のエインヘリアル・トークン2体にレベル2の極星天ヴ

アルキュリアをチューニングー！！

北辰の空にありて、全知全能を司る神よ！！今こそ、星界の神々を束ね、その威光を示せ！！シンクロ召喚！！

天地神明を統べよ、最高神、極神聖帝オーディン！！」

ATK4000

「で……でかい……」

竜騎はその大きさに驚いていた。ビルよりも数倍巨大な神に……

「極神聖帝オーディンの効果発動、自分の幻神獣族モンスターはエンドフェイズまで魔法、罠の効果を受けない。

インフルエンス・オブ・ルーン」

「バトル！極神聖帝オーディンでグングニールに攻撃！！
ヘヴンスジャッジメント！！」

「リバーカードオープン、ガード・ブロック、戦闘ダメージを0にしてカードを1枚ドロウする！」

（頼む…何か、逆転できるカードを……）

竜騎が引いたカードは死者蘇生だった。

（今頃来ても……前のターンに来てたら勝てたのに……）

「極神皇ロキでダイレクトアタック！！
ヴァニティバレット！！」

竜騎
LP31000

準決勝 第2戦 聡vsシン

竜騎が負けた。

『次は俺達だぞ』

「わかってるよ」

シンはデュエル場に向かった。

「……竜騎」

デュエル場に向かう途中で竜騎とすれ違った。

「流石、神だ……全然通用しなかったよ……勝てよ」

「……絶対勝つてやるよ」

「「デュエル!!」」

先攻はシンだ。

「俺のターン」

「俺は手札を捨て、THEトリッキーを特殊召喚する」

ATK2000

「トリツキーのレベルを1つ下げ、レベル・スティーラーを特殊召喚」

ATK600

「真紅眼の飛竜を召喚」

ATK1800

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「俺のターン、ドロー」

「俺は機皇兵グランエルアインを召喚」

ATK1600

「グランエルアインの効果発動、トリツキーの攻撃力を半減させる」

THE トリツキー

ATK2000 1000

「バトル！！グランエルアインでトリツキーを攻撃」

「永続トラップ発動、血の代償。

相手のバトルフェイズにも効果が使える！ライフを500払って、モンスター3体を生け贄に捧げ、オベリスクの巨神兵を召喚！！」

シン

LP 4000 3500

ATK X000 2000

空が青く染まり、青い巨人が現れる。

「神！？くッ、カードを伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「死者蘇生を発動して、トリッキーを特殊召喚」

ATK 2000

「トリッキーのレベルを下げて、墓地のレベル・ステイラーを特殊召喚」

ATK 600

「黒竜の雛を召喚」

ATK 800

「血の代償でライフを払い……」

シン

LP 3500 3000

「3体を生け贄に捧げ、ラーの翼神竜を召喚！！」

ATK? 3400

「2体目の神!?!」

「バトル!!オベリスクでグランエルアインに攻撃!!
ゴッドハンド・クラッシャー!!」

聡

LP4000 1400

「くッ、罠カード、機皇創世を発動!!手札のワイズ・コア、スカ
イ・コア、グラント・コアを墓地に送り、機皇神マシニクル 3を
特殊召喚する!!」

ATK4000

(攻撃力がオベリスクと互角、相討ちしても効果で生き残るから)

「ターンエンド」

「俺のターン、ドロー」

「俺は天よりの宝札を発動、お互いは手札が6枚になるようカード
をドローする」

シン

手札0 6

聡

手札1 6

「俺は機動要塞フォルテシモを発動、効果で手札のレベル4以下の機械族モンスターのスキエルアインを特殊召喚」

ATK1200

「ワイゼルアインを召喚」

ATK1800

「機皇モンスターが3体以上存在することにより、手札から機皇神龍アステリスクを特殊召喚する！！」

「攻撃力は自分の場の機皇モンスターの攻撃力の合計になる」

「手札からエフェクト・ヴェーラーを捨てて、アステリスクの効果を終ドフェイズまで無効にする」

「ならマシニクルでラーの翼神竜に攻撃！！
ザ・キューブ・オブ・デイスペアー！！」

シン

LP3000 2400

「カードを3枚伏せてターンエンド」

機皇神龍アステリスク

ATK0 7000

「俺のターン」

「俺は古のルールを発動し、レッドアイズを特殊召喚」

ATK2400

「レッドアイズのレベルを下げて、レベル・スティーラーを特殊召喚」

ATK600

「仮面竜を召喚」

ATK1400

「血の代償の効果でライフを払いモンスターを3体生け贄に捧げ」

シン

LP2400 1900

「オシリスの天空竜を召喚」

ATK3000

2つの口を持つ、胴長の赤い竜が現れる。

「貪欲な壺を発動、墓地のモンスター5体をデッキに戻して、2枚ドローする」

オシリスの天空竜

ATK3000 4000

「バトル！！オベリスクでワイゼルアインを攻撃！！
ゴッドハンド・クラッシャー！！」

「畏カード、機皇廠、墓地の機皇兵、グランエルアインを手札に加え、
攻撃対象にされたワイゼルアインを破壊する」

機皇神龍アステリスク

ATK7000 5200

「ならオベリスクでスキエルアインに攻撃」

「機皇廠を発動、墓地の機皇兵ワイゼルアインを手札に加え、スキ
エルアインを破壊する」

機皇神龍アステリスク

ATK4000

（よく考えたら、相手の墓地に機皇帝パーツが無い……行ける！！）

『今頃かよ……』

「オベリスクの巨神兵で機皇神マシンクル 3に攻撃！！
ゴッドハンド・クラッシャー！！」

「迎え撃て、マシンクル！！ザ・キューブ・オブ・ディスペアー！
！」

2体のモンスターが相殺する。

「しまった！？パーツが無い！！
マシニクルが……」

機皇神龍アステリスク

ATK 4000

「オシリスの天空竜で機皇神龍アステリスクに攻撃！！
サンダー・フォース！！」

聡

LP 1400

決勝戦 徹vsシン

決勝戦が始まるうとしていた。

シンは目の前の相手は自分の父親だった。

「お前がここまで勝ち残れるとは思ってもいなかったぞ、シン」

「俺もだよ、父さん」

「じゃあ始めるか」

「「デュエル!!」」

先攻は徹だ。

「俺のターン」

「俺はジャンク・フォアードを特殊召喚」

DEF1500

「さらに、切り込み隊長を召喚」

ATK1200

「切り込み隊長の召喚に成功した時、手札のレベル4以下のモンスター1体を特殊召喚できる。」

俺は極星獣グルファクシを特殊召喚」

ATK1600

神の召喚条件は揃った。

「もう神かよ……」

シンは小さく呟いた。

「俺はレベル3のジャンク・フォアードと切り込み隊長にレベル4の極星獣グルファクシをチューニング!!」

星界の扉が開くとき、古の戦神がその魔鎚を振り上げる。大地を揺るがし轟く雷鳴とともに現れよ。

シンクロ召喚!! 光臨せよ、極神皇トール!!」

ATK3500

「カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン」

「俺はアンノウン・シンクロンを特殊召喚」

DEF0

「古のルールを発動して、レッドアイズを特殊召喚!!」

ATK2400

「レベル7のレッドアイズにレベル1のアンノウン・シンクロンをチューニング!!」

シンクロ召喚！！真紅眼の伝説竜！！」

ATK2500

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「俺は手札抹殺を発動、お互いは手札を全て捨て、捨てた枚数デッキからカードをドローする」

「俺は0枚だ」

徹だけが手札を捨て、ドローした。

「極神皇トールのレベルを1つ下げ、レベル・ステイラーを特殊召喚」

ATK600

「レベル・ステイラーをリリースし、サルベージ・ウォリアーをアドバンス召喚」

ATK1900

「サルベージ・ウォリアーの効果で墓地の極星霊デッキアールヴを特殊召喚」

ATK1400

「デッキアールヴのレベルを1つ下げ、レベル・スティーラーを特殊召喚」

ATK600

「レベル5のサルベージ・ウォリアーとレベル1のレベル・スティーラーにレベル4のデッキアールヴをチューニング！」

星界より生まれし気まぐれなる神よ、絶対の力を我らに示し世界を笑え！！シンクロ召喚！！光臨せよ、

極神皇ロキ！！」

ATK3300

「手札からエフェクト・ヴェーラーを捨て、ロキの効果が無効にする」

「バトル！！極神皇ロキで真紅眼の伝説竜に攻撃！！
ヴァニティバレット！！」

「トラップ発動、亜空間物質転送装置！
レジェンド・ドラゴンをエンドフェイズまでゲームから除外する」

「ならロキでダイレクトアタック！！」

「トラップ発動、ガード・ブロック！！
戦闘ダメージを0にして、1枚ドロ」

「トールでダイレクトアタック！！
サンダー・パイル！！」

「手札からバトル・フェーダーを特殊召喚し、バトルフェイズを強制終了させる」

DEF0

「ならターンエンドだ」

「レジェンド・ドラゴンはフィールドに戻る」

「俺のターン」

「俺は天よりの宝札を発動、お互いは手札が6枚になるようにドロ―する。」

俺はグローアップ・バルブを召喚」

DEF100

「レベル1のバトル・フェーダーにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！！シンクロ召喚！！
フォーミュラ・シンクロン！！」

DEF1500

「フォーミュラ・シンクロンの効果発動、1ターンに1度、デッキからカードを1枚ドローできる」

「クリアマインド！！」

「何！？」

「レベル8、シンクロモンスター、真紅眼の伝説竜にレベル2、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロンをチューニング！絡み合う運命が、幻の竜を呼び覚ます……」

フォーミュラ・シンクロンが光の輪になり、それに向かい、レジエンド・ドラゴンは飛翔する。

「アクセルシンクロオオオオオオ！」

光の輪と竜が消える。

「光臨しろ！！ミラージユ・デステニー・ドラゴン！！」

雲が晴れ、光り輝く竜が舞い降りた。

DEF 2200

「カードを2枚伏せてターンエンド」

「俺のターン」

「俺は極星天ヴァルキュリアを召喚」

ATK 800

「ヴァルキュリアの召喚に成功した時、手札を2枚墓地に送り、エインヘリアル・トークンを2体特殊召喚できる」

ATK 1000 x 2

「レベル4のエインヘリアル・トークン2体にレベル2の極星天ヴアルキュリアをチューニング！！
北辰の空にありて、全知全能を司る神よ！今こそ、星界の神々を束ね、その威光を示せ！！シンクロ召喚！！
天地神明を統べよ、最高神、極神聖帝オーデイン！！」

ATK4000

「永続トラップ発動、希望の宝札。
手札を1枚捨てて発動する。自分のドローフェイズにカードを2枚ドローできる。
自分のターンのエンドフェイズに手札を1枚墓地に送らなければ、このカードを破壊する」

シンは発動コストで手札の1枚を墓地に送った。

「バトル！！極神皇ロキでミラージユ・デステイニー・ドラゴンに攻撃、ヴァニティバレット！！」

「墓地のネクロ・ディフェンダーの効果発動、墓地に存在するこのカードを除外することで、このターン、ミラージユ・デステイニー・ドラゴンは戦闘では破壊されない」

ロキの攻撃をネクロ・ディフェンダーが防ぐ。

「ならカードを伏せてターンエンドだ」

「俺のターン」

「俺はアクセル・ブラストを発動、エクストラデッキからシューテ

イング・スター・ドラゴンを墓地に送り、ミラージュ・デステイニー・ドラゴンの攻撃力をエンドフェイズまで1000ポイントアップさせる!!」

ミラージュ・デステイニー・ドラゴン

ATK 3300 4300

「神の攻撃力を上回ったと!?」

「ミラージュ・デステイニー・ドラゴンの効果発動、墓地のシューティング・スターの効果を得て、発動、デッキの上からカードを5枚確認して、その中のチューナーの数、このターン攻撃できる!!」

ミラージュ・デステイニー・ドラゴンがシューティング・スター・ドラゴンの姿になる。シンはデッキトップからカードを5枚引き、確認する。

「俺が引いたカードのチューナーは3枚、よって3回の攻撃ができる!!」

デステイニー・ミラージュ!!」

シューティング・スターの姿になった、ミラージュ・デステイニーが3体に分身する。

「1回目のバトル!! 極神皇ロキに攻撃!!」

「くッ!!」

徹

LP 4000 3000

「2回目のバトル！！極神皇トールに攻撃！！」

徹

LP3000 2200

「3回目のバトル！！極神聖帝オーディンに攻撃！！」

徹

LP2200 1900

「なかなかやるじゃないか」

「カードを伏せて、エンドフェイズに希望の宝札の維持コストに手札を捨てて、ターンエンド」

ミラージュ・デステイニー・ドラゴン

ATK4300 3300

「エンドフェイズに神は復活する」

次元の裂け目のような場所からロキが現れたかと思うと、トールもオーディンもいつの間にか姿を現していた。

「極神皇ロキの効果で、極星宝グングニルを手札に加える。

極神皇トールの効果で相手ライフに800ポイントのダメージを与える」

トールの出した雷がシンを襲う。

「うわあああああ！！！」

シン

LP 4000 3200

「極神聖帝オーデインの効果でカードを1枚ドロ―！
そして俺のターン」

「極神皇トールの効果発動、相手モンスター1体の効果を無効にする」

「ミラージュ・デステイニー・ドラゴンの効果発動！！
このカードをゲームから除外して、このターン相手モンスター1体の攻撃を無効にする！！
オーデインの攻撃を無効！！」

ミラージュ・デステイニー・ドラゴンがそこに存在しなかったかのように消える。

「なら、極神皇ロキでダイレクトアタック！！
ヴァニティバレット！！」

「バトル・フェーダーを特殊召喚！！
バトルフェイズを強制終了させる！！」

「なら、神の桎梏グレイプニルを破壊、神が存在する時、極星邪狼フェンリルを手札に加える。

極星邪狼フェンリルをお前のフィールドに守備表示で特殊召喚」

DEF 4000

「俺のフィールドに攻守4000のモンスターを!？」

「そのカードはバトルフェイズに自分フィールドのカードを全て攻撃表示にする。」

そして、極星邪竜ヨルムンガンドをお前のフィールドに守備表示で特殊召喚、このカードは攻撃表示になった時、プレイヤーは3000ポイントのダメージを受ける」

DEF3000

尻尾から自身を呑み込もうとしているような竜が現れる。

「さあ、どうする？カードを2枚伏せてターンエンド」

「くッ!!俺のターン!!」

シンは希望の宝札の効果で2枚カードをドローした。
その中に黄色いカードが見える。

(やっと来た)

『ようやく神を引いたか……』

「俺は極星邪狼フェンリルと極星邪竜ヨルムンガンドとミラーージュ・デステイニー・ドラゴンを生け贄に捧げ、ラーの翼神竜を召喚!!」

黄金の神の竜が舞い降りる。

「ラーの攻撃力は生け贄に捧げたモンスターの攻撃力の合計の数値になる」

ATK 10300

「バトル！！ラーで極神聖帝オーデインに攻撃！！ゴッドブレイズ・キャノン！！」

ラーが口から炎の塊を吐く。

「惜しかったな、オーデインを選択して極星宝メギンギョルズを2枚発動。」

選択したモンスターの攻守をエンドフェイスまで倍にする」

極神聖帝オーデイン

ATK 4000 8000 16000

「な……」

『まだだ、トラップを発動しろ！！』

「トラップ発動！！」

レッドアイズ・フォース！！自分フィールド上のモンスターの攻撃宣言時に攻撃対象のモンスターの攻撃力が変化した場合、発動できる。

攻撃宣言した自分のモンスターをリリースし、自分の手札・デッキ・墓地から真紅眼の黒竜を特殊召喚する」

ATK 2400

真紅の瞳の黒い竜が現れ、目の前の巨大な神を睨みつける。

「そして、この効果で特殊召喚された真紅眼の黒竜は、攻撃対象にした相手モンスターの攻撃力分、攻撃力を加え、そのモンスターと戦闘を行う!!」

レッドアイズ

ATK 2400 18400

「攻撃力……18400!？」

「行け!! ダーク・メガ・フレア!!」

レッドアイズの黒い炎がオーディンの槍、グングニルを焼き尽くし、オーディンの体も焼き尽くす。

徹

LP 1900 0

「勝った……?」

シンは勝った事が信じられず、しばらく立ち尽くしていた……。

決勝戦 徹vsシン（後書き）

シンは負ける予定だったのですが勝ってしまいました。

極星邪竜ヨルムンガンドの攻撃力が不明だったのですが、極星邪狼フェンリルの攻守が4000なのでヨルムンガンドの攻守は3000って事にしました。

ラーが……ラーが無意味に出てしまった！！

地獄の学校生活

バトルシティが終わりしばらく経ち、もう2月も終わろうとしていた。

「もう……嫌だ!!」

シンは少し前から、そんな事を言っている。

何故なら

優勝した 女子からの人気爆発 追っかけられる 逃げろおおお

!!

という事だ。

アカデミアの女子の3分の1ほどがシンのファンになっていた。

男子からは嫉妬の目で見られる。

唯一竜騎だけは、シンが女性恐怖症になるんじゃないかと心配している。

シンは放課後、逃げるようにアカデミアを出た。

『シン、なんで逃げるんだ？

男はモテたいんじゃないのか？』

（お前なー、俺は別にモテたいんじゃないやなくてな……）

『珍しいな!!世界中の全ての女を俺の女にしてやるって奴も居るんだぞ!!』

（そういう奴も居るけど、俺は違っぞ!）
『そうなのか……』

（そういえば、お前ってカードの精霊？）

『そうだが……突然どうした？』

（いや、本物の悪魔だと思ってたからさ）

『前世はそうだが……』

（そうか、ならいいや）

シンは家に向かって全速前進した。

ある薄暗い店に1人の男が入ってきた。

「おい、居るか？」

すると店には、体の細いひよろつとした男が居た。

「おやおや、聡様、ようやくお帰りになられましたか……久しぶりの祖国はいかがでしたか？」

「楽しかったな、あとこれは返す」

聡はカードを男に渡す。

「機皇シリーズのカードをですか！？」

「俺には必要無い」

そう言うと、聡は店から出て行った。

数日経った、ある日の昼休み、シンはダンボールに隠れていた。するとダンボールが突然、持ち上げられた。

「!」

「何をしてるんだ？」

龍一だった。

「デジャヴ」

シンはそう言うと、全速力で走り去った。

「どうしたんだ？」

数秒後、龍一は女子軍団に踏み潰されていた……。

「あれは流石に可哀想だな……」

竜騎はシンの様子を遠くから眺めていた。

「大人しい子が多ければな……あれは流石に周りも迷惑だろ、そして周りの怒りはシンに集まり、シンがボコボコに……まあ、シンが

学校がこんなに嫌になったのは初めてだって言ってたしな……」

「竜騎先輩!!」

流也だ。

「どうした？」

「シン先輩の事です……女子達にはちょっと自重して欲しいッスね」

「あれはおかしい。絶対おかしい」

「みんなナンバーズ持ってた……」

「その発想は無かった!!」

「「無いな」」

2人はそう思ったが

「もしかしたら……」

シンは女子軍団から逃げ続けていた。

「もう……無理」

元々体力の少ないシンに限界が近づいていた。

後ろを確認すると、一部の女子は諦めたのか数が減っていた。
前を見ると、竜騎と流也が居た。

「シン、後は任せろ」

「大丈夫スカ？先輩」

「お前ら……ありがとう」

数秒後、シンには後ろから2人の悲鳴が聞こえた。

「お前らの死は無駄にしない……」

『勝手に殺すなよ……』

しばらくして……

『シン、向こうからも来てるぞ』

「挟み撃ちだと！？ならば！！」

シンは2階の窓から飛び降りた。

「来い！！レッドア……」

（ここでレッドアイズを実体化させて乗ったらいろんな意味でヤバ
い！）

シンは悲鳴をあげ、地面に落ちた。

『馬鹿！！痛いだろうが！！』

（こんぐらい我慢し……ろ……）

『しかし……しつこいな』

すると、1人の女子生徒が来た。

「シン様！！大丈夫ですか？」

（なんだ……コイツ？）

『流石はBBAだな！！』

（え？）

『え？』

「あの……どうかされましたか？」

「いや、そっぴや誰？」

「わたくし、金堂御子と申します」

聞いた事がある名前だった。

オベリスクブルー3年で、成績優秀、だがあまり良い噂は聞かない。一部の男子からDS女王とか呼ばれている……が、イメージとは違って、女王というより、お嬢様タイプの女性だ。

（どうする……？）

『とりあえず用事があるからって言えば?』

「すみません、用事があるんで失礼します……」

シンが離れようとすると、腕を掴まれた。

「お待ち下さい」

（捕まったー）

『orz』

（どーしょ?）

『H A N A S E ! っ て 言 え ば ? 』

（放してくれない気がする）

『俺はロリコンだ!! っ て 言 え ば ? 』

（社会的にヤバイ…… っ て か お 前 ロ リ コ ン だ ろ ? ）

『俺の好みがバレてしまったか……』

（なんか簡単に認められるとつままないなー）

シンは今はそのごろじゃないと思っていると。

「シン、大丈夫?」

「え？」

「どういう状況スカ？」

空と竜騎と流也が来た。

「すみません、俺、あいつらと約束してたんです」

御子は手を放した。

「……助かった」

シンは向こうに聞こえないように言った。

「ふ……ふふふ……」

御子の表情が変わった。

「シン様をわたくしの奴隷にして差し上げましょうと思っていました……」

「やややババって」

「シン、ここを離れよう」

すると、御子は空に近づき

「そういえばアナタ、シン様と随分と仲がよろしいようね。
イジメられちゃっわよ」

「え……？」

「な……、そこまでするんスカ!？」

「するわよ、昔からイライラしてたの」

「お前!! デュエルしろ!!」

竜騎の怒りが爆発する。

「良いわ、受けてあげる」

「デュエル!!」

地獄の学校生活（後書き）

こんな学校は嫌だ！！と思いました。
可哀想だが、シンをイジメよう！！

シン「意味不明」

作者「墓地のエフェクト・ヴェーラーとクリボーを除外して、カオス・ソルジャー開闢の使者！！」

シン「なんで禁止から制限になったんだー！！」

作者「お前の場にはレッドアイズが2体、伏せカード・手札無し、俺の場には開闢と手札にオネストだ」

シン「orz」

竜騎VS御子

「デュエル!!」

先攻は御子だ。

「わたくしのターン、ドロ」

「わたくしはモンスターを伏せ、カードを伏せてターンエンド」

「俺のターンだ」

(手札にフアランクスが無いな……)

「俺はドラグニティ・アキュリスを召喚」

ATK1000

「アキュリスの効果で手札のドラグニティ・ミリトゥムを特殊召喚して、アキュリスを装備」

ATK1700

「ミリトゥムの効果で装備されているアキュリスを特殊召喚。レベル4のミリトゥムにレベル2のアキュリスをチューニング!!シンクロ召喚、ドラグニティナイト・ガジャルグ!!」

ATK2400

「バトル！！ガジャルグで伏せモンスターに攻撃！！」

伏せモンスターが表側表示になり、姿が現れる。

「しまった！？ジャイアントウィルス！！」

竜騎

LP 4000 3500

「そう、このカードが戦闘で破壊された時、相手に500ポイントのダメージ、さらに自身のデッキからジャイアントウィルスを任意の枚数攻撃表示で特殊召喚……ふふふ……」

ATK 1000 × 2

（ヴァジュランダを出した方がダメージを受けなかったし、ライフを200まで削れた……）

「俺はこれでターンエンド」

「ふふふ……わたくしのターン、ドロー」

「わたくしはゾンビ・キャリアを召喚」

ATK 400

「ふふふ……わたくしの邪魔をするアナタを許さない……わたくしは3体のモンスターをオーバーレイ、3体のモンスターでオーバーレイ・ネットワークを構築、エクシーズ召喚！！
現れよ、No.96ブラック・ミスト」

「ナンバーズ!？」

「ふふふ……アナタもすぐにわたくしの奴隷にして、その後に愛しのシン様も……ふふふ」

狂気の笑みを浮かべながらそんな事を言う御子にシンは言った。

「奴隷は嫌だ……なりたくないいいいい!!」

『何言つてんだ!？』

(スマン、なんか言ってみたかった)

「ふふふ……シン様もそんな胸も無く、成績も普通の女なんかよりも、わたくしのように成績優秀、美しい女性と一緒に居た方がよろしいわよ？」

それに男は胸が大きな女性の方がよろしいのでしょうか？」

「うわっ!!ナルシですか!？」

流也は引いていた。

「む、胸が無いって／＼／」

空は身体を気にして、頬を赤らめながら言う。

シンは反応に困っていた。

(どーしょ?)

『とりあえず、あのセリフを使え』

わかったと答え、シンは一言。

「デカけりや良いってもんじゃ無い」

「『『え!?!』』」

全員の反応にシンは意味が分からず

「え?」

「せ、先輩、何言ってるんスか!?!」

そして竜騎は

「お前、なにさり気なく貧乳派ですってアピールしてんだよ!?!」

シンは慌てて

「あつ違う!! AIBOが勝手に!」

と言った。

『人のせいにするな』

(黙れ、ロリコン悪魔!?!)

『すいません』

「まあ良いですわ、バトル、ブラック・ミストでガジャルグに攻撃」

「攻撃力100のモンスターで!？」

「ブラック・ミストの効果発動、このカードがバトルする時、オーバレイ・ユニットを1つ取り除く事で相手モンスターの攻撃力を半分にして、その数値分このカードの攻撃力をアップさせる……ふふふ、苦しみなさい」

ドラグニティナイト - ガジャルグ

ATK 2400 1200

No. 96 ブラック・ミスト

ATK 100 1300

「しまった!？」

竜騎

LP 3500 3400

「カードを2枚伏せ、ターンエンド」

「俺のターンだ」

「俺はドラグニティ・ブランディストックを召喚」

ATK 600

「ブランドイストックをリリースして、ドラグニティアームズ・ミスティルを特殊召喚！
ファランクスを装備」

ATK2100

「ファランクスの効果で装備されているこのカードを特殊召喚する！！」

ATK500

「レベル6のミスティルにレベル2のファランクスをチューニング！！」

シンクロ召喚、ウィンド・マスター・ドラゴン！！」

ATK2800

「バトル！！ウィンド・マスター・ドラゴンでブラック・ミストに攻撃！

このカードが戦闘を行う相手モンスターの効果はリバーズ効果でも無効になる」

「ブラック・ミストを対象にハーフ・アンブレイクを発動、このターン対象モンスターは戦闘では破壊されなくなり、ダメージも半分になりますわ」

御子

LP4000 3250

「破壊出来ないのかよ、カードを伏せてターンエンド」

(まあ、次のターンで倒せるな)

「わたくしのターン、ドロ―」

「わたくしはレインボー・ヴェールをブラック・ミストに装備」

「流石に予想外」

竜騎はレインボー・ヴェールが装備モンスターと戦闘を行う相手モンスターの効果を無効にするカードだと知っていたが、まさか使う人が居たとは思っていなかった。

「バトル、ブラック・ミストでウィンド・マスター・ドラゴンに攻撃、ふふふ……レインボー・ヴェールの効果でアナタのモンスターの効果は無効、ブラック・ミストのオーバーレイ・ユニットを1つ取り除いて効果発動」

ウィンド・マスター・ドラゴン

ATK 2800 1400

ブラック・ミスト

ATK 1300 2700

「くッ!!」

竜騎

LP 3400 2100

「ターンエンド」

「俺のターンだ」

「俺は救世竜セイヴァー・ドラゴンを召喚」

ATK0

「ふふふ……アナタ、諦めなさい。
すぐに楽になりますよ？」

「俺はワンショット・ブースターを特殊召喚」

ATK0

「さらに、リビングデッドの呼び声を発動、墓地のウィンド・マスター・ドラゴンを特殊召喚」

ATK2800

「どのモンスターで攻撃しても、アナタのライフは0になり、ワンショット・ブースターの効果は発動できないですわね。
ふふふ……諦めてわたくしの奴隷になりなさい」

「諦める以前にこのターンで俺の勝ちだしな……」

余裕の表情で竜騎は言う。

「ならそれを証明してもらいましょうか」

「いいぜ、俺はレベル8のウィンド・マスター・ドラゴンとレベル

1のワンショット・ブースターにレベル1のセイヴァー・ドラゴン
をチューニングー！

希望を導く風が、新たな力に変わる。

シンクロ召喚ー！導け、セイヴァー・ウィンド・ドラゴンー！

ATK4000

細長い身体をした4枚の翼を持つ、緑色の竜が現れる。

「このカードは相手フィールド上に表側表示で存在する全てのカードの効果を無効にし、無効にした数だけ相手モンスター1体の攻撃力を1000ポイントダウンさせる。

ブラック・ミストとレインボー・ヴェールの効果を無効にして、ブラック・ミストの攻撃力を2000ポイントダウンさせる」

No.96 ブラック・ミスト

ATK2700 700

「わたくしの……負け！？」

「そうだ」

セイヴァー・ウィンド・ドラゴンがブラック・ミストの身体を貫いた。

御子

LP3250 0

「シン、行くぞ」

「ああ」

「そういえば、お前はなんで女子から追われるようになったんだ？」

「うーん、最初は昼休み腹減ってた時に1人、俺に弁当食べてく
さいって言うてきたんだ。」

それで貰おうとしたら、周りに居た女子が私のも私のもって言うて
きて、逃げた。

それから毎日あれだ」

「なんか……可哀想だな」

そして、校舎に戻ったシンにまた地獄が始まる。

シンvs竜騎 前編

卒業式が終わり、3年生は卒業した。

気がつくと、終業式も終わり、春休みになっていた。

「平和だー」

シンは春休みになって地獄から解放されたのか、そんな事を言う。
シンの隣に居た空が

「シン？」

「ん？」

「そういえばさ、クリスマスに私の事好きだけど……って言ったよね？」

「うん」

「それってどういう意味だったのかなって思って……」

シンは少し考えてから言った。

「さっぱり意味が分からんぞ」

「あう……ならlikeかloveならどっち!？」

「ええ?」

シンは戸惑った。

(どーしょ)

『自分の気持ちを正直に』

(実は妹みたいにしかなってませんでしたなんて本人に言えない)

『うわぁ、そりゃ言えないな』

そしてシンが取った行動は……

「ラ……」

すると

「待ってください!!」

そこにはメガネを掛けた少女が居た。

その少女を見て、シンと空は顔を見合わせてから言った。

「誰? ストーカー?」

「ストーカーじゃありません!!」

電柱などに隠れながら、付いて来てただけです!!」

シンはため息をついてから言った。

「世間ではそういう奴の事をストーカーって言っただぞ?」

「違います!! 私はストーカーじゃないです!!」

「ダメだ……コイツは重症だ。
相手にするだけ無駄だ、よって逃げるぞ」

シンは空の腕を掴んで逃げ出した。

1人取り残されたメガネの少女は

「そんなに恥ずかしがらなくても……」

と言っていた。

2人は竜騎の所に逃げていた。

「ストーカーが居た!!」

「物騒な世の中になったな」

竜騎はどーでも良さそうに言う。それから

「それより、久しぶりにデュエルしようぜ」

「別にいいけど」

2人はデュエルディスクを構える。

「デュエル!!」

先攻はシンだ。

「俺のターン」

「俺は黒竜の雛を召喚、黒竜の雛を墓地に送り、真紅眼の黒竜を特殊召喚！！」

ATK2400

「カードを2枚伏せて、ターンエンド」

「俺のターンだ」

「俺はモンスターを伏せてターンエンド」

「俺のターン」

（伏せモンスターだけとか誘ってるだろ……）

「俺はランス・リンドブルムを召喚」

ATK1800

「バトル！！ランス・リンドブルムで伏せモンスターに攻撃。

このカードは貫通効果がある。シールド・ウィングなんか無駄だあ！！」

ランス・リンドブルムが攻撃しようとする、何か雪だるまのような物が出現した。

シン

LP4000 3900

「え？」

「スノーマンイーターの守備力は1900だぞ？スノーマンイーターの効果でレッドアイズを破壊する」

レッドアイズが喰われた。

「た、ターンエンド」

「俺のターンだ」

「俺はデブリ・ドラゴンを召喚」

ATK1000

「墓地に攻撃力500以下はないからそのまま、レベル3のスノーマンイーターにレベル4のデブリ・ドラゴンをチューニング！！シンクロ召喚！！」

氷結界の龍グングニール！！」

ATK2500

「グングニールの効果発動して手札2枚を墓地に送って、ランス・リンドブルムと左の伏せカードを破壊する！」

グングニールが出した氷弾にランス・リンドブルムは抵抗すらできずに破壊された。

「グングニールでダイレクトアタック！」

無数の氷弾がシンに降り注ぐ。

シン

LP 3900 1400

「俺はこれでターンエンドだ」

「俺のターン」

「俺はアンノウン・シンクロンを特殊召喚」

DEF 0

「思い出のブランコを発動して、墓地のレッドアイズを特殊召喚」

ATK 2400

「グローアップ・バルブを召喚」

ATK 100

「ブースト・ウォリアーを特殊召喚」

DEF 200

「レベル1のブースト・ウォリアーにレベル1のグローアップ・バルブをチューニング！」

シンクロ召喚、フォーミュラ・シンクロン」

DEF1500

「フォーミュラ・シンクロンの効果で1枚ドロ」

「レベル7のレッドアイズにレベル1のアンノウン・シンクロンをチューニング!!」

シンクロ召喚、真紅眼の伝説竜」

ATK2500

白い炎を身に纏った真紅眼の黒竜が現れる。

「真紅眼の伝説竜の効果で墓地の黒竜の雛を除外して、グングニルを墓地に送る」

白い炎がグングニルを焼き尽くす。

「クリアマインド!!」

レベル8、シンクロモンスター、真紅眼の伝説竜にレベル2、シンクロチューナー、フォーミュラ・シンクロンをチューニング!!
絡み合う運命が幻の竜を呼び覚ます。

アクセルシンクロ!!

ミラージュ・デステイニー・ドラゴン!!」

ATK3300

光り輝く竜が現れた。

「バトル!!」

シンvs竜騎 前編（後書き）

シン「前編と後編に分ける必要あるか？これ」

竜騎「さっぱり意味が分からんぞ！！」

シン「今日、ギリギリだったからか？」

竜騎「そついや最近はず2日に1話になりつつあるからな」

シンvs竜騎 後編（前書き）

ゴメンナサイ遅れました。

シンvs竜騎 後編

「バトル!!」

ミラージュ・デステイニー・ドラゴンでダイレクトアタック!!」

「こりゃデカいな」

竜騎

LP 4000 700

「ターンエンド」

「俺のターンだ」

「俺はドラグニティ・ファランクスを召喚、ファランクスをリリースして、ドラグニティアームズ・ミスティルを特殊召喚、ファランクスを装備」

ATK 2100

「ファランクスの効果で装備されているこのカードを特殊召喚」

ATK 500

「速攻魔法、地獄の暴走召喚を発動!!
ファランクスを2体特殊召喚」

ATK 500 x2

「スカレ出すの？」

「お楽しみだ、レベル6のミスティルにレベル2のファランクスを
チューニング！！
シンクロ召喚！！
ウィンド・マスター・ドラゴン！！」

ATK2800

「ウィンド・マスター・ドラゴン！？」

「そうだ、レベル8のウィンド・マスター・ドラゴンにレベル2の
ドラグニティ・ファランクス2体をダブルチューニング！！
新たな風よ、大いなる力で敵を撒き散らせ！！シンクロ召喚！！
風来せよ、ストーム・ブレイザー・ドラゴン！！」

ATK3500

特徴的な部分は……頭の巨大な角と4枚の翼だ。

「作者の想像力が酷すぎて、変な表現になってるな……」

「バトル！！ストーム・ブレイザー・ドラゴンでミラージュ・デス
ティニー・ドラゴンに攻撃！！」

ストーム・ブレイザー・ドラゴンが巨大な竜巻を作り出した。

「ミラージュ・デスティニー・ドラゴンの効果発動、このカードを
ゲームから除外して、相手モンスター1体の攻撃を無効にする！！」

ミラージュ・デステイニー・ドラゴンがそこに存在しなかったかのように光の粒子になって消えようとした。

「無駄だ、ストーム・ブレイザー・ドラゴンの効果発動、このカードの攻撃宣言時、相手フィールド上に表側表示で存在するカード全てを無効にし、フィールド上に表側表示で存在するカード1枚につきこのカードの攻撃力をエンドフェイズまで500ポイントアップする!!」

ストーム・ブレイザー・ドラゴン

ATK 3500 4500

竜巻の中に光の粒子になろうとした、ミラージュ・デステイニー・ドラゴンが出てきて、竜巻に巻き込まれ破壊された。

シン

LP 1400 200

「あと200かよ……」

「次のターンで終わりだな。」

ターンエンド」

ストーム・ブレイザー・ドラゴン

ATK 4500 3500

「俺のターン!!」

シンは手札のカードを見てから。

「ターンエンド」

「俺のターンだ」

「俺はドラグニティ・ミリトゥムを召喚」

ATK1700

「バトル！！ストーム・ブレイザー・ドラゴンでダイレクトアタック！！」

ストーム・ブレイザー・ドラゴンが巨大な竜巻を発生させる。

「手札からバトルフェーダーを特殊召喚してバトルフェイズを終了させる！！」

バトルフェーダーが出した超音波で竜巻が消える。

「なら、カードを2枚伏せてターンエンドだ」

「俺のターン！！」

「俺は天よりの宝札を発動！！お互いに手札が6枚になるようドロ―する！！」

「なっ！？」

シンはあまりにの幸運に笑みをこぼした。

「手札から死者蘇生を発動、ミラーージュ・デステイニー・ドラゴンを墓地から特殊召喚」

ATK3300

「手札から、アクセル・ブラストを発動、エクストラデッキからシューティング・スター・ドラゴンを墓地に送り、ミラーージュ・デステイニーの攻撃力を1000ポイントアップする」

ミラーージュ・デステイニー・ドラゴン

ATK 3300 4300

「ミラーージュ・デステイニー・ドラゴンの効果で墓地のシューティング・スター・ドラゴンの効果を得て、発動！！
デッキの上からカードを5枚確認して、その中のチューナーの数、このターン攻撃できる」

ミラーージュ・デステイニー・ドラゴンがシューティング・スター・ドラゴンの姿になる。

シンはデッキの上からカードを5枚引き、確認する。

「俺が引いたカードのチューナーは3枚。ライフ700は簡単に削れる！」

ミラーージュ・デステイニー・ドラゴンが3体に分身した。

「1回目のバトル！！ストーム・ブレイザー・ドラゴンに攻撃、デステイニー・ミラーージュ！！」

「ストーム・ブレイザー・ドラゴンの効果発動、このカードをゲームから除外して相手モンスター1体の攻撃を無効にするぜ！！」

ストーム・ブレイザー・ドラゴンが竜巻で次元の裂け目を開き、その中に逃げ込む。

「2回目のバトル!!ドラグニティ・ミリトゥムに攻撃!!」

竜騎

LP700 100

「え!？」

「畏カード、竜騎士の意地を発動したんだ。

ドラグニティと名のついたモンスターが戦闘で破壊され、自分のライフが0になる時、ライフは100残る」

「流石にもう耐えられないだろ？」

3回目のバトル!!」

「畏カード、無防備からの一手を発動、相手の攻撃宣言時に自分フィールドにモンスターが存在しない場合発動できる。

手札からレベル4以下のモンスターを特殊召喚する。

俺はドラグニティ・フアランクスを特殊召喚するぜ」

DEF1100

フアランクスが竜騎の盾になり、ダメージを与える事ができなかった。

「カードを伏せてターンエンド」

「俺のターンだ」

「バトル!!ストーム・ブレイザー・ドラゴンでミラーージュ・デス

ティニー・ドラゴンを攻撃!!」

竜巻が発生し、ミラージュ・デステイニー・ドラゴンを襲おうとする。

「トラップ発動、黒竜強襲、ミラージュ・デステイニー・ドラゴンをリリースして発動!!」

デッキ・手札・墓地から真紅眼の黒竜を特殊召喚する!!」

ATK2400

「ミラージュ・デステイニー・ドラゴンを除外してまでレッドアイズを特殊召喚するのかよ!？」

「この効果で特殊召喚した真紅眼の黒竜の攻撃力は黒竜強襲の効果でリリースしたモンスターの攻撃力分アップし、相手モンスターとバトルする!!」

行け、レッドアイズ!!

ダーク・メガ・フレア!!」真紅眼の黒竜

ATK2400 5700

「な……」

黒い炎は巨大な竜巻を貫いた。

竜騎

LP1000

「楽しかったぜ、シン」

「俺も、久しぶりに楽しめたよ」

「2人とも凄かったよ!!」

と空が言つと

「「え?空、居たの?」」

「酷い!!最初から居たよ、シンは私と一緒に来たのに……」

「ゴメン、忘れてた」

空は頬を膨らませる。

「もう……そういえばシン、忘れてたけど、loveがlikeど
つちなのだ!?!」

「げ……忘れてた……」

とシンは言い、逃げ出した。

「シン!!どっちか答えてよ!!」

逃げ出したシンを空が追いかける。

『ちなみに空気化したのは空だけじゃなく、俺もだ』

(黙れロリコン悪魔!!)

『ゴメンナサイ』

「シン、待つてよう!!」

「俺が待てと言われて待つ訳が無いだろー!!」

こうして春休みが終わり、3年目が始まるうとしていた、彼等にとつては最悪の1年が……。

シンvs竜騎 後編（後書き）

竜騎「やっと終わったぜ」

シン「何勘違いしてるんだ、まだ俺達の物語は完結してないZE！
」

流也「作者の都合により、しばらく更新できないので一応完結させて、タイトルを少し変えて3年目を始めるっスよ」

竜騎「意味あんのか？

しばらく更新できませんってお知らせで言えばいいのに……」

シン「この竜野郎！！

3年目は今までとは違うんだよ！！」

空「始まるのは11月の始め頃になるみたいだね」

シン「なら11月にまた」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4101s/>

遊戯王～真紅眼に選ばれし少年～

2011年11月11日01時57分発行